

Fate/world end ～ソ
ラノハテとリクノハテ
～

神駈

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「Fate／Zero」

冬木市を騒がせている殺人鬼は血染めの魔術陣から呼んではいけないものを呼び出してしまふ。無邪気故の残酷さと老獪のような思考を併せ持つその『悪魔』はどのような結末を迎えるのか。

「Fate／stay night」

第四次聖杯戦争から十年後。本来なら六十年周期で起きるはずの聖杯戦争が再び行われる。

声を失った少女、桜卯琴音。正義の味方を志す少年、衛宮士郎。血の繋がらない兄妹はお互いにマスターとなり、聖杯戦争を戦い抜くことになった。

目次

Fate / Zero

A C T.										
1 1	1 0	9	8	7	6	5	4	3	2	1
110	101	88	76	62	53	43	32	24	14	1

P h a s e.	F a t e / s t a y n i g h t	A C T.	A C T.	A C T.	A C T.	A C T.						
7	6	5	4	3	2	1		1 6	1 5	1 4	1 3	1 2
239	226	214	203	190	182	173		160	147	138	128	119

E p i l o g u s	P h a s e.											
	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8
388	364	357	348	341	334	325	317	307	297	285	263	252

	外 伝	あ と が き と 設 定
	p r o t o t y p e	
	409	394

F a t e / Z e r o

ACT. 1

聖杯戦争。それは、聖杯によつて選ばれた7人のマスターと、セイバー 剣士・アーチャー 弓兵・ランサー 槍兵・ライダー 騎乗兵・アサシン 暗殺者・キャスター 魔術師・バースーパーカー 狂戦士の7体の英霊が聖杯を巡り、冬木の地にて繰り広げる戦争である。

本来、選ばれるマスターは魔術師であることが大前提であり、聖杯戦争のシステムを作り上げたアインツベルン、マキリ、遠坂の三家には優先的にマスターであることの証——令呪——が授けられる。

聖杯戦争は今回で四度目となるが、今まで三度も行われていながら、一度も聖杯を受けとつたマスターは存在しない。仲違い、聖杯の受け皿の損失などそこにはいくつもの理由があつた。

「ええーつと、ここをこうしてつと」

なあ？」

歌うように召喚の呪文を暗唱しながら、龍之介は魔術陣を描いていく。今回の魔術陣は一分の隙もない古書通りの完璧な出来だった。こう簡単に出来てしまうとどうも張り合いがないと思えてしまうのだろうが、彼にとつてはどうでもいいらしい。ただただ自分の描いた魔術陣の完成度に満足するだけである。意味の分からない文字の羅列と幾何学的な紋様はそれだけで彼を虜にする。

その部屋の隅では、縛られ猿轡をかまされ、転がされている少年が、物言わぬ死体となった両親と姉をじつと見つめている。幼い子供にも、この光景の異常さが分かるのだろうか。時々魔術陣を見てはすぐに目を逸らしている。まるで、視界に入れば死んでしまうというように。

「あー、やつぱり五度かー。じゃ、もう一回。閉満たせじよ、閉満たせじよ、閉満たせじよ、閉満たせじよ、閉満たせじよーつと。はい、今度こそ五度ね」

詠唱の間違いを発見しそれを修正しながら、魔術陣作成で使用しなかった余りの血を、龍之介は絵具にでも見立てたのか、壁に塗りたくる。特にその行為に意味などなく、ただただ壁を赤く染め上げていく。白かった壁紙も今や悪魔が出現するに相応しい色合いとなっている。

それから縛つてある少年の反応を伺おうと顔を覗き込んでみたものの、その目は龍之

介を映しておらず、ただただ頭と胴体の分かれた両親と姉を見ていた。しかし、筋肉が麻痺してしまったのか顔に何の表情も浮かんでいない。それでも体の震えはおさまっていないことから恐怖心が無くなったわけではないことも分かる。

「ねー坊や。悪魔つてさ、本当にいると思う？　まあ、別に俺は宗教を信じてるわけじゃないんだけどさー」

龍之介は両腕を広げ、芝居がかつた仕草でそう問い掛けるも、猿轡をかまされている以上、少年の返答は望むべくもない。ただその身を恐怖で震わせるだけである。だが、返答はなくとも、血を見たこと、加えて魔術陣が遂に完成したことによつて普段より饒舌になつてゐる龍之介はさらに話し掛ける。

「世間じゃ俺のこと悪魔だーとか言つてるけどさ、でも本当に悪魔がいたらさ、失礼なんじゃないかな？　ほら、俺が殺したのつてさ、両手両足の指で足りちゃうんだよね。そこんとこスツキリしなくてさー。で、確かめてみようと思つたわけ」

ますます上機嫌になる龍之介は、血だらけの部屋を歩き回りながら話し続ける。どこかその様子は信者に熱心に教えを説く伝道師のようにも見えてしまう。悪魔という不明瞭な存在を語ることもそれに拍車をかけている。しかし彼が伝道師であるならば、その教えを聴く聴衆は3つのモノと化した遺体と、怯え、そして精神的な圧迫によつて何も耳に入っていない様子の子の少年だけ。少年からすれば彼は伝道師などという崇高な者

ではなく、まさしく悪魔であった。

「でもさ、こつちから呼んでおいて何の準備も無しつてのは失礼じゃん？　だからね、坊や。もし悪魔が本当に出てきたら、COOLに殺されてもらえないかな？」

龍之介の発言の異常さは、幼い子供にも理解できた。それゆえ、少年は、くぐもつた悲鳴を上げながらなんとかこの場を逃れようとする。のたうちながら逃げ出そうとするも、思うように体は動いてはくれない。物理的な拘束もそうだが、精神的な拘束によつても子供の動きは阻害されていた。

「あれ？　逃げようとしてるの？　ダメだよ、坊やには殺されてもらわなきゃいけないんだから。……痛ッ！」

逃げようとしている少年に近づこうとした龍之介の右手の甲が痛みを発する。そこには入れ墨をしたかのような紋様が浮かび上がってきていた。盃の周囲を囲むように二本の剣のようなものが描かれているそれは、まさに芸術だった。

それだけではない。先ほど描いた魔術陣が黒い光を放ち始めた。その光は黒という明るさとは程遠い色にもかかわらず、時間を増すごとに徐々にその光量を増していき、ついには目も開けられないほどになった。

それが収まったところには、魔術陣の上に何者かがいた。服装はローブを羽織っている以外特に変わり映えはしないが、龍之介はそれを予てより会うことを望んでいた『悪魔』

だと思い、ゆっくり近づいていく。

「えーっと、悪魔サン……だよな？」

「……………」

龍之介が声を掛けるが、返答は帰ってこない。やはり生贄が必要なのかと、声にならない悲鳴を上げ逃げようとする少年を手早く捕まえ、龍之介は『悪魔』へと差し出す。そもそも日本語が通じていないかもしれないということに、彼は気づいていない。

「あの一、これ、生に」

龍之介の言葉は途中で途切れることとなった。

龍之介が少年を差し出した途端、何か見えない圧力を感じ、次の瞬間には少年の姿はその肉体の一片も残さず、文字通り跡形もなく消えていたのだ。そこに何かがあった痕跡などまるでない。彼が魔術師であったのなら残留している魔力から何らかの魔術を使った結果であると分かるのだが、生憎と彼は魔術回路を持って生まれた一般人だ。詳細など分かるはずがない。

「……………ちそうさまー」

ようやく『悪魔』が発した声は、少年とも少女ともとれるような声だった。だが、その言葉の内容から龍之介はこの『悪魔』がしたことが容易に想像できた。ただ殺したただけではない。『喰らった』のだ。辛うじて黒いものが動いたことは見えたが細かいとこ

ろまで理解できなかった。それでも龍之介にとつては問題ではない。自分の知らない『殺し方』が見れただけでも一生ものの感動なのだから。そして、感動の次に来るのは『欲求』。自分も同じことがしてみたいというものだ。

「ク……COOLだよツ!! あんた、すげーよ!!」

「あなたがボクのマスター?」

「マ……マスター? 何の事だか知らないけどよろしく!! あ、俺、雨生龍之介つていいます!!」

本当の『悪魔』を召喚できた。このことは龍之介を舞い上がらせるには十分な出来事であった。今にも踊りだしそうな勢いで自己紹介をする龍之介。実に不釣り合いな敬礼のようなものまでしている。そして、彼の心はこの古書に書かれたことは間違っていない。なかつたんだと感傷に浸っている。

対して、召喚された『悪魔』は不思議なものを見るような表情で、それを見ている。

「い……今のどうやったんだ!? ねえ、教えてくださいよー」

テンションが最高潮である龍之介は次々に問い掛けていく。だが、それに対する答えはない。相変わらず『悪魔』は黙つたまま龍之介を見ている。その様は、龍之介という人間を隅から隅まで観察しているようにも見え、何も理解していない幼子のようにも見えた。

「え……えーつと、あの、俺、何か気に障るようなことでもしちやった？」

『悪魔』はその問いを首を横にフルフルと振って否定する。

コミュニケーションは可能だと理解した龍之介は先ほどまでのように自らが一方的に話し掛けるのではなく、『悪魔』の希望を聞くことにした。

「じゃあ、なんかして欲しいこととかありますか？」

「………ただきまーす」

今度は正体不明の圧力が龍之介に襲い掛かる。その圧力によって、龍之介は一步も動くことが出来ない。何かに縛られているかのように手足は動かず、言葉を発しようにも喉が正常に動いてくれない。ただただ思考だけが加速し体感時間を引き延ばす。

『悪魔』が自分のほうに歩いてくるのを見て、龍之介は自分の死を悟った。逃れようのない絶対的な死が迫っているにも関わらず彼は子供のよう無邪気な笑みを浮かべている。

龍之介が最期に見た光景は、腰まで届くような長い黒髪に黒い目をした少年のような、少女のような『悪魔』の影が自分に喰らいつこうとしているところだった。

「はは………これが……悪魔……。さいつこうにCOOLだぜ」

人生の終わりに龍之介は自分の求めていたものを知った。彼が求めていたCOOL殺は自分の常識外にある異常な現象による一方的な殺し。それをもっと探求してみたい

という欲求もあつたが、それ以上に彼は自らのCOOL殺しの答えを知つて満足してしまつた。

彼の得た答え。殺しの終着点。彼自身が望み幾つもの志向でもつて作り上げてきた芸術さつじんの終着点。それは——自らの死だつた。



「……ちそうさまー。でもあんまりおいしくないや」

龍之介から『悪魔』と呼ばれていた存在は、龍之介の『味魔力』をそう評すると、既に物言わぬ死体である先ほど喰らつた少年の両親とその姉を平らげていく。『悪魔』自身は身じろぎひとつしていかないが、足元で蠢く影がそれらを捕らえ、消し去つていく。

「うーん。やっぱり死体はおいしくない。でも、まだまだお腹魔力空足りいてるしなあ。……そだ。お金お金ーつと」

『悪魔』は先ほど摂取した死体から記憶を抜き出し、まるでここが自分の家であるかのように迷わず引き出しを開け、そこにあつたお金を財布ごとポケットにいれると、この家を出て行つた。出て行くときに少しだけ振り返り何かを呟いた。『悪魔』が再び歩き出すと、その家は音もなく消え去つて行つた。

「えーっと、確かコンビニ二つっていうやつが近くにゐるはず」

家を出て、ついでに消し去った『悪魔』は、裸足のまま道を歩いていった。いくら深夜であり、外出を避けるように通達されていても人通りがないわけではない。奇妙なものを見る目で見られていることに『悪魔』は気づいた。遠巻きに見られていることに多少の不快感を覚えたのでその原因を探る。

「あ、靴つて履かなきゃいけないんだっけ。忘れてたよ。それにローブなんて着てる人いるはずないし」

自分の恰好の異端さに気付いた『悪魔』は一旦路地裏に入りどこからともなく靴を取り出し、それを履く。それと同時に、目立っていたであろうところどころ赤い染みのあるローブも脱ぎ、今度こそコンビニを指す。

十分ほど歩いたところに目的のコンビニはあった。既に深夜、外出自粛が為されている中でコンビニが営業しているかどうか分からなかったが、客こそ一人もいないものかどうか営業していたようである。『悪魔』はそれに躊躇することなく入って行く。

「甘いもの甘いものー。あ、これおいしそう。………彼女も一緒に来れたらいいのになあ」

買い物かごの中に、気に入れたものを片っ端から入れていく子供という光景は奇妙だったのだろう。店員はこの子供は家出か何かだろうと思ひ、親切心から警察を呼ぶこ

とにした。こんな状況で容易に子供に家出をさせる親の気がしれない、と店員は心の中で呟く。

『悪魔』が一通り店内を見終わりに、会計しようとしたころ50代半ばの警察官が一人やってきた。

訳も分からぬまま呼び止められ、警察官によつて店内の事務所に『悪魔』は連れて行かれ、そこで警察官の説得を聞かされていた。その説得は「今は危ないよ」や「どうしたの?」といった子供を心配する心情に溢れていたが『悪魔』は聞く耳を持たない。

「親御さんも心配しているよ? お家はどこ?」

「……………」

何回聞いても『悪魔』は何も答えなかった。そもそも聞いてすらいないのでと警察官は思うも、当然、そういう反応を返されるのも承知済みとばかりに、警察官の説得は続く。

「……………いただきます」

「ん? 君は一体な」

『悪魔』は警察官を喰らった。当然、一般人である警察官では反応の仕様がなく、瞬間に『悪魔』によつて喰らい尽くされてしまった。おそらく何も感じる時間はなかっただろう。あの少年や龍之介を喰らった時よりも数段速い魔術の行使であった。

「うえー。マズーい。口直したいなあ……。あ、確か聖杯戦争って秘匿しなきゃいけないんだよね。あー、めんどうだよ」

先ほどの時と同じように味を^{魔力}そう評価し、口直しを求める。しかし会計が済んでいないのでかこの中の物を食べるわけにもいかず少し落ち込む。そして、聖杯戦争の決まりを『悪魔』は思い出し、頷くと、足で床を叩いた。そこから魔術陣が広がっていき、やがて店を覆い尽くすほどの大きさになった。

「うーん……とりあえず……記憶よ、消えちゃえ！」

『悪魔』の言葉に呼応するかのよう^に魔術陣が一瞬輝き、すぐにその姿を消していった。詠唱は何とも適当なものであったが、既にその場に魔術を使った痕跡はほとんどなく、後から見ても筋力強化くらいの魔術だっただろうと推測をつけるに留まるレベルだ。

そして、警察官がいた痕跡が防犯カメラ、店員の記憶から抜け落ちていた。それどころか、再び店内に戻ってきた『悪魔』を見ても、店員は先ほどのように家出か何かとは思わず、普通に業務をしていた。記憶の改変だけではなく人心操作も含まれていたのだろう。しかし、機械にも通用する魔術など存在しているのか怪しい。

『悪魔』は何事もなかったかのように、先ほど買い物かごにいれた商品をレジに持っていき、会計を済ませます。

「ありがとうございます」

店員のやる気のない声を聴きながらコンビニをあとにした『悪魔』は、両手にレジ袋をぶら下げ、満面の笑みで夜の闇にその姿を消していった。

ACT. 2

「んー。よく寝た。それにしても、あの金ぴかな人、強かったなー」

『悪魔』は昨夜の出来事を思い出しながら呟く。

昨夜、『悪魔』は特に意味もなく街をぶらついていた。そんな中、一際大きな家を見つけた。しかも、そこからはいいにおいがする。だが、『悪魔』の経験上このような場所は大抵罠が仕掛けられているはずなので、立ち入ることは出来なかった。それでも諦めきれなかった『悪魔』は、霊体化したまま周囲をうろついていた。

だが、そのうち使い魔の気配が立ち込め、『悪魔』はようやくここが聖杯戦争に関わる場所だと気付いた。

聖杯に託す望みがある以上、『悪魔』は無闇にこの場所に近づくことは危険と判断、使い魔を放ち観察することにした。

そして行われたのが、サーヴァント同士の戦い。いや、戦いとは呼べないのかもしれない。なぜなら、一方的に侵入者であるアサシンが倒されたからだ。多数の武器を射出して戦うスタイルから、『悪魔』はその『金ぴか』をアーチャーと仮定することにした。

「でも、あの人多分王様だよな？　王様って大体金ぴかだもんね。そういやどうやって
気配遮断してるアサシンを見つけたんだらう？　ま、いつか。……さーて、今日はどこ
に行こつかなー」

頭を切り替えた『悪魔』は、今日の目的地を考える。自らのマスターである龍之介を
『喰らった』ことにより、行動指針を自分で決めなければならない。『悪魔』はそのこと
においてのみ悔やんでいた。魔力自体は自らのスキルで補えるため、マスターの存在が
場合によっては邪魔になるとさえ考えていたのだが、やはり明確な行動指針は必要だと
改めて認識する。

「そだ。今日は昼間だし、街の中心まで行ってみようかな。おいしいものもあるだろう
し。それに、早く憑代よりしろ考えなくちゃね。いくら魔力はいっぱい合っても、憑代ないと消
えちやうみたいたし」

とりあえずは今日の行動を決めた『悪魔』は、寢床である柳洞寺から出て行くのであつ
た。



冬木市は地方都市である。外国人も多いこの都市であるが、ここまで目立つ外国人は初めてなのではないだろうか。長い銀髪の女性と、それに仕えるかのような男装の麗人。特に店に入るわけではないが、歩いているだけで俄かに街が活気づいていく。

なぜ注目されているのか見当もつかない、もしかしたら注目されているとは気づいていないかもしれない彼女たちは、いつも通り振る舞う。それがかえって彼女たちを目立たせているのだが。

だが、彼女たちは一般人ではない。この度の聖杯戦争の参加者なのだ。長い銀髪の女性、御三家のひとつ、アインツベルンの女性、アイリスフィール。男装の麗人は、サーヴァントであるセイバー。彼女たちが普通に出歩いているのも、作戦の内なのである。

「アイリスフィール、本当にこのようなことで大丈夫なのですか？」

「大丈夫よ。それに、私だって観光したいんですもの」

……作戦なのである。実際、手がかりが何もなかったため、このような行動をとっているサーヴァントがいる可能性もあるのだが、アイリスフィールとセイバーは未だ敵サーヴァントには遭遇していない。そもそも聖杯戦争は夜に行われるため昼間から出歩いているサーヴァントは居ないと言ってもいいだろう。

と、セイバーが何かに反応する。

「アイリスフィール、サーヴァントです。姿は見えませんが、おそらくこの群衆の中に紛れ込んでいるものと思われれます」

「わかったわ。でもこの場所では戦闘は出来ないわね。広い場所に行きましょうか」

二人は街中で戦うことを避け、海岸沿いにある倉庫街へと向かうことにした。そこに至る道中、魔力の塊が遠ざかっていくのをセイバーは感じた。

「着いてきませんね。どうやら向こうはこちらに気が付いていなかったようです」

「それならいいわ。無闇に戦うなって切嗣にも言われてるし」

「そう、ですか。……………アイリスフィール、またサーヴァントです。どうやら先ほどとは違うみたいです」

セイバーが見た方向には、誰もいなかった。だが、セイバーが声を掛けようとしたとき、何も無い場所から敵サーヴァントが姿を現した。霊体化を解いたのだろう。

「ふん。俺に気付いたか。今日一日で俺に挑もうという輩はお前一人だ。では、始めるとうしようか」

敵サーヴァントは二本の槍を手に持っている。その槍には呪符が巻かれているが、おそらく宝具なのだろう。その銘が分からないようにしているに違いない。そしてそれは呪符を剥がしてしまえば真名が割れるということでもある。

そして、『槍』。このことから、敵サーヴァントはランサーであることが覗える。しか

しそれだけでクラスを特定することはできない。槍に偽装した杖の可能性もあり、ライダーの握る武器であつてクラスとは関係ないかもしれないのだ。

そこまで考えてセイバーも何かを握る。そこには何も存在していないように見える。だが、構えを取つたということは、何かしらの武器を持つているのだろう。

「行くぞ!!」

「来い!!」



セイバーとランサー（仮）が戦い始めたころ、『悪魔』は同じ倉庫街にいた。先ほどセイバーが感知したのはこの『悪魔』であり、当然『悪魔』もセイバーに気付いていた。だが、まるで誘うかのようなセイバーの行動に乗るはずもなく、あえて遠回りしてこの倉庫街にやつてきたのだ。

「うわー、流石だね。ボクじゃ一瞬でやられちゃうよ。あつちの男の人はランサーだろうけど、女の人は何だろう?」

遠い場所から観察しているため、『悪魔』からは、槍を二本持ったランサーと思われるサーヴァントが何も持っていないサーヴァントに打ち込めていないように見える。しい魔を飛ばすという手もあるのだが、『悪魔』が放つ使い魔は、『友だち』であるため、荒事には近づけたくないらしい。

と、そこで『悪魔』は何かを見つけた。『悪魔』の視線の先には、銃を持った女性がいる。こんな場所に隠れるようにしている以上聖杯戦争の関係者だろう。

「ねえ、おねーさん。なんで銃持ってるの？」

急な問いかけに女性は振り向こうとするが、一向にそれは出来ない。まるで何かで縛られたかのように身体を動かすことが出来ないのだ。

「あー！ もしかして聖杯戦争の参加者？」

「……………」

『悪魔』の問いかけに反応を返さない女性。それでもめげることなく『悪魔』は話し掛ける。

「うーん、でも魔力そんなに感じないんだよなあ。じゃあ、協力者かな？」

「……………」

「もう！ 何か喋ってよ！ じゃないと、読心しちゃうよ？ 知られたくないヒミツとかあるでしょ？」

少しの沈黙のあと、ようやく女性が言葉を発する。

「あなたは誰ですか」

「あ！ やつと喋ってくれるんだ！ ボクはね、キャスター。おねーさんは？」

「私は、傭兵です」

あつさりと自分のクラス名を明かす『悪魔』改めキャスター。対して女性の返答は短い。

「んー、せめて名前くらいは知りたいなー。……………あ！ ボクのマスターのこと心配してるの？ だったら大丈夫だよ！ ボクにマスターはいないから」

「信用できません」

そこで、ザザツという機械音とともに、男性の声が聞こえる。

『舞弥、どうかしたのか？』

「いえ。問題ありません」

会話の相手が依頼主なのだろうか。早々に会話を切り、悟らせまいとする。

「へえー。舞弥さんっていうんだ。ねえ、舞弥さん、拘束解いて欲しい？」

「……………解く気はないのでしょうか？」

「ひどーい。じゃあ、解いちゃえー！」

コンビニでの一件と同様に、キャスターが足を踏み鳴らす。すると、今まで舞弥を拘

束していたものが完全に消え去り、解放される。そして、キャスターは舞弥の眼前に移動する。その動きは隙だらけであるが、何かしようとする気が起きない。

「うん、これでよし。さあ、舞弥さん、お菓子食べよ」

どこからともなくお菓子を出し、それを舞弥に勧めるキャスター。だが、キャスターというクラス名を聞いた舞弥は、そこに何かしら仕掛けられているのではと疑い、それを口にするのではない。

だが、お菓子を食べなくても、キャスターの目は、常に戦場の方を確認している。それを間近で見ている舞弥は、余計に疑うこととなる。

そんなことを知る余地もないキャスターは次々と舞弥にお菓子を勧める。

「ねえ、これは？ あ、こっちでもいいよ！ ……もしかして、お菓子嫌いだった？」

少々涙目になりながら問い掛けるキャスター。舞弥は決してお菓子嫌いというわけではないのだが、それを勧めるのがキャスターであるという一点のみでお菓子を食べることを拒んでいた。それでも、見た目は幼いキャスターの涙目には、少々心を動かされたようで、視線がお菓子の方へと向く。だが、自制心を働かせ、ここは戦場であると自分に言い聞かせながら、誘惑を撥ねつける。

実は、このやり取りも、無線を通じて切嗣に聞かれているのだが、当の切嗣は、その会話内容に少し呆れている。以前の切嗣であれば、戦場で呆れるということとはなかった

だろう。やはり自分は魔術師殺しになりきれていない。そのことは自身がよく知っている。それを改めて確認するのであった。

そんなことも知る余地はなく、キャスターは舞弥にどうしてもお菓子を食べてほしいのか、誘惑を続ける。

「あ、これおいしいー！　ねえ、いらないの？」

「要りません」

再び断つたところで、急にキャスターの調子が変わった。

「ふーん。そう。じゃあ、もういいや。あつちで戦ってるアーサー王のことも分かったし、切嗣っていう人がマスターってことも分かったし」

「な……ッ!?　なぜそれを!?　まさか……読心術!」

舞弥が答えに辿り着いたその時、戦場から太い声が聞こえてきた。

『聖杯に招かれし英霊は、今!　ここに集うがいい。なおも顔見せを怖じるような臆病者は、征服王イスカンダルの侮蔑を免れぬものと知れ!』

「ふふふ。ここまで言われちゃボクも行かなくちゃね。ま、ボクは英霊なんかじゃないんだけど。じゃあね、おねーさん。人の言うことを信じちゃいけないんだよ?」

舞弥が再び口を開く前に、キャスターは姿を消していた。そこには、食べ散らかされたお菓子と、未開封のケーキが置いてあった。

それには目もくれず、しかし確りとケーキを確保しながら舞弥は自分の失態を切嗣に報告するのだった。

ACT. 3

黄金の光が場を覆う。地上20メートル余りの高さがある街灯のボールの頂上にその姿は現れた。昨夜、アサシンを圧倒的な力の差で葬った黄金のサーヴァント。キャスターの見立てではアーチャー。その立ち位置からして自分が上位者であることを示そうとしているようにも見える。

「我を差し置いて『王』を称する不埒者が、一夜のうちに二人も涌くとはな」

黄金のサーヴァントは不愉快気に口を歪め、眼下のサーヴァントを一瞥する。その眼には明らかに侮蔑の色が含まれており口調にも不快感が漂っている。その雰囲気は他のサーヴァントを圧倒しており、一般人では立つことも儘ならないほどの威圧感を放っている。

「難癖つけられてもなあ。イスカンダルたる余は、世に知れ渡る征服王に他ならぬのだが……」

「たわけ。真の王たる英霊は、天上天下に我唯独り。あとは有象無象の雑種に過ぎん。いや、王を名乗るなど雑種以下であろう」

「あー！ やつぱり王様だったんだー」

と、そこに無邪気な声が割って入る。その声の主は、タン、と足音を立てて地面に着地する。その姿と声は幼く、今この場に於いては些か不釣り合いだった。ただ、この場の黄金のサーヴァントを除いた誰もが新しい闖入者を注視している。沈黙が好きではないのかライダーが手始めに声を掛けた。

「お主、サーヴァントか？」

「ボクはキャスター。よろしくね！」

突如として現れた子どもは自らをキャスターと称した。キャスターが自ら姿を現すなど自殺行為である。そのため、疑ってかかるのだが、どうもキャスター以外には思い当たらない。なにしろ、セイバーとランサーは今の戦いではつきりしており、イスカandalは自らをライダーと称した。アサシンは既に敗退。また、その攻撃方法から黄金のサーヴァントはアーチャーだと思われる。残るはキャスターとバーサーカーなのだが、明らかに狂化しているとは思えない。

さらに、この場にいるウエイバーはそのステータスを見ることで、キャスターだと確信した。魔力だけが突き抜けて高く、その他のステータスが軒並み平均以下なのはキャスターしかいない。

「このステータス……間違いなくキャスターだ。だとしたら何で……」

「教えてあげるよ？ ライダーのマスターさん」

「うわあ！ いつの間に近づいてきたんだよ!!」

先ほどまでは遠くに居たはずのキヤスターがいつの間にか近くに来たことで悲鳴を上げるウェイバー。だが、驚いていたのはウェイバーだけではなかった。サーヴァントは、キヤスターが移動した瞬間を確認できていない。おそらく何かの魔術を使ったのだろうと予測は出来るが、遠くから監視しているランサーのマスターや、アイリスフィールはその魔術の痕跡を見つけられずにいた。

それはつまり、このキヤスターが隠匿性に長けているという証だろう。誰にも気づかれること無く移動し、痕跡すら残さない。まるで、魔法のように。

「んーとねえ、ボクが出てきたのは、そのライダーが呼びかけたからだよ？」

だが、当のキヤスターは、いかにも子どもらしく首を傾げながらウェイバーに答える。無邪気であるが故の恐怖をウェイバーは感じていた。

「我を無視するか。雑種ども」

先ほどから言葉を発していなかった黄金のサーヴァント、アーチャーは、怒りに顔を歪ませる。そして、アーチャーの左右の空間に歪みが生じ、次の瞬間には、眩い刃の輝きが虚空に姿を現していた。槍と剣。二本とも隠し切れないほど猛烈な魔力を放っていた。宝具としか思えないような代物である。

だが、それが放たれることはなかった。突如として、黒い魔力の塊が出現し、アーチャーに襲い掛かったのだ。

当然、アーチャーはその攻撃を躲すが、先ほどまで立っていた街灯は、跡形もなく消え去っていた。そして怒りに歪められた顔を黒いサーヴァントに向ける。

「……ッ！ 天に仰ぎ見るべきこの我を、同じ大地に立たせるかッ!!」

怒り心頭といった様相のアーチャーは、先ほどまで展開していた剣と槍を、即座に闖入者に向けて射出する。だが、それをあろうことか剣を取り、槍を叩き落とすといった所作で闖入者は防ぐ。その僅かの攻防ではあるが、黒いサーヴァントの技量は低級の英霊ではないことを示している。

「あれがバーサーカーか。ボクじゃ勝てないね。……セイバーさん、後ろに隠れてもいい?」

「な、なぜ私に聞くのですか。というか、いつの間に!!」

またしても謎の移動方法でキャスターはセイバーの後ろに移動し、避難を始める。そうしている間にも、アーチャーは次々に武器を射出しているが、一向にその攻撃がバーサーカーに当たることはない。

だが、それも唐突に終わりを迎える。

「貴様ごときの諫言で我に引けと? 随分大きく出たな、時臣」

おそらく令呪でも使われたのだろう。64もの武器を展開していたアーチャーは、それを仕舞うと、セイバーとライダーを一瞥したのち、霊体化して消えていった。

だが、それでもバーサーカーは残っている。今も唸り声をあげ、戦闘態勢を取っている。その対象は、セイバー。

「……a……a r……」

数瞬後、一息に駆け出したバーサーカーは、手に持ったポールを振りかぶり、セイバーに叩きつけようとしていた。

「うひゃあー！ なんてこっちくるのー！！ 来ないで！！」

セイバーの背後に隠れていたキャスターは、バーサーカーが向かってくるのを見て悲鳴を上げる。だが、それと同時に、足を踏み鳴らす。

すると、セイバーまであと数十センチといったところで、バーサーカーが見えない何かに弾かれたかのように、反対方向へと吹き飛ばされた。吹き飛ばされたバーサーカーは路上を滑り、倉庫へと突っ込んでいった。

「もうー！ 何でこうボクのところに来るかなあ！ 死んじやえ！！」

何かスイッチが入ってしまったのだろうか。キャスターが足を踏み鳴らすたびに魔術陣が形成されていく。その中には、見覚えのあるものから、全く見覚えのないものまであった。大小様々な魔術陣を狂ったように作り出すキャスター。明らかに大出力な

魔術が放たれるであろう予感に、ライダーやランサーが撤退していく。高い対魔力を持つセイバーではあるが、アイリスフィールにはその恩恵がないため、セイバーも全速力で撤退を開始する。

全員が撤退し終わった頃、キャスターの魔術は完成した。

作り出された魔術陣が連動し、一つの魔術陣を作り上げる。その中を魔力が循環し、徐々に光量が増加していく。流石に危険を察知したのか、バーサーカーも霊体化し消えていく。だが、それに気付かずに、キャスターは、最後の一言を口にする。

「逝け!! 発動 activate!!」

「あはハハははハ! 消えちやえ!! 落 Castrum 日 occasus 城 solis 郭

!!」

発動された魔術は圧倒的であった。ほんの一瞬の間に、周囲に点在していたコンテナは消え去り、アスファルトの地面は完全に溶けてドロドロになっていった。

だが、そんな地獄のような風景の中でも、傷一つ負わずキャスターは笑い転がっていた。「はははハハはハ! アははハハはハハはハ!」



「凄まじいな……。これではセイバーでも耐えられないかもしれないな」

「ですが、キャスターはセイバーのマスターが『衛宮切嗣』であることを知っています。おそらく何か仕掛けてくるでしょう」

使い魔を残し戦場を脱した切嗣と舞弥は、先ほどのキャスターの行使した魔術を見ていた。今まで幾つもの戦場を経験してきた切嗣と舞弥であったが、これほどまでの威力の魔術を目にしたことなどない。あの魔術を使われてはアインツベルンの結界ですら紙のように消されてしまう可能性もある。

舞弥が言うように自身がマスターであると知られてしまった切嗣だが、自身が狙われることはないと感じていた。

「いや、それはないだろう。いくらあのキャスターの魔力が多くても、あのレベルの魔術を行使すれば、当然マスターにもそれなりの負担が来るはずさ。だから僕たちは予定を変更しない。それに、ライダーのマスターに接近しておきながら何もしなかったということは、おそらく一般人が多いところでは何もしてこないだろう。予定通り行動すれば問題ないさ」

「わかりました。それでは早速行動に移ります」

舞弥はそう言うと、切嗣の部屋を出て行く。一人になった切嗣は、今回のキャスターについて考えをまとめていく。

「今分かってしていることは、キャスターというクラス名とステータス。マスターは不明……」

切嗣は口に出しながら紙に情報を書き出していく。

「ステータス面では魔力以外は最弱といつてもいい。ただ、セイバーと同じく魔力放出のスキルを持つていた場合はそれに限らない……。やはりマスターを狙うべきか？だが、情報が一切ない。ということは、この地で選ばれた可能性が高い。少し探ってみるか」

切嗣は紙一枚に亘った情報をもう一度確認し、これからの方針を立てる。とりあえずは、今宵のランサーのマスターの件からだ、と自分に言い聞かせ、部屋を出て行く。

「ふーん。あの人が切嗣っていう人か」

いつの間にか部屋にいたキャスターに気付かずに。

ACT. 4

倉庫街での戦いの翌日。キャスターはまたも街をぶらついていた。だが、その存在は昨夜よりも薄く感じられる。

「はあ。やっぱり限界が近いのかなあ。早くマスター見つけないと……」

自らのマスターである龍之介を喰らって以来、スキルである魔力生成で魔力を補い、現界を保ってきたキャスターであったが、単独行動スキルを持つアーチャーならいざ知らず、流石に限界が近づいてきたようである。キャスター自身の見立てでは、あと一日持つかどうか。とりあえず一般人に暗示をかけマスターにするという方法もあるのだが、それは最終手段。まだ余裕があるのだから、キャスターは魔術的素養のある人物を探していた。

魔術的素養さえあれば、キャスターである自らの能力を活かし、即興の魔術師にすることも可能である。だが、これが本当にただの一般人であればそうはいかない。魔力を節約したい身であるキャスターにとって、一々暗示をかけるのは危険なことなのである。

それに、魔力生成も無闇に使うことのできないものである。その特性上、魔力生成の対象は跡形もなく消えてしまう。それに、対象物によつて摂取できる魔力量にも差があるのだ。多用すればするほど他のサーヴァントに見つかる可能性は高くなっていく。

「都合よくいえないかなあ……」

だが、現実とはそこまで甘くないのである。かれこれ朝からずつと繁華街をうろついているのだが、発見できたのはライダーとそのマスター。彼ら以外にはいなかったこともないのだが……。

「うーん、あの子がそうじゃなければなあ……」

キャスターが思い出しているのは、つい先ほど見つけた少女のことだ。まだ幼いながら、魔術を使用しているであろう魂の匂い。一度はマスターにしようかと思つたものの、読心術を掛けた結果、あの大きな屋敷の所有者遠坂の娘であることが分かり、無理だなあと諦めたのだ。

と、ここでキャスターが何かに反応する。どうやら次の候補が見つかったようだ。

「よし！ 行こう!!」

キャスターは次の候補がいる方角へ駆けて行つた。



「なあ、ライダー。今のつてキャスターだよな?」

「ん? そうであつたか?」

キャスターが駆けて行く数時間前。ライダーとウェイバーは繁華街へと赴いていた。

朝、宅配便を使いTシャツを手に入れたライダーは意気揚々と外出しようとしていた。当然、ズボンは穿いていない。それを断固阻止すべくウェイバーはズボンを買に行くことになるのだが、肝心のサイズが分からない。そのため、霊体化したまま着いて来てもらうという行動に出るしかなかったのだ。

現在、ズボンを無事に購入してもらったライダーはマスターであるウェイバーの制止を無視して実体化し、歩いていた。当然、このような大男が冬木市にいるということはなく、先日のセイバーとアイリスフィールの時と同様市民の注目を集めてしまった。となれば、敵のマスターやサーヴァントに見つかっていると考えるのが普通であろう。事実、ウェイバーはそれを恐れていた。だが、当のライダーはそんな心配どこ吹く風。悠々と街を歩き、ウェイバーの金でいろいろなものを買っていた。

そんな中見つけたのがキャスターだった。

「なあ、追わないのか？」

「追う必要はあるまい。余とてこんな昼間からキャスターと争う気にはなれん。周りが焦土と化してしまうではないか」

なるほどライダーの言にも一理ある。昨夜のキャスターが使用した魔術を見るに、この繁華街くらいであれば確実に消し飛ばすことが可能であろう。それに対抗するには、ライダーもそれ相応の技を出す必要がある。場合によつては宝具もだ。そうなればライダーの言つた通り、この辺りは焦土となるだろう。

そこまで考え付いたウェイバーは、キャスターの行つた方角を見ながら、溜め息を吐くのだつた。

「おーい、坊主。余はこれを食してみたい」

「また!?! もうお金無くなつちやうじゃないか!!」



「あ、いたいた!」

キャスターは先ほど感じた気配を追って繁華街を走っていた。5分ほど走ったところで、その気配を目で捉えることにキャスターは成功する。

そこにいたのは、先ほど見かけた遠坂の娘と同じぐらいの年齢であろう少女。振り向いたその顔は、大人しめな印象を受ける。だが、キャスターは見つけたという興奮以上に驚いていた。

「似てる……。ソラに……」

ソラというのが誰だかは不明ではあるが、キャスターの生前、そういう人物がいて、それなりに親しい人物だったのだろう。

キャスターはそのことを意識しながらも、話し掛けることにした。

「ねえ、君。魔法、使ってみない?」

「魔法?」

「うん。あ、ボクはリクっていうんだ。君は?」

「私は……コトネ。ねえ、魔法って本当?」

「うん。じゃあ見せてあげるね! *transitus*^{転移}」

キャスターが呪文を唱えると、少し身体が引つ張られるような感覚になり、次の瞬間には先ほどまでいた場所から移動していた。

「はい、これが魔法。今のは一瞬で場所を移動するものだね。どう? 信じてくれた?」

「うん。……私にも使えるの？ リクちゃん」

「使えるよ。君には魔術的素養があるからね」

「まじゆつてきそよー？」

急に出てきた難解な言葉にコトネは首を傾げる。

「そ。まあ、そんなに難しく考えることはないよ。あ、それにさつきは言わなかつたけど、こんな髪形でも、ボクは男の子だからね」

「ええーっ!!」

どうやらコトネにとつて魔法の存在よりもそちらのほうが驚きだったらしい。確かにキャスターの容姿は女の子のそれだ。艶のある黒い髪は腰まで届くほど長く、背丈や中性的な顔立ちも相まって女の子にしか見えない。

「やっぱり勘違いしてたんだね。ま、慣れてるけどね。さて、もう一回聞くんよ？ 魔法使いになりたい？」

「うん！ なりたい！」

「よし分かった。じゃあ、目をつぶってて」

キャスターに言われたとおり目をつぶるコトネ。その間にキャスターは足を踏み鳴らし魔術陣を作り上げていく。

「Contactus ambiens rejectio。」

コトネにとって聞き覚えのない言葉が耳に入る。それがいかにも魔法らしくてコトネの胸は自然と高鳴っていく。一方のキャスターは今までにないほど真剣な顔で魔術陣を作り続けていく。

「Claud痛eb覚ant遮 dolor断・

Ex既ist存ens回 a路per開t放circu開itu放・

Com魔mit術t回it路ur移 port植and開is始 mag認ic認ae認 circu始itu始

………Com完ple了ment了um了・Sat起us動 re確pre確hend認o認 ……

Non問 pro題blemなaし・Fin終em了・」

最後に一際大きな音を出して足を踏み鳴らすと、コトネの意識がなくなる。

「さて、あとは目を覚ましたらOKかな」

一仕事終えた体のキャスターは意識を失っているコトネを少し空中に浮かせると、その身体の下の地面に新しい魔術陣を描いていく。今度は足を踏み鳴らす訳ではなく、寶石を融かしたものを使い魔術陣を描く。

そうしている内にコトネが目を覚ます。初めは何が起こったのかわからないような顔をしていたが、徐々に思い出してきたのだろう。コトネの顔は興奮に染まっっていく。

「ねえ、リクくん。もうこれで私も魔法使いなの?」

「うん。でも最初は簡単な魔術しか使えないけどね。ボクみたいに場所を移動するよう

な魔術はたくさん練習しないと」

「やっぱりそうなんだー」

「当然。じゃあ、魔法使いとしての初めての魔法を使ってみようか。頭の中に浮かんでくるのを唱えてね」

コトネはそう言われて、自然と目を閉じる。そして、口を開き詠唱を始める。

「Dico.

Tu es tuum sub,

fate est in tua fistula.

Sequitur in loco ad sanctum Graal,

hanc, si hac administratione, secundum.

Sifatum, reliquota fistula

Acciper sacramentum in nomine applicatur ad

Puteus admittere ut principaler.

一通り唱え終ると、先ほどキヤスターが描いていた魔術陣が光を放つ。それが収まるころには、二人の間に、繋がりが出来ていた。

「何か変な感じがするよ？　これが魔法？」

「うん。まあ、詳しいことは言えないけど、ボクとコトネちゃんの間に関わりが出来たん

だ。一時的に、だけどね」

「一時的？」

「うん。ボクもずっとこの街に居られるわけじゃないからさ、ボクがこの街を離れたときにはその手にある繋がりには切れちゃうんだ」

そう言いながらキヤスターはコトネの手を指差す。コトネが示された場所を見ると、盃を囲む二本の剣と杖で出来た三画の模様が手の甲に浮かび上がっていた。

「これが、繋がり？」

「そう。あ、そだ。これプレゼントね」

そう言つてキヤスターがコトネに渡したのは、一冊の本だった。題名も何も書いていない、古ぼけた本。中を開いてみても、何も書かれていない。そのことを抗議しようとして口を開くも、キヤスターが説明を始めたので、仕方なく黙ることにする。

「まず、これを開くときには、周囲に誰もいないことを確認すること。魔法つていうのは隠しておかなきゃいけないものだからね」

「うん」

「で、開く前にはこう唱えること。……claude^閉re^よ」

キヤスターがそう唱えてから本を開くと、先ほどまで何も書かれていなかったページに次々に文字が浮かび上がっていく。

「最初はあんまり読めるページは多くないけど、レベルが上がれば読めるところも増えていく仕掛けになってるんだ」

「うん。じゃあ、ママにも内緒だし、リンちゃんにも内緒にしなきゃいけないんだね」

「そうそう。秘密でね。さて、ボクももうそろそろ家に帰らなきゃね。コトネちゃん、さっきの場所まで移動するよ」

ここに来た時と同じように転移魔術を使い元居た場所に戻る。そこで二人は別れを告げ、家路に着く。

一人になったキャスターは、コトネのことを頭の中で整理していく。

「(コトネちゃん、まあ、今のままじゃ魔術師とは言えないけど、将来は結構いい魔術師になりそうだなあ。魔術回路も多かつたし。それにしても何でソラに似てるんだろう?) ……ねえ、アサシンさん、出てきたら?」

人通りのないところでキャスターは立ち止まり、何も無い方向へ向けて声を発する。

すると、あつという間に複数の人影が現れていく。どれも髑髏の仮面を被っている。

すなわち——アサシン。

「キャスター風情が、自らの陣地ではないところで我らアサシンに勝てるでも?」

「ふふふ。今のボクは機嫌がいいんだ。このまま何もしないで帰ってくれるなら、何もしないであげるよ?」

キヤスターのあからさまな挑発に、アサシンの一体は耐えきれず、先制攻撃を仕掛ける。

「ハッ。何を言うかと思えば、その程度か。我らアサシン、キヤスター風情には負けぬわ!!」

そう言つてアサシンは手に持った短剣をキヤスターへと投げつける。だが、それをキヤスターは舌打ちだけで防御魔術を発動し完璧に防ぐ。

「あはは。じゃあ、みんな死刑」

キヤスターは目を瞑り、詠唱を始める。それを好機と見たキヤスターは一斉に襲い掛かるも、悉く防御魔術に防がれる。

「じゃあさよなら」

そして――

ACT. 5

「えーと、確かこう言うんだったよね。……claude^閉re^{じよ}」

帰宅したコトネは早速自室で魔術の鍛錬を始めることにした。耳慣れない言語を口にし、本を起動させる。

すると、白紙であつた本に文章が浮かんでくる。それを声に出して読み始める。

「……この魔導書は魔法を習得するためのものである。なお、初めに読める箇所は2頁であり、それ以降は個人の力量・習得度合によつて文章が浮かび上がる」

コトネにとつては少々難解な言葉の羅列が続くが、辞書を引きつつ読み進めていく。

「手の甲に描かれた模様は魔法使いであることを表し、隠しておかねばいけない……つて、先に言つてよ！ 普通に帰つてきちゃつたよ……」

「ここにはいないリクに突つ込みつつ、それでも本の文字を追うことは止めない。

「これより、魔法の練習を始める。まずは、この呪文を唱えてみよ」

「……えーと、summon^召itione^喚m・SORA」

コトネが呪文を口にした途端、窓も開けていないのに突如として風が吹き荒れる。や

がて風は収まっていき、代わりに人影が姿を現す。

「呼びかけに応じて参上したわ！ さあ、魔法の練習を始めましょう!!」



「^{マスター}導師、先ほどキャスターの監視に着いていたアサシンがやられました」

「そうか。それで、何か得られたのかね？」

「いえ、ステータス以上のことは得られませんでした」

「では、アサシンを一ヶ所に集める手配をしておいてくれないか？」

「……何かあったのですか？」

地下室より時臣に連絡を取っていた綺礼は、その申し出に少々驚愕する。未だ情報が全て集まった訳ではないこの状況でアサシンを集める必要があるのか？ そんな疑問が綺礼の中で首を擡げる。

「アーチャーがライダーから酒宴に誘われたのだ。英雄王とあつてはその誘い断るわけにはいくまい。期日は3日後だ。そこで仕掛け、ライダーの宝具を明らかにする」

「……了解しました。それでは各地に散っているアサシンに伝達をしておきます」

「よろしく頼むよ、綺礼」

通信が途切れ、部屋を静寂が満たしていく。名目上脱落者である綺礼はこの部屋にいる限り不可侵を約束されている。だが、自らここを出て衛宮切嗣に会いに行つたのは昨夜のことだ。結局会うことはできなかつたが、帰つてきたとき、この部屋にはアーチャーがいた。

そこで綺礼はアーチャーから一つの依頼を受けた。それは、各マスターの聖杯に託す望みを調べよというものであつた。

だが、こうなつた以上、その依頼は破棄されてしまう。それを告げた際のアーチャーの機嫌を思うと、気が重くなる。

それでも、やらぬわけにはいかない。綺礼は、常に教会の側にいるアサシンの一体を呼び出す。

「マスター、何か御用ですか」

現れたのは、長い髪をポニーテールにした女性型のアサシン。どうやら、数ある分身の中でもリーダー的な役割にいらしく、よく指令を出している。今回このアサシンを呼んだのも、そういう経緯からだ。

「時臣師より、命があつた。3日後、ライダー主催の酒宴を襲撃しライダーの宝具を探れ

というわけだ。それを各アサシンに伝達してほしい」
「了解しました」

アサシンはすぐに身体を霊体化させ、部屋から消えていった。再び静寂が部屋を満たしていく。綺礼はその中で目を閉じ、今までのアサシンの報告を思い返すのだった。



「どうした？ 雁夜。随分やつれておるではないか」

「う………るさい！」

バーサーカーの思わぬ暴走によりその身を削られた雁夜は、一先ず間桐家へと帰宅し、再び刻印虫の調整を受けていた。

今回は運よくキャスターによってその暴走は止められ、この程度で済んでいるが、何も邪魔の入らないところで暴走してしまえば、雁夜の魔力をいとも容易く食いつぶすだろうことは想像に難くない。

「それにしてもあのキャスター、中々よいサーヴァントではないか。マスターはおろか、

サーヴァントにすら気づかれず背後に回るとは。あれならばこの聖杯戦争、容易く勝ち抜くことができようぞ」

「一体、何を考えている」

「なに、お前が気にするようなことではあるまい。僕はあのキャスターの供物を探すでしょうかの。次の聖杯戦争に向けてな」

「次は……ないッ！ 俺が聖杯を取って桜ちゃんを解放する!!」
「精々頑張るがよいわ」

臓硯はそう雁夜に言うのと、さっさと部屋を出て行く。部屋を出る間際の臓硯の顔は、嘲笑を浮かべていた。

一方雁夜は、自分の実力のなさを痛感し、項垂れている。もつと自分に力があれば、自分が間桐から逃げていなければ。そんなことが頭の中を巡り、苛立ちが募り、そしてそんな自分にも苛立つ。取り留めもない自己嫌悪が雁夜自身の実力のなさを自らの中で浮き彫りにしていく。

そして、ついに雁夜は手を出してしまった。禁断のモノに。



アインツベルンの城では、これからの方策が話し合われていた。出席者は、切嗣、アイリスフィール、舞弥、セイバー。

「まずはランサーだが、セイバーの傷が癒えていないところを見るとまだ生きているよ
うだ」

そう言われ、セイバーは自分の左手を見る。表面上は分からないが、その実、臍を切られている。これでは満足に戦うことは出来ない。セイバーは両手で剣を振るうのが自らのスタイルであるからだ。

「だが、奴の魔術工房は破壊済みだ。おそらく僕たちを狙ってここに来るはずだ。その時に仕掛けよう。舞弥、設置は終わっているかい？」

「はい。全て設置は完了しています」

切嗣がこの城にやってきて以来、もともとあつた魔術的防御に加え、科学的なトラップをいたるところに仕込んでいった。それは、城だけでなく、森にも同様に仕掛けられている。

「ライダーははつきり言って何もわかつてはいない。現れる時も帰還するときもあの戦車チャリオットを使っているから速すぎて追跡ができない」

強いてあげるのであれば、マスターの名前くらいだろうか。ウェイバー・ベルベット。ランサーのマスターであるケイネス・エルメロイ・アーチボルトと同じ降霊科であることぐらいしか判明しておらず、その工房の所在すらわからない。

「アーチャーとアサシンは手を組んでいる可能性が高い。僕も舞弥も倉庫での戦いの際にアサシンを確認した」

「ちよ、ちよつと待つてください！ アサシンは敗退したのではないのですか!?!」

だが、セイバーの言葉を無視して切嗣は続ける。

「バーサーカーに関しては、特に何かする必要はないだろう。どうもセイバーに何かあるらしいが、マスターが急造だ。勝手に自滅してくれるだろう」

「切嗣！ 私の話——」

「そして、キャスター。はつきり言って、ライダー以上に不明だ。ただ、拙いことに僕がセイバーのマスターであることを知っている。ランサーの呪いが解け次第速やかに排除すべきだ」

「ふふふ。ボクを排除できるかなー?」

突然割り込んできた声に全員が身を固くする。いつの間にかキャスターが部屋の中にいたのだ。

「キャスター!! 貴様、一体どこから……」

「わー!! ストップストップ!! 今日には戦いに来たわけじゃないから!!」
「信じられないな」

セイバーは当然キャスターの言を信用するはずもなく、見えない剣を構える。

一方のキャスターは、よくよくみれば両手にスーパールのレジ袋を持っており、手が使えない状況にある。

「今日のボクは機嫌がいいからさ、みんなでお菓子でも食べようよ!」

そう言つてキャスターは両手のレジ袋を掲げてみせる。そこには、ポテトチップスからチョコレートまで、ありとあらゆるお菓子が入っていた。

「要らぬ。それに敵が出すものを口に入れるわけにはいかない」

「もう! 真面目すぎるよ。いいじゃん、別に」

セイバーが正論で言い返すも、キャスターは聞く耳持たず。少し不貞腐れたような仕草をする。

そんな時だった。

「……………ツ! 切嗣、侵入者よ」

「くツ……………こんな状況で……………!!」

アイリスフィールが境界からの信号を受け取り、侵入者がいることを切嗣に告げる。だが、部屋の中にキャスターが居る以上、迂闊にセイバーを迎撃に向かわせるわけには

いかない。

当のキャスターはいつの間にか袋を置き、テーブルの上にあつた水晶を覗き込んでいた。

「……ふーん。ねえ、セイバーさん、ランサーみたいだよ?」

そう言つて水晶を指し示すキャスター。警戒しながら水晶を覗き込むと、確かにランサーの姿があつた。

「ねえ、セイバーのマスターさん。一旦休戦しない? ボクとセイバーでランサーを倒してあげるよ?」

「断る! 私とランサーは一騎打ちをすると誓つたのだ。二人がかりなど——」

「キャスター、それは君のマスターの指示か?」

断ると言つたセイバーの言葉を遮り、切嗣がキャスターに質問を投げかける。

「うん。あの破魔の紅薔薇のデータが欲しいんだつて。だからここは共闘しないかつて」

「……分かつた。一時休戦だ。アイリ、ランサーの方は頼んだ。僕はマスターの方をやる」

「分かつたわ。気を付けてね」

「行くぞ、舞弥」

「待ってください!! 切嗣!!」

背後のセイバーの声を無視し、切嗣は部屋を出て行く。それを見ていたキャスターは一言。

「……なんか、複雑な関係??」

ACT. 6

「それじゃあ、セイバー、迎え撃つてくれるかしら？」

「はい。ですが、キャスターは……」

「ボクが行つても邪魔でしょ？ ボクはここにいますよ」

「しかし……」

切嗣と別れたセイバーたちだが、どうしてもキャスターが信用できないのか、迎え撃ちにいけないセイバー。それも当然だろう。いくら休戦協定が結ばれるとはいえ、特に契約などを交わしたわけではないのだ。裏切ろうと思えば容易く裏切ることが出来る。だが、そうこうしている間にもランサーは迫ってきている。

「うーん、じゃあボクがランサーと戦おうか？ それなら問題ないでしょ？」

「しかし、私は彼と一騎打ちをすると誓いました」

「じゃあ、行けばいいじゃん。大丈夫だって。マスターじゃないのに一々危険を冒してまで襲う気はないから」

「……わかりました。ですが、何かあったら……」

「分かっているって。さ、いつてらっしやい」

手をひらひらと振ってセイバーを送り出すキャスター。セイバーが出て行つたあと、部屋に残つたアイリスフィールは、キャスターに聞きたかつたことを聞いてみることにした。

「ねえ、何で私たちに協力することにしたの？ 対魔力持ちのセイバーが脱落したほうがあなたには都合がいいんじゃないかしら？」

アイリスフィールの言うことは正しい。この聖杯戦争において、高い対魔力を持つセイバーは、キャスターの天敵だ。通常であれば、逆にランサーと組んでセイバーを倒したほうが有利になる。ランサーも対魔力を持っているとはいえ、セイバーには及ばない。加えて、セイバーは今、ランサーの必滅の黄薔薇ホウキウによって傷ついているのだ。サーヴァントが二人協力すれば容易く撃破できるだろう。だが、そんなアイリスフィールの予想に対して、少々違つた考えをキャスターは述べる。

「うーん、確かにそうなんだけどね。でも、ボクが苦手としてるのは、対魔力じゃなくて敏捷のほうなんだ。いくらボクの防御術式が早いとはいえ、最低でも一工程シングルステップは必要だしね。最速と言われるランサーだつたらその時間でもボクに迫ってくるだろうし、今回のランサーは最悪なことに破魔の紅薔薇ベニバラまで持つてるからねー。だから、さつさと退場してもらおうと思つて」

なるほど確かに言われてみればそうである。確かにセイバークラスのもつ高い対魔力は脅威だ。だが、今回に限って言えば、魔術を無効化する槍を持つランサーの方が厄介なのだ。たとえばその身に防御術式を掛けていようが、問答無用で無効化され、ダメージを負ってしまうのだ。

「あ、セイバーさんが到着したみたいだよ?」

水晶で遠見の魔術を使っているキャスターが水晶を覗き込みながら言う。そこには、既に戦い始めているセイバーとランサーの姿があった。



ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは優秀な魔術師だ。自らの持つ属性を遺憾なく発揮した、この月ツォールメン・ハイドグラム 霊 髓 液は、自身の持つ礼装の中でも特に信頼を寄せている礼装だ。

だが、その信頼も揺らごうとしている。

「この私が手傷を負うだと……?」

ケイネスがアインツベルン城に侵入してから、初めの内は問題はなかった。敵が設置

したと思われるクレイモア地雷や、自動小銃による銃撃も、ヴォールメン・ハイドラグラム 月 靈 髓 液の前では役立たずの代物であった。だが、索敵術式を発動し、追いつめたところで切嗣が放った銃弾がヴォールメン・ハイドラグラム 月 靈 髓 液を突破し、ケイネスの左肩に命中したのだ。

その痛みに耐えている隙に切嗣はまたも姿を隠している。そんな切嗣を見つけ出し、誅罰を下そうと考えているケイネスではあったが、どうも魔術がうまく使えない。自分の思った通りにヴォールメン・ハイドラグラム 月 靈 髓 液が反応しないのだ。それには先ほど撃たれた傷が影響し、自身の思考が鈍っているのが原因なのだが、頭に血が上っているケイネスはそれに気づかない。

ふらふらと歩いている内に、ケイネスは廊下の先に佇む切嗣を視界に捉えた。既に銃口はケイネスの方を向いており、銃弾は今にも発射されそうである。ケイネスは全身の魔術回路を起動させ、ヴォールメン・ハイドラグラム 月 靈 髓 液に攻撃指令と銃弾への防御指令を出す。

その瞬間だった。

ケイネスの魔術回路が暴走し、全身から血が噴き出る。自分に何が起こったのかわからないまま、ケイネスは血の海に倒れこんだ。意識ははつきりしているものの、身体が言うことを聞かない。口を開き、罵倒しようにも口が動かない。そんなケイネスを見て、切嗣は一言告げた。

「さよならだ、アーチボルトの当主」

次の瞬間には切嗣の持つ銃から弾が発射され、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトの生はその一生を終えた。



ケイネスが絶命したのとほぼ同時刻、セイバーと戦っていたランサーはいち早くそのことに気付いた。それを隙と見たセイバーは剣を振りかぶり、必滅の黄薔薇の破壊に成功する。だが、ランサーの様子がおかしいことに気付くと、一旦攻撃の手を止める。

「どうしたのだ？ ランサー？」

「我が主が死んだ……？」

自分をこの世界に繋ぎ止めておく楔がなくなっただけに気付いたのだろう。ランサーは呆然と呟く。その呟きを聞いたセイバーは、わずかに俯く。切嗣が殺したのだと理解してしまっただ。

「すまない……おそらく、私のマスターが……」

「言うな、セイバー。この結果は俺がお前との勝負にこだわり過ぎていたが故のものだ。」

俺が我が主とともに戦場に立てば防げたものだ」

「だが……」

「もうじき俺も消えるだろう。だが、だからこそ、俺はセイバー。お前との決着をつけた
い」

自身をこの世界に繋ぎ止める楔と宝具の一本を失ったランサーと、左手が回復したセイバー。どちらが勝つかはもはや分かりきったことではあった。それでも、ランサーは決着を望んだのだ。

「いいだろう。我が名はブリテン王、アーサー・ペンドラゴン」

「俺はフィオナ騎士団、デイルムツド・オディナ」

「参る!!」

決着は一瞬だった。ランサーが放った渾身の一突きをセイバーは巧みに剣でいなし、その流れに従って剣を振り下ろす。

「セイバー、お前なら最後まで勝ち残れるだろう」

「ランサー……」

「さらばだ」

最後の魔力を使い果たしたランサーは光の粒子となって消えていく。それを見送るセイバーの心に、ランサーの姿は強く焼きついた。



「アイリ、セイバーの方はどうなった？」

片づけを終えた切嗣は部屋にやってくるなり、戦況を聞いた。

「ええ、セイバーが勝ったわ。それで、そっちは？」

「ああ、問題ない。ケイネスは僕が殺した」

切嗣の「殺した」発言に僅かに顔をしかめるアイリスフィールだったが、それも一瞬のことで、切嗣に気づかれることはなかった。戦況を確認し終えた切嗣は、次にキヤスターに問い掛ける。

「キヤスター、僕の銃に何か細工をしたかい？」

「あ、気づいたんだ。大丈夫、変なものじゃないから。ただ、強化しただけだから心配しないです」

「強化？ それは魔術的な強化ってことかな？」

「ううん。そこに入ってた弾に、『貫通』の概念を込めただけ」

キャスターは何でもないように言っているが、これはとてつもないことである。普通、概念武装というものは、ある程度時間をかけて作るものだ。切嗣が使う『起源弾』もその一つである。だが、キャスターは気づかれること無く、しかも元から存在していた概念を消すことなく弾に概念を込めたのだ。そんなじよそこの魔術師が出来るようなことではない。加えて言うならば、時計塔でもそのようなことが出来る者は皆無といつてもいいだろう。

さすがはキャスターのサーヴァントとアイリスフィールは思った。そうしている内にセイバーが帰還する。何か思うことがあったのか、切嗣に詰め寄って行こうとするが、その気配を察知したのか、切嗣は足早に部屋を出ていく。

そんな中、キャスターは次の行動に移ることにした。

「じゃあ、ボクは帰るね。もう休戦協定はおしまいだし、次会ったら戦おうねー」

元気いっぱいといった様子で手を振りながらキャスターは霊体化して、その場を後にした。

「あ、これどうすれば……って行っちゃった……」

その場に大量のお菓子を残したまま。



町のはずれにある廃工場。そこには、紅い髪をした女性の姿があつた。彼女の名は、ソラウ・ヌアザレ・ソファイアリ。ケイネスの許嫁である。

彼女は今、多大な喪失感に襲われていた。ケイネスが死亡したからではない。ランサーがいなくなつたからだ。

だから、気づけなかつた。背後から忍び寄る小さな影に。

「いただきまーす」

声が聞こえ、振り向いた時には、すでに彼女の意識は消え、数瞬後には肉体もこの世から姿を消した。

ACT. 7

ランサーとの一戦から3日後。ライダーによつて、「聖杯問答」なるものが、アインツベルン城で開かれようとしていた。

そもその発端は、ライダーの発言にある。ウエイバーに服を買ってもらつた時に、偶然、アーチャーに遭遇した。その場では特に何事も起きなかつたのだが、帰りがけにライダーがこの「聖杯問答」を開催すると言つたのだ。もちろん、挑戦とあらば、受け取らないわけにもいかないアーチャーはその場で承諾、場所はライダーが見つけることになつた。

だが、ウエイバーが拠点としているマツケンジー宅ではあまりにも狭い。そのため、いい場所を探していたのだが、運がいいのか悪いのか、アインツベルン城をライダーが発見、そこを開催場所として選んだのだ。当然、アインツベルンの許可はない。

そして、当日。ライダーは力任せに結界を破り、堂々とその姿を現し、セイバーにも誘いをかける。それをセイバーは即座に承諾、「聖杯問答」の開催が決定した。

「ふーむ、遅いなあ、アーチャーめ」

今は、アーチャーの到着を待つている状態だ。一応、使い魔による連絡を送っているのだが、読んでいるかは不明だ。

だが、ただ待つているだけではつまらないと、ライダーはセイバーに話し掛ける。

「のう、セイバーよ。今一度聞くが、我が軍門に下る気はないか？」

「くだい。私とて王だ。下る気は毛頭ない」

セイバーから帰ってくるのは、拒絶の言葉ばかり。本当なら聖杯を求める理由も聞きたいのだが、それはアーチャーが来てからと自分を抑えるライダー。

「しかしこゝも暇だとなあ」

暇なことに耐えられなくなってきたライダー。特に余興などなく、またセイバーも積極的に会話する気がないのか無言を貫いている。

「我より早く来るとは、雑種にしては礼儀があるではないか」

「ようやく来たか。余は待ちくたびれたぞ」

ライダーはアーチャーが来るなり、持参した酒樽を開け、柄杓で酒をアーチャーに差し出す。

それをアーチャーは受け取ると、一息に飲み干して一言。

「所詮はこの程度か。ならば我が真の酒というものを味あわせてやる」

アーチャーはそう言うと、王の財宝を開き、そこゲイトオブバビロンから黄金の盃と酒を取り出し、ライ

ダーに差し出す。

「これは美味い！　もしや神代のものか？　お主はこれ以外にも持っているを見た。余に一つくれないか？」

「やらぬ」

ライダーの要求を即座に切り捨てるアーチャー。

「まあ、これで王の格は決まったも同然。まともな酒すら用意出来ぬ者など……」

「酒などで格を決めるなど、バカバカしいにも程があります」

「フン、酒すら持参せぬ貴様に言われたくはないぞ、雑種」

今まで黙っていたセイバーがアーチャーに食つてかかる。場の雰囲気が悪くなつていく。

「論点がズレておるぞ。……さてアーチャー、これは聖杯を掴む正当さを問う謂わば聖杯問答。貴様は王なのであろう？　なれば貴様は何を以つて聖杯を得んとする？」

「仕切るな雑種。そもそも奪い合うという所からしてずれているのだ。聖杯は我の所有物なのだからな。故に得るものではない」

聖杯は自分の所有物だと言うアーチャー。それゆえ、奪い合うということ自体が間違っているのだと、アーチャーは告げる。

怪訝そうに眉を顰めるライダーを一瞥し、アーチャーは続ける。

「この世界の宝物はその起源を我が蔵に遡る。いささか年月が離れ、各地に散逸しているもののそれは変わらぬ」

「じゃあ、貴様は聖杯がどのようなものか知っているのか？」

「知らぬ。我が財の総量は、とうに我の認識を超えているのだ。だが、それが『宝』である時点で我が財であるのは明白だ。それを奪い合うとは盗人猛々しいにもほどがある」
 セイバーは呆れ果てているようだったが、ライダーは違った。何やら合点がいつたらしく、一人で頷いている。

「ほーう。余は貴様の正体が掴めてきたぞ……。まあ、それは置いとくとして、じゃあ、何か、貴様の許可があれば良いと？」

「然り。だが、我がお前ら雑種に褒賞を賜す理由はどこにもない。我が褒賞を賜すは我の臣下と民のみ。故に、貴様が我が軍門に下るといふのなら杯の一つや二つ、下賜してやってもいいぞ？　ライダー」

「まあ、そりゃ出来ん相談だわなあ。王が下るのは戦で負けたときのみよ。でもな、アーチャー。貴様、別段聖杯が惜しいという訳ではないのだろうか？　なら、なぜ聖杯戦争に出てきたのだ？　叶えたい願いでもあるというのか？」

「願いななどない。法だ」

アーチャーはライダーの問いに即答する。

「我が王として敷いた、^{オレ}私の法だ。それが侵されるのであれば我^{オレ}自らが裁かねばなるまい。まあ、現世がこれほどまでに醜くなっているとは思わなかったがな。消費文明とやらには虫唾が走る」

「そうかのう……余としてはこの現世は中々刺激に満ちていると思うのだがなあ。いや、それは関係なかったな。それにしても……ふむ。自らの法を貫くか。だがな、余は聖杯が欲しくてたまらないんだよ。で、欲した以上、このイスカンドルは征服王故に略奪するのが流儀である」

「是非もあるまい。お前が犯し、^{オレ}我が裁く。問答の余地などない」

はつきりと敵対の意思をお互いに示すアーチャーとライダー。だが、それを憚然としながらセイバーは見ていた。

「さて、次は余の番だな。余の目的、それは受肉だ」



アインツベルン城から、少し離れた場所。そこでは、キャスターとアサシンが戦いを

繰り広げていた。

「もう！ しつこいよ！ Esset mea ventus scutum！」

アサシンの投擲を、風を用いた防御魔術で弾くキャスター。周囲が森であることも災いし、死角からの攻撃に悩まされるキャスター。加えて、アサシンは攻撃時以外は常に気配遮断のスキルを使っているため、居場所を特定することが出来ず、苦戦していた。

「……………しようがない、やるしかないか」

何か覚悟を決めたような顔をするキャスター。どうやら魔力の高まりからして宝具を使うようだ。当然、やらせまいとアサシンの攻撃は激しくなるが、先ほど発動した防御魔術を貫くことが出来ず、発動を止めることが出来ない。

「行くよ。Ventus concidit sculpe！」

発動した魔術は宝具ではなかった。とはいえ、周囲の木々を切り刻み、枝の落下した衝撃であたりを土埃が覆う。それこそが目的だったのだろう。キャスターは素早く次の詠唱を行う。

「Manducare vita！ 魂喰い！！」

キャスターの宝具が発動される。キャスターの足元から黒い影が広がって行く。その影に触れた木々は、一瞬のうちに姿を消し、影が通った後は、不毛の大地となっていた。

流石に危険だと感じたか、潜んでいたアサシンが、次々に脱出していく。

それでも影の範囲は広がって行く。遠くに行けば行くほどスピードが上がり、遂には1体のアサシンを捕らえることに成功した。

「ひッ！ や、やめ——」

そのアサシンの悲鳴は途中で途切れることとなった。瞬く間に影がアサシンを覆い尽くしたからだ。それを目撃したアサシンは、更にスピードを上げ遠ざかろうとする。霊体化すれば逃げられるのだろうが、結界が張られているのか霊体化が出来ない。

逃がっている内にも、数体のアサシンが影に吞まれて消えていく。

やがて、影がその動きを止めるころには、その場にいたアサシン5体が、全て影に吞まれていた。

「ふう。やつぱりサーヴァントは違うなあ。魔力生成できる量が違うや」

周囲1キロにわたって不毛の大地と化した場所でキヤスターは一人呟く。

「さーてと、どの能力貰おうかなー」

キヤスターは魔力を用いて、何やら図形のようなものを描いていく。そこには、今回宝具によって呑み込んだアサシンのステータスが表示されていた。

「5体分だけど、魔力生成にもまわしちやっただから実質1体分だけかあ。じゃあ、耐久でも貰おうかな」

そう言つてキャスターは凶形のある部分を指差す。見た目には何も変化はないが、もしこの場でステータスを見ていたマスターが居たのなら驚愕したことだろう。元々Eランクだったキャスターの耐久ステータスが、アシンと同じDランクに変化したのだから。

本来、サーヴァントのステータスとは召喚時に決定し、以後変化することはない。だが、この宝具はそれを可能にしてしまうのだ。

「さーとと、セイバーさんたちのところに行こうかなー」

キャスターはその場で足を踏み鳴らし、消えていった。



聖杯問答の会場では、異常事態が起こっていた。

ライダーが自らの望みを語り、最後にセイバーが自らの望みを語った。セイバーが聖杯に託す願い、それは故郷の救済だった。

それを聞いたライダーとアーチャーの反応は白けきっていた。そこでセイバーはラ

ライダーの問いに対して言い返そうとするも、言い返すことが出来なかった。ブリテンの滅びの運命は誰よりも自分が知っているが故に。

それだけであれば異常事態ではない。だが、アサシンが現れ、事態は急転した。脱落したはずのアサシン、それも1体ではなく、少なくとも50はいるであろうアサシンの集団。

だが、それを前にしても、ライダーは平静だった。王の言葉は万人に対して発せられるという彼の考えにより、アサシンにも酒の入った柄杓を差し出す。「この酒は貴様らの血とともにある」と言つて。

アサシンは当然のようにそれを断り、短剣によつて柄杓を破壊した。

そして、ライダーは告げる。

『『この酒』は『貴様らの血』と言つたはず。……あえて地べたにぶちまけたいというのなら……是非もあるまいて』

ライダーがそう告げた瞬間、砂塵が舞い始める。

「セイバー、そしてアーチャーよ。これが最後の問いかけだ。王は孤高なるや否や」

最後の問いとして、ライダーはセイバーとアーチャーに問い掛ける。

アーチャーは口元を歪めて失笑した。そんなもの問われるまでもないという沈黙の返事だった。

一方セイバーは、己の王道に従い答えを告げる。

「王たらば……孤高たるしかない」

そんな両者の答えにライダーは豪笑する。

「ダメだな！ 全くもつて分かつておらん！ そんな貴様らにはここで真の王たる者の姿を見せねばなるまいて！」

逆巻く熱風が一層激しく吹き荒れ、遂には現実を侵食し、覆す。

「そ、そんな!?! 固有結界ですつて!?!」

夜のアイントベルン城から一転したその世界は、遙かな荒野。現実を侵食する幻影。奇跡と並び称される魔術の極限であつた。

「あなた、魔術師でもないのに!?!」

「もちろん違う。これは、余一人で出来ることではない。この風景は、かつて、我が軍勢が駆け抜けた大地。余とともに苦楽を共にした勇者たちが等しく心に焼き付けた景色だ」

そう告げたライダーの周囲に、人影が現れ始める。

「この世界、この景観をカタチに出来るのは、これが、我ら全員の心象だからだ」

誰もが驚愕する中、ライダーの周囲に続々と騎兵が実体化していく。人種も装備もまぢまちではあるが、各々が競い合うかのように華々しく精悍だ。

「こいつら……一騎一騎がサーヴァントだ……」

マスターであるウェイバーには、自分のサーヴァントの最終宝具の正体が理解できなかった。

ランクEX対軍宝具。独立サーヴァントの連続召喚。

軍神がいた。マハラジャがいた。のちの3分割後の王朝の始祖、プトレマイオス、セレウコス、アンティゴノスがいた。そして彼ら全員が、かつて偉大なるイスカンドルと轡を並べし勇者と誇っているのだ。

「見よ！ 我が無双の軍勢を!! とうの昔に肉体は滅び、その魂は英霊と為れど、それでも余に忠義する永遠の朋友たち。彼らとの時間、彼らとの絆が我が至宝であり我が王道! イスカンドルたる余が世界に誇る最強宝具……『^{アイオニオン・ヘタイロイ}王の軍勢なり!!』」

誰もが驚愕に声がなかった。アーチャーですら、この輝ける軍勢を鼻で笑うことはしなかった。

「王とは、誰よりも鮮烈に生き、諸人を魅せる姿を指す言葉! 全ての勇者の羨望を束ね、願いを受け入れ、その道標として立つ者こそが王。故に! 王は孤高に非ず。その偉志は臣民の総意たるが故に!!」

『然り!! 然り!! 然り!!』

英霊たちの斉唱は地を揺るがし、蒼天の彼方へと突き抜けていく。その声に恐れをな

したのか、すでにアサシンは逃亡を始めている。

「さて、では始めるかアサシンよ」

そうアサシンに微笑みかけるライダーの視線は、限りなく獰猛で、残忍だった。

「蹂躪せよ!!」

『A A A L a L a L a L a L a L a i e !!』

勝負はすぐに決した。勝鬨の音が辺りに響き渡る。

彼らが消えるにつれ、固有結界も解除されていき、元のアインツベルン城に戻って行く。

「……幕切れは興醒めだったな」

ライダーは、僅かに残っていた酒を流し込みながら呟く。

「なるほど。いかに雑種ばかりと言えども、あれほどの数を束ねれば王と息巻くようにもなるか。……ライダー、貴様はこの我自ら殺してやる」

アーチャーからの完全な敵対宣言。呼び方も『雑種』から『ライダー』に変わったあたり、敵と認めただろう。

「では、この辺でお開きとするか。坊主、引き揚げるぞ」

だが、反論を返せていないセイバーはこれに納得できるはずもない。

「待て、ライダー。私はまだ」

「もうお前は黙つとけ。今宵は王が語らう場であつた。余は貴様を王とは認めぬ」

ライダーはウェイバーを伴うと、チャリオット戦車に乗りこの場を去つて行つた。

「耳を傾ける必要などないぞ？ セイバー。お前が語る王道に微塵たりとも間違いはない」

「先ほどまで私を嘲笑しておきながら何を！」

「己の器に余る『正道』を背負い込み、苦しみにあかくその道化ぶり。セイバー、もつと我を笑わせろ。さすれば聖杯の一つや二つ賜わしてもよいぞ？」

言うだけ言つてアーチャーはさっさと霊体化し、その場を去つて行つた。

残されたセイバーは、物思いに耽るような沈鬱な表情をしていた。アイリスフィールはセイバーを慮つてか、声を掛けずただそこにいることしかできなかった。

「あれ？ もう終わっちゃったの？」

そんな重苦しい空気の中、キャスターが到着し、セイバーの雰囲気も騎士のそれとなる。

「何か悩んでるみたいだけど……そんな迷いのある剣じや、ボクは倒せないよ？」

先日とは打って変わって変わって戦う気のあるキャスターは、挑発をする。普段であればこのような挑発に乗ることはないセイバーであっても、今日は違った。散々に扱き下ろされ、セイバーの精神は限界に達しようとしていた。

だが、セイバーはキャスターに切りかかることが出来なかった。

それは、キャスターの奥にいた。

黒い鎧姿。

バーサーカー。狂乱に囚われた英霊が姿を現した。

「……………A……………er……………!!」

A C T . 8

間桐雁夜は、急造の魔術師である。それ故、魔力量という観点において、他の魔術師よりも数段劣っている。

そんな彼がバーサーカーを繰るに当たって、当然魔力量は不足し、その度に彼の身体は傷ついていく。

先日の暴走の時もそうだ。幸いにして無事に隠れ家に到着し、事無きを得たものの、次もそうだとは限らない。その為、嫌々ながらも臓硯のもとを訪れることとなった。そこで提示されたもの。それが、『間桐桜の純血を初めに啜った蟲』であった。

当然、雁夜は激昂するも、臓硯は聞く耳を持たない。その蟲を残したまま、早々に部屋を出て行った。そして、雁夜は罪悪感と自らの無能さに自己嫌悪に陥った。

翌日、雁夜は狂った。端的に言ってしまうえばそれだけのこと。だが、ヤケになったわけではない。思考が一周回り、『狂気の正気』とでも言うようなものになったのだ。

雁夜は、眼前に在った蟲を使い、自らの魔力を補給。その後、バーサーカーの暴走を避けるため、隠れ家に籠った。

そこで考えた結論、それが今の状況を生んでいる。つまり、暴走するのであれば、先
にその暴走の原因であるセイバーを脱落させ、その後には時臣を殺せばいい、と。

雁夜は、そのために出来ることを行つた。桜から蟲へと渡つた魔力を、臓硯に要求し、
バーサーカーを万全の状態に仕上げた。バーサーカーのスキルを十分に發揮させるた
めに、博物館から剣を盗つてきた。今その剣はバーサーカーの腰に下がっている。

そして、邪魔者であるアーチャー、ライダーが去つたのを確認した後、バーサーカー
を現界させたのである。だが、そこには一つのイレギュラーがあつた。

それが、キャスター。

倉庫街での戦いの時に、場を引つ掻き回し、それでいて一切その真名に至るヒントを
出さなかつた唯一のサーヴァント。バーサーカーもほぼヒントは出してはいないが、手
に持つた武器を宝具とすることは知られてしまつてゐる。それだけで辿り着くことは
無いだろうが、ある程度絞り込むことは出来るだろう。それを、雁夜は恐れていた。

そして、運の良いことに、セイバーは先程までの聖杯問答で、迷いが生じていた。こ
れは絶好の好機であるはずだつた。キャスターさえいなければ。

つまるところ、キャスターさえいなければ、この場でセイバーが脱落してゐたのだろ
う。キャスターも言つていたが、迷いのある剣では、バーサーカーの猛攻を防ぐことは
適わなかつただろうことは想像に難くない。

しかし既にバーサーカーは現界した後だ。今更戻すことは出来ない。キヤスターが居ようと、戦う以外に道はないのだから。

だから雁夜は自らのサーヴァントに対して、こう言うことしか出来ない。

「……狂え！ 狂って狂って殺しつくせ！ バーサーカー!!」

「……………a r……………er……………!」



突如として現れた影。その正体は紛れもなくバーサーカーのもの。キヤスターに斬りかかろうとしていたセイバーは、思わずその剣を止めた。キヤスターもバーサーカーを感じし、警戒を強める。

「何でバーサーカーが来るかなあ。ボクは君と戦う気はまだ無かったんだけどなあ」

キヤスターが一人呟く。キヤスターからすれば、折角精神的に弱っているセイバーを倒そうとしていたのだ。バーサーカーは邪魔者でしかない。どうもバーサーカーはセイバーに対して何かあるようで、放っておけば勝手にセイバーを倒しそうなものであ

る。それでもキャスターは自分で戦うことを選んだ。

そこにはある理由がある。それは確実にセイバーが消滅した事を確認することだ。

確かに今回の聖杯戦争では、ランサーの方が厄介だった。だが、ランサーが消滅した今、キャスターにとって最大の壁はセイバーなのだ。だからこそ、その消滅を自らの目で確認したいのだ。使い魔では、戦闘の余波で潰されてしまう危険性があり、また、誤魔化すのも可能だ。

その状態でもし、セイバーが生き残っていれば、キャスターに勝ち目は無いに等しくなってしまう。相手がバーサーカーなら尚更だ。あんな攻撃方法では、土煙に紛れて撤退することも可能だろう。

キャスターはそれを危惧していたのだ。

「しようがないか。ソラ頼んだ」

キャスターが何者かの名を呼ぶ。遠くにいたアイリスフィールには聞こえなかったが、セイバーは何とか聞きとることができた。

直ぐ様変化は起こった。キャスターの身体が光り出したのだ。そして、光が収まった時、キャスターの雰囲気は変わっていた。

「……ふう。私の出番がこんなに早く来るとは思ってたわ。ま、時間も限られて
いることだし、ちやつちやつと片付けましょうか」

バーサーカーは警戒こちらに襲い掛かつては来なかった。恐らくはマスターの指示によるものだろう。

だが、それもほんの数瞬のこと。まるで重戦車の如く、バーサーカーはセイバー目掛けて突進を始めた。

セイバーとバーサーカーの中間にいるキャスターは全く慌てていなかった。ゆつくりと右腕を挙げていく。その際に袖が少しだけ捲れ、腕に刻まれた魔術陣がセイバーには見えた。

そして、たったそれだけの動作で、バーサーカーの動きは停止した。見えない鎖に縛られているように、動こうともがいている。

次にキャスターは、挙げた右手を握り始める。すると、バーサーカーの鎧が軋みはじめ、ミシミシと音を立てる。

バーサーカーはそれでも前にも進もうともがき続ける。

「……………a……………a……………」

「アハハ、まだ抗うんだ。じゃあ、もつと行くよー！」

キャスターは次に左手で、魔術陣を描き出し、そこから、凡そキャスターに相応しくない武骨なハンマーを取り出し、振りかぶる。直後、キャスターの足元で魔力が爆発し、その勢いのままバーサーカーへと振り切る。当然、バーサーカーが避けられるはずもな

く直撃し、吹き飛ばされる。

「そんな……」

セイバーは驚愕の表情でそれを見ていた。あのハンマーは明らかにキャスターが持てるような代物ではない。それなのにセイバーを超えるであろう速度でバーサーカーに接近し、吹き飛ばしたのだ。

セイバーにもそのようなことが可能になるスキルが備わっている。それは、魔力放出。魔力を身体や武器にのせることで強化するということものだ。それを使ったのなら、納得できる。だが、キャスターは魔力放出のスキルを持っていないはずなのだ。そのことは先日、切嗣からの報告をアイリスフィール経由で知らされている。

だからこそ、セイバーはキャスターの正体が分からなくなつた。

驚愕の表情を浮かべていたのはセイバーだけではない。アイリスフィールもだ。彼女は魔術に敏いたため、セイバーとは違つたことで驚愕していた。

それは、キャスターが使つた魔術。シングル・アクション一工程すら行わずに、サーヴァントを拘束してしまう魔術。そのようなことが出来る魔術を彼女は知らない。一応腕を挙げるといふ動作があつたものの、実際はその動きに連動しているため、ノータイムでの発動なのだろう。

使われた属性は辛うじて判断出来た。キャスターが使つた属性、それは風。風を操

り、その圧力で動きを封じ込め、潰そうとしたのだ。

だが、ハンマーを出した魔術はその正体が掴めなかった。恐らくは、キャスターが頻繁に使用する空間転移を応用しているのだろうが、それが合っているかと聞かれれば断言は出来ない。

こうして考えている間にも、キャスターは次々と武器を取り出し、バーサーカーを追い詰めていく。既に風の魔術による拘束は解かれているのだが、バーサーカーは思うように動けない。

「アハハハ！ こんなものなの？ 弱すぎるわ！」

追い詰められていくバーサーカーは、キャスターが放置していた武器を掴もうと手を伸ばす。だが、近づいた途端、武器は爆発した。

「ぎゃんねーんでした！」

キャスターは思惑通りで嬉しいのか、満面の笑みを向ける。そこには、微かではあるが、狂気が見て取れた。

そもそもこのキャスターは、以前までのキャスターとは違いすぎる。セイバーもアイリスフィールもそのことを感じていた。セイバーは、キャスターが放った『ソラ』という言葉が何か関係あるのだろうと考える。

「……はあ。それにしてもつまらないわね。狂つてると会話できないし」

ついさつきまで楽しそうであったキャスターの声に落胆の色が混じる。あまりにも激しい感情の揺れ。ますます訳が分からなくなっていくセイバーたち。

「……A……………」

しかし、バーサーカーにそんなことは関係ない。猛攻が止んでいるこの瞬間に腰に下げていた剣を引き抜くと、キャスター目がけて一直線に突進していく。どうやら、キャスターを障害と捉えたようで、セイバーには目もくれない。

そんな様子を見て、キャスターはまた笑みを浮かべる。但し、先ほどまでの笑みとは毛色が違った。

先ほどまでの笑みを『喜色』と表すのであれば、今の笑みは『無』。笑みを浮かべていながら、そこに何の感情もない。

「……t a c i t a e」

キャスターが発したのはたった一言。ただそれだけで、バーサーカーの歩みは止まる。続けて、度重なる衝撃を受けてきた黒い鎧が音を立てて壊れていく。

バーサーカーのマスターは危険と判断したのか、徐々にバーサーカーは霊体化している。それを何の感情も浮かんでいない目で見るキャスター。

そして。

「……そんな……なぜ、あなたがバーサーカーに……………ランスロット……………」

バーサーカーの真名を看破したセイバーは、剣を取り落とした。

カラン、という音が戦闘の終わった森に響く。セイバーは呆然とし、アイリスフィールは離れた場所に居たため訳が分からず、キャスターは空を見上げている。

沈黙が続く。未だキャスターが居るといふ状況においてセイバーは完全に戦意喪失しており、キャスターもずっと空を見上げたまま動かない。

何分経つたのだろうか。キャスターが霊体化して消えていく。そこかしこに散らばっていた刀剣類も姿を消し、セイバーとアイリスフィールがその場に残される。

「……セイバー？ 取り敢えず、城に戻りましょう？」

「……………はい……………」

今にも消えてしまいそうな雰囲気醸し出しながら、セイバーは剣を拾い、アイリスフィールの後に従って帰路に着いた。



「綺礼、ライダーの宝具評価はどうか？」

「はい。ライダーの宝具、アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢はギルガメッシュと同じ、評価規格^E外です」

聞きたくなかったであろうその言葉。時臣と綺礼は、先ほどのライダーの宝具に関して意見を交わしていた。

アサシン全てを犠牲とし、ライダーの宝具を発現させたものの、ランクは評価規格^E外。はつきり言つて誤算である。

何も知らずに挑んでいれば敗北していた可能性もあることを考えれば、この結果は良いものではある。それでも、アーチャーが持つ宝具と同格であることはやはり誤算なのだ。

救いがあるとすれば、マスターがまだ未熟であること。あれでは本来の実力を発揮することは出来ないだろう。

「それと、わが師よ。キャスターの宝具も明らかとなりました。ライダーのもとへ集結させる直前、キャスターとの戦闘時に判明いたしました」

「聞こうか」

「はい。ランクとしてはA+。ただ、その効力が非常に厄介です」

「というところ？」

「自身を中心とした直径一キロの範囲の森を不毛の大地と化し、その宝具に触れたモノは全て魔力に変換されキャスターに取り込まれました。無論、その場にいたアサシンも

です」

「つまり、サーヴァントであろうと逃れられぬと？」

「恐らくは。さらに取り込んだアサシンから耐久のステータスを取り込み、自らの耐久のランクを引き上げていました」

「……取り込めば取り込むほど強くなるということか。だとすればこれ以上キャスターにサーヴァントを倒されるのは都合が悪い」

時臣はそこまで口にし、そこで一つの疑問を口にする。

「綺礼、キャスターのランクが上がったのは耐久だけかな？」

「はい。5体のアサシンを取り込んだのにも関わらず、耐久のみでした」

時臣の中で一つの仮説が出来上がっていく。

「こうは考えられないかね？ キャスターが取り込めるもの、とりわけステータスに係するものには制限がある。それは一つしか取り込めない。尚且つ、アサシンという存在からは一つのみである、と」

「つまり、アサシンの分身体は一体一体という捉え方ではなく、『アサシン』という一つの存在であったため、耐久のみであったということでしょうか」

「恐らく、そうだろう。これならば、特に心配することはない。アサシンの中でも厄介な『気配遮断』を取り込まなかったことから考えるに、クラススキルは獲得できない

ようだしね。今残っているのは、セイバー、アーチャー、ライダー、キャスター、バーサーカー。問題はあるまい」

時臣はそう告げると、通信を切る。確かにライダーの宝具に関しては誤算ではあったが、キャスターの宝具に関しては僥倖だ。

時臣は自身のこの判断を疑うことはなかった。

ACT. 9

果てしなく広がる不毛の大地。そこには生き物の気配はなく、唯一人、■■■がいるだけ。

ここは嘗て繁栄の極みであった都市。そう。たった数時間前までは。今となつては、その片鱗すら窺い知ることには出来ない。そこに文明があつたことを示すものなど、何も残っていないのだから。

■■■には分かつていた。直、■■■を殺すために何者かがやつてくるだろうことが。でも、それでも良かった。何故なら、■■■が望むのは滅亡のみ。この大地に残る生命はあと3分の2。これだけ好き勝手やれば『星』が黙っていないだろう。もう、疲れた。いや、疲れたのではない。もう■■■の内には■■■以外何も無いのだ。だから……。

ハヤクコロシテ。

何者かの気配。後ろに誰がいる。

■■■が振り向くと、そこには赤い外套を纏った双剣使いが……。

◆
言峰綺礼が間桐雁夜を見つけたのは偶然であった。

アサシンを使い潰したことによりある程度は自由に動けるようになった綺礼は、アインツベルン城に切嗣がいなかったという報告を前もってアサシンから報告されていたことを先ほど思いだし、探索に出かけようとしていた。

綺礼には切嗣にどうしても聞きたいことがあった。廃ビルの時は話す時間がなかった。ランサーとの戦いにまぎれて訪れようとしたが、キャスターの存在が邪魔だった。

だが、今回は切嗣は一人。報告にあつた久宇舞弥という女性もアインツベルンのマスターに付いているため、完全に一人。またとないチャンスであった。

しかし、今回もまたイレギュラーによって綺礼の思惑は途切れることとなった。

市街地から一步奥に入った場所。そこに間桐雁夜は倒れていた。綺礼は一瞬どうしたものかと考えたが、すぐに治癒魔術を掛けた。それが時臣に対する非礼行為であったとしても、なぜか治癒したいと思つたのだ。

自分でもよくわからぬ感情。それが綺礼の身体を駆け抜けた。今まで体験したこと

のない高揚感。自然と綺礼の口元は弧を描いていた。



間桐雁夜は不思議な声を聴いていた。頭の中に直接語りかけてくる、穏やかな声。

『あなたは強いんですね。たった一人で戦っている』

雁夜はその声に答える。勿論、心の中で。

『俺は強くなんかない。桜ちゃんを助けるためには、強くなきゃいけないんだ』

『矛盾していますよ？ ですが、それも強さの形なのでしょうね。あなたに一つ、教えてあげましょう』

穏やかな声は、まるで子どもをあやすかのごとく雁夜に語りかける。

『この聖杯戦争の監督役には予備令呪というものを持っているのは御存じで？ あなたがそれを得ることが出来れば一層強くなれるでしょう』

『ダメだ。それは出来ない。俺に魔術の知識は殆どない。たとえそれを奪い取れても使うには臓硯の協力が必要だ。だが、あいつが協力してくれるはずがない』

『そうでなくても、あの監督役は遠坂と繋がっていますよ？ このまま放っておけば、あなたの復讐の障害になるでしょうね』

『それは本当なのか!? だったら……』

もう雁夜に正常な判断能力は残されていなかった。ただ声に導かれるのみ。

『それと、マスターを狙いなさいな。あなたのサーヴァントは消耗していますが、マスター相手であれば問題ないでしょう？ どうも遠坂のマスターはサーヴァントと上手くいっていないようですし、そこを狙われては?』

雁夜の頭の中は、この声で一杯になっていった。遠坂を狙う。なんと甘美な響きなのだろう。既に雁夜の中ではこの声の正体などどうでもよくなっていた。ただ、この声に従うこと。それが重要なのだ。

『そうしよう。明日、時臣を殺す!』

穏やかな声の主はそれを否定しなかった。そのことが雁夜を幸福にしていく。自分の言っていることは間違っていないのだと確信できる。

『それでは、あなたの健闘を祈っていますね』

それきり、声が聞こえることはなかった。

そして、雁夜はバーサーカーに指令を出す。

『バーサーカー、監督役を殺せ!!』



「そうそう。いい感じね。やっぱりあなたは才能あるわ！」

「ありがとうございます！」

リクに本を貰って以来、魔術の鍛錬を毎日欠かさず行っていたコトネはメキメキと上達していった。その傍らには、半透明な人間がいた。それが、コトネが初日に書かれてある通りに魔術を使ったときに現れた人物であった。

彼女の名前はSORA。どことなくコトネに似ている少女である。彼女は本に宿された『魂』であり、本体からは切り離され、魔力供給の身によつて現界している。勿論、それはリクのマスターであるコトネの魔力供給だからであり、他の魔術師が供給したところで彼女は瞬く間に消え去ってしまう。

「やつと4分の1までできたんだー。ねえ、SORA先生！ リクくんが使つてた瞬間移動つてどの辺に載つてるの？」

「あー、確か……最後の方だったような……」

「えー」

コトネは目標が遥か遠くであることを知ると項垂れる。ここまでは順調に来ていたが、ここから先は順調にはいかないとSORAに言われ、更に落ち込むコトネ。

だが、たつた数日である程度魔術を使えるようになったこと次第驚きなのだが、魔術師の常識を知らないコトネにはそのことが分からない。SORAとしては、聖杯戦争期間中に魔術回路の切り替えができるようになればいいな—程度に考えていたので、この成長度合いは予想外であつた。

「さて、今日はここまでね。じゃないと明日の発表会、遅れちゃうでしょ？」

SORAはそう言いながら、窓から近くにある冬木市民会館を見ながら言う。明日、コトネはそこでピアノの発表会を行うのだ。

「うん、そうだね。じゃあ、おやすみSORA先生」

「おやすみ、コトネちゃん」



「うわー、ボクの魔力殆ど使われちゃってるじゃん。使いすぎだよ!!」

「いや、まあ、そうだけどさ。確かにソラのおかげで仕込みはできたよ？　でも、折角アサシンから貰った魔力も無くなっちゃってるし」

「うん！　それにしよう！」

アインツベルン城から立ち去ったキャスターは空中を散歩しながらソラと会話していた。勿論、姿を隠すために魔術を使っている。少し先には濃い魔力の痕があり、そこをライダーが通ったことは明白だ。

「よし！　じゃあまずは地上に降りて魔力の補給だね。コンビニヘレッツゴー!!」

キャスターは空中浮遊を止め、初日に訪れたコンビニで、またしても甘いものを買って漁っていく。お金に関しては、あの一家から全て貰っているので問題はない。

「お、テイラミスだ。んー、こっちはモンブラン。両方とも買っちゃえ！」

「いや、交代したらまた魔力使っちゃうから。我慢しててよ」

「!!」

「あと少しの我慢だから。聖杯戦争で勝てば、そこからは自由なんだからさ」

キャスターはその後疑われること無く会計を済ませ、コンビニを出て行く。すでに仕込みは終わっている。あとは発動させるだけ。

「さーて、踊ってもらおうかな？ バーサーカーのマスターさん」



「ん？ 何だねこんな夜更けにいつ」

血の匂い。

綺礼が教会に帰ってきて真つ先に気が付いたのが血臭だった。胸の高鳴りを抑えながら、教会の扉を開く。

まず目に入るのが十字架。そして、その下には……。

「父……上……？」

右腕を残し、他の四肢を失った状態で、さらに辛うじて顔が判別できる程度にまで破壊された璃正の姿がそこにあつた。傍らには『jn424』の文字。繰り出される暴虐の中で必死に書いたのだろう。その文字は些か崩れてはいたが、辛うじて読むことは出来た。

「ヨハネ福音書4:24。……神は御霊なり。故に神を崇める者は、魂と真理をもつて拝むべし……」

璃正の右腕に刻まれていた予備令呪が綺礼の腕に移植されていく。

だが、その途中、それとは違った痛みが綺礼を襲った。そうこの痛みは以前にも体感した。これは……。

「令呪……だと？ 何故だ。私は既に敗退しているはず……」

綺礼が思考している間に予備令呪の移植は完了し、綺礼の右腕には予備令呪が刻まれた。

変わり果てた父親の姿を見て、綺礼は一筋の涙を流す。だが、そのことに綺礼は愕然となり、顔を押さえる。涙を流すことは普通だ。だが、綺礼の心は違った。何か湧き上がってくる感情があるのだ。

それを受け入れてはいけないと綺礼は咄嗟に思った。受け入れてしまえば、元には戻れない。そんな予感がした。

だから綺礼は主禱文を読み上げる。その『ナニカ』を封じ込めるように。



時臣は珍しく焦っていた。綺礼から知らされた、璃正が何者かに殺されたという一報。それが時臣を焦らせた。

だが、それも一瞬のこと。すぐに元の調子を取り戻し、綺礼へと問い掛ける。

「それで、犯人の目星は付いたのかね？」

「いいえ。それよりもまず父上をきちんと埋葬したいと思ひまして」

「あ、ああ、そうだね。済まなかつた」

「いえ、お構いなく。詳細については明日の昼にそちらに伺つても？」

「ああ、構わない。ちょうど君に渡すものもあるのだから」

時臣はここで通信を切る。やはり先ほどの調子は無理をしていたのだろう。通信が終わった途端に時臣は天を仰ぐ。

「まさか、こんなことになるとは……」

一人呟くも、応えはない。かの英雄王もいつも通り夜の散策に出かけているようだ。

「やはり、私も出るしかないか……」

そういつて時臣が取り出したのは一際大きなルビー。この聖杯戦争のために魔力を蓄えてきた一級品だ。

それを礼装である杖に嵌め、簡単な火の魔術を使い調子を確かめる。

なんら問題なく稼働しているのを確認した時臣は、僅かな睡眠をとるために寝室に向かつていった。

◆
「痛ツ!! くら、ライダー!! 寝相悪すぎだぞ!!」

「うるさいのう」

ライダーはウェイバーに向かってデコピンを繰り返す。

「……………ツ!!」

痛みに悶絶するウェイバー。ライダーはそれを気にせずに再び眠りについた。

◆
暗い暗い場所。原初の風景。黒い太陽。

その場に立っているのは赤い外套の人物のみ。■ ■は地に伏せている。どこまでも
純粋な笑顔のまま。

「ありがとう。正義の味方さん。ボクはこれでようやく……………」

黒い太陽はその姿を消し、一筋の光が大地を照らす。そこには、新芽が出ていた。

ACT. 10

焼き払われた森。

そこには嘗て■■が住んでいた家もなく、優しかつた動物たちもない。

残されたのは、齡15程の男女のみ。いや、女の方は虫の息だ。その傍らには、生きている男以外にもう一人の男がいる。彼は既に死んでいる。女はその男を守っていたのだろうか。

「……ああ、もう私もダメみたいね……………」

「……………」

「……ねえ■■。あなたに私の総てをあげるわ。力も知識も……魂も」

「……………」

「だから、お願い。奴等を……」

暫し無言の時間が訪れる。

「……何当然のこと言ってるんだよ！ ボクがこのまま大人しくしている訳がないだろ！ 父さんも！ 動物たちも！ ■■も！ 皆殺られて！ ……でも、僕だけじゃ出来

ないよ。だから、■■！ ボクの中で生きてくれ。ボクにも君にもそう出来る力はあるんだから」

「……そうだね。私、少し弱気になってたわね」

ややあつて、女が返答する。その眼は先程までの諦めたような眼ではなく、意思を強く持った眼。覚悟を持った眼。

「始めるよ」

それだけで十分だった。優しい黒が女を包み込んでいく。そして、女の身体はこの世界から消滅した。

『成功みたいね』

何処からか頭に響く声が聞こえる。それを聞き、男は笑みを浮かべる。

「さあ、始めようか。この世界に対する反逆を」

この時より、彼らの復讐は始まった。目標は——魔術師。



時臣との通信を終えた綺礼は何者かの気配を感じ、後ろに振り向く。そして、溜め息を一つ。

ここ数日、時間が空けば必ず訪れているアーチャーの姿がそこにあつた。

「どうだ？ 貴様の求めるものは見つかったか？」

アーチャーは口元を歪め、綺礼に問い掛ける。

「未だに分からない」

そう言いつつも、綺礼は自分の父を見たときに浮かび上がってきた「ナニカ」を自然と思ひ出す。

「おいおい、綺礼。お前は今笑みを浮かべているぞ？ 気づかないのか？」

「私が……笑みを浮かべているだど？ 何を言っているんだ」

「本当に気づいていないのか？ では、聞こう。今、お前は何を思い浮かべていた？」

まるで自分には分かっているとでもいうようなアーチャーの態度。そして、綺礼の脳内では、父の死の光景が繰り返し流れていた。

——アア、自分ノ手デ ■ ■ ■ タカッタ

——モット ■ ■ ■ テミタイ

「バ……バカな!!　これが私のはずがない!!」

「おいおい、否定するなよ。それが紛れもなくお前なのだ」

綺礼の脳内では、様々な光景が浮かんでは消えていった。

父の死体。雁夜の惨めな姿。妻の死に際。

「それがお前の愉悦の形だ。受け入れるがよい。さすれば世界は違って見えるぞ?」

アーチャーの赤い目は喜びで細められ、まるで蛇のようだった。



「セイバー、あなた大丈夫?　さっきからずっと顔色悪いわよ?」

アインツベルン城の一室にアイリスフィールとセイバーは居た。先ほど切嗣への連絡を終え、この部屋に戻ってきたアイリスフィールだったが、セイバーの顔色が一向に回復していないのを見て心配になった。

「……すみません……」

「あなたらしくないわよ?」

「……………」

アイリスフィールの問いかけにまともな返答が出来ないセイバー。どうも先刻の戦闘が影響しているということは分かるのだが、それ以上のことは分からない。なにせ身の安全のために一定以上の距離を開けていたのだから。

原因として考えられるのは、キャスターとバーサーカー。キャスターのあの妙な戦闘方法なのか、バーサーカーの鎧が砕けたことなのか、その判断がつかない。

「……はあ。セイバー、今日はゆつくり休みなさい。私の護衛は舞弥さんがやってくれるから」

「……………」

ついに返答すらなくなってしまった。仕方なく話し掛けるのを諦め、自室へと向かうアイリスフィール。

そして、扉が閉まる音と共にセイバーは崩れ落ちた。

一方、アイリスフィールは自室に戻ると、セイバー、つまりアーサー王関連の書物を開く。勿論目的はセイバーがああなってしまった原因を見つけてくれることだ。

「んー、キャスターになりそうなのはマーリンくらいよねえ……」

マーリンとは、アーサー王伝説に登場するアーサー王の助言者のことだ。彼は強大な魔術師であり、また万能であった。だが、その最期は愛した女に騙され、塔の中に幽閉され死んでしまう。その辺りから、聖杯戦争に参加する動機もありそうである。

だが、あまりにも今回のキャスターとはかけ離れている。彼はどの伝説においても老人の姿で描写されているのだ。ただ、セイバーという前例がある分、否定しきれるものではない。

しかし、マーリンが居たからといってあそこまでセイバーが動揺するだろうか。それに、動揺するタイミングがやはりバーサーカー寄りな気がするのだ。

「舞弥さん、ページ、捲ってくれる？」

アイリスフィールは既にヒトとしての機能を失い始めていた。セイバーが近くに居れば問題はないのだが、いったん離れてしまえば、歩くことすら困難なのだ。

だからこうしてページを捲ることすら人に頼まなければならぬ。

「バーサーカーになりそうな人物なんてアーサー王伝説にいるのかしら？」

「しかしマダム。バーサーカーは指定が可能なのですよね？」

「ええそうよ。その方法で召喚されていれば特定は難しいわね。セイバーだったら円卓のどの騎士がバーサーカーとして召喚されていても動揺するでしょうしね」

結局考えはここで行き詰まってしまった。バーサーカーが原因であろうことはほぼ

確定したが、そこから先はやはり本人でないと分からない。戦略的な面で見ても、真名が分かるというのはそれだけで大きなアドバンテージを得ることになる。だが、当のセイバーがあれでは望み薄だろう。

「今日はここまでにしておきましょうか。じゃあ、舞弥さん。今日はよろしくね」「はい」

夜は更けていく。そして、激動の時間はすぐそこまで迫っていた。



そこは世界でも有数の都市だった。それゆえ、隠れ住んでいる魔術師も多数いた。「く、来るなッ！ いったい俺が何をしたっていうんだ!!」

「別に君が何かしたわけじゃないよ。君が魔術師なのが悪いのさ。Ventus concidito sculpe.s.」

「ひ……ぎやあああああ……」

「これでこの街にいるのはあと一人、か。面倒だし、街ごと燃やしちやおうか」

『それでいいんじゃない？ どうせ最後にはこの街ごと消さなきゃいけないんだしさ』

足元でバラバラになった魔術師には目もくれずに、■■■は誰かと相談する。

『あー！ たまには私にやらせてよー』

「はいはい。じゃ、■■■、頼んだ」

■■■の身体が不自然に輝き、その姿を変えていく。背は縮み、体型も変わっていく。

数秒後には、まったく違う背格好の人物になっていた。

「さーで、久しぶりだしおっきいのいきましようかねー」

■■■は空に浮かび上がると、両手を使って魔術陣を描き出していく。その際、袖の隙間からわずかに見えた腕には、びっしりと魔術陣が刻まれていた。

「うん。これぐらいでいいでしょー！」

そう言つて周囲を見回す■■■。魔術陣はこの街全てを覆うような壮大な規模になっていた。

「Originis ignis.

Imber lux.

Est spes non,

et finem non,

tantum adolebit ex.

Est salus non,

et salutem non,

t a n t u m ^だ m o r t e m ^を v i s .
 …… A c t i v a t e d ^動 c a u s a ,
 …… F i n i s ^終 f l a m m a ! ! ^縮 d e i ^神 i u d e c i u m .
 ……

発動した魔術は一度天高くで太陽のように球の形を取り、その後一直線に街へと向かう。

そしてそれが着弾した直後、猛烈な光が周囲を照らす。

その光を魔術で防御した■は街を見て頷くと、その場を去って行った。

街だったその場所は、その高温で硝子状の物質になつてしまった。おそらく住人は何があつたかすらわからずに蒸発してしまつたのだろうことは想像に難くない。

その街の名は、ニューヨークといった。

ACT. 11

冬木市民会館。今日、そこでは発表会が行われていた。キャスターのマスターであるコトネの発表は次に迫っている。

「うー、緊張する」

「コトネちゃんなら大丈夫だよ」

「うん………つて、ええーっ!!」

独り言に返事が返ってきたことに驚くコトネ。更に、その声の主がリクであることもっとコトネを驚かせた。

「あー！ 静かに！ ばれない様に来たんだから」

「う、うん。でも、どうやって？」

「それは内緒」

内緒と言われれば聞きたくないのが人間。だが、コトネには大凡予測がついていた。なにせ、自分に『魔法』という存在を教えたのは、まぎれもなく目の前の人物なのだから。

「そうそう。これ上手くいくようにお守り」

そう言つてリクはポケットから、ペンダントを取り出す。そのペンダントは、蒼い石が雫のような形になっている。勿論、リクの魔術でそれなりの保護も掛けられている。

「わあー！　ありがとう!!」

「どういたしまして。……ほら、もうそろそろだよ?」

「うん！　じゃあ行つてくるね」

「ボクも席で聞いているよ。そのあとは用事があるから会いに行けないけど、頑張つてね」

「うん!」

控室から出て行くコトネ。一人その場に残つたリクは、以前コトネにあげた本を開く。

「claude^閉re・summon^召itione^喚m・SORA」

「あ、リク。コトネちゃんは?」

「発表会だよ。それより、ほらボクの記憶、さつさと受け入れちゃつてよ」

「はいはい。……完了だよー」

「じゃあ、ボクは行くよ。あとは頼んだ」

「任せときなさい。私は一部分とはいえソラなんだから」

リクは本を閉じると、足を踏み鳴らし、その場から消えていった。



「アイリ、ここを出る準備をしてくれ」

「急にどうしたの？ 切嗣」

「セイバーがあれば僕が用意した場所に移ったほうがいい」

「わかったわ」

アイリスフィールはすぐに部屋を出て行き、準備を始める。勿論、舞弥もそれに付き従う。今日はいくらかマシとはいえ、やはり歩くことすら難しくなっているのだから。

アイリスフィールが部屋を出たのを確認すると、切嗣は溜め息を吐く。それはセイバーの現状に原因がある。

昨日のキャスター、バーサーカーの影響か、セイバーが部屋から出てこないのだ。アイリスフィールが行ったところでまともな返事も帰ってこず、もはやサーヴァントを失ったのと大差ない。

切嗣は自分の願いの成就の為こんなことで諦めるわけにはいかない。ライダーの居場所も分からない以上、既に判明している時臣から始末することに決めた切嗣ではあるが、やはりアーチャーが気にかかる。特に、セイバーが使えない現状では。

「全く、役に立たない。あんなものが騎士王だというのならば、やはり騎士というものは間違っている」

切嗣が一人呟いても、答えが返ってくるはずがない。

「まあいい。まずは出来ることをやらないとね」



「おい、ライダー。何でまた急に霊体化なんかしてるんだよ?」

『ちよつと予感がしてな。どうも今日は大きく戦況が動きそうなのだ』

「……それ、本当か?」

『ああ。余の勘は中々に鋭くてな。そういえば、ダレイオスと戦う前もこんな感じだったのう』

ウェイバーが朝起きてみると、なぜかライダーが霊体化していた。今までなるべく現界したままでいようとしていたライダーが。

流星に不審に思ったウェイバーがそのことを聞くと、何やら戦況が動きそうだという答えが返ってきた。

「そうか。じゃあ、あそこに行くぞ、ライダー。お前を召喚した場所なら、魔力も満ちていくだろう？ それに僕も協力してやる」

ウェイバーは朝食もそこそこに、マツケンジー宅を出て行った。

何者かがそれを見ていたのにも気づかずに。

デパートで寝袋や栄養ドリンクを買い込み、コンビニで昼食を買ったウェイバーは、ライダーを召喚したその場に到着すると、魔法陣の点検を始め、そこに綻びがないのを確認するとその上にレジヤシートを敷き、昼食をとる。

『それ、うまいのか？』

「いいや。日本の食文化もたかが知れてるな。それよりもライダー、調子はどうか？」

『うむ。ここならば夕方には万全の状態になるだろう』

「そっか。……なあ、ライダー。お前、やっぱり僕からの供給じゃ魔力足りなかつたんだろ？」

食べ終わり、寝袋の用意を始めるウェイバーはライダーに向けて話し掛ける。

『まあ、なあ。しかし、余の全開の魔力消費にお主を巻き込めば命すら危ういのかも知れんしのう』

「僕はそれでもいいんだ。聖杯を勝ち取るためなら……」

『余も聖杯とやらが本当に存在するならそれでもいいとは思う。しかし、それが虚であつた場合、余はそういった有るのか無いのか分からぬもので、もう周りの者を死なせたくないのだ』

「最果ての海……」

『そうとも。この時代に召喚されて驚いたわ。まさか地が丸く閉じているとはな。……もし、余を無理矢理にでも止めてくれる臣下がいなければ、余は余に従う全ての者を死なせていたであろうよ。そういった裏切りが無いとは言ひ切れんのだ』

「それでも………。まあいい。で？ 次はどここと当たるつもりなんだ？」

『そうさのう。まずはセイバー。あやつのは考えは誰かが正してやらねばならん。あのままでは可哀想だ』

「ふわあ……。そつか。じゃあ、僕は寝るから、魔力どんどん取つても構わないからな」

そう言った途端、ウェイバーから取られていく魔力が増える。襲ってくる眠気に抗うことなくウェイバーは眠りについた。



綺礼は昨夜の言いつけどおり、遠坂邸を訪れていた。

「それで導師^{マスター}。一体何用得」

「一応、遺言状を、と思つてね。この先いかに英雄王をしても不測の事態が起きないとは限らない。この遺言状には、綺礼、君が凜の後見人になることが記してある」

「私でよろしいのですか」

「ああ。君ほど優秀な生徒はいないよ。それと、これを」

時臣が古めかしい箱から取り出したのは、アゾット剣とよばれるものだった。

「これを、君に。私からの餞別だ」

「ありがとうございます。導師」

綺礼はその剣を手にとると、眺める。

「気に入ってもらえたようだなによりだ。さて、私はこれから少し出てくるよ。私が帰ってくるまでいてもらつても構わない」

時臣は綺礼に背を向け、部屋を出ようとする。

だが、その望みは永遠に叶わない。

「な……………」

時臣が背を向けた瞬間、綺礼は代行者として鍛えたその身体を使い、アゾツト剣で心臟を的確に刺す。少しの痙攣ののち、時臣は死亡した。

まるでそれに合わせるように、黄金の光が集まり、アーチャーが姿を現す。

「おやおや、これはこれは。まさか我^{オレ}のマスターが死ぬとはな。…………おや？　そこにいるのは敗退したにも関わらず令呪を持っている綺礼ではないか」

あまりにも演技がかった口調に綺礼は苦笑する。

「ふむ。ならばアーチャー、私と再契約するか？」

「いいだろう」

「告げる。汝の身は我の下に、我が運命は汝の弓に。聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら、我に従え。ならばこの命運、汝が弓に預けよう」

「アーチャーの名に懸け誓いを受ける。貴様を我が主として認めよう」

ここに、最後のマスターが誕生した。



冬木市沖合。

「ふふふ。やっとボクの魔力もいっぱいになってきたね」

「うん。じゃあ、夜になったら仕掛けるとしようか」

「さーて、覚悟してよね？ バーサーカー」

ACT. 12

昼前に行動を開始したが、追跡がかからないように遠回りしながら移動したせいで、夕刻になってようやくアインツベルン城からの移動は完了した。

住宅地にある新しい拠点はまさに日本の屋敷という趣であった。しかし、魔術的な観点からすれば閉鎖空間が少ないため、工房が作りづらいつらいという難点も抱えていた。それは土蔵に工房を作ることでも無事に解決し、アイリスフィールは自分が敷いた魔術陣の上で休息を取っている。

切嗣は舞弥が放っていた使い魔からの情報でライダーのマスターの拠点を割り出し、すぐさま監視に向かっていた。

そんな中でもセイバーはふさぎ込んだままだ。移動中も一言も喋らず、ただそこにいるだけという感じだった。

そんなセイバーを見かねたのかアイリスフィールは声を掛ける。

「ねえ、セイバー。切嗣がライダーの拠点と思われる場所に向かったの。着いて行ってあげるかしら？」

「……………あなたを守る役目はどうするのですか」

「私は大丈夫。舞弥さんもいるのだから。……セイバー、少しは気分を変えるべきよ」
後半部分が本音だったのだろう。そんな気遣いをさせてしまうほど自分は落ち込んでいるのかとセイバーは思う。しかし、その気遣いを無碍にすることは出来ないセイバーは一言礼を言うと外に出て行つた。

当然、セイバーが離れたことによりアイリスフィールの体調は悪化していく。今までは魔術陣の上で座っていたのだが、それも無理をしていたようでありには横たわる。

「マダム、またサーヴァントが脱落したのですか？ 昨日より悪化していますか……」
「いいえ、違うわ。ただ、私の中にあつた『全て遠き理想郷』を切嗣に渡したのよ。もうこんな体じゃ私はセイバーの隣に立つて戦場には行けないわ。だったらあの人を持つていた方がいいでしょう？」

本来であれば、サーヴァントが一体でも倒れば、アイリスフィールの体調は今よりもずっと悪くなっていたはずである。それを食い止めていたのが、『全て遠き理想郷』。それを手放したということは、『ヒト』としての機能を手放すことに等しい。それでもアイリスフィールは気丈に振る舞う。

「それよりも舞弥さん。あなたは何で切嗣に従うの？ 一度聞いておきたかつたのよ」
僅かな沈黙のあと、舞弥は語り始める。

「切嗣は私の全てだからです。私は、親の顔も、自分の名前ですら覚えていない。気づいた時には既に戦場に居ました。この久宇舞弥という名も、切嗣が作った偽造パスポートの名です。私が戦場で切嗣に拾われたその時から、私の全ては切嗣のもんです」

「……そう、なの。……舞弥さんは願いとかはないの？」

「ありません。私は切嗣が願いを成就するための装置ですから」

その答えにアイリスフィールは沈黙する。自分のことを装置という舞弥はどことなく自分に似ている気がするのだろうか。

『願いがなんなんて嘘だよ。少なくとも、ボクはそう思うよ?』

突如響く声。この声には聞き覚えがある。キャスターだ。

切嗣に連絡を取ろうとした舞弥は風の魔術による拘束で身動きが取れない。そんな中、キャスターは姿を現した。

「別に君たちを襲いに来たわけじゃないからそう警戒しないでよ。マスターでもない君たちを襲ったところでボクに得はないんだから。怒り狂ったセイバーなんか相手にしたくないよ」

心底嫌そうな声を出すキャスター。やはりセイバーの対魔力は苦手なのだろう。

「ボクの今日の目的はお話だよ。前は戦闘中だったし、セイバーもいたから話せなかつただけだね。アイリスフィール・フォン・アインツベルン。今代の聖杯の器と話した

かったんだ」

「それで、何を話したいのかしら？」

「いやいや、大したことじゃないさ。ちよつと聞きたかっただけ。その不完全な器に英霊の魂が入るのってどういう感じなのかなあって」

「不完全？　いつたいたいということ？」

「そのまんまだよ。たかが英霊の一体や二体が入っただけでヒトとしての機能を失ってしまう器なんて不完全だよ。……尤も、完全な器が出来上がるのは次の世代なんだけだね」

後半部分は早口であつたためにアイリスフィールは聞き取れなかつたが、確かに納得できるものではあつた。

今回の聖杯戦争では、前回のように器が戦闘中に破壊されることの無いようヒトの中に入れることで自衛本能などで器の破壊を防ぐことが目的のはずだ。しかし、実際アイリスフィールは動けなくなつてしまつている。これでは確かに不完全といわれても納得できる部分がある。

「ま、そのこととはどうでもいいんだよ。で、一体どんな感じ？」

「そうね……体が重くなつていく感じかしら。あとは体が熱く感じるわね。体温は変わらないのに内側だけ熱くなつていくわ」

「ふうん。ようするに魔力過多と同じかあ。ありがと。じゃあボクは行くね。……あ、そうそう。舞弥さん、おねーさんの願いなんてはつきりしてるじゃん」

「私に願いはありません」

「違うよ。おねーさんの願いはたった一つだよ。切嗣に願いを叶えてほしいっていう願いがあるでしょ？ それを忘れちゃダメだよ」

言うだけ言つてキャスターは空間転移でその場を去つて行つた。それと同時に舞弥の拘束も解け、無理な体勢を強いられていた舞弥は少しだけ座り込み、足の痛みを取る。

「私の、願い……」



ライダーの拠点を観察していた切嗣は突然の痛みを襲われた。その痛みを発するのは、舞弥と切嗣に仕込まれてる通信礼装だ。これに反応があったということは、何かが起こつたということだろう。

そこからの切嗣の行動は早かつた。一瞬の迷いもなく切嗣は令呪を発動させる。

「我が下僕に命ず！ アイリを守れ!!」

令呪が発動した瞬間、セイバーの意識は強制的に覚醒させられた。今まで塞ぎ込んでいた姿はそこには無く、ただアイリスフィールを守るためだけに行動する騎士の顔になった。

令呪の強制力により空間を超えたセイバーが目にしたのは、破壊された土蔵だった。慎重に中に入ると、倒れ伏している舞弥を発見した。

「舞弥！ いったい何が!？」

「セイバー……ライダーが……マダムを……」

「わかりました!! あと少して切嗣も来るはずです！ それまで気をしっかり保ってください!」

そう言うのと、すぐさまセイバーは屋根に上り遠くにいるライダーの姿を発見する。セイバーはそれを確認すると、屋根の上を伝って追跡を始めた。

切嗣が土蔵に到着したのはセイバーが来てから30分後だった。銃を手に取りながら辺りを警戒し土蔵へと入って行く。

切嗣は倒れ伏した舞弥を見つけると、その手を取る。その刺激でか、舞弥が目覚ま

すが、その視線は朧げで焦点が合っていないように見える。

「……ないたら……だめ。まだ……だめ」

舞弥に言われ、自分が泣きそうになっていると初めて気付く。

「舞弥、僕は……」

「……だめ。……あなたは……よわいから。……ないたら……だめ」

舞弥は一生懸命手を伸ばし、切嗣の目元にたまっている涙を拭う。

「なみだは……あのひとのために……。あなたは……いきで。それが……わたしの

……ねがい……」

その言葉が引き金になったのか、切嗣は悲しむ顔を止めた。囚らずとも、それが『魔術師殺し』である切嗣の本来の姿を取り戻すきっかけとなった。

「……やつと……むかしのかおに……なった……」

「……舞弥、君の役目はここまでだ」

その言葉を聞いた舞弥は微笑みを浮かべると、その生を手放した。



「おい、これでいいんだな？」

「ああ。しかし姿を変えることが出来るとは。つくづくバーサーカーにしておくには惜しいサーヴァントだな」

とあるビルの屋上に綺礼と雁夜はいた。そのそばには、先ほどまでライダーの姿をしていたバーサーカーと、バーサーカーに抱えられているアイリスフィールの姿があった。

「だが、こんなことに令呪を二画使う意味はあったのか？」

「令呪を惜しむ必要はない。今の私は未使用の令呪を預かる身であるからして、君に令呪を渡すことなど造作もないことなのだからな」

そういうと綺礼は、雁夜の手を覆う。そこから赤い光が迸り、手を退けたときには、令呪が再び三画に戻っていた。

「本当に時臣に会わせてくれるんだな？」

「本当だとも。今夜零時。教会だ。忘れるなよ」

聞くだけ聞き、雁夜はその場を去って行った。十分に雁夜が離れたのを確認し、綺礼は何もない空間に話し掛ける。

「人払い済んだ。どのような用件かは知らないが、出てきたらどうだ？」

「ほう。流石に儂に気付くか。元代行者」

ビルの陰から姿を現したのは、間桐臓硯だった。

ACT. 13

深夜0時。教会の中では、一人の男が完全に狂ってしまった。

彼の名は、間桐雁夜。バーサーカーのマスターである。彼は遠坂時臣との決着をつけるために言峰綺礼によってセッティングされた時間に教会にやってきた。だが、そこに居たのは、既に物言わぬ死体となっていた時臣であった。

そこへやってきたのが、遠坂葵。時臣の妻であり、雁夜にとって好意を寄せる女性であった。だが、彼女は雁夜には目もくれずただただ時臣を見続ける。しまいには雁夜を罵り始めた。

そこで、雁夜は狂った。

——コノヒトハイッタイダレダ。ナゼボクヲミナイ

そんな考えが彼の胸中を満たしていく。元々狂っていた雁夜は、今度こそ完全に狂った。今の雁夜に通常の思考能力は無く、ただ破壊衝動に身を任せるだけだ。

「死ね！ 死ね!! 死んでしまえ!!」

口をついて出てくる言葉は『死ね』という言葉のみ。葵の細い首に掛けた手は魔術による無意識な強化も加わり、彼女の首は今にも折れてしまいそうだ。

やがて、葵の口からは叫び声すら聞こえなくなり、身体は弛緩していった。ここに至って何故か雁夜は正気を取り戻してしまった。そして、自らの行いを自覚してしまった。

「あ…………お…………俺は…………」

葵の生死を確かめようともせず、雁夜は教会から逃げようように走り去っていった。

雁夜が教会から出ていった後、アーチャーの声はどこからか響いてきた。

「初めてにしては中々良い劇であった」

扉の影に隠れるように佇んでいたのは、アーチャーと綺礼。教会とはその性質上区切られてはいても話を聞くことが出来る構造をしている。事の始まりから全てをこの二人は特等席とも言える場所から鑑賞していたのだ。

「…………さて、このまま放っておいては死んでしまうな」

綺礼はそう言うのと葵のもとへ向かう。

簡易的な治癒魔術を施し、あとは病院へと送った。

一仕事終えた風な綺礼は、グラスに残っていたワインを飲み干し、新たに違うワインの封を開ける。

「どうした、綺礼。貴様にしては飲むペースが早いのではないか？」

「……酒がこんなにも旨いものだとは知らなかった」

「酒とはな、綺礼。肴によって大きく味が変わるものだ。どうやら貴様も見聞を広げるすべを身に着けたようだな」

アーチャーは愉快そうに笑うと、霊体化して姿を消していった。



教会から脱兎の如く逃げ出した雁夜は結界に囚われてしまった。

その事に気付くも時既に遅し。雁夜に出来ることはバーサーカーを呼ぶことくらいだ。

「出て来い！ バーサーカー!!」

黒い鎧を纏ったバーサーカーが現界する。雁夜には視認出来ないが、バーサーカーには敵サーヴアンの姿が分かっているらしく、その赤い双眸は、一点を見続けている。『ようこそボクの領域へ』

何処か馬鹿にしたようなキャスターの声が聞こえる。バーサーカーの視線の先が歪み、そこからキャスターは姿を現す。

先の一戦でバーサーカーはキャスターを障害として認識している。マスターである雁夜の言も聞かず、突進していく。

予想済みだったのだろう。特に慌てることなくキャスターはお得意の転移魔術で一瞬にしてその場を離れると、バーサーカーを指さしながら詠唱を始める。

「Ventus^風volvens^は. Ieiunium^{尚速}acriter^く,
note^{尚速}ieiunium^く」

「バーサーカー！ 詠唱を止めろ！」

危機を感じた雁夜が命じるが、それよりも早く魔術は完成した。

「Aspera^荒insanient^{れ狂え}」

放たれた魔術は四方八方に広がり、その途上のものを切り刻んでいく。

「く、まだ死ぬわけには……いかない!! 令呪を以って命ずる! バーサーカー! 俺を守れ!」

えて直進系の魔術を放つ。そうなればバーサーカーは避けることが出来ず、剣でもって防ぐしかない。そして、バーサーカーが剣を振るうたびに雁夜は消耗していくのだ。

「そ　ろ　そ　ろ　キ　ッ　イ　ん　じゃ　な　い　の？」

Ventus concidit o sculpe

とどめとばかりに風の魔術を放つキヤスター。それを辛うじてバーサーカーが防いだところで、雁夜の魔力は尽きてしまった。既に指先一つ動かせない状況で、今すぐにも死んでしまいそうだ。

「私は……消えるのか……」

バーサーカーが明確な言葉を発する。消滅の間際になって狂化が解けたのだろう。

「……私は、裁かれたかったのだ。……王の手によつて……」

「それは傲慢だよ、ランスロット。自らの罪は自らが清算すべきなんだ。他人に裁かれるなんて、そんなものただの『逃げ』だよ」

バーサーカーの独白にキヤスターが答える。いつもより大人びているその言葉は、バーサーカーに響いた。

「だが、それでも……私は王に……」

「それは君が弱いからだよ。意思が弱い。ギネヴィアを助けにいったんだつたら、王を殺す覚悟で行くべきだった。王の判断を仰がなければ何もできない君の弱さが原因だ

よ。もしかしたら、滅びの運命も変わっていたかもね」

「……………」

バーサーカーは沈黙する。キャスターから言われたことは『ブリテンの滅びはお前のせいだ』ということに他ならない。自分ではわかっていたものの、他人から言われるというのは初めてのことだった。

「まあ、今更どうにでも出来ないことで悩む必要はないよ。それは全て過去の出来事なんだから」

「……………」

「過去に囚われたままじゃ前に進めない。ボクもそうだったし、セイバーやランサーだってそうさ。……いや、聖杯戦争に呼ばれる殆どの英霊はそうか」

容姿と合わないあまりにも大人びた言葉。一体キャスターの過去には、どれだけのものがあつたのだろうか。バーサーカーは思う。それが口に出たのだろうか。

「……………あなたは、強いんですね」

「ボクは弱いよ。聖杯なんてものに頼らざるを得ない」

「それでも私よりずっと強い。私はあなたに初めて言われました。『ブリテンの滅びはお前のせいだ』と。私はようやく自分の罪と向き合うことが出来たように思えます」

もうバーサーカーの身体は殆ど消えている。現界していられるのもあとほんのわず

かだろう。

「最期に……あなたの名前を覚えて頂けないだろうか」

「……ボクの名は、リク・チェラーシス。彼女と一緒に決めた名だよ。でもボク起の最初源の名前は違う」

キヤスターは指を鳴らす。すると、今まで黒かった髪は色が抜けていき、綺麗な銀髪に、同様に黒かった目は赤に染まっていく。その姿はまぎれもなく――

「これがボクの本当の姿。名は、ツエーン・アインツベルン」

「……感謝する。私はランスロット。あなたに会えて良かった」

最期にそう言ってバーサーカーは消滅していった。

「うん。行こうか」

キヤスターは誰かと会話すると、結界を解き姿を消した。



雁夜は辛うじて生きていた。どうやって辿り着いたのか、今となつては思い出すことが出来ないが、雁夜は今、間桐家の蟲倉にいた。

雁夜は夢を見ていた。葵と凜と桜が公園で遊んでいる。

とても幸福で、一つの悲劇もない世界。

『あなたは掴んだのです。あなたの望んだ世界を』

そして雁夜は自らの夢に旅立った。雁夜にとつてこの夢が現実のものとなったのだ。

最期に響いた声の主。それがキャスターによつて仕掛けられた、自らの心の声を聞かせる魔術だとは、終ぞ気づくことなく。

ある意味、雁夜はこの第四次聖杯戦争で最も幸福な終わりを迎えた。

「……おじい様に逆らうから……」

佇む桜の袖を掴む雁夜の手。それを、桜は払い落とす。その目は、雁夜を見下している。

「私はこんなにも自由なのに」

桜が手をかざす。その動きに連動して蟲達が雁夜に群がり、喰らい始める。

「さようなら。哀れな雁夜おじさん」

雁夜が一片も残さず蟲達に喰らいつくされるのを冷淡な目で見届けると、桜は蟲倉を出て行った。

ACT. 14

その夜は何処か異常な夜だった。冬だというのに空気は生暖かく、体に纏わりつくような不気味な気配。魔術師ではない一般人にもその感覚は感じられた。

当然、魔術師ともなればその感覚は一層強く感じられた。

『今日、聖杯戦争は決着する』そんな予感がマスターたちにはあった。

詳しく聞かされていないコトネは、その事は分からないが、その空気の異常さは、同年代の誰よりも鋭敏に感じとっていた。

「ねえ、SORA先生、この空気何？」

「分からないわね。但し何か起こるかもしれないから、私は今日はずっと出てるわ」

コトネの本に宿るSORAは、今夜ずっと外に出ているという言葉聞いて、少しは安心したのか、ようやく布団に潜るコトネ。

SORAは探査魔術を家に掛け、椅子に腰掛けた。

◆

セイバーは、一日中街でアイリスフィールを探していた。昨日の夜にアイリスフィールを見失つて以来、不眠不休で歩き続けた。

途中、マスターである切嗣の下を訪れたが、特に会話も無くセイバーが一方的に話ただけだった。どうやら切嗣はアイリスフィールよりも、目先の戦いにその気持ちを向けているようだった。

セイバーとてそれが正しいとは分かっている。だが、騎士としてアイリスフィールを守れなかったことが、彼女を諦めるといふ選択をさせない。

いつの間にか空は暗くなり、何やら重い空気が立ち込めていた。

セイバーは、郊外の森で少し身体を休めることにした。休んでいる暇は無いと心は訴えるが、それ以上に身体を休ませなければならぬと、自らの直感が告げていた。

「……一体何処にいるのですか……。それに、サー・ランスロット……」

信号弾が打ち上がったのはそんな時だった。

意味は分からずとも、切嗣がその信号弾が打ち上がった場所へと移動したということ、そこにサーヴァントがいるのだろう。それにもしかしたらアイリスフィールも。

セイバーは、黒いスーツから鎧へと着替え、森を抜けようとする。だが、その背に向かつて声がかけられた。

「勝負だよ。アルトリア・ペンドラゴン」

その声は、やけに響いていた。



ウェイバーが信号弾が打ち上がったのを見たのは、マッケンジー宅であった。

「今のは……『達成』と『勝利』？ 聖杯戦争が終わったつてののか？」

「いいや、違うな。あれは謂わば宣戦布告。ここに来いというな」

ライダーはそれだけ言うと、窓を開け放ちそこから飛び降りた。ウェイバーにそれが出来るはずもなく、ウェイバーはマッケンジー夫妻を起こさぬように静かに玄関から出ていく。

ライダーは既に準備万端であるらしく、チャリオット戦車に乗り込んでいる。ウェイバーは何か覚悟したかのような表情で、右手の令呪を掲げる。

「……ウェイバー・ベルベットが、令呪を以つて命ずる。ライダー、絶対に勝て。負けなんて認めない」

手の甲に刻まれた令呪が一画消える。それを見ずに、ウェイバーは続ける。

「重ねて令呪を以つて命ずる。ライダー、聖杯を掴め。失敗なんて許さない」

これで二画消費した。残った令呪を名残惜しむようにして暫し見たあと、ウェイバーは告げる。

「更に重ねて令呪を以つて命ずる。ライダー、世界を掴め」

そこまで言ったウェイバーは、ライダーに背を向ける。それは、ウェイバーからすればライダーへの決別の合図だった。だが、ライダーはウェイバーを掴み上げると、御者台に乗せる。

「おい！　なんで乗せるんだよ！　僕はもうお前のマスターじゃないんだぞ！」

ウェイバーは分かっていた。自分が一緒に居るせいで本気を出して戦えないのだと。だからその憂いを断とうとした。

「何を言つとるか。余と様々な戦場を駆け回つた貴様はもう余の朋友ともであろう。マスターだとかそんなものは関係ない。それにあれだけ喧しく命じたのだ。勿論見届けるのだろうか？」

「……分かった。僕も行く。いや、行くぞ！　ライダー！」

「おうとも!!」



信号弾の打ち上がった場所、つまり冬木市民会館に一人の姿があった。言峰綺礼である。

彼が信号弾を打ち上げたのは、衛宮切嗣に居場所を知らせるためであった。

「綺礼、我は如何様にすればよいのだ？」

霊体化を解いたアーチャーが、綺礼の横に立ち問い掛ける。

「ライダーを迎え撃て。それに、ここで暴れられては聖杯自体が危うい。アーチャー、ライダーとお前が戦えば加減などしないのだろう？」

「当然だ。我が財宝を荒らすものに加減など不要。まあ、確かにここで我が戦えば聖杯は危ういだろうよ。だが、綺礼よ。セイバーかキャスターが来た場合はどうするのだ？」

「その時は令呪を使う。いいか？」

「許す。まあ、その場合聖杯は保証せぬがな」

「まあ、その心配はないだろう。今現在、セイバーとキャスターは戦闘中のようだからな」

そう言って綺礼が目を向けた先では、通常有り得ない現象が起こっていた。木が倒れ、水が弾け、時折風が倒れた木を上空へと吹き上げる。確かにそれはサーヴァント同士の戦闘の余波だろう。

「ならば、迎え撃つとしようか。ではな」

アーチャーは霊体化し、橋の方へ向かっていった。一人その場に残った綺礼は、ただ衛宮切嗣の登場を待ち受ける。



キャスターは、その空気に混ざる雰囲気から、今日が決着の日であるといち早く気付いた。

そのため、持ち金すべてを使い、飲食物を買い漁り魔力の補充を行っていた。

「ん、これはいまいちだったな。失敗失敗」

「分かったよ。味覚だけ共有すればいいの？」

「昨日、ライダーが休息を取っていたまぎにその場所で、キャスターは食事を摂っていた。自分の内にいるもう一人と会話しながら、手を止めることなく食べ進めていく。」

「これはうまい!!」

「——に——!!」

「次はこれにしようかな」

「——早く——」

今まではキャスターが一人で話しているように見えていたのだが、魔力が充足していくにつれ、もう一人の声も聞こえるようになっていた。その声色は少女のそれであり、コトネの持つ本から出てきたSORAと同じものであった。

「あ、これ最後の一つだ」

『ちよ、ちよーっと待ちなさい!! 身体交換して!! 私が食べる!!』

「いやだ」

キャスターは声を見捨てて食べようとしたが、口に入れる直前でその動きを止める。

『どうしたの?』

「いや、どうも聖杯の器が聖杯の受け皿として機能し始めたらしいね。ボクには感じられる」

『ふーん。ま、どうでもいいじゃない。ほら、さっさと私に身体の主導権よこしなさい!!』

「だが断る」

キャスターは手に持っていたシユークリームを一口で頬張ると、同時に手を打ち鳴らす。すると、食べ散らかっていたものが一つにまとまり、炎の魔術でまとめて焼却された。

『あーー!!』

「いいじゃん、別に。聖杯取ったら出てくれるんだしさ」

『でも!! でも!!』

「それよりもさ。ボクはこの後どう動けばいいと思う?」

食べたり会話している内に、すっかり辺りは暗くなっている。そしてキャスターは声と相談を始める。

『多分、ライダーとアーチャーが戦うわよね。そしたら残るはセイバー。色々精神的にやられてるはずだし、セイバーから狙えば?』

「確かにそうんだけどさ。対魔力がどこまであるか分からないからなー」

キヤスターのマスターはコトネである。つまり、ステータスの透視などしているはずもなく、キヤスターは敵サーヴァントのステータスが全く分からないのだ。

『そうなのよねー。でもあくまで対魔力だし、直接攻撃すればいいんじゃない?』

「キヤスタークラスで呼ばれたボクにそれをしると? 無理無理。ソラみたいに魔力放出ないし」

『じゃあ、あれやりましょうよ』

「やっぱりあれしかないかー。……………ん? 結界に何か引つかかった?」

キヤスターはここら一体に仕掛けていた探知結界に何者かが引つかかったのを感じた。目を瞑り、意識を集中させる。そこに居たのはセイバーだった。

「セイバーだ。ちようどいいや。行こうかソラ」

『そうだね。リク』

キヤスターと内なる少女ソラは戦場へと向かった。

「勝負だよ。アルトリア・ペンドラゴン」

ACT. 15

「やはり貴様であつたか」

ウエイバーとライダーが冬木にかかる橋にさしかかったとき、橋の反対側にはアーチャーがいた。それに気づいたライダーは戦車を止める。

そして、両者は橋の中央に歩み寄り、「聖杯問答」で残っていた酒を飲み干す。

「……最後の問答をしようと思つていたのだが……止めにしよう」

「いまさら何を言う。我と貴様はお互いの全力を以つて決すると決めたであろう？ イスカンダル」

「そうであつたな。ギルガメッシュ」

お互いの真名を言い、両者は元居た場へ戻り、相對する。

ライダーが剣を掲げ、言葉を発する。

「今宵、我らが對するは最初の王！ その威光を、我らが征服するのだ!!」

ライダーの呼びかけに答え、『王の軍勢』が展開されていく。現れたのは、アサシンと戦つた時よりも遙かに多い軍勢。それを先頭で率いるライダーは、まさしく『王』

だ。

「行くぞ！ 神威の車輪!!」

「ゴルティマス・ホイール」

「「A A a a a L a L a L a L a L a i e !!」」

軍勢は声を上げながらアーチャーへと向かっていく。

一方のアーチャーは悠然と佇んだままその軍勢を見ていたが、ライダーが走り出すのを見て、手を掲げる。そして、その手には一本の鍵が握られている。その鍵こそ、『王の財宝』を完全に開放する唯一無二の鍵。

「ゲイトオプ・パピロン」

それを天へ突き上げると、アーチャーの背後に樹形図のような幾何学的模様が現れる。それこそが、本来の『王の財宝』の姿。そこからアーチャーは一振りの剣を取り出す。

その剣は異質であった。刀身は3つの部分に分かれ、それぞれが互い違いに回転し、風を巻き起こしている。

そして、それを見たライダーは未だ披露していなかった最後の宝具の名を叫ぶ。
「いざ行かん!! 遙かなる蹂躞制覇!!」

「ヴァイア・エクスプugnateイオ」

そして、アーチャーも自らの宝具を開放する。

「目覚めよ、エア。……………さあ、仰ぎ見るがいい！ 天地乖離す開闢の星を!!」

「エクス・マニフェスチ」



「Ventum^風 et^我 lancea^矛!!」

「この程度!」

セイバーとキャスターの戦いは、互いに様子見から始まった。セイバーが知っているのは、倉庫街での一件とバーサーカーとの戦いである。それ以外の情報は、切嗣が見たステータス、それとキャスターが多用する空間転移だ。一方のキャスターは、セイバーの実力自体は知っているものの、対魔力のランクが分からないため、それを見極めようとしている。

キャスターが多種多様な魔術を放ち、セイバーがそれを避ける、もしくは剣で防ぐ。それが数十回に渡って行われていた。

「さーて、準備は終わったよ。行くよ!」

今までのような詠唱での魔術主体から足踏みなどの音を利用した陣魔術主体へと切り替えるキャスター。一つ一つの威力は詠唱時よりも僅かに劣るものの、その数が倍以上に増えている。それでも、セイバーの対魔力を突破することはかなわない。

しかし、既にキャスターは準備を終えている。その数が増えた魔術も、唯の牽制でしかない。

キャスターが一際大きく足を踏み鳴らすと、大小様々な魔術陣が空中に展開されていく。いや、現れていく。それはキャスターがこの大小様々な魔術陣を不可視にしていたからだ。

しかし、キャスターのスキルである陣魔術では、不可視に出来るのは一つだけ、加えて言えば、魔術陣という描かれた線のみであつて、発動後の効果などは不可視に出来ない。それではこの状況とかみ合わない。セイバーはこのスキルを知っているので尚更混乱する。

だが、キャスターはそれを利用した。スキルを利用し不可視にした魔術は、唯一つである。そして、その魔術こそがこの状況を生み出したカラクリだ。今回キャスターが使用した陣魔術。それはその魔術陣よりも後方の光景を不可視化するものである。地面に使えば色が変わるため使えない。だが、今は夜。空に展開してしまえば黒い色をしたその魔術陣の効果そのものが夜の闇に紛れてしまい見ることが出来ない。セイバーであれば上空を注視すれば分かるのだろうか、魔術が絶え間なく襲ってくるのでその暇もない。

あとは、魔術を放った後の移動時の足音や、詠唱そのものを陣魔術の媒体として魔術

陣をその後方に出しておけばいいだけである。もともと舌打ちですら発動できるのである。詠唱の声で発動することに何ら問題は無い。

そして、準備が整ったところで、キャスターはわざと詠唱魔術を使わずに、陣魔術のみで戦い、あたかもそれが突然出現したかのように見せかけたのである。

セイバーが混乱している間にも、魔術陣は繋がりが合い、一つの巨大な魔術陣を形成していく。それは、倉庫街での一撃――。

これを見たセイバーは、宝具での迎撃をしようと、剣を掲げる。姿を現したその剣に、光が集まっていく。

そして、二つの技はほぼ同時に発動した。

「Activated. Castrum occasus solis!」

「約束された勝利の剣!!」

二つの攻撃によって、辺りがまるで昼間のように照らし出される。

莫大な熱量で以って破壊を齎すキャスターの魔術は、神造兵器たる約束された勝利の剣に勝つことは出来なかった。上空から放たれたキャスターの魔術は完膚無きまでに消し飛ばされ、その余波で上空の雲が消し飛んだ。

しかし、上空の魔術に向かって放たれたため、キャスター自身は無傷である。セイバーは再び風王結界を剣に纏わせ、キャスターに正対する。

「流石だね。でも、ここからはボクたちも本気で行くよ」

そう言うと、キャスターは自らにかけていた魔術を解く。その姿が変わり、銀髪に紅い目になる。その姿にセイバーは驚愕するが、それだけに留まらない。

「いくよ、ソラ。『二人だけの絆』!!」

間違いなく宝具であろう魔力の高まりにセイバーは警戒を強くする。

『さあ、行くよ!!』

キャスターの声が二重に聞こえる。セイバーが自らの直感に従い後方へ飛び退いた次の瞬間、今までセイバーが立っていた場所に、剣が突き刺さる。それを落ち着いて見る間もなく、次々と剣や槍が飛来し、セイバーは防戦一方である。

「くっ……これでは近づけない……。それにこの攻撃方法はアーチャーと似ている……」

飛来する剣を避けながらも、セイバーは接近を試みる。最低限の動きで躲し、危険なもののみを剣で叩き落す。ある程度の距離まで進んだとき、不意に攻撃が止んだ。畏であることは間違いないが、進まなければ何もできないとセイバーは考え、魔力放出を使い一気に駆け出す。

何にも妨害されること無くキャスターのもとへ迫り着いたセイバーはキャスター目がけた一撃を繰り出す。しかし、そこに手応えは無い。

気配を感じ後ろを振り向くと、キャスターが二振りの剣を振りかぶっていた。

セイバーは振り向いた勢いのまま剣を振るう。

金属音が鳴り響き、お互いに間合いを取る。そこでセイバーはキャスターが持つ二振りの剣に見覚えがあることに気付いた。

「あれは、『勝利すべき黄金の剣』!? それに、『無^ア羅^{ロン}無^ダ光』!? どうして!」

セイバーが驚愕しているが、キャスターは不満気だ。何せ、たった一撃競り合っただけで罅が入っているのだから。

『やっぱりうまくいかないか。まあ、いつか。次いくよ! リク!』

罅の入った剣を投げ捨てると、キャスターは手を用いて魔術陣を描き始める。その動きに合わせてステップを踏みながら陣魔術による魔術も同時に放つ。

再び弾幕が張られ、セイバーは防戦一方に陥る。そこでセイバーは、キャスターが描いている魔術陣の完成を阻止するために、聖剣の真名解放を除いた中で唯一の遠距離攻撃を放つ。

「行け!! 『風^{ストライク・エア}王鉄槌』!!」

聖剣を覆う『風^{ストライク・エア}王結界』を攻性魔術として扱おう『風^{ストライク・エア}王鉄槌』は、キャスターの魔術を打ち破りながらキャスター本人目がけて進んでいく。しかし、そのキャスターは口元に笑みを浮かべていた。

『それは悪手だよ。Manducare^{命を喰} a vita^{らえ}! 魂喰い!!』

キャスターの持つもう一方の宝具、『魂喰い』が発動し、黒い影が『風王鉄槌』^{ストライク・エア}ごと、周囲の空間を削り取って行く。

『ごちそうさま。さーて、続きといこうかな。哀れな王様』

キャスターはそう言うのと先程とは違う魔術陣を虚空に描き始めた。それを見たセイバーは直感で宝具の前準備であると見抜き、それを妨害するために近づこうとするもより一層密度の濃くなった魔術の雨で中々突破ができないでいた。



セイバーは何度も魔術陣の完成を阻止しようとしているのだが、出来ないでいた。既に3つの魔術陣が完成し、不気味に光輝いている。

『ほらほらどうしたの？ 早くしないと完成しちゃうよ?』

「くっ……この弾幕さえ何とかなれば……」

『そーれ! 投影、破魔の赤薔薇』

こうして魔術による弾幕の間にも、投影魔術によって形作られた紛い物の宝具がセイバー目がけて降り注ぐ。いくら使い捨て目的でつくられているせいでランクが落ちているとはいえ、元は宝具。当たればダメージは避けられない。

既に自らの聖剣にかけた風王結界イリシブル・エアは無く、刀身が剥き出しになっている。そのため、風王鉄槌ストライク・エアを使うこともできない。

『よし、あと少しで完成だね、ソラ』

『そうね、リク』

絶え間なく降り注ぐ魔術は、セイバーを精神的にも追い詰めていった。通常であれば冷静でいられるのだろうが、既にセイバーの精神の糸はギリギリまで張りつめられていた。しかし、あと少しで完成という言葉聞き、遂にセイバーは自らの対魔力任せで強引に突破を始めた。

これを見て焦ったのはキャスターである。今描いている魔術陣は、最後の宝具を使うための絶対条件だ。一つでも破壊されてしまえば、十全な発動は出来ず、威力も下がってしまう。かといって、推定B以上と判断した対魔力を突破する魔術を放つには、いくらかの詠唱が必要であり、この魔術陣を維持するための集中力が足りない。

そこで、キャスターは苦汁の決断をする。それは、不完全ながら宝具を発動するとうものだ。

『しょうがない。発動するよ?』

『そうね。これ以上引き延ばせばやられるしね。大丈夫。8割位の出力は出ると思うから』

描いていた5つ目の魔術陣を消し去り、4つの魔術陣を繋いでいくキャスター。ギリギリでそれに気づいたセイバーは一旦静止し、改めて剣を構え直す。そして、自らの直感に従い、宝具解放の準備を始める。

『ねえ、セイバー。君の約束された勝利の剣は人々の願いが作り上げた神造兵器だよね』
「そうですが、それが何か?」

『人々の願い、この場合は“正の願い”かな。じゃあ、これからボクたちが取り出すこの剣はなんでしよう?』

「……まさか!」

キャスターは生前において、守護者に殺されるほどの行いをした。“魔術”を徹底的に排除し、その為には無辜の民を消し飛ばした。

そんな彼は、いつしかこう呼ばれるようになっていった。

——この世全ての悪

そう呼ばれていた彼のもとに、ある日、一本の剣が現れた。まるで、主を待っていたかのように。

その黒い刀身は、一切光を反射せず、全てを呑みこむ昏い輝きを放っていた。その剣は彼によく馴染んだ。数ある聖剣と同じく神造兵器であるこの剣は、決して剣術が得意でない彼でも容易に振るうことが出来、どんな物でも斬れぬものは無かった。

そして、彼は理解した。この剣の在り様に。

すべてを呑みこむ剣。これは、人々の“負の願い”の結晶である、と。そこに至って、ようやくこの剣の真名を彼は知ることになる。

曰く――

『死を齎す災厄の剣!!』

解放された宝具は、うねりながらセイバーへと向かっていく。それを見たセイバーは今日二度目の真名解放を行う。

「約束された勝利の剣!!」

二つの宝具は、丁度二人中間点で衝突した。約束された勝利の剣から放出される光が徐々に死を齎す災厄の剣を押し込んでいくが、それもほんの僅か。死を齎す災厄の剣は

その光を呑みこみながらそれを突き破ろうとしている。

二人には、この均衡している時間が数分にも数十分にも感じられた。しかし、終わりはあつけなく訪れる。

やはり十全な発動でなかったのが災いしたのだろう。死を齎す災厄の剣の威力が急激に弱まり、そのまま約束された勝利の剣によつて破壊された。

当然、キャスターも巻き込まれ、ここら一体に張り巡らされていた結界も消失する。

『はは、負けちゃったね、ソラ』

『そ——ね、リク』

デュオ、タントウム・サインクローラ

二人だけの絆の効果も切れてきたのだろう。二重に重なって聞こえていた声も聞こえなくなつてきている。遠くでは先程まで聞こえていたもう一つの戦いの音が止んでいる。向こうも決着がついたのだろう。

『あーあ。やつぱり戦略ミスかなー』

『——』

「あれ？ 効果切れちゃったのか。ま、あと十二時間も居られるわけじゃないし。それ
に」

キャスターはセイバーの方を向く。

「また、会いそうなんだよね。セイバーさん」

た。それに応えず、セイバーはマスターのいる冬木市民会館に向かって歩き出していった。

ACT. 16

「令呪が消えた……。負けちゃったのね、リク」

椅子に腰かけていたSORAはコトネの右手を見て眩く。そこにはつい先程まで刻まれていた三画の模様は無い。

「……………私ももうそろそろ消えるわね。ま、魔力さえあれば出てこれるんだけど」

自分の中の魔力が急激に失われていく。今や形を保つのが精いっぱいだ。コトネが魔力供給をすれば問題ないのだが、今コトネは睡眠中。言付けでも書いておけばいいだろう。そう考えていた。

しかし、そう簡単にこの夜は終わらなかつた。

張り巡らされた結界がいち早く異常を察知する。それは火事であつた。しかし、明らかに通常のものとは違っている。火に触れた瞬間に家が燃え上がるのだ。

「コトネちゃん！ 起きて!!」

SORAはなけなしの魔力を掻き集めこの家に防御魔術を掛ける。そしてコトネを起こしに向かった。叩き起こされたコトネは目を擦りながらSORAに問いかける。

「……………どうしたの?」

「火事よ! 早く避難する準備……………」

そこでSORAは言葉に詰まってしまった。分かってしまったのだ。既にこの家以外周囲の建物すべてが燃えているのだと。そして、これを引き起こしたものの正体にも気づいた。何故なら彼女の元となる人格にある記憶はこの光景を知っている。

「え? なにこれ? わけがわからないよ!!」

「拙い! 私の魔術が破られ——!!」

やはり即興の魔術では長くもたなかつた。あつという間にコトネの家も火に包まれる。それでもコトネだけは守れるようにと魔力を振り絞りコトネの部屋に新たに防御魔術を展開する。しかし、それが長くは保たないことも同時に理解していた。

これが本当にアレであるのなら特上のエーテル体であるサーヴァントですら抗うことのできないものなのだ。サーヴァントはおろかその魂の欠片であるSORAの展開した防御魔術など紙のようなものだろう。それでも、リクがコトネに渡した装飾品の魔術が発動するまでの時間はどうか稼ぐことができた。

「ひ…………ツ! 助けて!! リクくん!!」

コトネがそう叫びながら、首元のネックレスを掴む。それはリクがコトネに渡したものである。その行動が鍵となり、ネックレスに刻まれていた魔術陣が周囲から莫大な量

の魔力を掻き集め、防御魔術を発動した。その魔力吸収の余波に巻き込まれ、SORAは消滅し、コトネ自身も体内の魔力を過剰に吸収され気を失った。

コトネが気を失っても魔術の発動は途切れなかった。魔術陣からは絶え間なく風が吹き出し、周囲から魔力をかき集め続ける。魔力吸収と防御が一体となったこの礼装はこの現象の大元である冬木市民会館にある穴が塞がるまでその効力を発揮し続けた。



コトネが目を覚ました時、目の前には一人の男がいた。名は衛宮切嗣。生存者を捜し歩き、つい先ほど一人の生存者を救っている。その目は絶望の淵にあつた者が一筋の希望を見つけたような色をしていた。

「あなた………だれ？」

「僕は衛宮切嗣。さあ、ここから出よう。ここからはまだ危ないからね」

切嗣に手を引かれその場を出るコトネ。ふと後ろを振り向くと、かつて自分の家だったものがそこにあつた。そして、そこからはみ出ている黒焦げた足――

「ふ……………いや……………いやー……っ!!」

それが誰のものか理解してしまったコトネは再び意識を失った。



それからコトネは病院に連れていかれ精密検査を受けた。あの火災の中傷一つない身体は医者を不審がらせたが、特に言及はしなかった。——いや、出来なかった。

それはコトネが入院してから3日後のことだった。

切嗣に連れてこられて以来目を覚まさなかったコトネは3日目にしてようやく目を覚ました。コトネが周りを見ると何人もの子供たちがベッドに寝かされていた。恐らくこの火災での被害者なのだろう。

目を覚ましたコトネは看護師に連れられて診療室に向かった。そこでいくつかの検査をし、医師と会話しようとした時のことだ。何度話しかけても医師が反応しない。懸命に口を開き大声を出しても医師には聞こえない。

埒が明かないのでコトネは医師の白衣の袖を引っ張る。そこでようやく気付いたの

か医師がコトネの方を向いた。

「……もしや、喋ることができないのかね？」

そんなことはない、とコトネは口に出したはずだった。しかしそれは音として医師に伝わっていない。コトネ自身の中では声は聞こえているし出ているのに。

「火災のショックで喋ることが出来なくなってしまったのか……」

違う！　と言いたかった。しかし、伝わっていないことが理解できてしまった以上何もコトネに出来ることはなかった。

そして、彼女は診療室を飛び出した。

どこに向かっていているのかはコトネ自身分かっていない。ただ、その場にいたくなかった。無我夢中で走り続け、コトネは黒いコートを着た人物にぶつかってしまった。

すいません、と言うことすら出来ないことにコトネは涙が出てきた。

「ああ、ごめんね。……君は」

どこかで聞いた声だ、とコトネが顔を上げると自分を助けてくれた人が目に入った。

「覚えていないかもしれないけど、僕は衛宮切嗣。君の名前は？」

話すことのできないコトネは落ちていた木の枝を拾うと、地面に『さくらう　ことね』と書いた。

「コトネちゃん。うちで暮らさないかい？ 君が嫌だというならそれでもいい。ただ、僕は君を放つてはおけないんだ。……身勝手でごめんね。出来れば考えておいてくれると助かるよ」

切嗣はそれだけ言うとは病院の方に向かっていった。コトネが喋ることができないことに関しては何も言わなかった。それでもその声色からは本当に心配しているということが伝わってきた。

——そして、一週間後。コトネは切嗣に引き取られることとなった。



「よ。目が覚めたか？」

「ん？ (こ)はど(こ)？」

「(こ)は聖杯の中だ。お前、俺と同じなんだろう？」

「同じってなに？　ボクは君みたいに体中に入れ墨なんてしてないんだけど？」

「そうじゃねえよ。お前は俺と同じ呼び名で呼ばれたんだろ？　なあ、この世^ア全^ンての悪^マ」

「……ああ、そう呼ばれたこともあつたっけ」

「そうそう。んでさ、ちよーつとお願いがあるんだ」

「なに？」

「ああ。——つてこと、してくれねえか？」

「いいよ」

「じゃ、ゆつくりしてけよ。どうせ次の聖杯戦争まで暇なんだからな」



く五年後く

それは月の綺麗な夜だった。

衛宮切嗣は縁側に座り、ただただ月を眺めていた。傍らには、赤い髪の少年。

名前は士郎。あの火災の中、切嗣が助けることが出来た二人の内の一人だ。もう一人の少女、琴音は既に床に就いているのだろう。

「……僕はね、子どもの頃正義に味方に憧れてたんだ」

「いきなりどうしたんだよ。それも憧れてたって、諦めたのか？」

士郎の中で、切嗣の存在は大きなものになっていった。彼の中にある、自己犠牲と正義の心は、どうやら切嗣の存在が大きいらしい。彼は切嗣が過去に行ってきたことを知らない。もちろん、切嗣も知らせるつもりは無かった。

しかし、切嗣はついに士郎に自分の歩んできた道のりがいかに間違っていたのかを論ずることが出来なかった。

そして、琴音。彼女を助けたとき、振り向かせてしまった。切嗣も、そこに死体がある、それも琴音の家族であろうものがあるのは分かっていた。だからこそ、切嗣は強引にでも後ろを振り向かせないように琴音を引っ張るべきだったのだ。

それが切っ掛けなのだろう。琴音は声を失ってしまった。学校での会話は筆談で行い、家では魔力を用いた『声』を使う生活を送っている。医者によれば精神的なものがあるため、回復する余地はあるというのだが、それを聞いても全く慰めにはならなかった。ただ後悔するだけである。

「……そうだね。正義の味方っていうのは、期間限定だったんだ。そんなこと、もつと早く気付けばよかったんだ」

「そっか、それじゃ、しようがないな」

「ああ、本当に、しようがない」

「うん。しようがないから、俺がなつてやるよ」

士郎は言った。かつて自分が諦めたものになつてくれると。そして、思い出す。初めてそれを口にしようとしたときのことを。

『ケリイはさ、どんな大人になりたいの？』

確かに、その声を聴いた気がした。彼女が切嗣シャーレイに掛けた問い。今、この気持ちでなら嘘偽りなく彼女に言えるのだろう。

「任せろつて。爺さんの夢は、俺が受け継ぐ」

士郎の誓いの言葉が聞こえる。

「そうか。ああ——安心した」

そして、切嗣は眠るように息を引き取った。嘗て、初恋の女性であったあの人に言えなかった言葉を胸に抱いて。

◇
　　～10年後～

穂群原学園に、衛宮士郎、桜卯琴音は通っていた。二人は名字は違えど、同じ養父のもとで育つたため、本当の兄妹のようだ。

「あ、先輩。おはようございます」

「ああ、おはよう桜」

琴音は喋れないため、頭を下げる。それを見るたびに士郎は心が痛む。正義の味方になると言っておきながら、最も近い琴音すら救えていないということが、彼にとっては悔しい。

「お、琴音じゃないか」

そう言つてこちらに歩いてくるのは間桐慎二。クラスメートである。

琴音は慎二の姿を見つけると、走り寄つて行く。士郎の知らぬ間にこの二人は仲良くなつていたので。今ではよく家に遊びに来ている。

「そうだ、慎二。美綴がもうそろそろ部活に來いだってさ」

「は！ 嫌だね」

しかし、琴音が睨んでいるのに気付くと、慎二は自分の言を撤回する。

「い、いやまあ、たまには出てやるか」

背中に冷たい汗をかきながら慎二は答える。慎二は琴音のこの目線に勝てないのだ。

それは初めて知り合った中学二年のころからだ。

「あのー、先輩？ 早くしないと遅れちゃいますよ？」

気づけば時間は遅刻間際。遅刻すると冬木の虎が五月蠅いので、見とがめられない程度に走って教室に向かう。

しかし、こんな平穩な日々は続かなかつた。

『……っ？』

「どうしたんだ？ 琴音」

『ううん、何でもないよ。 土郎』

何でもないとはいつつ右手を隠す琴音。そこには、嘗てそこにあつたものと同じ模様が浮き出していた。

令呪。聖杯戦争のマスターの証。魔術の鍛錬を怠っていなかった琴音は、遂にあの魔導書を最後まで読み進めている。令呪を授かるには十分な実力がある。そして、触媒も、この本を使えばいい。

琴音は楽しみだった。リクにまた会うことが出来るのだから。

しかし、それは恋愛感情ではない。どちらかといえば、よくできたと褒められたい、そんな感情なのだ。

何せ、彼女の恋愛感情は、間桐慎二に向いているのだから。

『ごめんね。こんなものに付き合わせちゃって』

「気にするなよ。僕だってサーヴァントを見てみたいんだ。それに、もしかしたら僕にも令呪が宿るかもしれないだろ?」

『……………』

「何か言ってくれよ。僕だって魔術師の家系だ。可能性が無いわけじゃない」

『……………でも、魔術使えないじゃん』

「う……………」

琴音は慎二と共に夜の市民公園で召喚を行うことにした。嘗て住宅街だったその場

所は、10年前の大火災によってほとんどの家屋が焼け落ちたため、今はその犠牲者の追悼碑とともに公園となっている。

『始めるよ』

そして、召喚の儀は始まった。

F a t e / s t a y n i g h t
P h a s e . 1

10年前までは住宅街であったこの場所は、突如として発生した大火災によつて壊滅的な被害を受け、その後市民公園へと変わった。

昼間などは、子どもたちで賑わっている公園であり、まだ深夜とは言えないこの時間にも人はいる。しかし、今日に限っては、二人しかない。

その内の一人、桜卯琴音は公園内のある場所で、融かした宝石を用い魔術陣を描いていた。一般人が見れば、変人認定されるような光景ではあるが、元々この辺り一帯には人払いの魔術を掛けてあるので、問題は無い。

残る一人である間桐慎二は、その行為を手伝うわけでもなく、ただ見ていた。

『よし。これで完成かな。ねえ、慎二君。こんな夜にまで付き合わなくてもよかつたんだよ?』

どこか普通の声とは違うように聞こえる声が慎二に向けて発せられる。

「何を言ってるんだ? 琴音を一人にできるわけがないだろう? それに僕だって魔術

師だ。サーヴァントの召喚を見てみたいしね」

『あ、うん、そう。じゃあ、もうちよつと離れててくれる？　もしかしたら危ないかもしれないから』

「分かった」

慎二が魔術陣から十分に離れたのを確認すると、琴音は手に持っていた本を魔術陣の中央に置き、目を閉じて詠唱を唱え始める。

『Dico.』

Tu 汝の身は我が下に

fat 我が命運は汝の剣に

Sequitur in loco ad Sanctum Graile,

hanc,

sic hac administratione vivere usque

歌っているかのような詠唱に、慎二は鳥肌が立っているのに気づく。琴音が発する言語の意味を慎二は理解できない。彼は魔術師の家系ではあるが、魔術を使えない。そのため、既に学術名などにしか用いられないラテン語を聞き取ることはできない。

『Hic sacramentum.』

Quis longe facti sumus omnium bonorum,

quis longae facti Simus mali distant

完成された詠唱は、それだけで一つの芸術である。その言葉の響きは、魔術とは何の関係もない人にすら、何らかの感情を呼び起こすような、そんな旋律を奏でる。

そして、琴音が思い浮かべるのは、一人の人物。10年前に、『魔法』を自分に初めて教えてくれた少年。黒い髪に黒い目をして、どこか悲しげな感じがしていた少年。

彼にもう一度逢いたい。その思いを胸に、定められた最後の一節を読み上げる。

『Septem caelum induit in potentia verbum tuum

ex circuli deterrance,
nos defensores instatera!

詠唱は完成した。あとは、彼が出てくるのを待つだけ。琴音はゆっくりと目を開け、魔術陣の中央に立っている人物を見る。

そこには、あの時から少し成長した、彼の姿があった。

「問おう、君、というよりも琴音ちゃんがボクのマス」

そのサーヴァントは最後まで言うことができなかつた。その途中で、琴音が飛び込んできたのだ。

『……リク君！ ずっと、ずっと逢いたかつた!!』

「大きくなったね、琴音ちゃん。泣いちゃだめだよ。最後まで続けてから。………さて、もう一度」

リクと呼ばれたサーヴァントは一度咳払いをして、再び言い直す。

「問おう、汝が我がマスターであるか」

『私があなたのマスター、桜卯琴音。これからよろしく』

「ボクはキャスターのサーヴァント。よろしく」

契約が完了したことにより、右手の令呪が紅く輝く。

「さて、ボクを完全な状態で呼べるくらいに成長したんだね。さすが！」

『あ、ありがとう。……でも転移魔術は使えないよ？』

「まあ、あれが使えちゃったら色々問題になるだろうし、いいんじゃない？　ところで、

あそこにいるのは？」

キャスターが指差した先には、空気と化していた慎二の姿があった。

サーヴァントの召喚に見惚れていたのだろうか、ぼんやりと虚空を見つめているようにも見える。

『慎二君はね、私の……あの……その……』

琴音は顔を紅くしながら下を向いてしまった。その反応から答えを察したキャスターは、ニヤニヤした笑みを浮かべる。元々悪戯好きであるキャスターは琴音にそつと

耳打ちをした。

『あ、……あわわわわわ……：Ventus, quis cecinit!』

琴音の顔は更に紅くなり、照れからなのか、無意識に魔術を発動させ、キヤスターを吹き飛ばそうとした。だが、不意打ちであつてもそこはサーヴァント。魔術を見切り、吹き飛ばされることは無かつた。

このまま観察を続けていてもいいのだが、取り敢えず甘いものが食べたくなつたキヤスターは琴音を落ち着かせ、話を進めることにした。

「からかつて悪かつたよ。で、これからどうする？ 多分まだサーヴァントは全騎揃つてないよ？」

『……じゃあ、いったん帰ろつか。一応士郎には慎二君の家に行くから帰りは遅くなるって言つてあるし……』

「じゃ、さつさと行こう。ボクは甘いものが食べたい」

未だ固まつたままの慎二を引きずりながら、琴音とキヤスターは近くにあるコンビニに向かつた。



衛宮士郎は頭を抱えていた。

学校と自宅でのランサーの襲撃をどうにか乗り切った士郎は、目の前のセイバー、そして遠坂凜の説明を聞き、ようやくこれが聖杯戦争であることを理解した。

切嗣から聖杯戦争というものがあるということは聞いてはいたが、周期が違う。それに、未熟な魔術師である自分が選ばれたのは何故なのか理解できなかった。

加えて、今の時刻。今まで通りであれば、もうそろそろ琴音が帰ってくる時間である。琴音は凜と友人であるので特に説明はいらないだろうが、セイバーに関してはどうすればいいのだろうか。それに、琴音は自らが魔術師であることを士郎と慎二以外には明かしていない。帰ってくるなりいきなり魔術を使うようなことはないだろうが、凜に魔術師であることがバレてもいいのだろうか？

そんな考えが、士郎の頭の中を占めていた。

「ねえ、衛宮君。私の話聞いてた？」

「あ、いや……悪い。全然聞いてなかった」

「あ、そう。そういえば琴音は居ないの？」

「もうそろそろ帰ってくるはずなんだが……」

そんな話をしてている時だった。玄関が開く音が聞こえ、琴音が帰ってきた。

『ただいまー。……つて、あれ？ 凜ちゃん？』

「あら、お帰りなさい、琴音。それより、その声は何？」

『あー、ごめんね、凜ちゃん。言うの忘れてた。私、魔術師なんだ』

士郎が悩んでいたことをあつさりと告白してしまう琴音。士郎は今まで悩んでいたのは何故だったのかと項垂れている。

そこへ、更なる混乱を招く人物が入ってきた。

「お邪魔しまーす。あ、琴音ちゃん、これどこに置いとけばいい？」

『んー、取り敢えずテーブルの上にでも置いといてー』

両手にレジ袋を提げたキャスターが堂々と姿を現し、凜の顔が引き曇る。

「ね、ねえ、琴音。あれつて、サーヴァントよね？」

『うん。ていうことは、凜ちゃんもマスターなんだ。………もしかして、士郎も？』

「ええ。で、今から戦う？」

『やだ。今日は疲れたから』

疲れたからという理由で戦闘を拒否する琴音。元々戦う気になかった凜は少しだけ安堵した。流石に二連戦はキツイのだろう。

そして、件のサーヴァント、キャスターは、セイバーとの対面を果たしていた。

「あ、久しぶりだね、セイバーさん」

「あなたは、キャスター!? なぜここに!？」

「何でって……まあいいや。で、お菓子食べる?」

「……いただきます。どうやら今日は戦う気ではないようですし、私もあなたの性格を少しは知っています。どうせ今日はお菓子が食べたいから、といった理由なのでしょう?」

「正解! ま、戦うかどうかはマスター次第だけだね。あんまり兄妹で戦ってほしくないってのも理由かな」

本当に敵同士なのかと疑いたくなるような会話をしながら、キャスターとセイバーはお菓子を食べる。そこに、お互いのマスターから声がかかった。どうやら、教会に行くようだ。

「面倒だなあ…………よし、転移魔術で行こう! みんなこっち来てー」

全員が近寄ったのを確認すると、キャスターは手を打ち鳴らし、魔術陣を敷設する。その展開速度は、さすがはキャスターのサーヴァントと行ったところか。

「凜ちゃん、教会を強く思い浮かべて。じゃないと、どつか変なところに飛んじやうからね」

「分かったわ。……それにしても凄いわね。転移なんて魔法レベルのを簡単に使うなん

て」

『うーん、やっぱり私には使えなさそうだなー』

「行くよ！ trans^転sit^移us」

まるでその場には誰もいなかったかのように、魔術陣ごと彼らは消えていった。



「相変わらず出鱈目な能力だなあ、おい」

黒い空間に声が響き渡る。誰の姿もないのに、声だけが聞こえる。

「しっかし、まあ、俺のクラスをやるっていったのに、結局正規のクラスに収まるとか、

まあ、アイツらしいけどな」

「ま、そうでなきや面白くないよな」

「さあ、早く俺を壊してくれよ。ここにいても飽きちまったんだから」

「頼むぜ、ツエーン」

Phase. 2

「ようこそ、少年少女。私は言峰綺礼という。君たちの名は？」

「衛宮士郎だ」

『桜卯琴音です』

悠然と佇む綺礼に士郎は少し気圧されているように見える。対して琴音は毅然とした態度でいた。

「君たちが5番目と6番目のマスターだ」

「……ああ。だけど、俺はマスターになるつもりはない」

この士郎の発言に誰よりも驚いたのが琴音だった。凜は前に聞かされているため動揺はない。

「衛宮士郎。聖杯とは願望器だ。それがどんな願いであれ叶える万能の願望器だ。マスターによってはそれを私利私欲のために利用するだろう。そうなればどうなる？」

「……それ……は……」

「さらに言うならば、聖杯戦争はこれで5回目だ。前は10年前。あのとき、愚かなマ

スターの手によって、未曾有の災害がもたらされた」

「じゃあ、あの火災は！」

「さて、どうする衛宮士郎。もちろん辞退するのであればそれでも構わん」

「ふ……ざけるな！ 俺は切嗣オヤジのあとを継いで正義の味方になるって約束したんだ！

10年前の悲劇を繰り返させるわけにはいかない！ そのためなら、マスターにだってなつてやる！」

『……正義の味方……ねえ……』

士郎の独白によって遮られ、琴音の言葉は誰の耳にも届かなかつたが、その言葉には複雑な感情が込められていた。

「よろこべ少年。君の願いはようやく叶う」

最後に綺礼が言ったその言葉は、士郎の中で反響していた。



マスター組が教会に行っている間、サーヴァントは外で待機していたため、暇だった。

マスター三人に対してサーヴァントが二人であるということは、一人いないということだが、キャスターは気にしていなかった。今頃そのサーヴァントは教会に向かって全力疾走しているところだろう。

「暇だね、セイバーさん」

「ええ。本来私たちは戦うべきなのでしょうが、マスターが戦いを望まぬ以上何もすることはありませんからね」

時間を持て余してしまったセイバーとキャスターは特にすることもなく、時々教会を気にしてはまた当てもなくブラブラしているだけだ。

『お待たせ。もう用事終わったから帰ろうよ』

10分後、ようやくマスターたちが出てきて、暇な時間は終わった。あとは帰るだけである。しかし、そうはいかなかった。

「初めまして、だね。お兄ちゃん、それにお姉ちゃん。私はイリヤスフィール」

突如聞こえた声。聞こえた方を見ると、10歳くらいに見える少女がそこにはいた。白銀の髪に紅い目。それは、紛れもなくアインツベルンのホームクルスの出で立ちだった。

この少女に心当たりがあるのだろうか、セイバーは目に見えて動揺している。キャスターはその姿を見て、なんとなく想像がついた。

「お兄ちゃん……?」

「気にしなくていいよ。どうせ皆ここで死んじやうんだし」

イリヤスフィールと自らを称した少女は、片手をあげる。すると、霊体化して控えていたであろうサーヴァントが姿を現した。

2 mはあるであろう巨体に、ただ石を削っただけに見える斧剣。威圧感を放つそのサーヴァントは強大に思えた。

「やつちやえ! バーサーカー!」

「やらせません!」

バーサーカーが剣を振り下ろしたのに合わせ、セイバーも自らの剣で迎え撃つ。一目見ただけでも分かるその破壊力を正面から受け止めるその剣技はまさしくセイバーの名に相応しい。しかし、魔力が行き渡っていないのか、剣を打ち合わせるたびにセイバーは徐々に押されていき、最終的には斧剣の横からの一撃によって吹き飛ばされてしまった。

「セイバー!! ……だったら俺が! トリス・オン 投影開始!」

「ちよ! 何やつてるのよ! 風 衛宮君!」

『無茶をしないで! 土郎! 風 Ego よ ventus 彼 eum 引 redu 戻 cunt! て リク君、お願い!』

「OK! Ventus, conciderunt!」

バーサーカーではなくそのマスターを狙った一撃は、バーサーカーが片腕を伸ばすことで防いだ。しかし、その無防備な体勢を逃すセイバーではない。先ほど吹き飛ばされたセイバーが戦線に復帰し、袈裟懸けにバーサーカーを斬る。そして、その巨体は地面に倒れていった。

明らかに死に至らしめるであろう攻撃を自らのサーヴァントが受けてなお、イリヤスフィールは余裕の笑みを浮かべていた。

「起きなさい、バーサーカー」

彼女の掛け声に呼応するように、地に倒れ伏していたバーサーカーが何事もなかったかのように立ち上がる。既にセイバーに傷付けられた痕は無く、初めと変わらぬ姿だった。

「私のバーサーカーはね、ヘラクレス。古代ギリシャ最大の英雄よ。こんな程度では負けないわ」

自らサーヴァントの真名を明かすイリヤスフィール。彼女の狙いは分からないが、真名を知ることによって対策は練ることが出来る。だが、厄介なのは、ヘラクレスの伝承だ。

ヘラクレスはその伝承において12の試練を乗り越えている。それが忠実に再現さ

れているとすれば、12通りのナニカがあるはずなのだ。

しかし、考えている暇はない。こうして考えている間にも、バーサーカーは迫ってきているのだから。

セイバーは再びバーサーカーと剣を交えるも、消耗が激しいのか、先ほどよりも動きにキレが無くなってきた。その証拠に、剣がぶつかり合う度に辛そうな顔をしている。

「加勢するよ、セイバーさん！ Perci^地pe^よ t^彼erra^を quassatur^る！」
 キヤスターはバーサーカーの立つている地面を揺れ動かし、バランスを崩させる。急にバランスが崩れたせいで踏ん張りのきかなくなつたバーサーカーをセイバーが押し切る。バーサーカーが一步二歩と下がったところで、遠くから魔力を纏つた矢が命中する。凜のサーヴアントであるアーチャーが狙撃したのだ。

それでもバーサーカーは倒れなかった。単純に攻撃力が足りていないのだ。

セイバーは魔力の関係で、既に立っているのもやつとの状態になつていた。アーチャーの狙撃は、狂化しているとは思えないような身のこなしによつて大きな斧剣によつて防がれていた。

セイバーは懸命に力を振り絞ろうとするものの、魔力が尽きかけているため動くことが出来ない。そこにバーサーカーの一撃が迫ってきた。

セイバーにバーサーカーが迫って行くのを見て、士郎は自らの得意とする魔術、投影を用い、バーサーカーに斬ってかかった。だが、サーヴァントであるバーサーカーにただの魔術師である士郎が敵うはずもなく呆気なく左の脇腹を切り裂かれてしまった。

『……ッ！ Per aquam, et curabo eum!』

それを見た琴音が士郎に回復魔術を掛ける。だが、回復する速さよりも出血のほうが早いらしく、すぐに血の海が出来上がってしまう。

『リック君！ 力を貸して！』

「ごめん。ボクは回復系の魔術が使えないんだ……」

自分の力では助けることができないとみた琴音は、自らのサーヴァントであるキャスターに助けを求める。しかし、当のキャスターは回復魔術が使えない。その間にも、バーサーカーは距離を詰めてくる。凜の放つ宝石魔術も悉く防がれ、立っているのもやっとなセイバーの剣撃、いつの間にか姿を現していた双剣使いの攻撃も殆ど意味を為していないかった。

直接的な戦闘手段に乏しいキャスターは、琴音や倒れている士郎を守るために強固な防御陣を敷き、来る衝撃に備えていた。また、一瞬の隙に転移を行うための魔術陣の敷設も同時に行っている。

そして、隙は訪れた。

それは、最初にキャスターがやったものと同じだ。バーサーカーではなく、そのマスタを狙うという方法。

セイバーとアーチャーがバーサーカーをひきつけている内に、凜が宝石魔術をイリヤスフィールに向けて放つ。当然、それを防ごうとバーサーカーはその射線上に移動する。その一瞬の隙を、キャスターは見逃さなかった。

「specificat^指ur trans^定it^転us^移！」

敷地全体に敷設された魔術陣によって、キャスターが指定した対象を強制的に転移させることによって、バーサーカーとイリヤスフィールを残してキャスターたちは撤退することになった。

「ふーん。転移魔術なんて使えるんだ。帰ろっか、バーサーカー」

残されたイリヤスフィールはそう呟くと、バーサーカーの方に乗ってこの場を去って行った。

Phase. 3

「……寝ている君に言っても何も変わらないのは分かっている。でも、やっぱり僕は自分が許せないんだ。あの時、強引にでも君を振り向かせてはいけなかった」

月明かりに照らされた部屋の中で、一人の男性が寝ている少女に懺悔をしている。少女の腕の中には、意識を失ってなお離すことのなかった一冊の本が抱かれている。

「……………僕のことを恨んでくれたって構わない」

『恨むなんてこの子がするはずないじゃない』

今まで男性の声しかしなかった部屋に、女性の声が響く。目を凝らすと、月明かりに照らされている本が薄らと光を放っていた。

「君は？」

『私はSORA。この本に宿る……………うーん何ていうんだろう？ 分霊？ 魂の欠片？』

まあ、そんな感じ』

「魔術師か？」

『厳密には違うけど、まあ、間違ってもない。この子は聖杯戦争でキャスターのマス

ターだったから。で、私はキャスターに造られた存在』

「この子が、マスターだったのか。道理で見つけられないわけだ。……この子が優しいことは知ってるよ。決して僕を恨むようなことはできないような、ね。でも、僕には責任がある」

『責任ねえ。じゃあ、一つ、私に教えて。聖杯は願いを叶えたの?』

「……わからない。あの火災が願いの結果なのか、あふれ出した泥のようなものの結果なのかはわからないんだ」

『ふーん。でも、あの火災程度が願いだったとしたら、かなり魔力に余剰分が出そうだね。すぐにでも次の聖杯戦争が始まるかも』

どこか訳を知っているような声色だが、顔が見えないので判断のしようがない。そもそも、その声自体もどこから聞こえてくるのか分からない。360度どの方向からも聞こえてくるのだから。

「もし、そうなったとしても、僕にはもう打つ手はない。大聖杯のもとに仕込んだ仕掛けも60年の周期を見越したものだしね。それに、僕自身もそう長くはない」

『だったら、君の力を残せばいい。私がこの子を導く。使い方を間違わせることなく』
「僕の力は血塗られた力だ。そんなものこの子に与えるわけにはいかない」

『でも、その血塗られた力のおかげで、君はいままで生きながらえてきた。その事実は覆

ることはないでしょ』

「どうしてそこまで僕の力にこだわる？ 君が力を与えればいいんじゃないか？」

『……それが、この子の望みだから。幼いながらこの子は魔術がどういったものなのか知ってしまった。この子はこの年で既に立派な“魔術師”なんだよ』

しばらく、沈黙の時間が続いた。聞こえるのは、幼い少女の穏やかな寝息だけ。

「……分かった。僕の持つ魔術刻印をこの子にあげよう。あの子には適応しなかったしね」

『今すぐじゃなくていいよ。私が実体化して刻印の移行ができるようになるまではあと2ヶ月くらい必要だからね』

「そうか。それと、土蔵のなかにアレも残ってる。できれば使ってほしくはないけど、使わざるを得なくなった時に使ってくれ」

『分かった。絶対に使い道を誤らせないよう約束する。だから、この子のことは任せて』



「傷口が塞がってる……?」

一夜明けて回復した士郎は自分に傷がないことを不思議に思っていた。琴音が必死に回復魔術を掛けていたのは覚えているのだが、そのおかげなのだろうか。士郎は上手く回らない頭でそう結論付けた。

ともかく、昨夜に大怪我をしたとはいえ回復しているのなら学校に行かねばならない。幸い、制服は二着持っていたので問題は無かった。

取り敢えずは朝食を作らなければと自分を奮い立たせリビングへと向かう。琴音は料理が出来ないのだ。きっと座って待っているのだろうと思っていた。

しかし、いざ到着してみるとテーブルの上には料理が並び、なぜか凜も一緒に食事を摂っていた。

「お……おはよう。なあ、これ、誰が作ったんだ?」

『キャスターだよ。もう動いても大丈夫なの?』

「大丈夫。なんか痛みもないし。琴音がやってくれたのか?」

『私じゃないよ? 勝手に治っていったの。キャスターは何か知ってるみたいだったけど教えてくれなかったし』

回復魔術を掛けたのは琴音ではないらしい。それどころか勝手に治っていったとはどういうことだろうか。士郎はそれを疑問に思い、キャスターの姿を探すが、どうにも

見当たらない。

「なあ、琴音。キャスターはどこ行つたんだ？」

『わかんない。朝ごはん作つたら散歩に行くつて言つて出かけちゃつた』

「そつか」

琴音も士郎も互いに家族を失い、もう失いたくないと思つてゐる。そんな雰囲気が出ていたのだろう。凜は朝食を少し早めに食べ、いったん帰る準備をする。

「琴音、衛宮君。私は一旦家に帰るわ。ああ、今日は学校休みなさい。念のためにね」

「ああ、分かつた」

『あ、凜ちゃん。私が魔術師だつてバレちゃつたんだし、この際だから言うね。多分私だつたら凜ちゃんのお母さん治せるかもしれない』

「ほ………本当!?!」

凜の母親は、10年前の第四次聖杯戦争の際に酸欠による障害を負つた。そのせいで、脳からの伝達信号に障害が発生し、意識の混濁及び下半身の麻痺症状が出ている。医学では治療が不可能でも、魔術でなら可能になる場合もある。特に、琴音の得意とする系統が回復・治癒であるため、その可能性も高い。

『多分。今までの私だつたらできないかもしれないけど、今はキャスターもいるし。彼、治癒魔術が得意じゃないつて言つてるけど、理論は知つてるから、それで大丈夫だと思

う。もちろん、凜ちゃんにも手伝ってもらわないといけないけど」

「……それがわかっただけでもいいわ。でも、この話は聖杯戦争が終わったあとね」

『わかったよ、凜ちゃん。キャスターには理論残しと言って言っておく』

「ありがとう」

優雅にお礼を言った凜は、少し浮かれたような足取りで自宅へと向かっていった。



一方、朝食を作った家を出てきたキャスターは、霊体化して昨夜の戦闘の跡地に来ていた。

目的はバーサーカーを連れたいンツベルンの魔術師の魂の匂いを覚えること。匂いさえ覚えてしまえばある程度の範囲内に相手が入ってくれば感知できる。

「やっぱり匂いは変わらない、か。感情があつて、個性があつても人形である時点で同一の存在ということか」

『リクが悩むことは無いわ。あなただって被害者なんだから』

「違う。ボクは加害者だよ。彼らからしてみればね」

『そんなことはない！ リクがいなかったら私は……』

「ありがとう。でも、ボクは自分の罪から逃げない。じゃないとランスロットに言ったことが嘘になっちゃうからね」

見えない声との対話が終わわり、静寂が訪れる。教会墓地であるこの場所に朝早くから訪れる者などほとんどいない。元々静かな場所ではあるが、昨日の戦闘によつて地面は裂け、墓石もいくつか壊れてしまつており荒れ果てているため、立ち入り禁止の看板が掲げられていることも一因だろう。

「さすがにこれは直したほうによさそうだね。……
Move_地mant_我net_が O_求terra_め, post_まula_まmus_動」

実体化したキャスターの魔術に呼応するように地面の裂け目が塞がり、抉れた跡も元に戻っていく。それは、あたかも時間が巻き戻っているかのような光景だった。

5分後にはすっかり元に戻った地面があった。さすがに墓石を元に戻すことはできないのか散らばってしまった欠片を集めているだけだが。

魔術の行使が終わつてからもしばらくの間キャスターはその場から立ち去ることはなかった。

その表情からキャスターが何を思っているのかはわからない。



結局放課後になってもキャスターは帰ってこなかった。

念のため学校を休んだ士郎が姿を見ていないというのだから本当だろう。おそらく琴音が呼びかければすぐにでも現れるのだろうが、特に差し迫った用事があるわけでもないの、自然に帰ってくるのを待つことにした。

琴音はいつも通り水を操って魔術の鍛錬をしている。コップ一杯程度の水だが、文字を作ったりいくつかに分けたりと色々なことをしている。

「本当に魔術師だったのね」

『凜ちゃん、信じてなかったの？ サーヴァントだつて召喚したんだよ?』

「あー、確かにそうだけどさ」

『信じてくれなかった凜ちゃんにお仕置きだね。Ventus^風, inflant^{よ、吹}ur^き』

「ちよつ、何を!?!」

凜を中心に少し強めの風が吹き上げる。当然、凜の履いているスカートは捲れ上がる

わけで……。

『ふむ。赤か』

「……………」

そして、偶然にもそれを見てしまった土郎は首が鳴るほどの勢いで後ろを向く。だが、その行動は見ましたと言っているようなものだ。そして、それに気づいた凜は無言で土郎に近づき、腹に一発拳をぶち込んだ。

「……………ぐっ……………」

「わ、忘れなさい!!」

「ゴメン! 分かった! 分かったから! 忘れるから!」

土下座しながら、もう一発は殴られたくないと土郎は必死に謝る。それを見て笑っている琴音だったが、そもそもそのきっかけを作ったのは彼女である。凜から怒りの矛先を向けられるのもうすぐだ。



キャスターは海岸にある倉庫街を歩いていた。

10年前、自分が初めてキャスターとして大規模な術式を使った、ある意味思い出の場所。実はキャスターは、前回の聖杯戦争で使用した場所を巡っていたのだ。アインツベルンの城は結界が新しくなったのか諦めなければならなかったが他の場所はもう見終わっている。

「あれだけ大きい魔術使つてもさすがに10年も経つたら痕跡は残つてないみたいだね」

『そりやそうでしょ。なんだっけ、確か魔術は秘匿されるべし、だっけ?』

「そう。魔術は知る人が増えれば効力が落ちるからね。やっぱりそういうところの知識に疎いよね、ソラは」

『しようがないじゃない。知る機会が無かつたんだから』

誰もいない倉庫街に二人分の声と、足音が聞こえる。本来であればまだ人がいるはずであるが、既にこの辺り一帯に人の気配はない。

「さて、人払いはもういいかな。……出てきなよ。どのサーヴァントだか知らないけど」
その声に呼応するように、一人の男性が姿を現す。全身を青に包み、槍を手に持っている。既に臨戦態勢のようだ。

「ランサーかな。じゃ、始めますか!」

キャスターはその言葉とともにお得意の転移魔術で一氣に間合いを取る。しかし、相手は全サーヴァントで最速といわれるランサークラス。あつという間に離れていた間合いも近づいていく。

「Per^炎 ignem^{よ、壁}, et^と murum^{なれ}」

キャスターは慌てることなく炎でできた壁を作り視界を遮る。この程度の妨害など気にも留めないランサーは、槍を揮うことで炎を掻き消した。しかし、炎の先にキャスターの姿は無い。

ランサーが気配を感じ振り向くと、そこには何発もの火球を浮かべたキャスターの姿があった。ランサーが駆けだすと同時に火球も放たれ、その全てが複雑な軌道でランサーに迫る。それを紙一重で躲しながら進むランサーだったが、キャスターの姿が不意に揺らぐ。

一つ舌打ちをしてランサーはその場から大きく飛び退いた。

次の瞬間には、いくつもの火球が合わさった巨大な火球が先ほどまでランサーがいた場所に当たり、爆炎が辺りを包む。

「蜃気楼だっけか？ なかなかやるじゃねえか」

「ありがとう。でも、本物のボクを見つけたられるかな？」

爆炎が晴れ、視界が開けた。そこにいたのは、何十人もキャスター。おそらくこの

中の一人が本物か、もしくはどこか別のところに隠れているのだろう。普通なら少しは焦りを感じるような場面なのだが、逆にランサーは強敵との出会いに興奮していく。

「おもしろえ。見つけ出してやるよ！」

そういつてランサーは一番近くにいたキャスターに切りかかる。だが、そこに手ごたえは無く、霞のように消えていく。

「次！ 次！」

どンドンキャスターを消していくランサーだったが、それでもキャスターに焦りの色は見られない。

「いくら倒しても無駄だよ。いくらでも増やせるんだから」

その言葉通り、先ほどまでに倒した数の倍以上のキャスターが現れる。

「こりやすげえ。初めて見たぜ」

よりいつその喜色を浮かべるランサーだったが、その表情も一瞬にして曇った。

「あ？ 撤退だ？ 今からいい所だったのによ！ ……はいはい。分かったよ。

………あー、済まねえ。帰らなきやいけなくなっちゃった」

「そう？ じゃいいよ。大丈夫。後ろから襲ったりはしないから」

そういつて姿を現したキャスターはランサーの真上にいた。しかも何故か逆さまで。

「そこにいたのかよ……。じゃ、また今度やろうぜ」

ランサーは霊体化しその場を離脱していった。おそらく今日の戦闘のことをマスターに報告するのだろうが、キャスターは特に心配はしていない。

なぜなら、火の魔術は一番苦手なのだから。

「運動したら甘いもの食べたくなくなっちゃった。コンビニ寄って帰ろっと」

霊体化せずに歩き出すキャスター。10年前に破壊された倉庫街はまたしても同一人物の手によって破壊されたのだった。

Phase. 4

深い森の中に一軒の山小屋がある。そこに近寄る人は居らず、荒れ放題に見える。と
ころどころ崩れ、屋根も剥がれているその小屋には、今二人の人間がいた。

「はあ。ここまで来たのはいいけど、どうしようかな。まあ、目的は達成できたんだし、
あとは帰るだけなんだけど、こっからだと遠いしなあ……」

「……………遠いつて、何?」

「……………ここまで知識がないのか。うーん、本当にどうしようか」

少年は一人呟くが、答えは帰ってこない。傍らにいる少女はあまりにも知識が乏し
く、連絡するために持たされていた携帯電話は先の戦闘で破壊されてしまっている。

帰る場所は分かっているのが一応の救いだろう。少年が使う魔術には長距離を移動
できる魔術がないので、一気に帰るということは出来ないのだが。もしあつたとして
も、海を越えなければならぬのでそう簡単なことではない。

「とりあえず今日はここに泊まるしかないかな。」

o b i c e c o n s t r u c t i o n e :
結界構築築

A p p l i c a t i o n s :
用途

Quaererer operatio et clangoris」

「『いま』の……『まじゆつ』？」

「ん？ あ、そうだよ。そうだ、ボクの名前教えてなかったね。ボクはツエーン。よろしく」

「『わたし』は………『0255号』」

ツエーンの名乗りに対して、少女は0255号と名乗った。それは、少女の製造番号。通算して255番目の実験体を意味し、元々あった名前は完全に奪われている。

「番号による名前……か。ボクも似たようなものだけだね。そうだ！ ボクが君に名前を付けてあげるよ。うーん、君がよく使う魔術って何？」

「……『かぜ』」

「風か。じゃあ、君はこれからソラだ。ソラ・チェラーシス」

「『ソラ』。……わかった。『おれい』、『なに』かしないと」

初めて笑顔を見せた少女は、幾何学的な模様の浮かんだ目でツエーンを見る。何かを見ているのだろうが、ツエーンにはそれが何かは分からない。少なくとも、自分には見えないものを見ているのだろうということしか分からない。

「リク」

「ん？」

『あなた』の『なまえ』。リク」

「ありがとう。じゃあ、ボクはこれからリク・チェラーシスと名乗ろう」

今までソラに向けていた仕事をしている時のような冷たい目から、同年代の少年のような暖かい目が変わったのがソラには分かった。



結局一晩中帰ってくることのなかったキャスターは、夜明けごろになってようやく帰ってきた。既に士郎は朝食の支度を始めており、キャスターが帰ってきたことに気付いた。

「あー、えっと、キャスターだよな。昨日はありがとうな。朝飯作ってもらっちゃって」
「気にしなくていいよ。それに、あれぐらいなら時間もかからないしね。……あ、琴音ちゃんの部屋はどこ？ 昨日ほったらかしにしちゃったから会いに行かないと」

『その心配はいらないよ、リクくん』

特徴的な声が聞こえ、振り向くと、居間に琴音が居た。髪の毛がぐしゃぐしゃだが。

「あー、とりあえず琴音ちゃん、髪をどうにかしたほうがいいと思う。ちよつと見苦し
い」

『うん。自分でも分かつてる。でも、その前に言うことがあるんじゃないのかな?』

何やら妙な威圧感を出している琴音にキャスターは逆らえない。土郎はとぼつちり
を受ける前にさつさと台所に向かい、朝食の準備の続きをしている。

「う……、すみませんでした」

プレッシャーに負けてキャスターが土下座する。しかし、それでも怒りは収まらな
かったのか、それともお仕置きなのか、琴音は土下座しているキャスターの上に座った。

特に重いわけでもないが、なんとなく精神的に攻撃されているような気がするキャス
ター。琴音が無言なのもそれに拍車をかけている。

何分経ったのか分からないが、土郎が様子を見に来て声を掛ける。

「琴音? さすがに可哀想だから許してあげろよ」

『ふいふい……』

しかし、琴音は不気味な含み笑いをするだけだ。その眼は語っている。「じゃあ、土郎
が代わりになる?」と。そんな意図を的確に読み取った土郎は、それ以上言うこともで
きず、さすがごと引き下がる。

そして、この体勢は何故か泊まっていた凜に言われるまで続いた。

ようやく許してもらえたキャスターが立ち上がり大きく背伸びをする。意外なところで琴音のドS性を見てしまった凜は何やら考え込んでいるようだが、ひとまず朝食が出てきたので食べることにする。

『ねえ、リクくん。聖杯戦争のマスターって変な夢見たりするの?』

「なんでボクに聞くの? ボクには分からないよ。だってマスターじゃないし」

『じゃあ、凜ちゃん。そういうことってあるの?』

「あるわ。令呪を通して繋がっているマスターとサーヴァントはお互いの過去を夢で見たりすることがあるらしいわね。もしかして、見たの?」

『うん。内容は秘密だけど』

あつさりと見たと肯定する琴音。さすがに夢の内容は、自らのサーヴァントの真名や弱点につながる可能性があるということでは分かるので言うことはないが。

キャスターは琴音がどんな夢を見ていたのかも実は分かっているの、語られなくて良かったと思っている。なにせ、いろいろと分かっってしまうようなものだったのだ。それに、自分以外に語られるというのは恥ずかしいという思いもある。

「ああ、そういえば昨日ランサーと戦ったよ」

『え？　じゃあ、あの時の魔力消費はそれ？』

「うん。向こうも本気じゃなかったし、ボクも本気で相手はしてないけどね。えーと、特徴は全身青で紅い槍、あと好戦的ってところかな」

「あ、ソイツ俺を襲ってきた奴だ」

「キヤスター、それなら真名も分かっているわ。クー・フリーン。セイバーが真名解放の一撃喰らったからそこから特定できたのよ」

「ふーん。じゃ、宝具はゲイ・ボルクか。……また相性が悪い」

宝具の効果を知っているのか、少し落ち込むキヤスター。元々最弱のサーヴァントとよばれるキヤスタークラスなのだから、相性が悪い相手も多い。特に三騎士と呼ばれるクラスにある対魔力は最大の壁である。

基本的にキヤスタークラスは裏でコソコソやるようなクラスなので、今回のように堂々と表で戦うキヤスターにとって、聖杯戦争を勝ち抜くことはかなり厳しい。

更に、前回と違ってマスターの友人が他サーヴァントのマスターであるということも条件を厳しくしている。前回のバーサーカーのマスターのように暗示を掛けて操ることでもできないのだ。サーヴァントである以上、自らのマスターに嫌われては満足に戦うことすらできない。

『まあ、真名が分かっている分対処はしやすいから。でも、問題はバーサーカーだよ』

「ヘラクレス、でしたか。半神半人ですから対神宝具があればいいのですが……。それに、私の一撃を受けても何事もなかったかのように立ち上がってきました。あれは宝具の効果なのでしょうか」

「うーん、多分宝具だと思うわ。逸話通りなら、十二の試練に関連した宝具だと思う。たとえば、潜り抜けた試練の武勇十二通りとか、そんな感じの」

『それってかなり厳しいんじゃない？ 毒とか有った気がするし』

琴音が心配しているのは、逸話にあるヒュドラの毒のことだ。ヘラクレスがその毒を使い次々と功績を立てていったのは有名である。

「でも、狂化した状態で使えるかな？ 基本的に矢として使ってた気がするし、アーチャークラスじゃないからそこまで気にしなくてもいいんじゃないかな？ と、もうそろそろ準備しないと学校に遅れるんじゃないの？」

キャスターに言われ時計を見ると、確かにいい時間になっていた。身だしなみを整えてから来た凛と違って琴音は何もしていない。髪も爆発したままだ。慌てて洗面所に向かう琴音。

それを見ながらキャスターは考える。セイバーからすれば、その表情は何か悪だくみをしているような顔だったのだろう。少し警戒しながらキャスターを見ている。そんなことに気付くはずもなく、キャスターは自分の考えを練り上げていった。



夜、穂群原の校庭に三人の人影があつた。セイバーと士郎、そして、自らライダーと名乗つた髪の長いサーヴァント。

事の始まりは、士郎が学校の近くを通りがかつた時に何かに反応したことだ。それが魔術的反応であつたこともあり、士郎は躊躇いもなく踏み込んでいった。そして、校庭にでると、一人のサーヴァントが居たのだ。

「ふふ。よくこの結界の基点に気付きましたね。今日仕掛けたばかりですが、見直しが必要なようです」

「結界？ それはどんな効果なんだ」

「シロウ、そんなことはライダーを倒してしまえば問題はありません」

「効果が気になりますか。そうですね、魂喰いの結界ですよ」

士郎は魂喰いと聞いてもピンとこなかった。しかし、セイバーには思い当たることがあったのだろう。その顔には怒りの表情が浮かんでいる。

「シロウ、魂喰いとはその名の通り、人間の魂を魔力とする外道です。放っておいては危険です」

「な!? ……セイバー、あいつを倒すぞ」

「分かっていきます!」

士郎の声に応え、セイバーは一気に駆け出す。二回三回と剣を振るライダーを後退させていくが、対するライダーも鎖のついた短剣を使いその身への攻撃を許していない。

一際大きな一撃の後、ライダーは大きく距離を取る。その顔には、一筋の傷がついていた。

「不可視の剣……厄介ですね。しかし、対処法はあります」

そう言ったライダーは、先ほどの短剣をセイバーではなく士郎の方へ投擲する。士郎の方へ投げられるとは思ってもみなかったセイバーはそれを防ぐために移動する。その隙を狙い今度はセイバーに向けて短剣が投擲される。

ギリギリで士郎への攻撃を防ぎ切ったセイバーは無理をして避けるが、完全に体勢が崩れてしまったところを狙ったライダーの蹴りが命中する。

「セイバー!!」

「サーヴァントの心配をしている暇はありませんよ」

セイバーを蹴るとはほぼ同時に投擲された短剣が士郎に迫る。完全に気を取られていた士郎に自らの魔術を発動させる余裕は無かった。来るであろう痛みに備えるが、それは一向に來ない。

おそるおそる士郎が目を開けると、目の前に銀色の壁があった。

『まったく、士郎は危なっかしいんだよ。もし私が居なかつたら死んでたよ?』

そう言うのは、この銀色の壁を作り上げた琴音。士郎は知らないが、この銀色の壁は降霊科随一の天才と呼ばれたケイネス・エルメロイ・アーチボルトが使った^{ヴォールメン・ハイドラグラム}月 靈 髓 液と呼ばれた礼装だ。琴音がこれを使うことが出来るのは、ケイネスと同じ風・水の属性であるということと、衛宮切嗣が遺していた資料のおかげだ。

水銀によって作られた壁は、至近距離でのクレイモア地雷や自動小銃ですら防ぐほどの速さと硬さを誇っているが、琴音はそこまでの練度に至っていないので、角度をつけ短剣を逸らすように使った。

そして、琴音がいるということはそのサーヴァントであるキャスターもいるということである。

「^風Ventus, ^{よ、切}conci^りderunt. ^めO ^火Ignis, ^{よ、焼}urere.」

風と火の魔術により、大きく後退を余儀なくされるライダー。ある程度距離が離れたところで琴音の展開した月 靈 髓 液も解除され、士郎はようやく辺りを見回すことが

出来た。

キャスターの魔術によって地面は大きく抉れ焦げたような跡もある。蹴り飛ばされたセイバーも既に戦線に復帰し、キャスターと共にライダーを追い詰めていた。

「セイバーさん！ 行くよ！ Ventus^風, flare^吹nt^飛!」
「行きます！」

キャスターが魔術を使って体勢を崩したところにセイバーの一撃が迫る。しかし、それが当たるとは無かった。

セイバーの一撃が当たると直前にライダーは忽然と姿を消したのだ。霊体化ではない。完全にこの場から消え去っていた。

『令呪を使ったのかな。そうじゃないと説明できないしね。さ、士郎帰るよ。相手に令呪を一面使わせただけでも十分な戦果だよ』

「あ、ああ。ありがとうな、琴音」

『気にしないで。今は共闘関係なんだから。リクくん、お願い』

「りょーかいつと。transitus^転移

例の如くキャスターの転移魔術によって帰宅する士郎と琴音。

そして、この戦闘を影で見いていたものに誰一人気づくことは無かった。

Phase. 5

『さて、士郎？ 申し開きはある？』

家に帰ってきて琴音はすぐに士郎を正座させ、問い詰める。家を出る前に決して一人ではサーヴァントと戦わないようにと言っていたのだが、案の定士郎はセイバーが居るとはいえ戦い始めてしまった。これでは折角協力体制を敷いているというのに意味がない。

そして、魔力の高鳴りに気づいて行ってみればセイバーは蹴り飛ばされ士郎は絶体絶命。怒るのも無理はないだろう。

「あの一、琴音？ もう許してあげたら？」

『ダメ。凜ちゃん、士郎の突撃癖はそんな簡単に治るものじゃないの。いい機会だから矯正しちゃおうか』

「誰が突撃癖だよ!？」

『士郎よ。ああ、もう！ イライラするわね！ 自覚がないのがこれほど面倒くさいとは思わなかったわ……』

かれこれ一時間このようなやり取りが繰り返されている。いつ琴音が爆発するかビクビクしている凜と正座している士郎とセイバー。そして、それを面白そうに眺めるキャスターという図が出来上がっている。ちなみにアーチャーは屋敷の屋根で警戒に当たっている。

それでも見ているのは流石に飽きたのかキャスターが口をだす。

「ねえ、琴音ちゃん。ボクが幻術でも見せて強制的に叩き込もうか？」

『それでもいいかと思えてきちゃう。でも言っちゃったら意味ないよ?』

不穏な雰囲気を感じ取ったのか士郎は土下座に移行する。

「悪かった。次からは気を付けるよ」

『一応信じてあげる。でも次そんなことしたら本当に幻術コースだからね』

「ああ。もうしないさ」

「ようやく次に進めるわね。士郎、相手は自分をライダーって言ったのよね?」

士郎への説教が終わったので凜が話を進める。その内容はライダーについて。凜の方ではサーヴァントにもマスターにも出会わなかったのだから特に話すことはないのだが、協力関係にある今は情報の共有が重要だ。それに結界と思わしきものが仕掛けられていたというのは見逃すことができない。

「ああ。自分でライダーだって言ってた。それに結界は魂食いのためのものだって言っ

てたぞ」

「魔術を使えるってことは厄介ね。それに結界を使えるほどっていうことは少なくとも近代の英霊ではなさそうね。キャスター、あなたの見立ては？」

「そう外れてはないと思うよ。あの術式はギリシア式だからそっち方面だと思う。あの結界は基点を全部壊さないといけないタイプだから明日あたりにも学校に行つて壊した方がいいかもね」

『そこまで分かるの？』

「それでもキャスターだからね」

そういうキャスターの顔は自信に満ちている。自身の分析に絶対の自信を持つているのだろう。しかし、セイバーにはその顔が違つて見えた。自らのスキルである直感が何か違つと訴えかけている。漠然としたものだが、それが気になった。

「キャスター、あなたはもしかして真名にも予想がついていないのですか？」

「うん。でも言わない。もしかしたらそれこそが向こうの狙いかもしれないし、そう思つて対策立ててたら真逆でこつちがピンチなんてのは嫌だからね。確定するまで真名は考えなくてもいいと思うよ」

『まあ、令呪一画使うくらいだしね。それくらい警戒してもいいのかな』

キャスターの考えに同意する琴音。言葉は発しないが、凜も同じ考えのようだ。

確かにあのタイミングで令呪を使わなければライダーは重傷を負っていただろう。しかし、それが消滅にまで繋がるのかと言われれば果たしてそうであったのだろうか。

セイバーは見た目に傷は無くとも、数十メートル蹴り飛ばされた後である。流石に全開時と同じ攻撃は出来ていなかった。琴音が見たステータス上はライダーの敏捷値はA。傷を負っていても地形を利用すれば十分逃げられる。

『ま、とりあえずそのことはあとにして、あの結界を消さなきゃいけないんだよね』
「当たり前だ。魂喰いなんて許されるわけがない」

「え？ 魂喰いって悪いことなの？」

士郎が魂喰いは許されないと行って、それに驚いたキャスター。それが思わず声に出していたのかその場に居る琴音以外から強い視線を浴びる。

「そんなの当然だろ！ 自分だけのために人を犠牲にするなんて許されていいわけあるかー！」

「人を犠牲にしない人なんていないよ。それに誰が魂喰いされようと君には関係ないでしょ？ 魔力が足りないのなら何処から取ってくるのは当たり前だよ。見知らぬ人がどうなるかと知ったことじゃない。ボクはボクの大切な人を守ればそれでいいんだから」

「違うッ！ そんな犠牲の上に守られたって誰も嬉しくなんかない！ 人を犠牲にして

それがいいはずはないんだ！」

「何を熱くなってるの？ それは君の主観でしょ？ 君とボクは違う。生きていた時代も、考え方も、環境も、何から何まで違う。それに、『犠牲の上に守られたって誰も嬉しくないんじゃない』？ それがどうしたの？ 誰かを犠牲にしなくちゃ誰も守れないよ」

憤怒の表情を浮かべる土郎に、キャスターは更に言葉を重ねていく。

「人を犠牲にしたくないんだったら、何で君はここにいるの？ 世界には聖杯戦争よりも多くの人が犠牲になる争いはいくつも起こってる。だったら何でそれを止めようとしらないんだ？ こんな平和な日本にいて、君は何をしてるんだ？」

「それは……」

「見知らぬ人が犠牲にされるのが許せないんだったら、今すぐ救って見せなよ。こうしている間にも何人死んだんだろうね。それと変わらないさ。ただその数字上に何人か追加されるだけのことだよ」

「お前、本当に人間なのか!? 英霊ってのは人を救ったからなるんだろ！ だったら——」

「黙れ」

今までの雰囲気が一変し、辺りは濃密な殺気に包まれた。ただ黙っていたセイバーも瞬間的に臨戦態勢に入り、見張りをしていたアーチャーまでが姿を現した。それほど

前回よりステータスが下がっているセイバーではマスターである士郎を逃がすのが精一杯だろう。

「……………そう。ボクも彼女も人間。ああ、そうだね、ソラ。初めからそうすれば良かったんだ」

誰かと会話しているキヤスター。そして同時に魔術陣が浮かび上がる。

「transitus」

キヤスターの十八番である転移魔術。それを使ってキヤスターと琴音はどこかに消えていった。

残された士郎たちは呆然としていた。いきなり激怒し、そして何処かへ行ってしまうたキヤスター。琴音も連れて行ってしまった。凜はおそらくもうこちらと協力することとは無いだろうと思った。むしろ、完全に敵対してくるだろう。

だが、いつまでも呆けているわけにはいかない。キヤスターが何処に向かったのかは知らないが、敵に回ったと考えるのが妥当だ。ならば、対策を考えないわけにはいかない。琴音はリクと呼んでいたが恐らく真名ではない。それはアーチャーに確認済みだ。最も、アーチャーは記憶喪失らしいのだが。

「士郎、いつまでもそうしていないで頭を切り替えなさい。恐らくこれでキヤスターは敵に回るわよ」

「……………あ、ああ」

「もういいわ。セイバー、何か知ってること無い？」

「キャスターは前回の聖杯戦争にも参加していました。真名は分かりませんでした。が、宝具なら分かります」

「宝具は分かるのに真名が分からないの？」

「ええ。何故だかは分かりませんが。彼の宝具は3つでした。『魂喰い』、デユオ・タントゥム・ウインクラ、『二人だけの絆』、ヴェン・デイダー、『死を齎す災厄の剣』です。どれも厄介なものばかりでした。特に『ヴェン・デイダー死を齎す災厄の剣』は危険です」

凜は少し考え込む。その場にいたアーチャーが微妙な顔をしているのだが、それには誰も気づいていない。やがて、考えが纏まったのか口を開く。

「取り敢えずキャスターは保留にするしかないのが現状ね。どこに行ったのか分からないんだし。…………アーチャー？ どうしたのよ」

アーチャーが気になったのか凜が声を掛ける。

「ん？ ああ、セイバー、一ついいか？」

「何ですか、アーチャー」

「その宝具を使った時キャスターは何か言ってなかったかね？」

「確か、『人の負の願いの結晶』みたいなことを…………」

「そうか。凜。キャスターの真名が分かったぞ」



キャスターが転移してきたのは、10年前寢床としていた柳洞寺だった。

「ごめんね、琴音ちゃん。こんなあ演技をさせちゃつて。取り敢えず探知できない様に

眠ってもらうね。

A 彼bonus のnoctis 者somno にin 安persona かsua ら」

琴音に魔術を掛け、強制的に眠らせたキャスターは次にこの柳洞寺を工房とすべく細

工を始める。

「ん、まずは僧たちが邪魔だな。

Qui 彼mi 者gravi たte ちre をgione 我illius が……

Sed 彼entem のin 者memoria たme にius 偽……

キャスターが魔術を使うと、柳洞寺で生活している人はフラフラと夢遊病のように正門から出て行く。境内に自分と琴音以外がいなくなったのを確認すると、キャスターは

穏やかな寝顔の琴音に声を掛け部屋を出て行くキャスター。その顔は、先ほどまでとは打って変わり穏やかなものだった。

『リク、これからどうする?』

「そうだね。アイツは最後にしようか。聖杯がどんなものなのか見せつけてね。差し当たっては、アーチャーかな。今頃はボクの真名も分かっているだろうし」

『そうかなあ? あくまで彼が見たのはそういうことがあったという記録でしょ?』

「いいや、覚えてるよ。彼は『正義の味方』だからね……」

そう言ったキャスターの顔は皮肉の笑みを浮かべていた。



「何とか上手くいったようじゃな。令呪一画分の価値があったというものよ」

「そうですね。お爺様、次はどうしましょうか」

「うむ。そろそろいつもの日課に言ってくるがよい」

「では、明日からそうします。おやすみなさい、お爺様」

Phase. 6

一夜明け、キャスターの真名を知った凜は対策法を考えていた。既に放課後となり、屋上で協力者である土郎が来るのを待っている。目的は勿論この学園に刻まれている魔術陣を消すことではあるが、それについてはさほど心配はしていない。凜だけでは消すことは出来ないが、薄めることは出来る。そうして結界の完成を遅らせている間にライダーを討伐してしまえばいいのだ。

だが、それ以上に厄介なのは昨日知ったキャスターのことだ。

魔術師でありながら魔術を否定したキャスターにとってこの聖杯戦争自体が忌み嫌うものである可能性が高い。そして、マスターである魔術師も同様だろう。

アーチャーから聞いたキャスターの生前は過酷で残酷なものだったが、今を生きる凜たちからすれば冷たい言い方かもしれないが、関係は無い。ただ、魔術を否定したキャスターは当然のように魔術を無効化させてくるだろう。世界を相手取ったらしいので令呪ですら無効化してくる可能性は否定できない。

「ねえ、アーチャー。もうちょっと詳しくキャスターのこと知りたいんだけど、何か無い

？」

「私とて全てを知っているわけではない。それに、私の知っていることは昨夜全て話した。攻略法でも考えているのだろうが、おそらく無駄に終わる。セイバーの対魔力で正面突破が賢明だろう」

姿は見えないがアーチャーは凜に昨夜とほぼ同じ内容を告げた。

アーチャーが言い終わるのとはほぼ同時に屋上に通じる扉が開け放たれる。どうやら生徒会の手伝いをしていたらしい士郎が到着した。

ようやく仕事が始められると凜が立ち上がる。

士郎は結界の基点などを感知するのが得意なようで、次々に魔術陣のある場所を見つけ、凜がそれに対処していく。校内の至る所に仕掛けられていたため、全てを終わらせ帰路についたのは日が沈んだ後だった。

士郎の家には既に明かりが点っていた。と、そこで士郎が何かを思い出したかのよう
に慌てだした。

一緒に歩いてきた凜を置いて士郎は駆け足で家にかかる。

士郎が忘れていたこと、それは、桜のことだった。

◆

キャスターの拠点と化した柳洞寺はその姿を変えていた。

莊厳であつた本殿は跡形もなく消え去り、決して大きくは無い一軒の小屋になつてい
た。その中には琴音の姿があつた。キャスターの魔術によつて眠りについた琴音の周
囲には彼女を守るように幾重にも巡らされた結界があり、何者の侵入も防いでいた。

「既に種は芽を出したね。もうそろそろ始めようか、ソラ」

『いいんじゃない? なるべく早めの方がいいと思うよ。凜っていう人がここに来ちゃ
う前にしたほうがいいと私は思うんだけど?』

「そうだね。凜ちゃんが出来たら面倒なことになりそうだもんね。

Invoc^発ation^動, team^魔magic^力absor^取ption^陣,
Range: Tota^全area^域」

キャスターが敷設した魔術陣が一斉にその役割を果たし始め、柳洞寺に魔力を集め始
める。その範囲は冬木市全域に及び、全ての生物から魔力を吸い上げる。ひとつひとつ
から吸い上げる量は微量ではあるがその範囲の大きさに以つてカバーし、効率的に魔力
を集めていく。

今は気づかれていなくとも数日後にはサーヴァントに知られてしまいうだろうが、それまでには十二分に魔力は集まるだろう。マスターに限って言えば気づかれることはほぼない。吸い上げる量が微量すぎて人間の魔術師の持つ対魔力程度で十分に防ぐことが出来るからだ。もしかしたらその反応で気づく者もいるかもしれないが、キャスターが見た限りでは自分のマスターである琴音か、外来のマスターである金髪の男性くらいだろう。

一般人に与える影響もほとんどない。しいて言えば疲れやすくなる程度のものだ。そんなものは誰しも異常だとは気付かない。

だが、不安要素は先に潰しておくべきだとキャスターは考え、実力の分からない金髪の男性を今夜中に倒す決断をした。工房がどこにあるのかも自身の放った使い魔によつて判明している。どのサーヴァントなのか分からないのが少々問題ではあるが、自身の天敵である三騎士のうちセイバーとアーチャーではないのは分かっている。

召喚されてからすぐに放った使い魔の情報をまとめたところ、おそらくアサシン。そもそもキャスターにとってマスターが判明していないのはアサシンとランサーだけであり、ランサーは同時刻に別の所に居て、尚且つこの金髪のマスターは虚空に向かつて何かを呟いていた。それが偽装であればランサー、そうでなければアサシン、と二択にまで絞れている。

夜になるのを待つて琴音の周りに改めて結界を張り、キャスターは出かけていった。



キャスターから金髪の男性と呼ばれた人物は、時計塔に所属しているもののみならず、呪が浮かんだだけのマスターだ。初めてこの令呪を見た男性はすぐに聖杯戦争であると理解した。彼は特に目標を定めずに「狭く深く」ではなく「広く浅く」魔術を探求している異端な魔術師であり、その過程で聖杯戦争のことも僅かながら知っていた。

結局、これも探究の一步だと考えサーヴァントを召喚するが、召喚順で言えば最後。残っていたクラスであるアサシンを彼は召喚した。しかし、通例のハサンではなく何故か異なったサーヴァントが召喚されてしまったが、彼はアサシンⅡハサンが普通であることなど知らないので別段不思議には思わなかった。

ふと、彼は昨日の一戦を思い出し、アサシンに問い掛けてみる。

「なあ、アサシン。聖杯で叶えたい願いつてあるのか？ 昨日の戦いを見る限り相当強

「お願いを持つてるんだろ？ サーヴァントってやつは」

「私に特に望みは無い。まあ、剣の英霊であるセイバーとは一戦交えてみたいがな」

「へー。俺と同じか。俺は普通の魔術師じゃないからさ、根源だとかあんまし興味ないんだよね。たださ、折角参加できるチャンスなんだし、あのキャスターの魔術つてのをもつと見てみたいかな」

『じゃあ、見てみる？』

ホテルの一室に居た彼とアサシンに声がかかる。妙にエコーが掛かっているのか出所がはっきりしない。それでも二人はこれがサーヴァントの仕業であると分かった。

「マスター、ここから出るぞ。ここでは私の剣が振るえぬ」

「ああ。分かってる」

二人は窓ガラスを破り空中へと身を躍らせる。地上30mはサーヴァントからすれば大したことは無いが人間である彼は違う。身体が自由落下を始める前に魔術を起動する。

「Уменьшить 力 тяжесть, 軽減 Сознания 俺 Ветра! は飛」

二つの魔術を行使し、彼はモモンガのように滑空し広い公園へとゆるやかに着地した。彼にとつては久しぶりの緊迫した事態に少しの恐怖心とそれを上回る好奇心が疼く。自分がこうしている間にも敵サーヴァントは着実に距離を詰めてきているのが分

かる。人間では到底及ばない魔力の塊が一直線に向かつて来ているのだから。既にアサシンも剣を抜き臨戦態勢に入っている。

身体をすっぽり覆い隠すローブを纏い、それは現れた。

濡れ羽色の髪に黒い目、長髪で欧米人に見える顔だち。手には何も持っていないが、それでも威圧感はとてつもない。自らのサーヴァントであるアサシンと対面した時よりも遥かに大きいプレツシヤーに彼は思わず息を呑む。

「その居出立ち、キャスターで相違ないか」

「そういうお前はアサシンだな。セイバーは既に知っている。オレが知らないのはアサシンだけだからな」

「然り。アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」

「架空の英霊、か。まあいいさ。相手が剣士ならオレも剣を使おう」

そう言つてキャスターは虚空から一本の剣を取り出す。柄に近い部分が二又になっているその剣は、キャスターが魔力を込めると一瞬蒼く輝いた。そして、準備は完了とばかりに剣を構える。

アサシンのマスターである彼は自身のサーヴァントよりもキャスターを注視している。先刻アサシンに言つたように己の目的を果たすためだ。彼にはもはや自身のサーヴァントを気に掛けるつもりはなかった。それを承知とばかりにアサシンもマスター

の存在を意識から外しキャスターに意識を向ける。

「つと、こじや巻き込まれちまう。もうちつと離れねえと……」

アサシンのマスターが十分以上に離れたところで、戦いは始まった。

初めに仕掛けたのはキャスターだ。身体の遠心力を利用した横風の一撃を放つ。アサシンはその一撃を巧みにいなすと、滑らかな円の軌道で反撃をする。それを受けるためにキャスターはアサシンの長刀の斬線に自らの剣を合わせて防ぐが、そこから先の反撃には出られなかった。

アサシンの剣は絶え間なくキャスターに襲い掛かり反撃の隙を与えない。何度か反撃を試みるも簡単にいなされすぐに反撃されてしまっていた。アサシンを中心とした竜巻のような剣筋にキャスターは何とか防御しているだけであり、このままでは敗北は免れないだろう。そう悟ったキャスターは防ぐのと同時に足元で爆発を起こしその反動で大きく距離を取る。

「……ッ、さすがにキツイな」

「中々どうして、キャスターという割には剣の扱いが達者ではないか」

「言ってくれる……まあいい。次からは魔術込みで行く！」

そう言つてキャスターは先ほどと同じように足元の爆発を利用し一気にアサシンの懐に入り、初めと同じように剣を横風に振るう。当然、アサシンはいなそうとするが、そ

ここからは先ほどまでとは違った。

いなそうとしたアサシンの長刀を避けるように接触部分が水となりすり抜けてしまったのだ。しかし、ギリギリでそれを察知したアサシンは辛うじてその一撃を喰らわずに回避した。

アサシンがキャスターの剣を見ると、先ほどの水となった部分は既に元の剣の形に戻っていた。だが、剣全体が先ほどまでとは違って薄蒼く光っている。

「今のを避けるか」

「ギリギリだったがな。それにしても水、か。まさか刀で斬りきれないものとは。ならば、避けられない技を出すまでのこと」

アサシンはここに至って初めて刀を構えた。肩の高さまで持ち上げられた刀身が月の光を反射している。

「行くぞ。——燕返し！」

アサシンが振りぬいたのは一度のみ。しかし、防ぐべき剣筋は3つ。多重キシユア・ゼルレツチ次元屈折現象と呼ばれる魔術にあらざして魔法に届く技であるそれをキャスターは防ぎきれなかった。キャスターが防ぐことが出来たのは2つで、残りの1つによつて右肩から袈裟懸けに斬られた。

辛うじて首への一撃は避けたものの放っておけばいずれ致命傷になるだろう。しか

し、アサシンはそこへ更なる追撃をかける。その攻撃に対しキャスターはフラフラになりながらも致命傷だけは避けるように防いでいくが徐々に防ぎきれなくなっていく。

「ハア……ハア………」

「よくやった。だが、これで終いだ」

アサシンが最後の一撃を繰り出そうとしたところで、妙な声が聞こえた。

『情けないわねー。折角アンタに一番上げたんだけど？ まあいいわ。私が出る』

嫌な予感のしたアサシンは全速力で後退する。そのほんの僅かの後、先ほどまでアサシンが立っていた場所に次々と剣が突き刺さっていく。その数合計22。その衝撃による土煙が晴れたとき、キャスターが居た場所には全く違う人物が立っていた。

背も低くなり、微妙な変化ではあるが髪の色も変わった。そして、最も異なるのは性別。成長した男性の姿から、少女と呼べる姿に変わっていた。

「あーあー、こんなに傷付けちゃって。Total 完 recuperatio. 回 復」

「ふ、面白い。——行くぞ」

目の前で敵の傷が回復したにも関わらずアサシンは気落ちすることなく再び攻めはじめる。しかし、姿が変わったキャスターは消えるように姿を消した。ここから離脱したわけではないのはアサシンに知覚できた。だが、居場所が判然としない。

「投影、劍群20本」
クリエイト

声が聞こえ振り向くと同時にアサシンは剣を振るう。既にキャスターの剣は放たれておりアサシンの身を貫こうとしていたのだ。その全てを弾き、再びアサシンはキャスターを視界に入れる。キャスターは先ほどまでは持つていなかった2mはあろうかという杖を持つていた。その先端につけられた二つのリングが光を放っている。

「Exspectaverat, magicae bullet release!」
待機終了、魔法弾解放

キャスターの杖から次々に光が迸り魔弾がアサシンに迫る。時折見当はずれな場所に飛んでいくが、自らに迫ってくるそれを躲し、時には防ぎながらアサシンはキャスターに迫る。しかし絶え間なく襲い掛かってくる魔弾にアサシンも無傷とはいかず所々掠り傷を負ってはいるが、最終的にアサシンは魔弾を耐えきった。

次の魔術が放たれるまでの僅かな時間でアサシンは再び自らの技を放とうとする。

「秘劍——燕返——ッ」

しかし、剣は振るえなかった。それどころか、アサシンは自分の意思で身体を動かすことが出来なかった。正対するキャスターを見れば笑みを浮かべている。

「何をした」

「さっきの魔弾、おかしいと思わなかった?」

「あの見当はずれな弾のこと、か。アレを使ったのか?」

「ええ。わざと外した魔弾で地に穴を開け、それを結ぶ形で魔力で線を引いて魔術陣を作り上げたの。コジロウも強かったわ。まさかほんの掠り傷で私の目の前まで来るなんて思わなかったわよ。セイバーでさえここまでの剣技はないでしょうね」

「セイバーの剣筋を見る限りあ奴でもこれくらいのこととは出来そうだがな」

「見たのね。でもコジロウとセイバーの剣技は比べるものではないわ。セイバーの剣は軍を相手にしたときに最も力が発揮されるけど、コジロウの剣は一对一でしょ？ 悪く言えば大雑把なセイバーの剣じゃコジロウには勝てないわよ」

自分の感じたことそのままに話すキャスターはアサシンを褒め称える。その評価を素直に受け入れられないのかアサシンは苦笑いだ。

「本当ならばセイバーと戦ってみたかったものだが……まあ、敗北したのは私が至らなかっただけのこと。さあ、一思いにやってくれ」

「分かった。この街に響くほど盛大に送ってあげる。」

Exitium^{彼に安ら} pax^ら hominibus^{ぎの終}.
Copia^天 Naturae^を cucurrit^奔 caelo^る.

キャスターの魔力によって編まれた緻密な魔術陣がアサシンを中心として敷設され、輝きを放つ。一つ一つの文字が生きているかのように動き、発動される魔術にとつて正しい配置へと変わっていく。

そして、キャスターは別れを告げた。

「さようなら、コジロウ。——『Ascension^聖 of Sanctorem^{昇天}』」

最後の一節を唱えるのと同時に世界は色と音を無くした。だが、それも一瞬のこと。すぐに世界は元通りになりアサシンが居た場所には大きなクレーターが残るだけだった。あまりの熱量に大地が蒸発してしまつたかのように蒸気が立ち込めている。

その魔術による一般人への被害こそ無かつたものの、莫大な光量は遠く離れた士郎の家にもまで届いていた。

そして、アサシンのマスターである彼——イヴァン——はその魔術に使われた技術に感動し、キャスターの接近に気付くことは無かつた。

だから彼は気付かなかつた。自身の周りに影が蠢いていることに。

「いただきまーす」

そんな少年のような無邪気な声を最期に、彼はその一生を終えた。

Phase. 7

街であつただろうその場所は瓦礫の山となつている。黒い太陽の光が降り注ぎ、荘嚴な教会はその原形を留めず、街路樹は焼けて炭になつている。そして、そこに住んでいたであろうヒトの姿はどこにも見当たらなかつた。

そんな地獄のような光景の中、黒いローブを羽織り、何の感情も浮かんでいない顔をしている人物の前に、鮮やかな赤色が現れた。

「あなたが正義の味方でいいのかな？」

「……………」

自意識が奪われているのか、赤色はその問い掛けに答える様子を見せない。

『『星』からの刺客、掃除屋つてどこかな。さあ、ボクを殺して見せてよ!!』

手を振り上げるといふ動作に連動して様々な色の魔弾が放たれる。そのどれもが過剰に魔力が込められており着弾した場所は深く抉れている。そんな必殺ともいえる魔弾を赤色は手に持つ剣で弾き、いなし、斬る。絨毯爆撃のような魔弾を前にしても赤色は眉一つ動かさない。ただただ機械的に前に進んでいる。

「へえ。この程度じゃ太刀打ちできないのね。じゃあ次はこれでどう?」

口調の変わった黒いローブの人物は杖を取り出す。身長よりも遥かに大きいその杖を振るうと、先ほどよりも大きく、数も多い魔弾が射出される。それでも赤色は動じない。何かを呟くと、大きな花卉が出現しその全てを防いだ。

黒いローブの人物は手を大地に着けた。その手を中心として魔術陣が構築され、巨大な腕が創られる。その腕は大きさからは考えられないほどの速度で赤色に迫ったが、赤色が新たに手にした剣で切り裂かれてしまう。

「私でもボクでもこの程度の魔術じゃ通用しないみたいだな。んじゃ、オレが行きますか」

再び容姿の変わった黒いローブの人物は一本の剣を握る。そこに魔術を使い特性を付加させると一気に加速し赤色の懐に迫る。

上下左右、魔術を駆使した背後からの一撃でさえ赤色は余裕を持って対処している。その剣筋に天才としてのモノは無いが、それ故に徹底的に合理化された取り回しがそこにはあった。剣の特性を利用した一撃ですら赤色にとつては隙としかならず決定的な攻め手を欠いている。

「オレでも無理なのか!? あー、頼んだ」

『任せて。ボクたちが仕留めてみせるさ』

単一のものではない声が聞こえたときまたも黒いローブの人物は姿を変えていた。今まで見てきた中のどれでもない、白銀の髪色に深紅の眼。その身体から感じられるのは『悪』という不確かで不明瞭な概念。

『Αποκλεισμού? | ελεργοπολημ? να, Δελτ? ο τ? π
ο υ ε λ? γ χ ο υ.

ε π? κ λ η σ η, Γ? ν ν η σ η τ ο υ τ ο ? γ λ ο Δ λ σ κ ο π? τ
η ρ ο』

黒いローブの人物の内側から黒い光が溢れだす。明るさとは対極にある黒という色でありながら、明るい認識できるその光は辺り一帯を包み込んでゆく。

その光が消えると、周囲は不毛の大地と化していた。瓦礫となっていた教会も、炭と化した街路樹も、人が暮らしていたという痕跡も跡形も無かった。

そんな中、赤色は掠り傷一つ負っておらず。

そして、天上には黒い太陽が二つ、姿を現していた。



飛び起きる、とは正にこの事だろう。

昨夜遅くに発生した謎の光についての調査をし、凜が衛宮邸に戻ってきたのは約4時間前。帰るなり泥のように眠りに就いた凜は夢を見て飛び起きたのだった。

「あー、もしかしてあれってアーチャーの過去？　で、相手はあのキャスターってところ？」

先ほどまで見ていた夢を思い返す。どの街かは分からないが、あれがアーチャーの話していたキャスターの過去とも関係があることは分かる。夢であるが故にその場の匂いや温度などは感じなかったが、あれは人間が感じていい類のものではない。それははっきりと分かる。

時計を見ると、夢の所為でいつもよりも早めに起きてしまったと分かったが、何もやることが思い付かない。通常状態の凜であればキャスターへの対策を考えるなり、夢について考えるなりするのだろうが、凜は朝に弱い。おまけに疲れて眠ってみれば地獄のような風景を見せられる夢。思考回路停止である。

「うん。もう一回寝よう」

「何言ってるんだよ、遠坂。もう着替えないと間に合わないぞ？」

「あれ？　もうそんな時間？　だってまだ5時じゃ……」

目を擦って時計を見る。どう見ても時計の針は5時を指している。

「ほら、5時じゃない。士郎こそ何言ってるのよ……」

「その時計、ずれてるぞ。ほら」

そう言つて士郎は自分の腕時計を見せる。その時計では8時。遅刻ギリギリの時間である。

そして、微妙に回転の遅い凜の頭はそれを理解し。

「……………今日は学校休むわ」

思考放棄
仮病という選択をした。



夜になって元々閑静な地である柳洞寺は更に静けさを増していた。

キャストが創り上げた陣地は冬木中から集められた魔力を貯蔵し、その違和感によつて動物すら寄り付かなくなっている。虫一匹見当たらないその陣地の中は冬とは思えないほど暖かく、活動に適度な気温になっていた。

キャスターはその陣地の中で魔術陣の調整をしていた。

「えーと、これがこつちで、それがそつち？」

『違う違う。あれがあつち』

現在展開されている魔術陣の構成を弄っているのか、文字が動いている。その文字も一定の言語で書かれているのではなく、頻繁に使用しているラテン語から、この土地の日本語、更にはルーンなども含まれている。

「あーもう、面倒くさい！　そもそもボクは術式を弄るのは得意じゃないんだよ……」

『そんなこと言ってもどうにもならないわよ。ほら、続けた続けた』

「ぐ………幻想種を縛る構成式は複雑すぎるんだよ」

愚痴をこぼしながらも手は止めない。これから先の戦いにとって重要な魔術となるであろうそれを作り上げることは容易なものではないが、それが無ければ目的は達成できない。

この陣地に貯蔵されている魔力を使えば聖杯戦争を終結させることはキャスターにとって容易なことだ。全魔力を使い、冬木市一帯を焼き尽くしてしまえばいいのだから。対魔力持ちには通用しなくてもマスターを殺してしまえばサーヴァントは現界できなくなり敗退するのだ。しかし、それではキャスターの目的は達成できない。そのため回りくどい方法を取るしかないのだ。

今こうしているのもその『回りくどい方法』の一つだ。ライダーの駆る幻想種を縛り、自らの勝利を確実にするための布石を打つ。キャスターという最弱のクラスに当てはめられた以上、出来ることは全てやらねばならない。

「だからって、もうやだ……………」

『泣き言言わないの。とうかそれ、嘘でしょ?』

「何だ、分かってたの? 確かにやだっていうのは嘘だけだよ。でもさ、面倒なのは本当だよ。こんなことしなくてもあれぐらいだったら正面から潰せると思うんだけど?」

『令呪使われたらどうすんのよ。リクが知ってる情報は過去のものでしょ? 今とは差異があるかもしれないじゃない。だったら準備は十全にするべき』

何処か不貞腐れたような雰囲気でキャスターは作業を再開する。延々と文字を動かして続けるその作業は明け方まで続いた。



翌日。二日連続で学校を休んだ凜は琴音の部屋を訪れていた。傍らにはセイバーの

姿もある。

「リン、なぜここを調べようと思ったのですか」

「昨日一日ずつと考えてたのよ。琴音はあのキャスターを知っていたみたいなの。それに、あの子が魔術師だなんて私は気付かなかった。それは有り得ないのよ」

「何故ですか」

「士郎みたいな魔術師見習いみたいなのとは違って琴音はきちんと魔術を使っていたし、時計塔に行っても通用するくらい操作に長けている。そこまでの魔術師だったら無意識に魔力を発しているから私にも分かるはず。でも聖杯戦争が始まるまで気づかなかった。それに、セイバーはあのキャスターに十年前の聖杯戦争でも会っているんじゃない?」

「ええ。私かとどめを刺しました」

「琴音はね、引つ込み思案であんまり自分というものを前面に出さない子だったの。でも10年前、あの火災があつて、声を失つてからは逆になった。言い方は悪いけど、普通だったら一層引つ込み思案になつてもおかしくないのよ。でもそうじゃなかった。むしろ自分に自信がついたみたいだった。それが魔術のおかげだとしたら?」

「10年前にキャスターと関わりがあつたと?」

「ええ。琴音の家は何代遡つても魔術師の家系ではないわ。たまたま魔術回路を持つて

生まれる人もいるけど、そういう人は大抵魔術には関われない。一般人に魔術を明かすことは禁じられているようなものだから。でも、キャスターという存在は違う。おそらくキャスターは魔術回路を持っていた琴音に接触し、何かを渡しているはず……」

セイバーと会話しながら部屋を調べる凜。魔術師の私室なので何かトラップがあるかもしれないと警戒しているのだが、一向にその気配はしない。洋服箆である物の大きさに少しクラッと来たが、それは魔術とは何ら関係のないものだ。

残るは本棚。一番可能性が高いゆえに最後まで残っていた場所だ。魔術的なトラップがある可能性も一番高い。凜は一通り魔術の探查をして安全を確かめる。

そして何も無いのを確認して一冊の本を抜き出した。

黒く焦げているような装丁をしているその本に凜は見覚えがあった。10年前、あの火災の後初めて会った琴音がずっと胸に抱いていた本だ。当時は家族のアルバムか何かだろうと思っていたのだが、今となってはその本が最も怪しい。今朝士郎に聞いたところ、たまにその本をどこかに持ち出しているらしいのだ。

慎重に表紙を捲る。

中身は白紙だった。しかし、確かに魔力は感じられる。恐らくキーワードが必要なのだろう。魔術師の描いた魔術書にはそういう仕掛けの物が多い。

琴音が使っていたラテン語で、「開け」や「現れる」などを言ってみたが変化はない。

そのほかにも、日本語、英語、ドイツ語と試してみたのだがどれも失敗。

「既に使われていない言語ではないでしょうか」

「それなら私にはどうしようもないわ。ラテン語かルーンくらいしか知らないもの。セイバーは他に何かアイデアは無い？」

「そうですね……逆に『消えろ』とかはどうでしょうか」

「押してダメなら引いてみるってことね。やってみるわ」

先ほどと同じように様々な言語で試す凜。「閉じろ」「消えろ」など真逆の言葉を言うも反応は無い。諦めかけたその時、手に持った本に文字が現れ始めた。何が正しかったのかは分からないが、起動されたのが久しぶりだったようで言葉の認識に時間がかかったようだ。

「えーと、『この魔導書は魔法を習得するためのものである。なお、初めに読める箇所は2頁であり、それ以降は個人の力量・習得度合によって文章が浮かび上がる』『手の甲に描かれた模様は魔法使いであることを表し、隠しておかねばいけない』……………決まりね。10年前、琴音はキャスターから魔術を教わり、魔術師になった。偶然召喚したのか、キャスターが前の召喚者を殺して琴音に乗り換えたのかは分からないけど、少なくともキャスターと繋がりがあつたのは分かったわ」

「10年前……………どうりでキャスターのマスターが最後まで分からなかったわけだ。

恐らくコトネは聖杯戦争自体を知らなかったのでしょう」

「そうでしょうね。この本、本当に基礎の基礎から書いてあるし、これを教本として魔術師になったみたいね。セイバー今日はありがとうね。私はもう少しこの本を調べてみるわ」

本を持つて凜は自室に向かう。本の内容はチラッと目を通したただけだが、ここに書いてある情報量は遠坂の所蔵する魔術書に匹敵するか、それを超えているだろう。どこまで読み進められるかは分からないが、これから先の魔術師としての生涯に良い影響を与えるだろう。

「なになに? 『世界は2つの属性に分けられる。存在と非存在である。魔術ではこれを五大元素・架空元素としている。存在の証明は非存在によるものであり、逆もまた同様である。しかし魔術にはそれは当て嵌まらない。何故なら五大元素の証明は架空元素によらず、魔術ではない技術によるものだからである。また架空元素の証明及び判別は魔術師による』……………えーと、つまり、魔術というものを証明しているのは科学とか自然の現象ってことよね、多分」

少し頭がこんがらがっているものの何とか理解し読み進める。

『魔法の定義は既存の技術で再現できないものであるが、必ずしも再現できないものではない。例として挙げるなら、一人の人間の生活を全て記録し、その人物の記憶を保存

する技術を用いれば、そのデータは個人の魂そのものであるという言い方もできる。即ち第三魔法・魂の物質化である。しかし、この事実を魔術師側は認めない。何故なら、それは「魂」ではないというのだ。であるとするならば、彼らの言う「魂」とは何であるのか』……………理解出来ないわ。一体どういう考えをすればこんな結論になるのかしら」

完全に理解できないところまで読んでしまったので一旦本を閉じ、目と頭を休めようとする。しかし、本がそれを許してくれなかった。

『あれー？ 私を呼び出したのはコトネちゃんじゃないの？』

突如聞こえてきた声に凜は驚く。周囲を見回しても声を発するようなものはどこにもない。そして、唯一可能性のある本を見ると、薄く光っていた。

「本が喋った!？」

『誰？ あ、私はSORA。この本に宿る(?)精霊みたいなものよ』

「えーと、なんとなくどんな存在かは分かったわ。私は凜」

『リン？ あー、コトネちゃんの友達のリンね。で？ 何が聞きたいのかな？』

自己紹介をしたことで落ち着きを取り戻した凜は琴音のことを尋ねる。

「琴音のこと、教えてちょうだい」

『コトネちゃんは、第四次聖杯戦争のキャスターのマスター。まあ、この本を読んだのな

ら分かると思うけど。彼女の属性は風と水。起源は操作つてどこかな。あと、好きなものは士郎の作った料理全般で——』

「そこまではいいわ。で、キャスターって何者よ。真名は知ってるけど、絶対それだけじゃないわ」

『リクは、リクよ。それ以外の何モノでもない。まあしいていうとすれ——』

言葉は途中で途切れてしまった。本がひとりでに閉じはじめたのだ。恐らく、キャスターが琴音に気付かれたのだろうと考え、凜はアーチャーを呼ぶ。いつ襲われてもおかしくないからだ。

「どうした、凜」

「あー、やつちやつたかも。暫く私の側に居てくれる？」

「了解した」

特に追求するでもなくアーチャーは凜に従う。言葉の端々から滲み出る危機感を感じ取ったのだろう。一応今日はキャスターのマスターの私室を調べると知らされていたので、来る可能性が高いのはキャスターであるとし、警戒を高める。

士郎が帰ってくるまで警戒は続いた。

Phase. 8

日は沈み、辺りは月明かりに包まれている。鬱蒼と茂った森は来訪者を拒絶しているようにも見える。そんな森の中心にあるアインツベルンの日本での本拠地にキヤスターは侵入していた。

先ほど結界を潜る際に侵入を感知されないように仕掛けを施したがおそらく見つかっているだろう。それを念頭にキヤスターは歩を進める。

「こつちだね」

分かれ道でも少しも迷うことなく目的である少女のいる方角へ向かうキヤスター。目に魔力を集中させ視力を上げているのか瞳が僅かに発光している。彼の眼には既にアインツベルンの居城が見えていた。向こうから直接持ってきたとされるその城は明らかに日本とは不釣り合いである。たまたま目撃した一般人が幽霊でも見たかのよう

に話すのも当然だろう。

やがてキヤスターは何の妨害もなく居城へとたどり着いた。

今感じ取れるだけでも数十の魔術的なトラップが仕掛けられているが、その一切を無

視して扉に手を掛け押し開く。

年を経た木の門は独特の音色を立て開く。

その先の豪華なエントランスには既に臨戦態勢のバーサーカーとマスターであるイリヤスフィールの姿があった。

「御機嫌よう、キャスター。わざわざ倒されに来てくれるなんて優しいのね」

「ボクこそきちんと城で出迎えてくれるなんて思ってたよ。本当だったら直接転移してこようと思ったんだけどね、レディーには準備の時間も必要だと思ってるさ」

「あら、そうなの。おかげさまで準備は万端よ。さあ、行きなさい、バーサーカー」

「——■■■■——っ！」



キャスターがバーサーカーと戦い始めたころ、士郎が帰宅した衛宮邸で作戦会議が開かれていた。

「士郎、違和感感じてる？」

「ああ。一昨日辺りから変だとは思ってたんだ。これってやっぱりキャスターなのかな？」

「そうでしょうね。こうしている間にもほんの少しづつだけ力が奪われていつてわ。おそらく魂喰いに似た結界でも張っているんでしょう」

学校を休んだ二日間、不自然な疲れを凜は感じていた。ほんの僅かではあるが、いつもと同じ魔術の鍛錬をした際に魔力の消費が増えていたのに気付いた凜はその原因を考えていた。

どこかに自らの力が吸収されていく感覚。それを感知することに集中し、今でははつきりと自覚できている。

「この冬木でそんな規模の結界を使つて魔力を集めるとしたら、位の高い霊地が必要になる」

「で、それってどこなんだ？」

「恐らく柳洞寺でしょうね。この冬木にある霊地の中で一定以上の力を持つのは、柳洞寺、アインツベルンの本拠地の森、十年前市民会館のあった広場、あとは遠坂家の敷地くらいよ。その中で一番確率が高いのは柳洞寺。他はキャスターが陣地とするのには都合が悪いわ」

「そういえば一成もここ何日かは柳洞寺に帰ってないらしい。何でも本殿の建て替え工

事をするとか言ってたな」

今日の昼間の会話を思い出す土郎。一成が珍しく弁当を持ってきていなかったの聞いてみると、そういうことらしい。

「決まりね。今夜私たちは柳洞寺に行くわよ。これ以上放置しておくとかヤスターは集めた魔力で魔法級の魔術を使い放題になってしまうわ。あんまり好きな手じゃないんだけど、琴音を人質にでもして止めさせないと大変なことになるわよ」

「ああ。で、作戦はどうするんだ？」

「私が前に出ます。私の対魔力でしたらあの程度の魔術は私の身に届きません」

「セイバー、お願いね。私と土郎は琴音を探すわ。アーチャーは私たちの護衛。キャスターは転移魔術を使うから、琴音の近くにいつ現れてもおかしくないわ。頼んだわね」

「了解した。セイバーの方は一人でもいいのか？」

「問題ありません」

「本人がそう言うんだし大丈夫よ。さ、行くわよ」

大まかな作戦を立て行動に移す土郎と凜。柳洞寺までは歩いていくしかないが、その道中ほかのサーヴァントと出会わないとも限らない。警戒を怠ることなく彼らは進んでいった。

◆

エントランスで始まったキヤスターとバーサーカーの戦いは既にその場を城外に移していた。

キヤスターから放たれる多種多様な魔弾、それを障害とも思わずに最短距離で詰め寄ってくるバーサーカー。エントランスという限られた空間では不利と見たキヤスターは転移魔術によって外に出ることでその不利を無くし、森という自然の壁を使って遠距離から攻撃を仕掛けている。

どこから襲ってくるかわからない魔弾に対処するためにバーサーカーはマスターであるイリヤスフィールの側を離れることが出来ず、イリヤスフィールも自身に降りかかる魔弾を防ぐためにバーサーカーを動かすことが出来ない状況だ。

「いつまで耐えられるかな？」

時々声を掛けてくるキヤスターは挑発とも取れる言葉を発しているが、未だバーサーカーを窮地に追いやる事が出来ていない。魔弾はバーサーカーの守りを突破できていないのだ。

だからこそ、イリヤスフィールはバーサーカーを動かせないことに苛立っているものの、その表情には余裕の色がある。

拮抗状態はこのまま長く続くと思われたが、それは呆気なく破られた。

キャスターの魔弾の一つがバーサーカーに傷を付けたのだ。

それをきっかけとして次々にバーサーカーに傷を負わせるキャスター。バーサーカーの強靱な肉体に無数の傷が刻まれていく。だが、傷が付いたからといってキャスターが有利になつた訳ではない。多少は動きに影響は出るだろうが、一撃でも喰らえば致命傷になりかねない状況は変わっていないのだ。

だからこそキャスターは未だ姿を隠し続けたまま雨霰のように魔弾を降らす。威力ではなく、足止めを目的とした魔弾を使いながら、隙を伺い続ける。

いったいどれくらい時間が経つたのだろう。絶え間なく降り注ぐ魔弾はイリヤスフィールの時間感覚を狂わせていく。一秒が一分に、一分が一時間にも感じられる。

「Mag^魔icae bullet^弾 rem^解issionis^放」

キャスターは再び待機させていた魔弾を解放し、間断なく攻撃を続ける。一体どこにそれほどの魔力を持っているのか分からないほど攻撃は継続している。

決定打こそないものの、サーヴァントであるバーサーカーはともかく、長時間攻撃に晒されているイリヤスフィールの精神は限界に近づいていた。気づけば、何を命じたの

かバーサーカーはイリヤスフィールの盾になりながら少しづつ前進を始めている。魔弾の攻撃はほぼ正面から来ているとはいえ、そこにキャスターが居る保証などない。

前に進むたびに弾幕は激しさを増していく。それが近づいている証拠と信じ、進み続ける二人。城から離れたところにある木々のあまり生えていない場所に着くと、今まで二人を襲っていた魔弾は無くなった。そして、その場所の中心にはキャスターの姿があった。

「……………ようやく見つけたわ……………やっちゃいなさい、バーサーカー!」

「ん? ……ここまで来るなんてすごいね。あの弾雨を潜り抜けてきたんだ。ご苦労様。じゃ、死んで」

軽く口にした言葉に対応するようにバーサーカーの首が落ちた。それでも歩みは止まらない。

「■■■■ー!」

首から上が無くなってもお手にした斧剣を振りかぶるバーサーカー。それに対しキャスターはただ一言告げる。

「Transitus^{転移}.」

一つの命を犠牲とした一撃を転移魔術によって易々と躲すキャスター。その一撃で力を使い果たしたのかバーサーカーはその場に倒れこんだ。しかしそれも束の間のこと

と。先ほど落とした首はいまや元通りの場所にあり、魔弾によって傷付けられたはずの肉体も回復している。

「無駄よ。バーサーカーは一回殺したくらいじゃ死なないわ」

「知ってるさ。宝具『十二の試練』^{ゴッド・ハンド}、蘇生魔術の重ね掛けでしょ？　なら死ぬまで殺し続けるだけだよ」

言葉と共にキャスターは足を踏み鳴らす。そこを中心としていくつもの魔術陣が浮かび上がっていく。それらは複雑に絡み合い、連動し一つの魔術陣を作り上げていく。

「ま、この魔術なら一回くらい殺せるかな。
In Maigret, flamma de Seraphim caelum！」^燃

魔術陣の中心から焰が噴き上がり渦を巻く。その渦の中に囚われたバーサーカーは直径が狭まっていく中で焼き尽くされていく。

バーサーカーの保有する蘇生魔術を二つも使わせた大魔術はその熱の余波だけで木々を炎上させる。上昇していく温度に耐えきれなくなったのかイリヤスフィールの意識は朦朧としていく。

大魔術の行使が終わると、その場には満足に動くことのできないバーサーカーと、意識を辛うじて保っているイリヤスフィールの他には誰もいなかった。そう、キャスターの姿さえ。

臆げな意識の中でイリヤスフィールはキャスターの言葉を辛うじて聞き取れた。

「マスターが危ないと。」



途中、何の妨害もないまま柳洞寺に到着した士郎たちは、寺に続く長い階段を昇り切り、正門の前に居た。そこから何うことのできる中の様子は士郎の記憶にある柳洞寺と一変していた。

まず、荘厳だった本殿がない。それどころか、僧たちの寝所すら跡形もなく消えていた。その代わりに、ちょうど本殿のあった位置に小屋が建っていた。

そして、空気。あまり魔術に詳しくない士郎ですら異常を容易に感知できるほどの空気の重さ。纏わりつくような感覚を覚える。

最後に、少し離れた所に居る人影。

その人影が士郎たちに話し掛ける。

「意外と早かったじゃねーか。アイツも予想外だろうよ。ま、どうなろうとオレのやることは変わらねえけどな。Inst^展tr^開uere. さ、かかってこいよ」

虚空から一本の剣を取りだしそれを突きつける格好をとる人影。その立ち姿はまさしく剣士^{セイバー}。

「ここは私が。コトネのほうは任せました」

セイバーはそう言うのと、人影の方へ一目散に駆けて行く。一瞬の後には斬り合いを始めていた。

それを脇目で見ながら士郎たちは小屋の方へと向かう。途中、いくつかの妨害があつたが、それにはアーチャーが対応し無傷で小屋に辿り着いた。

あまり時間は掛けられないのですぐさま探知魔術でトラップの有無を調べる。結果は『有』。地水火風四属性への迎撃術式に、魔力吸収陣、警報陣、土人形生成^{ゴレム}など古今東西ありとあらゆる地域の魔術が仕掛けられていた。その中には凜ですら見たことのないものもあり迂闊に手を出すことは出来ない。

だからといって諦めるようなことはしない。魔術の基点を何故か見抜くことのできる士郎の能力を活用し、基点をアーチャーに破壊させる。その要領で次々とトラップを無効化していき、ついには全49個のトラップの無効化に成功した。

セイバーの方を見れば、人影は防戦一方であり決着がつくのも時間の問題のようだ。

一回大きく深呼吸をし、扉に手を掛ける。

「何をしているのかな？」

冷や汗が噴き出る。あと一步という所で見つかつてはいけないものに見つかってしまった。動くことを拒否している肉体を無理やり動かし振り返ると、そこには。

「まったく早すぎやしないかい？　ねえ、琴音ちゃん」

『そうだね、キヤスター。まあ、凜ちゃんだし』

これから救出するはずだった琴音と。

「さて、ボクの計画を始めようか」

殺気を抑えようともしないキヤスターの姿があつた。

Phase. 9

夢を見ていた。



ある町の教会の地下に一人の男がいた。彼はその教会の人間を殺害し、その血を利用して「魔術陣」とかつて呼ばれていた幾何学的な図形を描いている。その傍らには女性物の衣服や装飾品、そして遺骨と思わしきものが雑多に置かれていた。

そして、陣の中心には柩が置かれている。中身を窺い知ることにはできないが、嚴重に封じられていた痕跡として至る所に鎖が巻き付いており、柩自体にも不可思議な文字が刻まれている。

「……これだけ揃えたんだ。失敗するはずがない。臆病な本家の人間や低能な兄に出来

なくても俺なら出来る。……………もう一度、お前に会うため……」

独り言を呟きながら男は準備を進める。凶形を描き終わると、衣服や装飾品を柩の周りに並べていく。そして最後に骨を砕き柩に振りかけた。

「行くぞー！」

男は少し離れた場所にある装置を作動させる。それに連動し凶形が起動する。徐々にその大きさを増していった凶形はやがて町をすっぽりと覆い尽くすほどになった。

地下から起動しているため一般の人には見つかるとは無いが、専門の者であれば気づいているだろう。しかしそれはもはや問題ではない。どうせこの凶形が本来の役割を果たすころには跡形も残っていないのだから。

そして、凶形は役割を果たし始めた。まず初めは教会に近い場所。突然歩いていた人が倒れ始め、それに駆け寄ろうとした人も一歩も踏み出せずにその場に倒れこんだ。倒れた人たちに最早息はない。その現象は拡大した凶形の端に達するまで加速度的に広がっていった。

「はははははは、成功だ！ 見たか！ 本家の臆病者ども！ 愚鈍な愚兄！ 俺こそが『魔術師』だ！」

成功を確信し男は笑い声をあげる。その口を吐いて出てくるのは罵詈雑言の類だ。この町の住人に対する言葉は露程も出てこない。

「さあ、仕上げだ。俺の愛しい妻よ。目を覚ませ！」

男は柩に向かって呼びかける。返答はないが、代わりに棺の蓋が落ちた。

そこから顔を出したのは、白銀の髪に紅い目、中性的な顔立ちをした10歳前後の姿だ。

「……………誰だ、お前！ 俺の儀式は完璧だった！ なぜ妻じゃない！ 何が間違っていた！」

その姿を見て男は絶叫する。こんなのは違う、と繰り返し、目の焦点も合っていない。「妻の遺品を使った！ 骨を使った！ なぜこれで魂が再生しない！ その柩に入っていたのは魂を扱う『魔法』だろう!? 貴様はいったい誰だ！」

返答はない。どこを見ているのか分からないその紅い目は真実誰も見ていない。目の前の光景を認識すらしていない。

「クソッ！ 死……………ね……………?」

懐に持っていたナイフで殺そうと一歩を踏み出したところで男は止まった。否、止まらざるを得なかった。

不意に痛みを感じ足元を見る。

しかし、そこに本来あるべき足は姿を消していた。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

それを認識した途端、男は絶叫した。その声にも反応はない。しかし、一歩ずつ男との間合いを詰めている。

「……有りえない、有りえない有りえない有りえない有りえない有りえない有りえない有りえない有りえない有りえないッ！　これが『魔法』だと!?　『天の杯』だと!」

喚く男の脳裏にある日の光景が浮かぶ。

『この枢には我らの先祖が残した『魔法』の素体が封じられているのだ。決して開けてはならぬ』

『どうしてですか?』

『これは被検体名『ツエーン』。完成しすぎてしまったのだよ。これはただそこにいるだけで害になる。故に封じたのだ』

『完成しすぎたってどういうことですか?』

『聖杯戦争の失敗から我らは他家の力を借りずに聖杯を作ることを目指した。だが英霊や令呪といったシステムは御するのに難がある。それ故、単独で魔力を貯蓄できるようにしたのだ。『アインス』から『ノイン』までは膨大な魔力に耐えられなかった。そして、以前の聖杯の欠片を使ったこれは耐えられたのだ』

『じゃあ成功したんですね』

『いや、失敗だった。あまりにも素体の容量を強化しすぎたため、要らぬものまで貯めてしまったのだ。魔力には大源マナと小源オドがあるのは知っているだろうが、本来は大源マナのみをため込むはずだった。しかし、これは小源オドまで貯めこみ始め、更には人の感情のエネルギーすら飲み込んでいったのだ』

『それで?』

『これはな、“悪”の概念を取り込み、その名の通りに害を与え始めた。完成しすぎた故に狂ってしまったのだ。だからこれは決して開けてはならぬ』

「そうかよそういうことかよ! お前、この町全ての“悪”の概念を取り込みやがったな! 最悪だ! いや最悪なのは俺の方か……こんなもんの封を解いちまったんだからな………だが簡単には行かせねえ! たとえ足が無くともお前をもう一度封じてみせる! 俺がが原因なら、俺がが封じるのが筋だか」

「Manducaveritえ」

男は最後まで言うことはできなかつた。いつの間にか近くまで寄っていた影に呑みこまれてしまったからだ。もうそれを止める者はいない。

そして。

世界に“悪”が生まれた。



私は夢を見続ける。



『わたし』は『しらない。』『そと』の『けしき』も、『おや』の『かお』も。
『わたし』は『しって』いる。『まじゆつ』のことを。『ひと』の『みにくさ』を。

だから、こんな『ひび』も『いつもどおり』だ。

『わたし』は『いつもどおり』、『けんきゆうしゃ』に『つれられ』て『へや』をでる。『ひとつ』も『まど』が『なく』て、ずっと『けいこうとう』の『ひかり』が『ついて』いる『まっしろ』な『へや』が『わたし』の『へや』。『しよくじ』は『きまつ』た『じかん』に『とどけられ』る。

『わたし』は『あるく』。

『いつも』と『かわらない』『いし』で『でき』た『ろうか』を『あるく』。『あるく』『あるく』。

『くつ』を『はいてい』ない『わたし』の『あしのうら』は、『いし』の『つめたさ』を『つたえ』てくる。『きよう』は『すこし』『しめって』いるみたい。

『あるき』、『あるき』、『あるいて』『ついた』のは、『しゅじゅつしつ』という『ぼしょ』。『わたし』に『いたいこと』をする『ぼしょ』。

『ひと』が『わたし』の『からだ』を『すきかって』に『いじくる』『ぼしょ』。

『ひと』が『いつ』た。『わたし』には『そよう』があるらしい。でも『わたし』には『いみ』が『わからない』。『そよう』という『ことば』の『いみ』を『しらない』し。

ああ、『きよう』も『いつも』の『いたい』ことが『はじまる』んだね。

ああ、『きよう』も『わたし』は『いきて』『しまつて』いる『こと』を『じつかん』させ

られるんだね。

そして、『きょう』も『わたし』の『からだ』には『もよう』が『きざまれ』ていくんだね。

『きょう』は『どこ』だろう。『め』かな。『のど』かな。

ああ——『し』って『らく』になるのかな。

『わたし』は『め』を『さまし』た。『いつも』の『へや』だ。『なにひとつ』『かわつてい』ない。『ためし』に『まじゆつ』を『つかつ』てみても『なにも』『かわらない』。『きのう』は『どこ』だろう。『きょう』は『どこ』だろう。『あした』は『どこ』だろう。

『わたし』の『からだ』は『もよう』で『いっぱい』。もう『あいて』いる『ばしょ』なんて『からだ』の『なか』にしかない。

そして。

『きょう』もまた『けんきゆうしゃ』が『やって』きた。

『きのう』とは『ちがう』『ひと』。でも、『わたし』にとつて『ひと』は『だれ』でも『おなじ』。『みんな』『わたし』に『いたい』ことをするだけの『ひと』。『いろ』の『ちがい』なんて『かんけい』ない。

『あるく』。『あるく』。『あるく』。

『あるく』。『あるく』。『あるく』。

でも、『きよう』は『いつも』と『ばしょ』が『ちがう』。

どうせ『どこ』に『いつ』も『かわらない』んだけど、『きよう』は『すこし』だけ『き』になった。

『わたし』の『め』にはこれから『いく』『ところ』が『まっくら』に『みえ』る。『いつも』『みている』『まっしろ』とは『せいはいたい』の『いろ』。

「な、何が起こったんだ!？」

『ひと』の『あわて』る『こえ』が『きこえ』る。

「お前が最後の一人だ。痛みを感じながら死ぬ。Torsion^{振れ}」

「ひ……やめ、やめろ！」

『ひと』の『ひめい』が『きこえ』る。

『まっくら』が『わたし』に『ちかづいて』くる。

「君がそうか」

『わたし』を『ころす』の。『はやく』『ころし』て。『し』っていうのは『かいほう』なんだって」

「ボクは君を殺すことはしない。ボクは君を助けに来たんだから」

そう『いつ』て『まっくろ』は『わたし』の『て』を『にぎつ』た。

『まっくろ』はそのまま『わたし』の『て』を『ひい』て『どこか』に『むかつて』いく。

そして。

『わたし』は『そと』を『しっ』た。

『わたし』は『ひと』を『しっ』た。

『わたし』は『せい』を『しっ』た。

『わたし』は『わたし』を『しっ』た。

そして。

『わたし』は、私は、『光』と『闇』、『善』と『悪』を知った。

それが、『私』と『彼』の出会いだった。



夢は続く。私の魂はもっと深く彼のものに沈んでいく。それは底なし沼のようにゆっくと、でも確実に私の魂を捕らえる。

そこに不快感はない。それは彼が私を知っているから。信じてくれているから。

だから、私も彼を信じよう。

最後まで夢を見続けよう。



白銀の髪に紅い目。いくら様々な人種がいるとはいえ流石に目立っているのは当人も知っているのだろう。人ごみを縫うように急いでいるのがわかる。そして、その白銀に手を引かれているのは真夏だというのに長袖を着てフードをすっぽりとかぶっている子供。

その二人組に目を引かれ、自分探しの旅という現実逃避をしている青年は彼らの後をついていく。

幸い、青年の背は高く、目立つ二人組であったため見失うことはなかった。

彼らの後を追うと、やがて暗い路地裏に入ってしまった。少々入り口付近で躊躇ったものの青年は踏み込んでいく。

しかし、路地に入ったところで見失った。躊躇った時間で目につかないところに行ってしまったのかと思いきや青年は踵を返す。

「どこに行くの？」

声が青年の左手方向から聞こえる。青年がそこを見ると、先程まで追っていた二人組がいた。

その眼は青年を警戒しているようだ。

「ボクたちをつけていたみたいだけど何か用？」

「いや、特に。ただ気になったから追ってみただけだ」

「ふーん。ま、魔術師じゃないみたいだし、ボクからは何もしないから、帰るといいよ。ここから先は引き返すことができない『闇』だからね」

「ちよつと待つてくれ、オレの話聞いてくれるか？」

「まだ何か？」

自分でもなぜ引き止めたか青年には分からなかった。魔術師というキーワードか、それともほかの何かか。それでも何を感じたのか分からずとも引き止めずにはいられなかった。

「オレの悩みを聞いてくれないか」

「いいよ。じゃあ、ついてきて」

「ああ、助かるよ。あ、オレはカイ」

「知ってる。私もリクも。あなたが何一つ自己というものを確立できていないということも。私たちに相談する内容も」

フードの方から声がした。その声はその容姿通りの幼い少女の声だった。顔はよく見えなかったが、警戒しているような声色ではなかった。

そして、カイが二人についていった先にあつたのは小屋だった。科学技術が最盛期を迎えている今、木造の建物はとても珍しく、『遺跡』として残っているのを除けば技術的

に後進的な国にしかない。今カイがいるのは世界有数の先進国であるフランス。そんなところでお目にかかるとは思っていなかったのか少々驚いている。

「入りなよ。大丈夫。罨なんて仕掛けてないから」

中々入らないのを警戒しているからだと思ったのかリクと呼ばれた少年が声をかけてきた。自分から頼んでおいて待たせるのは悪いと思いかイは急いで中に入る。

内装はお世辞にもいいものとは言えなかった。剥き出しの木材はどこどころ朽ちていた。

「さて、ボクたちに相談って何？」

ある程度綺麗な椅子に腰掛け、リクはカイに問いかけた。

カイは一度大きく息をつくと自分の抱える悩みについて話し始めた。

「君はさつき魔術師って言ったよな。オレの義父もそうだったんだ。だけどオレは魔術師って言われてもまったく分からなかった。だからまず魔術師について教えてくれな
いか」

「……魔術師っていうのは、科学とは違った手段で同様の結果を出す閉鎖的な技術を使い、そして最終的な目標が『根源』もしくは『』と呼ばれる領域に到達することである人種。ま、簡単に言えばこんな感じかな。細かく言えばもつと区別はあるんだけど。『根源』と『』の違いとか」

「オレの義父は魔術師だったのか？　なんか研究してた記憶がないんだけど」

「そういう人もいる。ただ、『根源』を指さない魔術師は魔術使いって言われて侮蔑されてるけどね」

どこか納得したような表情のカイ。自身の中である程度解釈ができたのか次の話題に移った。

「オレの義父だけじゃなく、その家系は『正義の味方』ってやつらしいんだ。義父もそうだった。紛争に巻き込まれたオレを助けてくれたんだ。でも、5年前に同じように紛争に行つて死んじまった。そして、その時に命がけで守つた奴がその紛争の首謀者だったんだ。結果紛争は長引いた。………なあ、正義の味方ってなんなんだ？　首謀者を助けて紛争を長引かせるのが『正義』なのか？　家族になつたオレを差し置いて戦場に行つて勝手に死ぬのが『正義』なのか？　教えてくれよ……」

よっぽど深い悩みなのだろう。その表情は苦悶に満ちていた。

「ボクから言わせてもらえば正義の味方なんて世界に必要な存在だ。そんな存在がいなくても死ぬ人は死ぬし生き残る人は生き残る。大体、正義の味方を名乗るなら敵は誰だと思ふ？」

「敵？　『悪』じゃないのか？」

「違うよ。正義の反対もまた正義。辞書的な意味で言うなら不義。決して『悪』じゃない

い。『悪』の対義は『善』だからね。はつきり言って『正義の味方』の敵は曖昧すぎる。自分が味方したほうが正義。そんな子供じみた結論が罷り通る最悪な存在だよ」

「私は、リクと知り合うまで、人を知らなかった。でも、外に出て分かったこともある。正義はない。私もリクも決して善人とは言えないし、一般的に見れば十分『悪』。でも私はリクを信じてる」

「そうか……初めてだよ。ここまで真剣に答えてくれたのは。ありがとう。オレの自分探しもここで終わりだな」

そう言ってカイは小屋を出ていく。扉を開けたところでふと振り返る。

「そういえばちゃんど自己紹介してなかったな。オレはカイ・エミヤ」

「エミヤねえ……。ま、いつか。ボクはリク・チェラーシス」

「私はソラ・チェラーシス。あなたの選んだ道は茨の道。それでも進むの？」

ソラの問いかけに頷いてカイは出ていく。

そして、2年後。三人は戦場で対峙する。

◆

夢はまだまだ終わる気配を見せない。でも、沈んでいく私の意識は外部の刺激によって引き上げられていく。

完全に引き上げられる前に彼の言葉が耳に届いた。

『陸の果てにも空の果てにも海の果てにもボクと私とオレの居場所はない。例えば世界を壊しても救っても。だったら、ボクと私とオレの救いはどこにあるんだろうね。ねえ、君は知らないかい？ 正義の味方にして掃除人のエミヤシロウ？』

◆

「マズイ！ 凜下がれ」

いち早く再起動したアーチャーが凜を遠ざける。その声を聞いて士郎と凜はキャストと琴音から離れようとするが一向に体が動かない。

「無駄だよ。サーヴァントならまだしもただの人間にボクの拘束魔術は解けない。おとなしくしてるといいよ。どうせ君たちに用はないから」

そう言うときキャストは士郎たちはおるかアーチャーにまで背を向ける。それを逃すアーチャーではない。即座に双剣を創り出し、そして側面からの一撃に吹き飛ばされる。

「アーチャー!？」

「その程度ですか、サーヴァント。ここは任せてください、キャスト」

「任せたよ、バゼット」

背がすらりと高く、スーツ姿の女性が姿を現していた。封印指定執行者バゼット・フラガ・マクレミッツ。人でありながらサーヴァントを殴り飛ばすその膂力は計り知れない。

キャストに一声かけバゼットはアーチャーに追撃をかける。自前のルーンだけでなくキャストからの強化を受けている彼女はサーヴァントに見劣りしないほどの力を発揮しアーチャーを追い詰めていく。

双剣の間合いよりもさらに近い距離で繰り出される拳の暴風は未だに初撃以来当

たつてはいないが刻一刻とアーチャーの余裕を奪つていき、反撃の隙を与えない。

それを横目に見ながらキャスターはセイバーの方に向かつていく。

「Continentiam operativa servato principio。」

セイバーの足元に魔術陣が展開される。それを振り切ろうとするセイバーだが思ったように体が動かないことに気づいた。

「何をした!」

「その魔術陣はライダーに使う予定だったんだけどね、ま、セイバーも幻想種が入っているから効いているはずだよ。さ、セイバーに死んでもらつては困るけどあつちにいるのは都合が悪いからね。落ちてもらうよ」

そう言うと、キャスターは魔術陣を描き始める。セイバーにとっては見覚えのあるそれ。10年前負の想念の結晶と言われた星の魔剣の制御陣。

『さあ、出でよ! 死を齎す災厄の剣!』

キャスターの手に握られているのは不定形の剣。どこまでも黒いその剣は脈打っているように見える。星が作り出した悪性の魔剣。善性の聖剣を持つセイバーにとつてそれは目に入れるだけでも毒であつた。

それを持ちながらキャスターはセイバーに近づいていく。遠くから士郎の叫び声が聞こえたが、セイバーの耳には入つてこない。目の前の魔剣に集中していなければもつ

ていられると感じているからだ。

『中々抵抗するね。でも、無駄だよ。さあ、呑み込め！ 死を齎す災厄の剣！』

振り下ろすでもなく突き出すでもない。ただ道具の名を叫ぶだけで変化は訪れた。キャスターの影を媒体として魔剣から負の想念が流れ出しセイバーを覆っていく。

それは魔力で編まれた鎧を溶かし、セイバーの肌を直接這い上がる。やがて下半身が埋め尽くされる頃にはセイバーに抵抗するだけの力は残っていなかった。

「済まない……シロウ……」

最後に己のマスターの名を呼び、セイバーは呑み込まれていった。

そして、それを確認したキャスターは二つの魔術陣を起動させる。自らの陣地であり潤沢に蓄えられた魔力があつてこそ可能なサーヴァントの契約解除術式。そして、その術式に邪魔な凜たちを弾き出す術式。

凜たちはキャスターの術式によって簡単に弾き出され、衛宮邸まで転移魔術で飛ばされてしまう。

残ったのはキャスターと影に包まれているセイバー、そしてアーチャーと戦っていたバゼット、凜たちを見張っていた琴音。

『さて、まずは成功だね。バゼットさん、セイバーと契約する？』

「遠慮します。私は今のままの方が性に合っているので」

『そ。じゃボクが契約するね。Delegation^{契約} contractus^{委譲}。さ、今日は休もうか。第二段階は明日から始めるからね。おっと、忘れるところだった。令呪を以つてセイバーに命ずる。ボクの指示に従え』

キャスターが命じると同時に影の拘束が解けセイバーが姿を現す。その姿は先程までとは正反対だった。すべてが反転している。もともと善性の聖剣使いであるセイバーの反転は大した労力ではなかったようだ。善悪は表裏一体ということなのだろうか。

「お休み、琴音ちゃん、セイバー、バゼットさん」



衛宮邸まで飛ばされた凜と士郎は翌朝まで死んだように眠らされ続けた。

起きた時には既に7時を回っており、いつものように桜が朝食を作りに来ていた。

いつもと変わらない光景に安堵する士郎だが、心の中では複雑な思いが渦巻いている。昨夜まで右手にあったはずの令呪は無くなっていた。それはセイバーが消滅した

ということを示している。

凜にしてもアーチャーが重傷を負い数日は実体化すらできないらしい。

「先輩？　どうかしましたか？」

「ああいや何でもない」

「嘘です。だって先輩——サーヴァントを失ったじゃないですか」

Phase. 10

間桐慎二は天才だ。

学業をやらせれば常にトップ、外国語も僅か数週間でマスターしてみせた。スポーツにしても数時間練習すれば一定以上のレベルに達し、周囲を驚かせる。

しかし、彼には魔術師にとって最も重要なものが欠けていた。魔術回路がなかったのだ。

I Fの話を好まない間桐の翁ですら嘆くほどの才を持ちながら、魔術師としては落第者であった。

それでも彼は諦めなかった。間桐に所蔵されている書を読み漁り知識を蓄えていく。既存の理論から机上の空論まで分け隔てなく吸収し、自らの物としていった。

やがて彼は自宅の書を読破した。それでも彼の欲は絶えなかった。書がないのなら聞けばいい。彼は「少し怖いお爺様」に勇気を振り絞って知識を聞きに行く。

そこで彼は知った。義理の妹の才能を。

嫉妬しなかったといえは嘘になるだろう。養子として連れてこられた義妹には十分

以上の魔術回路があり、自身には一つたりともないのだから。

しかし、彼はその嫉妬を抑えこんだ。そもそも初めて会った時から理解していたのだ。自分ではなく義妹が後の当主になるということを。幼いながらも聡い彼にとつてそんな結論を導き出すことは容易だった。

彼は兄として接し続けた。義妹の愚痴を聞き、料理の味見をし、虐められたと聞けば殴りに行く。

だから彼は義妹に魔術理論を教えることにした。自身の持つ知識を最大限に利用し少し要領の悪い義妹に時々苦笑しながら。

それは正しく兄妹だった。教える兄に教わる妹。

いつからか二人は本当の兄妹になっていた。

希少属性である架空元素と間桐の属性である水を使いこなす妹を彼は誇りにしている。

そして、聖杯戦争が始まった。

自身の彼女である琴音よりも家族である妹の助けをすると決め、勝つためにはその情ですら利用し、親友である衛宮ですら利用する。彼が計画を立て、足りない経験は祖父に補ってもらい、妹が実行する。

そして、ここまでは計画通りだ。



間桐桜は養子だ。

彼女を出迎えたのは温かい歓迎などではなかった。自身の属性を変えるための拷問にも勝るとも劣らない苛烈な教育は彼女の心を閉ざしていくはずだった。

実際、彼女の心はほんの少しの時間閉ざされていた。第四次聖杯戦争時に自身を助けに来た雁夜が来た時には確かに心を閉ざしていた。

それから一年間、雁夜が魔術の教育を受けている間、彼女への教育は中断された。それでも彼女は魔術の鍛錬を怠ることはなかった。何故なのかは本人にも分からなかったが、毎日の習慣のようになっていた。

そして転機が訪れたのはサーヴァントが召喚された時だった。

雁夜が召喚したサーヴァント、バーサーカーの放つ魔力にあてられ彼女は気を失った。

目が覚めた時、彼女は自身の変化を感じた。一年以上教育をされていなくても重かつ

た身体が軽く感じたのだ。それが何を要因とするのかは分からなかった。気分が高揚し世界が明るく見えた。

教育が再開したとき、自身の変化による恩恵を感じることができた。いつもはただその場にいるだけだが、ふとした思い付きで魔術回路を起動した時、自身の周囲の蟲の動きが変化したのに気がついた。

そうなつてから、蟲を自在に操ることができるようになるまでそう時間は掛からなかった。その成長には間桐臓硯も予想外のように翁自身の核を彼女の心臓に埋め込むことができず、また日に日に蟲の所有権を奪われていくため余裕がなくなっていた。

彼女はそんな自分自身に酔っていた。聖杯戦争に無様にも敗退した雁夜を蟲に襲わせるくらいには。

我に返ったのは聖杯戦争が終結してからだだった。雁夜を殺してしまったという自責の念から彼女の心は閉じこもる寸前だった。

それを救ったのは海外から帰ってきた義兄の存在だった。

初めて見た時は怒りがわいた。何故そんなもののうと生きているのだ、と。そして臓硯の話を聞いて哀れにも思った。魔術を使えないのに書を読み漁る義兄の姿は滑稽でもあった。

初めて言葉を交わしたのはそれから一年も経ってからだった。初めてかけられた言

葉はどこにでもある陳腐なものだったが、今でも彼女は覚えている。

『今まで放つておいて悪かったな。僕は慎二だ。これからよろしく、桜』

義兄ではなく兄であろうと振る舞っているのは何となく理解できていた。少々上から目線の物言いだったが、それはひどく心地よかった。彼女の再び凍り付こうとした心を溶かすのには十分だった。

それからは彼女も義妹ではなく妹であろうとした。普通の兄妹のように喧嘩もし遊んだりもした。そして魔術も教わるようになった。

兄に教わるようになってからは彼女の魔術の腕は著しく成長した。魔術の腕ならば既に臍硯に並ぼうかというところまで来ている。当然経験の差から直接戦うことになれば敵うはずもないが。

令呪が現れたのはそんな時だった。

初めに感じたのは恐怖だった。前回の生存者は3人。過半数が死亡する聖杯戦争に参加しなくてはいけないということに恐怖を感じ、部屋に籠った。兄の呼びかけにも応じず布団を被って丸くなった。

そんな彼女を立ち直らせたのもやはり兄であった。部屋の扉を強引に開け、不安と恐

怖で震える彼女を抱きしめた。

彼女は覚悟を決めた。聖杯戦争に勝ち残り生き残ると。

そうして、彼女の戦いは始まった。



居間で告げられた言葉は士郎に衝撃をもたらした。聖杯戦争に関係していないと思っていた桜がサーヴァントのことを知っていたからだ。

「あのー、先輩？　本当に大丈夫ですか？」

こうして今も士郎の心配をしている桜はいつもと何一つ変わらない。魔術と関わっているとは言われるまで全く気付かなかった。

しかし、同席していた凜は知っていたようで一切動揺はしていなかった。

「やっぱりね。桜、ずっと私を避けてたでしょ」

「避けてなんかいませんよ。たまたま会わなかつただけです。それに、今の遠坂先輩なら怖くありません。アーチャーも重傷ですし」

「言ってくれるじゃない。それよりも、士郎！　しつかりしなさいよ。何でそんなに衝撃受けてるのよ」

「いや、何か桜が魔術を知っているってのが……」

士郎はブツブツと呟いているが凧と桜の耳には入ってこない。埴が明かないので、二人は士郎を放つて朝食を摂り始めた。

「それで？　このタイミングで明かしたってことは何か目的でもあるのかしら？」

「ええ。先輩のことですからサーヴァントを失ったくらいじゃ聖杯戦争から手を引いてくれそうにありませんから。だから、私たちと同盟でもどうかかなと」

「あー、確かに士郎は聖杯戦争から手は引かないでしょうけど、同盟？　間桐家が？」

「はい。バーサーカーとキャスターを倒すまでの間ですけど、休戦でも構いませんよ？」
二人での会話を優位に進めているのは桜だ。サーヴァントが健在であるということが凧に対して大きなアドバンテージとなり会話の主導権を握っている。

凧も出来るだけ情報を引き出そうとするが、中々桜は手ごわいのか目的の情報が手に入らない。

「なあ、桜。桜もサーヴァントを連れているのか？」

「はい。先輩にはお見せできませんし、今は連れてきていないですけど。あ、でも証拠なら」

証拠といって桜は士郎に自分の右手を差し出した。そこには、一画足りないもの、確かに令呪があった。

「本当、確かに令呪があるわね。それで、貴女のサーヴァントのクラスは何かしら？」

「言えませんよ、そんなこと。正式に休戦なり同盟を結ぶのでしたら教えますけど、今私が話したら教え損じやないですか」

「そりやそうよね。じゃあ、同盟しましょう。どちらにしろあのキャスターとバーサーカーには一対一で挑んだら勝ち目はないわ。何だつたらギアスでも掛ける？」

「いいえ。私は遠坂先輩を信じてますから」

屈託のない笑顔でそう言う桜。その笑顔を見て何も言えなくなったのか凛が口を噤む。

ややあつて、再び凛が口を開いた。

「それで、桜。貴女のサーヴァントのクラスは何かしら。それによつて作戦も変わつてくるのだけど？」

「私のサーヴァントはライダーです。一度先輩とは交戦してるのでステータスは分かりますよね？ あ、先輩、そんな怒つた顔しないで下さい！ あの結界を使う気なんて有りませんから！」

ライダーと言つた途端、士郎の顔が怒りで歪み慌てて取り繕う桜。それでも士郎はし

つくく問い詰める。

「じゃあ、何で魂喰いなんかの結界を張ったんだ？ 使わないなら張る必要はないだろ！」

「ついつい大声になってしまおう士郎の声に桜は委縮してしまった。それをフォローするように凜が考えを述べる。

「おそらくほかのサーヴァントを呼び寄せるための罫でしょう？ ねえ、桜」

「は、はい。普通に捜すよりは効率がいいですから。それに私だつて魂喰いなんてサーヴァントにさせる気はありません。だからそんなに怒らないで下さい」

桜の少し怯えた声で頭に血が上つていたことに気付いた士郎は深呼吸をして自身を落ち着かせる。

「ああ、怒って悪かったな、桜。……信じるよ」

「あ、いえ。私も誤解されるようなことをしたんですし……その、先輩が謝る必要なんてないですよ」

二人とも謝り合うというコントのような展開の中、凜は時計を見る。

「あ、士郎、桜！ 早くしないと遅刻するわよ！」

凜の声で我に返った二人は大急ぎで朝食を片付け用意をし始めるのだった。

夕方、夕食の買い物で賑わう商店街にキャスターと琴音は買い物に来ていた。

流石に往来の中で魔術は使えないので琴音は手話でキャスターと会話している。

「んー、今日の夕飯は何がいい？」

『「焼肉が食べたいー」』

「中々思い切ったね。年頃の女の子が肉を所望するなんて思わなかったよ」

『「それは偏見だよ。女の子だってお腹いっぱいお肉を食べたい時もあるー」』

「んー、じゃあ、そうしようか」

琴音が先導する形で肉屋に向かう二人。その途中途中にある店で野菜やタレを買い、目的の肉屋で肉を手に入れる。少々お高い肉だったが、琴音が土郎の財布を持っていたため遠慮なく買い、それまでのものと合わせ両手がいっぱいになるほどの買い物をした。

流石にこの量を円蔵山の頂上まで運ぶのは労力があるので二人は人通りのほとんどない路地裏から転移魔術で荷物を送る。

それから再び表通りで琴音おすすめのたい焼きを買って近くの公園で食べる。

「あ、バーサーカーのマスター」

キャスターが指差した先には、いかにも高そうなコートを羽織ったイリヤスフィールの姿があった。気配からバーサーカーを連れていなさそうだったので声を掛けてみる。

「イリヤちゃん、こっちおいでー」

馴れ馴れしい呼びかけにイリヤスフィールが振り返ると、そこには昨日自分を蒸し焼きにしようとしたキャスターとそのマスター。

「ひっつ……………」

当然、イリヤスフィールは小さく悲鳴を上げると涙交じりで逃げていった。

「ありや、嫌われちゃったかな？」

『一体なにしたのよ。尋常じゃない怖がり方だったよね？ リク君？ 女の子には優しくしないとイケないんだよ？』

少し怒っているのか語気がいつもより強い琴音。

「あー、燃え盛る森の中に放置しちやったからかな」

『それは……………可哀想に……………本当に辛いよ、炎の中って。私はトラウマ克服できたからいいけど、あの子、トラウマになってるみたいよ』

非常に実感のこもった琴音の言葉。彼女は10年前に似たような状況に陥ったのだ

から当然だ。

『とにかく、聖杯戦争だからって女の子にトラウマ植えつけちゃうようなことしちやダメ。分かった？』

いつの間にか説教されていたキャスターだったが、琴音の言葉に得も言われぬ迫力があつたので思わず頷いてしまう。

『うん。分かったならそれでいい。じゃ、帰ろつか』

二人は座っていたベンチから立ち上がり帰路に着く。その後ろ姿は “きようだいのようだった。

Phase. 11

間桐桜との同盟が決まった日の放課後、凜は間桐邸に行く士郎には付き合わず自宅に向かった。

慣れた所作で防護結界の鍵を開け、古めかしい鍵を使って玄関を開ける。ここ数日帰ってはいないので所々に埃が積もり始めているがそれを無視して地下にある魔術工房に向かう。

「出てきなさい、アーチャー」

凜の呼びかけにアーチャーが姿を現す。士郎に言ったような実体化に支障のある傷は見当たらず、それを隠しているような所作も見られない。

それも当然だ。凜は士郎に嘘を吐いたのだから。

柳洞寺から飛ばされた後、凜は直ぐにアーチャーを霊体化させ他のサーヴァントの偵察に向かわせた。彼女が最も危惧しているのはこれ以上の戦力がキヤスターの下に集まってしまうことだ。

現状でもキヤスターを筆頭に封印指定執行者、最悪自身よりも魔術に長けている可能

性のある琴音、更には謎の剣士もいる。おそらくキャスターの言葉から推測するにセイバーもまだ健在でキャスター側についた可能性もある。

「それで、アーチャー。他の陣営はどうだった？」

「同盟を結んだライダーは省かせてもらうが、アサシンは確認できなかった。最後まで隠れているつもりなのか、先日のあの公園でキャスターにやられたのかは判断はつかないがね」

「バーサーカーは？」

「特に新しい情報はない。相変わらず森の中に引き籠っているようだ。ランサーは釣りをしていたな」

「釣り!? ……いやまあ昼間に何してようと魔術を秘匿してるならいいんだけどさ」

「最後にキャスターだが、偵察は不可能だ。柳洞寺の結界が強化されていた。おそらく正門からでも侵入できないだろう。中に入るには令呪を使った直接転移でもなければ無理だ。まあ、時間を掛ければ破ることはできるだろうがキャスターに捕捉されて終わりだろうな」

「最悪ね。士郎は今桜のところに行ってるけど、そこで何か聞ければいいんだけど」

間桐邸で士郎は慎二と向き合っていた。士郎はてつきり桜が何か教えてくれると思っていたので慎二に聞いてみることにした。

「なあ、慎二。桜が教えてくれるんじゃないのか？」

「ん？ ああ、桜の方がよかつたかい？ でも僕のほうが魔術には詳しいからね。さて、衛宮。お前の属性は何だ？」

「属性？ 火とか水とかみたいなのか？ 俺知らないぞ？」

「はあ!? 知らない!? ……しようがない。なら得意な魔術は何だ？」

「強化と投影かな。むしろそれ以外はできない」

ほら、と行って士郎は何の装飾もない剣を一振り投影する。それを慎二は十分以上かけて観察し、次の指示を出す。

「じゃあ、このティーカップを投影してみてくれ」

「それは出来ない。何でだか知らないけど俺は剣しか投影できないんだ。皿とか投影できればその分食器代が浮くと思ってやってみただけど一向に出来なかつたんだ」

「……少し待ってろ」

そう言つて慎二は部屋を出て行つてしまった。それと入れ替わるように桜が入つてきた。制服から着替えて私服になつている。桜はあまり士郎の前では私服でいることがないので少し新鮮さを士郎は感じていた。

「兄さん、出ていったみたいですけど、何かあつたんですか？」

「いや、少し待つてろつて言われた。そういや、慎二つて魔術師じゃないのか？」

「はい。兄さんは魔術回路を持つていないので魔術師じゃありません。でも知識量は高位の魔術師にも劣らないと思います。だから、先輩は安心してください」

そう言つた桜の顔は誇らしげだ。

それから一時間程桜と士郎は話をしていた。それでも慎二が戻つてこないのが桜が見に行こうとしたときちようど慎二が帰つてきた。その手には何本かの剣が抱えられていた。

「次はこれを投影してみろ」

「分かつた。投影開始………出来たぞ」

「………やつぱりそうか。衛宮、お前は特化型だ」

「特化型？」

「僕が勝手にそう呼んでいるだけさ。ある一定のものにのみ常軌を逸した才能が突出してることで、お前のは剣に特化してるみたいだな」

「じゃあ、俺は普通の魔術は使えないのか？」

「おそらく無理だね。ガラスを直したりとかならできるとは思うけど、あまり期待を持たない方がいい。どうせ衛宮のことだ、サーヴァントがいなくても聖杯戦争を戦うんだろ？」

「当然だ。例えセイバーが居なくてもそれは変わらない。誰かが犠牲になるような戦いなんて認めちゃいけないんだ」

士郎の真剣な顔を見て、慎二はため息をつく。自分がどんな位置にいるのか分かっていない士郎はため息をつかれる理由が分からなかった。

だが、慎二はあえて士郎の立ち位置を教えることはしなかった。教えたところで考えの変わらないと表情で分かったからだ。

ならば、慎二ができるのは士郎の魔術の技量を伸ばすことだけ。慎二は士郎にアドバイスをしていく。

「まず、魔術回路はきちんと開いているみたいだから、そっちは心配ないけど運用が壊滅的に下手だな。まあ、これは慣れていくしかないから日々の積み重ね。そうだな、ティツシュに強化を掛けて木を切れるくらいになればいいんじゃないか？」

「ちよつと待って慎二。それってかなり難しくないか？」

「そうか？ 桜は一週間で出来るようになったぞ？」

士郎の視界の端には誇らしげに胸を張る桜の姿が。

魔術の「普通」を知らない士郎はその難易度を見誤りこれに難儀することになるのだが、この時はまだ知らなかった。

「で、投影の方だけど、とりあえず作りまくれ。僕は投影に關してはそこまで詳しくないし、劍に特化した前例がウチの資料では見つからなかったからそれぐらいしか言えないな」

「そっか。ありがとな」

そう言つて士郎は席から立ちあがる。

部屋から出ていく士郎に向かつて最後に慎二は声を掛けた。

「じゃあな、衛宮。死ぬんじゃないぞ」

「ああ」

士郎はそれに答えて屋敷を出ていった。



大量の肉を買い込み行われた焼肉パーティーを終えたキャスターは行動を開始した。

セイバーを手に入れるという第一目標を達成した次は、小聖杯の確保。即ちイリヤスフィールの確保をしなければならない。だが、それに付きまとう障害は大きい。

キャスターにとつてはアインツベルンの結界など兇戯と同様ではあるが、問題はサーヴァントのバーサーカーのほうである。

ランクの低い攻撃では掠り傷すら与えることが難しく、おまけに一度死を経験した方法では殺すことができない。先日は日本の神道を利用した対神術式と火属性の魔術で計3つの命を奪ったが、それ以前のものを含めても4つしか削れていない。残り8回も異なった方法で殺しきるのはかなり難しいと言える。

だからキャスターが狙うのはマスター。最上級の英霊でありながら更に狂化しているため莫大な魔力が必要となるバーサーカーはマスターからの魔力供給が途切れればあつという間に自滅する。その自滅までの間に殺されてしまう危険性があることも否めないが直接対峙し殺しきるよりは危険性は大分低い。

しかし、マスターを狙うとはいっても常にバーサーカーは近くにいるため、一度は殺す必要性がある。それも回復に時間のかかる方法で。

幸い、前回の聖杯戦争とは違って魔力供給が十分であり、陣地に貯えもある現状では宝具の出し惜しみは考える必要がない。『デュオ・タクトゥム・ヴァインクラー』を使えば、先日のものより

も威力の高い魔術の発動は可能だ。

「いいかい？　琴音ちゃん。ボクは今からアインツベルンの城に行つてイリヤちゃんを拉致してくる。勿論、バーサーカーとの戦闘はあるだろうけど、心配はしなくてもいい」
『分かった。それで、そのイリヤちゃんつて子をここまで転移魔術で跳ばすんでしょ？』

そのあととは？』

「琴音ちゃんにはこれを起動してもらおう」

そう言つてキャスターが懐から取り出したのは2メートル四方の紙だ。その紙上には隙間もないほど魔術陣がびっしりと記してある。それを広げた後、再び小さく折りたたむと、琴音に預ける。

「ここに書いてあるのは外界との隔離術式。ようするにこれを使つてバーサーカーとのラインを一時的に無効化して自滅を待つ。起動するのにはそれほど魔力は要らないから。じゃ、行つてくるね」

『うん。いつてらっしやい』

琴音の言葉を聞いてキャスターは毎度お馴染みの転移魔術で姿を消した。

キャスターを見送つた琴音は小屋に戻り再び紙を広げる。いつ転移魔術で送られてくるかはわからないので紙の前から動くことは出来ず、いざという時のために魔術鍛錬も控えるように言われている。

強固な結界を張っているために他のサーヴァントからの介入の可能性は殆どないが、万が一ということもある。それに例え山門の結界を突破してきたとしても、そこで待ち構えているのはキャスターからルーン魔術を深いレベルで教わったバゼット、黒化したセイバー、キャスターの分身ともいえるカイがいる。

そんな面子がいてもキャスターは警戒を怠ることはなく、琴音に魔力を残しておくよう伝えていなのだ。本人からすれば過剰にも思えるのだが。

かと言って琴音にやることがないとは言えない。今までは声を発するのに魔術を使い、魔術を使うためには声を使わなければならないため一つの魔術を発動するのに声の分の魔力が上乘せされてしまうため効率が良くなかった。それを克服するために琴音は発声練習をしている。

幸い、魔術で声を作ることができるといっくら喉を酷使しても魔術の使用に支障はない。

「……………あ……………」

今はまだ声も小さく発音もはつきりしていないが以前に比べれば格段の進歩だ。一応声は出せるようになってきているのだから。

再び自分の声で話すために琴音は努力を続けた。



一方、柳洞寺から転移魔術で外に出たキャスターは直ぐにアインツベルンの本拠に向かうことはしなかった。

今キャスターがいるのは10年前、冬木市民会館のあった公園だ。

ちようどその公園の中心でキャスターは地面に手を着いた。小声で何かを唱えながらその場から動かない。

約三十分後、ようやくキャスターは立ち上がると、転移魔術ではなく普通に歩いて公園を出ていった。

キャスターが去る前はこの場に立ち込めていたはずの「嫌な気配」はいつの間にか消えていた。

そして、キャスターの「影」は濃くなっていた。

Phase. 12

公園を後にしたキャスターは未だアインツベルンの城には向かっていなかった。次に向かったのは教会。そこでキャスターは言峰と会っていた。

「やあ、言峰綺礼。今日はちよつとした挨拶に来たんだ。それと、提案にね」

「何だね、キャスター」

「何てことは無いさ。ただ宣言に來ただけだよ。聖杯戦争は明日決着する。是非君にも結末を見てもらいたいと思つてさ」

「根拠でもあるのかね？」

「君が協力してくれれば。まあ、協力してくれなかつたところで数時間伸びるだけだとは思うけど、その場合には君はもう死んでいるだろうけどね。分かるでしょ？ ボクの中にいるモノが」

「分かるとも。成程、もし私が協力しなければ私の中にあるモノを今取つていく、という訳だな」

「ご名答。さ、協力するかしないか選んでよ。もし協力するなら、君に『この世全ての悪』

を見せてあげよう」

「ふ、是非もあるまい。私の望みはアレの誕生にある」

言峰はほんの僅かではあるが興奮しているように見えた。キャスターはその表情を見て、次の条件を出す。

「ボクからの要請は簡単さ。地下に居るギルガメッシュのことは関係ない。ただ、ランサーが邪魔なだけ。……………分かるよね？」

「ああ、そういうことか」

言峰はわざとゆっくりと袖を捲り令呪を輝かせる。その顔は歪で、しかし極上の料理を前にしたかのような笑みを浮かべている。

「令呪を以って命じる。ランサーよ……………自害せよ」

たっぷりと溜め、最後に命じたそれはたちどころに効果を發揮し、今まさにアインツベルンの結界を通り抜けようとしていたランサーは自らの槍で心臓を抉って消滅した。

「ふふふ。良い笑顔だね。さあ、これで契約は完了した。明日の午前0時、柳洞寺で待つてよ」

「ああ。楽しみにしていよう」

転移魔術でキャスターが消えていった後も言峰は歪な笑みを浮かべたままでいた。それは上がってきたギルガメッシュが気味が悪いと告げるまで続いていたらしい。



火が見えた。どこからか広がった火災は瞬く間に家々を呑み込んでいった。

空を見上げてても、赤い。空に舞いがつた煙が火の赤を映しているからだ。よく目を凝らすと、奥に何かが見えた。……黒い太陽？

ここに居てはいけない。極限状態の中、既に歩く体力もないがとにかくここから離れなくては。

意志だけで身体を動かす。周囲には生存者の影もない。火災で崩落した家の中には家主がいるのだろうか。しかしそのどれもが既に生者ではない。それが理解できてしま

う。

歩き続ける。

ふと、誰かの声が聞こえた。

——助けてくれ——

しかし自分には助けるだけの余力が残っていない。

——この子だけは——

答えられない。自分が動くだけで精いっぱいだ。

謝ることすらできず、何を目的としているのかすら分からないまま歩き続けた。

聞こえてくる声は変わっていた。

——何でお前は生きているんだ——

知らない。答えることは出来ない。自分でも生きていることが不思議なのだから。

——よくもこの子を見捨てたな——

見捨てたわけじゃない。助けるだけの力が自分になかった。見捨てる気なんてなかった。

いつしか火災は収束を見せていた。黒い太陽も姿を消していた。

もう動くことすらできない。頭の中は数々の助けを求める声と、自分を責め、恨む幻

聴に支配されていた。

それでも何かを探すかのように正面に目を向ける。目の前に広がっているのは地獄絵図に他ならない。救いなどは一片も見えず、絶望以外を探すことすら難しい。

ふと、脇に目をやる。何か見覚えのある物が目に入ったからだ。

赤いリボン。

その先には胴体と繋がっていない——

唐突に目を覚ました。先ほどまで見ていたはずの悪夢は欠片も覚えていないが、得体のしれない不安感が土郎を襲う。

何か取り返しのことか起っているような、そんな気がした土郎は居てもたつてもいられず外に飛び出た。彼の工房である土蔵の扉に手を掛け、中に入ると違和感に気付いた。

普段は整然としているはずの2階部分が荒らされている。そこに何かあるのかは土郎は詳しく知らない。ただ、そこにある物は切嗣の遺したものであるということは知っている。

片づけをしながら自分の記憶と照合すると、箱が二つ無くなっていた。どちらもそれほど大きなものではないがやけに重かったのを覚えている。

中身の推測は出来ないが、誰がこれをしたのかは容易に分かる。衛宮邸の防犯用結界が作動しなかったのだから琴音かキャスターのどちらかだ。彼女たちであればこの程度の結界は少し構造を弄つたくらいでは無いのと同じだろう。

「ちようどいい。何か寝られる気がしないからいつもの日課をやるか」

土郎はちようど土蔵の中心で目を閉じる。いつものように自分という存在を世界か

ら切り離していく。魔術回路は異常なく稼働を始めた。

「投影開始」
トレスオン

慎二に言われたとおり、士郎は数を積み重ねることが重要だ。いくつもの剣を造りだし、精度を上げていくことしか今の彼には出来ない。記憶にある多種多様な刀剣を現出させていく。

他者を傷つけることしか出来ない武器を造り、他者を救うことを願って。



元の契約者である士郎から切り離され、キャスターの支配下に置かれたセイバーは夢を見ていた。

本来サーヴァントに睡眠や食事は必要ない。それは彼らが英霊だからだ。しかしセイバーは未だ英雄。未来に復活する王として眠りについたとされるセイバーは肉体的な死を迎えていない。それ故睡眠や食事といったことを多少なりとも必要としていた。

先ほどまでは周囲の警戒に当たっていたが、今はカイと名乗るキャスターの協力者が

それをしてる。

僅かな休息ではあるが戦場では寝られるときに寝るのが鉄則である。セイバーは即座に眠りに落ちた。

そして見ているのは夢。目の前に居るのがどこの誰なのかは分かりきっている。自身の新たな契約者であるキャスターだ。

今セイバーが見ているキャスターは生前の姿だ。今よりも背が小さく、ともすれば少女にも見えなくもない華奢な体つきだ。

その隣には長いローブを纏った少女の姿がある。おそらくキャスターがソラと呼んでいる人物のことだろう。

見たところ場所は戦場のようだった。セイバーが経験してきたどの戦争とも違うその光景は正に異形同士の戦いだった。

戦車が地を埋め尽くし、空には戦闘機の群れ。しかしそのどれにも人の気配はしなかった。無人の戦争には流血は無い。それが却って恐ろしかった。戦争というのはその理由が宗教であれ侵略であれ終わりというものが存在する。

当然、それを決断するのは人間だ。そして非情な言い方だが決断の為には一般人にも分かるほどの「被害」が必要とされる。

しかし、今セイバーが見ているのは人間には被害の出ない戦争だ。被害が出ない故に

戦争をしているという感覚は一般人にはあまり感じられない。物資の徴収によつて市場での物価は上がつていゝるだろうが、それくらいしか認識できる物が無いのだ。

そして、無人であるということは街に攻め込んだ際に一切の慈悲を期待できない。壊滅するまで破壊は続いてしまうのだ。

キャスターにもそれは分かつていゝるらしく、しきりに後ろを気にしてゐる。但し、キャスターの後ろにあるのは街ではなく森だ。戦場の間近でありながら木の一本も折れてゐないのはキャスターが守つてゐるからだと理解できる。先ほども飛んできた砲弾をかなり手前で撃墜してゐる。

「戦争ねえ。どこまでいつても人間の欲は尽きないつていゝのは何ていゝるか流石つてとこだね」

「そんなこと言つてゐるリクも私もお父さんも人間だけだね」

「そりやそうさ。ボクだつて人間だから欲もある。この森だけは壊させないつていゝ欲がね」

「随分平和的な欲よね。リクつて本当に“悪”の権化なの？」

「そりやそうさ。ボクはこの土地が欲しい大統領サマの要求を断り続ける悪さ」

冗談めかして笑う二人はそうして話してゐる間にも流れ弾を処理し続けている。その動きに一寸の無駄もなく洗練されてゐる。間違ひなく世界最高の魔術師であること

が覗える。

でも、と前置きをしてキャスターは続ける。

「世界がボクに悪を望むのならボクはそれに従うしかない。ボクの器はそういう風に出
来ているからね。世界全てを滅ぼせと願われたらボクはそれに従う。ボク自身が進ん
でそういうことをしようとは思わないけど、願われたのなら逆らえない。ボクはどれだ
け人間であろうとしても、いや、人間でも願望器である事実は変えられないからね」

「じゃあさ、もし私を殺すように願われたら？」

「苦しまないように一瞬で」

「そこは抗ってくれないの？」

「抗ってほしいの？」

そこでソラは少し考え込んだ。

「……ううん。リクに殺されるのなら、それはそれでいいかな。でも私の魂は一緒に連
れてってね」

「君が望むならね。ボクは強制するのはあんまり好きじゃないから」

「知ってるよ。じゃあ、最後に。もし、私が誰かに殺されたら？」

「世界を滅ぼすさ。ボク自身の意思で」

少しも考えずにキャスターはそう口にした。冗談ではなく、真剣な表情だった。

身体が浮上していく感覚に囚われる。セイバーはそれが夢からの目覚めであると感じた。そしてそれは僅かな休息の終わりであるとともに、聖杯戦争の最後の幕が上がったことを意味していた。



「いい感じに溜まってきたじゃねえか。さあ、さつさと俺を還してくれよ、ツエーン」
暗闇の中男の声がした。

Phase. 13

森に張られた結界を気にする様子もなく通り抜けたキャスターは既にバーサーカーと戦い始めていた。

バーサーカー。本来、低級な英霊を狂化することによってステータスの底上げを行うクラスであり、同時に狂化による魔力消費の増大から扱いづらいクラスでもある。しかも、今回のバーサーカーの真名はヘラクレス。低級どころか一級のサーヴァントである。おそらく一般の魔術師では十分ともたないであろう。

しかし、マスターであるイリヤスフィールはそれを何の苦にもしていない。それどころか運用に余裕すら垣間見えるほどだ。今も笑顔のまま戦いの趨勢を見ている。

バーサーカーが手にしている斧剣を振るう度に木が数本吹き飛ぶ。しかしそれは襲撃者であるキャスターに対して何のダメージも与えられない。

『早いけど避けられないほどじゃないね。さ、次はこっちの番だよ！』

いつもとは違う黒いローブを纏い、白銀の髪をはためかせて空を飛ぶキャスターは手を打ち鳴らす。一瞬の内に魔術陣が描かれ、魔術が行使される。ファンシーなピンクの

光線がバーサーカーに直撃する。しかし、その一撃も僅かに傷を与えた程度であり、行動を阻害するまでには至らない。

それも織り込み済みとばかりにキャスターは新たな魔術陣を展開する。現れたのは3つの魔術陣。それぞれが異なった言語で構成されており、一目ではその魔術の正体は分からない。それらは一直線に重なるように配置されていく。

『Circulation! constitution! σνμπ?εση!』

3つの言語でそれぞれの魔術陣が制御され、一つの大魔術を作り上げていく。

『Coeli flare!』

放たれたのはどの神話にも必ず現れる『神』の一撃を模した魔術だ。並大抵の魔術障壁では紙同然、一流の魔術師であつても現代に生きる以上防ぐことは不可能に近い。一撃をバーサーカーは耐えきつた。脇腹には大きな穴が穿たれ、左腕も失っているもの、生きてはいる。そして、バーサーカーはイリヤの指示によつて自らを殺すことで傷を完全に修復した。

『やっぱり面倒だなー、その宝具。次からはCoeli flareも効かないだろうし、さーて、どうしますかね』

傷が修復されたのを見てキャスターは呟く。当初の計画ではバーサーカーが傷を修復、ないし死亡状態から復帰するまでの間にイリヤスフィールを拉致する予定だった

が、今ではその計画に綻びが生じていた。

今までの戦闘結果から見ると、十分その計画は実行可能な範囲だった。しかし、再び戦ってみると、前回とは明らかに動きが違う。一つ一つの動作が速く、威力も増している。加えて防御力も上がっているのか中々致命傷を与えられない。先ほどの Coeli flare^神もイリヤスフィール^撃を巻き込まないように威力を抑えたとはいえ、十分致命傷を与えるに足る魔術だ。

『さて、計画変更かな。流石にこれをバラバラにするのは厳しそうだし、あと7回殺しきって終わらせるよ、ソラ』

『はいはい、じゃ、私は琴音ちゃんに連絡しとくね』

『うん、頼んだよ。さあ、派手にいこうか！』

キャスターが両腕を振りかざすと、空一面に魔術陣が展開される。それと共鳴するようにはキャスターの身体のいたるところに刻まれている魔術陣が連動して淡い光を放ち始める。

『Sed^さ orci^あ velum^戦 aperi^幕 am bellum^開！』

その言葉を発すると同時に、上空の魔術陣から魔弾が放たれる。雨霰と降り注ぐ魔弾はバーサーカーの動きを阻害する。鬱陶しそうに斧剣を振り回しているがその程度では魔弾を振り払うことは出来ない。

そして、動きが止まったところにキャスターの詠唱魔術が襲い掛かる。陣魔術のスキルで放たれる魔術よりも威力が高くなる詠唱魔術は先ほどよりもより効率的にバーサーカーの身体に傷をつける。それでも強化されたバーサーカーにとっては致命傷足り得ない。

『次、いくよ！』^{クリエイト} 創造、無名槍20本！ 付加『氷』^{アイス}！ 貫け！』

キャスターが投影魔術で作り出した槍に氷のルーンを刻み、それをバーサーカー目がけて一齐に射出する。しかし、それらはバーサーカーに対して何の意味も為さない。その肉体に到達するものの、傷一つすらつけることが出来ずに砕け散っていく。しかし、砕け散った時に発せられた冷気をキャスターは利用する。

『Egg^水 gl^よ·cic^{、被}es, me in laque^閉averunt cum illu^よm
!』

冷気で編まれた氷の檻がバーサーカーを閉じ込める。かなりの魔力を込めたようである。バーサーカーも中々脱出できないでいる。

「バーサーカー！ 早く脱出しなさい！ 次が来る！」

『遅いよ。Cast^落rum occ^日asus sol^のis!』^{城 郭}

セイバーが自らの宝具での迎撃を選択するほどの大魔術が身動きの取れないバーサーカーに直撃する。堅牢な城でも破壊しつくせるほどの魔力の塊は狙いを外すこと

なく檻の周囲を破壊しつくした。その破壊の余波で周囲の木々は薙ぎ倒され、遠くにあるアインツベルンの城が見通せるまでになった。

『さ、今ので3つは削れたかな。あと4回、殺しきってみせるさ』



一方、作戦の変更を告げられた琴音は衛宮邸にある土蔵に侵入して二つの物を運び出すそうとしている。結界には反応しないよう細工をし、音もなく忍び込んだのだが、どうも監視されているような感覚が抜けない。

一応外にバゼットが待機しているので呼ぶこともできるのだが、結界の細工は必要最低限であり、元々そこに住んでいた琴音だからこそその抜け道を使っている。おそらく中に呼べば警報が鳴りだすだろう。

『取る物取ってさっさと退散しよ』

目的のものはすぐに見つかった。5年前、衛宮切嗣がこの世を去ってから定期的に掃除こそしているものの場所は動かされていなかったそれは、土蔵の二階、一番奥に置か

れていた。素早く中身を確認し運び出す。

「何事もなく敷地から抜け出しバゼットと合流すると、魔術を使って一気にその場から離脱する。」

「一体どうしたのですか」

『ちよつと監視されてる気がするの。多分サーヴァントだと思う』

「分かりました。戦闘準備はしておきます」

バゼットはいつものグローブを嵌め、琴音は周囲を警戒しながら一目散に柳洞寺へと向かう二人。

しかし、山門へ続く階段に着いた時に威力こそそれほどないものの攻撃を受けた。幸い、周囲を警戒しながら向かっていたためバゼットが拳で弾いたが、そのあとにも続けて遠距離から攻撃を受け続けている。

『バゼットさん、ここはまかせてもいいですか？ カイさんと呼んできます』

「わかりました。恐らく敵はアーチャーでしょう」

バゼットにこの場を任せ階段へと消えていく琴音。時折攻撃が琴音のほうにも向かうが全て外れている。

「水で光を屈折させて像を作り出しているのですか……。しかし、これでは罫が明かない」

既に防いだ数は50を超える。敵に諦める様子は無く、絶え間なく攻撃が襲い掛かってくる。どこから撃っているのか分からないようにたびたび軌道が変わっているのも厄介だ。

「仕方ありません。カイが来るまで耐え続けるしかないようですね」

しかし、耐えると言っても人の体力には限界がある。たとえ短い時間であろうと常に相手の攻撃に晒されるというのは体力や精神力を奪っていく。先ほどから一層攻撃の密度が高まっているため徐々にバゼットは傷を負っていく。

「くっ……右20に左20ですか、流星に厳しいですね」

「伏せろ！」

バゼットが後ろから掛けられた声に従うと同時に、剣圧が全ての攻撃を弾く。

「悪い、少し遅れたな。あとはオレに任せな」

「頼みました。琴音は？」

「詳しくは分かんねえけど何かの術式を組んでたぜ……っ」と

話している最中にも飛んでくる攻撃をいとも容易く弾くカイ。それを見てか攻撃が止んだ。

「今の内だ。さっさと山門の中に入っておきな。恐らくアーチャーも今からこっちにくるぜ」

「分かりました。では一足先に行っています」

バゼットは10段飛ばしで階段を上りあつという間に山門に辿り着いた。

それを確認したカイは魔術で槍を作りそれをアーチャーがいるであろう場所に向かって投げる。一直線で進む槍はその途中で迎撃される。

「やっぱりそこか。なら、こつちから行かせてもらおう！」

アサシンとの戦いでもしたように足元で爆発を起こし、カイは一気にアーチャーに接近していく。

着いた先は住宅街から少し離れた雑木林だった。

「やれやれ。まさかすぐにここを見破られるとは思わなかつたよ。まあ、いいさ。ここで君を排除させてもらう」

「やってみろよ、ご先祖サマ。正義狂いのエミヤシロウ！」

そうして、どのマスターも見ることのない戦いが始まった。

Phase. 14

正義狂いと称されたアーチャーは両手に剣を作り出す。彼が生涯に亘って愛用し続けたその剣を見て、カイは笑い飛ばした。

「ハハハッ！ よりにもよってその剣か。己を最も愛してくれた女性を殺しておいてその剣を使うとは！」

「その程度の挑発に乗るとでも思ったのか？」

「いやいや挑発でも何でもねえよ、ただの感想だ。それにな、挑発つてのはこうやるんだよ」

カイは自分の喉に向けて魔術を使い、こう言った。

『「ごめんなさい。私が悪いんですね、センパイ。ごめんなさい」』

「貴様ッ！」

それはかつての記憶が摩耗した中でも鮮明に覚えている一場面だった。エミヤシロウを最も愛し、そしてエミヤシロウが全てを救うために明確に自分の意思で殺した後輩との最期の場面だ。

既に自身の中で決着はついていたはずだった。理性はそれをよしとした。だが本能は違った。どれほど年月を経ようと、英霊となってまで人を救うことを選ぶようと、本能は忘れなかった。その最期の瞬間、確かにエミヤシロウという存在を氣遣い、笑顔で殺されていった彼女を貶められることは赦せなかった。

「おいおい、この程度で何怒り狂ってんだよ。オレが受けた傷呪いはこんなもんじゃねえぞ！」

カイはアーチャーの剣を身一つで避け続ける。普段であればランサーとも対等に打ち合うこともできるアーチャーの剣筋は今や素人も同然。ただ感情に任せて振るっているようにしか見えない。

「もつと苦しめよ！ *f a i r e* 吹 *s a u t e r* 飛！」

カイの魔術はアーチャーを直撃した。回避行動どころか防御すら考えていないアーチャーの行動で受け身を取ることなど出来ずアーチャーは数十メートル先の大木に背を打ちつけた。

「ハッ！ 無様だな。まあ、その姿がお似合いだよ。お前呪いが世界に残した傷、その報いを受けるんだな」

カイはアサシンとの戦いで使った剣を取り出す。既に魔術が使われているのか全体が薄く青色になっている。

「私が残した傷……だど？」

「ああそうだ。お前が『正義の味方』として活動し、その思想を受け継いだ『自称正義の味方』の群れが何をしたか教えてやろうか？ 戦争だよ、戦争。九を生かすために一を切り捨てるその思想。その果てにあるのはそれぞれが違う九を掲げた戦争だ。どっちが正しいもない。リクも言ってたが、あれだな。『自分が味方したほうが正義』ってやつだな」

カイは剣の調子を確かめるように振るいながら続ける。

「そしてどうなったと思う？ 奴ら、人体実験すら惜しまなくなつたんだぜ。ソラはその被害者の一人だな。ソラという一を切り捨てるだけに飽き足らずそれを有効に活用するために人体実験だ。そんでリクがソラを救い出したら今度はリクとソラが『悪』だつて言つて中世期の魔女狩りまで持ち出しやがった。これじゃ一体どっちが『正義』なんだろうな」

尚もアーチャーの心を抉るようにカイは言葉を止めない。

「で、最終的に起こつたのが戦争。一丁前に人を傷つけるのは良くないとか言つて無人兵器同士戦わせて、結果危機感の薄れた民間人には報道規制して何も教えずその果てには無人機械による虐殺だ。その裏では魔術師がリクとソラの父親を探し出して殺害、そのあとはお前も知つてるだろ？ 傑作だよなあ。お前の守護者としての初仕事が自身

が蒔いた種の後始末つてのはな」

歩きながら話していたため既にカイの眼前にはアーチャーの姿がある。そして手に持った剣を鼻先に突きつけた。

「さあ、絶望を抱いて、死ね」

カイは躊躇することなく、剣を突き出した。



「カイは大丈夫でしようか」

無事に山門から結界内に入ったバゼットはそう呟いた。

アーチャーの攻撃によって多少の傷は負っていたものの、琴音によって既にその傷は治されている。当の琴音は土蔵から持ってきた荷物を開き、その中に入っていた銃を点検している。

琴音が扱うには大きいその銃は衛宮切嗣の愛銃であるトンプソン・コンテンダー。起源弾こそ全て破棄されているが、その特殊な口径に合う銃弾はいくらか残されていた。

『ま、本当に使う気はないけどね……』

誰に言うでもなく琴音は呟く。琴音はこれを銃として弾を撃つために使うつもりなどなく、ただの脅しとしてしか使わないと決めている。実体の見えない魔術も十分危険を煽るが、一般人に感性の近い土郎相手であれば目に見える脅威のほうがいい。

そしてもう一つ土蔵から持ってきた荷物の中には水銀が入っている。普段から少量は持ち歩いているが、対人戦となれば心許ない。その荷物の中には今現在琴音が同時に使用することのできる限界の量が収められている。

『準備終了つと。セイバーさんはまだ寝てるし、リクくんのほうも時間がかかりそうだなあ……』

「琴音。私が見張りをしていますので睡眠を取ったらどうでしょうか」

『でも、バゼットさんだつて怪我していたんだから休んだ方がいいと思いますよ?』

「いえ、この程度ならば問題ありません」

『そうなの? じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかな』

琴音は立ち上がるとベッドの方に向かう。一番奥にある琴音のベッドには10年前、リクに貰った蒼い雫の形をしたアクセサリーが置いてある。

『おやすみなさい』

それを両手で握りしめて、琴音は眠りについた。



『流石は大英雄ヘラクレス、まだギアがあがるんだね！』

既に戦闘が始まってから30分が経過していた。その間、キヤスターは幾度となくバーサーカーを死に至らせているが、そのたびにバーサーカーの動きは速く、鋭くなっている。

先ほど水の魔術で命を一つ削ったため、バーサーカーの宝具は残り3つ。しかし、キヤスターとしては少々の不安要素があった。それは『十二の試練』の発動条件である。既に斬撃、火属性、エーテル、水属性と多様な攻撃でその命を削っているため徐々に攻撃が通らなくなってきたのだ。条件をこまかすために複合属性や様々な宗派の様式を組み合わせてはいるものの、明らかにバーサーカーの負っているダメージは減少している。

キヤスターは自身の宝具である『死を齎す災厄の剣』を使えば残り3つの命を削りきれるという確証はある。しかし、精度の増した攻撃の前には緻密な魔術陣を5つ必要と

するその宝具は使えない。魔術陣なしで使用してしまえばコントロールが効かず周囲全てを呑み込む災厄と成り果ててしまうのだ。手がないわけではないが出来るだけ使用は控えたい。

『ソラ、どうする？ このままじゃ手詰まりだよ？』

『あの斧剣が邪魔なんだよね。少しでも短く出来ない？』

『やってみる。創造^{フリエット}、偽・物干し竿』

キャスターが作り出したのはアサシンが使っていた長刀。その刀身は風の魔術で強化されているのか、地面に近づくと落ち葉を巻き上げる。

「■■■■ーッ！」

『いくよ……燕返し！』

当然というか燕返しなど出来てはいない。だが、その剣筋は確かにバーサーカーの斧剣を捉えていた。衝突の衝撃波が辺りの木々を揺らす。一瞬の均衡の後、キャスターが大きく吹き飛ばされる。

『痛いな、もう。筋力強化の魔術と魔力放出使っても勝てないのか』

『それにあつちの斧剣はほとんど無傷みたいね。こつちのはポツキリ折れてるっていうのよ』

きちんと受け身を取ったキャスターが刀を見ると、完全に折れていた。修復どころか

折れた先の刀身が存在しないのではないかというような破壊具合だ。

『それに調子に乗って【燕返し!】なんて言うからよ。ほら、次来るわよ!』

『分かつてるよ! Ego solo, sive attolemur!』

『今の内よ! もう出し惜しみは要らないわ!』

ちようどバーサーカーの踏み出す位置の土を盛り上げバランスを崩している間にキャスターは次の準備をする。

『Continentiam chirurgicam remissionis ratiio
拘束 所 指 解 除 術 式 起
 Loco quibus suppra: Oculum dextrum.
箇 所 第 一 定 右 目
 Tertium a primo justo dolor,
第 一 第 三 魔 術 陣
 status reprehendo.
起 動 確 認

Transstulit ad SORA ratiio operationis dominii
術 式 制 御 を ソ 操 拉 に 讓 渡
 右目に刻まれた魔術陣が起動する。それに呼応するようにキャスターの身体から大量の魔術陣が構成されていく。その魔術陣がバーサーカーを的確に捉え、その歩みを止めている。

『今よ! 一気に仕上げて!』

『分かった!』

魔術をソラが操り、その隙にキャスターは5つの魔術陣を描き始める。それぞれの魔術陣には対応する災厄を祓うためのモチーフが記述されている。

虚偽・不浄、背教、無秩序、熱、渇き。これらの5つの災厄を悪しき思考で以って繋ぎ合わせる。本来は災厄を祓うための除魔法・宗教法として使われるそれらのモチーフを反転させていく。

『準備完了！ 行くよ！ 死を齎す災厄の剣！』

名を呼ぶだけだった。ただそれだけのことでバーサーカーを跡形もなく消し飛ばす。この世全ての悪が作り出した16の災厄は対象を完全に消滅させた。

「そんな……………バーサーカー！ 嘘でしょ……………」

『残念ながら嘘じゃないんだよ。さ、大人しくしてもらおうよ。小聖杯』

必要なのは心臓であるため、本人が生きている必要はない。手早くイリヤスフィールを殺害しキャスターは帰路につく。

間もなく午前0時。聖杯戦争最後の日を迎えようとしていた。

Phase. 15

カイが突き出した剣はアーチャーに当たることはなかった。ギリギリでアーチャーが身体を逸らしたのだ。

「へえ、まだ動けるのか」

「貴様が戯言を喋っていたおかげでこちらも準備が整った。凜には申し訳ないが宝具を使わせてもらおうでしょう」

そう言つてアーチャーが手を振り上げる。

そして、景色が一変した。

どこまでも続く荒涼の大地。そして墓標のように地面に突き刺さる無数の剣。

「固有結界ね。ま、関係ないね」

カイはまるで気にする様子なく離れてしまったアーチャーとの距離を詰めようとするが、その前に何本もの剣が上空から降り注いできた。

「チツ、めんどくさいな！ redde^私え！」

カイは剣を掲げ魔術を発動する。キャスターが作った最高の媒体であるその剣を通

じて何倍にも増幅された魔術が上空の剣を一掃する。

「次だ」

「またかよ！ redde！」

一掃しても次々に剣が生み出されキリがない。だから、カイは切り札を使った。

剣を地面に突き刺し、詠唱を始める。剣を中心として結界が張られ、剣を通さない。

だが、それもいつまでも保つわけではない。

「Unus mihi magnus aqua fit initium,

Laetatur in terra vitam, et glutiam

！」

詠唱は速かった。過剰な魔力を供給することにより半ば暴走気味で発動したその魔術はまるで神話の洪水のようだった。地面に突き刺さる剣を押し流し、濁流と化していく。

濁流はあつという間に地面を覆い尽くした。どこまでも広がっている荒野は今や海のように水に覆われている。

しかし、地上の剣をすべて押し流したとはいえ、アーチャーは幾らでも剣を作り出すことができる。魔術行使の隙を狙った射出は確かにカイを捉えていた。

事実、2本の剣はカイの左腕と右足を吹き飛ばしている。だが、その欠損箇所は瞬く

間に元通りになった。

「貴様、何をした」

「わざわざ教える必要があんのか？ オレの、いやオレたちを知ってるだろうに」

「やはりそうか。ならば跡形もなく消し去るだけだ」

再びアーチャーは剣の射出を始める。その悉くがカイに命中するが、その度に欠ける部位も元通りになる。そもそもカイは自身の身を守る行動を一切していない。

自身の身体の損失の一切を無視したカイは止まらない。あらゆる攻撃を身に受け、即座に元通りになっていながら治癒魔術を使っている気配はない。

「この程度じゃオレを殺し尽くせやしない。h a s t a m e e」

カイが叫ぶと周囲の水が槍の形をとり、アーチャーに向かって飛んでいく。

それを冷静に見切り、空からの投影と手に持った双剣で叩き落とす。それらの槍は地に落ちると再び水に戻った。しかし、その僅かな時間でカイは一気に距離を詰めていた。

「これで終わりだ！」

アーチャーは剣を振り切った体勢であり防ぐことは出来ない。投影をするにもカイの剣の方が早いだろう。カイは自身の勝利を確信していた。

剣が振るわれ身体を切り裂く手応えがあった。現に血も吹き出ている。しかし倒れ

たのはカイだった。

「な……………にが……………」

カイは地に伏せながらアーチャーを見る。アーチャーも傷を負ってはいた。しかし心臓を狙った袈裟懸けは身体をずらされ左腕を落とすに留まっていた。

対するカイは核を貫かれていた。無限に再生するかとも思われたあの術も効果を示さない。当然だ。あの魔術は身体を水と同化させるもの。その魔術行使の核を貫かれたのだ。魔術は解け、地平線を満たしていた水も既にない。

「結局オレは何も出来ないってことか」

固有結界が解け始めている。時期にもとの場所に戻るだろう。そうなればキャスターはカイの敗北を知るだろう。それが、どういう結果に繋がるかは分からない。ただ自分が居なくてもキャスターならば成し遂げるだろうことがカイには確信できた。

「……………」

アーチャーは何も言わない。問い詰めたこともあるのかもしれないが、それをせず固有結界が完全に消えると同時に去っていった。

一人残されたカイは白んできた空を見上げる。

「ま、オレは失敗しちまったが、リクなら大丈夫だろ。あー、やっぱ同族嫌悪ってやだね。まあ、アイツにも傷は掛けてやったから後は任せませ……………リク……………ソラ……………」

◆
カイが倒れたとき、キャスターは聖杯降誕の準備をしていた。

「ん、カイは負けちゃったか」

既に宝具『二人だけデュオ・タントウム・ウインクラーの絆』は解除しているため、声は二重には聞こえない。髪色と

目の色はもう黒には戻していない。わざわざ魔術をかけていたのも正体を隠すためだ。次が最後になるだろう時にそんなことに意味は無いのだ。

「まあ、カイがいなくてもなんとかなるでしょ。結局、カイは自分のしたいことは出来たのかな？」

誰に言うでもなく呟くキャスター。そもそも周囲には人影は無い。準備の邪魔になるため、琴音たちは一旦柳洞寺から出て行ってもらっているのだ。

「カイの魂は戻ってこなかったね。じゃあ、満足したってことか」
『そうなんじゃない？　そもそもそういう約束だったからね』

「まあ、そのところは本人以外誰にも分からないもんね。それより、術式に歪みは無い？」

『うん、大丈夫。接続式も問題なく作動してるし、結界も同じく。あとは英霊4騎分の魔

力でしょ?』

「ううん。あと2騎で問題ない。思ったよりもバーサーカーの分が頑張ってくれたから」

『あれ? バーサーカーって3騎分もあったっけ?』

「ないよ。ボクの中にあるものを代用した。これであとはアーチャーとライダーの分を入れれば完成する」

術式を追加しながら二人は会話する。彼らの計画が成功しても失敗しても、おそらく今日が最後。その身体の特異性からして、彼らは座に帰ることはない。

そもそもキャスターが聖杯戦争に召喚されること自体が例外中の例外なのだ。人類の三分の一を単独で葬った悪であり、守護者に討伐された存在が一体なぜ召喚されたのか。いくら聖杯の中身がアレだったとはいえ、何処かに歪んだモノが働いている。そう思わずにはいられない。

第四次聖杯戦争。キャスターが召喚されたのは偶然だったのか。あの時、確かに英霊を召喚する手順は完璧だった。血染めの魔法陣は正しくキャスターを召喚するための触媒足りうる。しかし、姿を現したのは全盛期ではない状態でのキャスターだった。

思考回路も歪だった。目覚めたばかりの純粋な悪意と、長年の戦いで得た知識。それらがごちゃ混ぜになった状態が第四次聖杯戦争の時だった。

後から考えてもその行動に全くの整合性がない。マスターがいなければ消滅するというのに真つ先にマスターを殺害。そして僅かの間でも現界できるようにマスターの魂を同化させた。

読心術を使つて安全に情報を得られたというのに英霊が出揃う中に現れたり。

とにかくやつていることがめちやくちやだった。慎重なようで無鉄砲、子供のよう大人のよう。確かにその行動のおかげで動きは読まれることは無かった。それでも自身に対する不信心は拭えなかつた。

そして、敗北してからは何故か聖杯の中に留まつていた。普通なら座に還るはずなのに。

キャスターは世界を観測する術を持たない。過去に何度かそれを望んだことはあるが、自身の願望は自身の器に反映されることは無かつた。

故に、今回の聖杯戦争でキャスターが望むのは、第二魔法。キャスターが真に望んでいるものを実現するための道具だ。

魔術師には理解できないだろう。到達点ともいえる第二魔法を自身の願望の為の道具として利用しようというキャスターの考えは。

だが、キャスターが望むのは、彼女との最初の約束を果たすためのもの。そのためならば、第二魔法すらただの道具となるのだ。

Phase. 16

朝が来た。恐らく今日が第五次聖杯戦争の最終日になるだろう。それはこの聖杯戦争の参加者にとって、最も過酷な戦いの始まりである。

キャスターは徹夜で準備をしていた。聖杯の起動には何の問題もない。小聖杯も手の内にあり、場も整っている。残るは敵対している2騎のサーヴァントを打ち倒すのみ。

魔力は十分に確保してある。人形も完成した。こちらの優位はほぼ揺るがないと言ってもいい。

キャスター陣営の最終的な戦力はこれまでの聖杯戦争では類を見ないほどの強力なものだ。

魔術に長けたキャスター、最優のセイバー。それら2騎のサーヴァントに加え、キャスターから直接の指導を受けた琴音、更には封印指定執行者までいる。それだけではない。決戦場はこの場である限り、キャスターは自身のステータス以上のスペックを発揮することができる。既にこの柳洞寺を含む円蔵山一帯はキャスターの陣地と化してい

る。今や魔法すら使えるほどに陣地は完成しているのだ。

「んー。終わったー」

キャスターは大きく伸びをする。聖杯の起動準備を終えてから不眠不休で作業を続けていたのだ。霊体にとって肩の凝りなどないが、気分的にも身体が固まっている感じがしている。

伸びをしているキャスターに琴音が近づいていく。部屋で寝ていた琴音はまだ眠そうではあったが、日課の魔術の鍛錬を始めていた。

最初はコップの中の水を操り顔を洗う。さっぱりしたところで本格的に操作を始め、空中に水で文字を書いたり、地面に水の染みで絵を描いたりしている。

そこまでしたところでキャスターから声を掛けられた。

「ねえ、琴音ちゃん。あの時の本、持ってる?」

『今は持っていないよ。家に置いてきちゃった』

「そっか。じゃあしようがない。transitus^{転移}」

キャスターがお馴染みの呪文を唱ええると、手元には件の本が現れていた。

「さてと、最後の仕上げをしますかね」

キャスターはそう言うのと本を地面に置く。

「琴音ちゃん、少し離れてて」

琴音が言われたとおりに離れたのを確認すると、キャスターは目を閉じ呪文を紡ぎ始めた。それに呼応するように魔法陣は展開していく。

「Eggo in somnis anima mea,
 Pearl River reversus est de vase
 negligentiam gererem fragmentum.
 Nomen SORA.

Forma in anima Heavens feel,
 Vas ad Deum qui fecit pupa.
 Recrearis, Et familia mea」

その詠唱はこの世の誰も聞いたことのないものだった。魔法陣ではなく魔法陣を使った真正銘の魔法。紡がれる呪文はキャスターのオリジナルだ。

「Meum nomen est RIKU,
 Tantum magicae manentibus lator quisquam」
 詠唱は終わった。しかし魔法陣は未だ起動中で魔力が魔法陣の中を循環している。文字の書かれていない異質な魔法陣はいくつもが重なり合い幾何学的な模様を生み出す。やがて、複雑な魔法陣は一つの円となった。

そして、遂に魔法は発動した。キャスターの身体から途轍もない圧迫感が発せられ

る。サーヴァントにも勝るそのエーテル体こそが物質化した魂そのものだ。やがてそれはキャスターが創り上げた人形に入り、その姿を変えていく。

変化は一瞬だった。一際明るい光が発せられた後、本のあった場所にいたのは十歳くらいの少女だった。

「魂の定着に問題はない？ ソラ」

「何も問題ないよ。身体中の魔術陣にも異常はないし、完璧だね」

ソラ、とキャスターは呼んだ。確かに琴音にも彼女の姿に見覚えがあった。夢の中の彼女の姿そのままだ。

「やあ、琴音ちゃん。こうやって生身の身体で会うのは初めてだね。私はソラ・チェラーシス。改めてよろしくね」

そう言つて笑顔で手を差し出すソラ。琴音も笑顔でその手を握り返した。



「士郎、桜、今日は学校は休みなさい」

凜は手元にあつた本が消えたのに気付き二人が学校に行くのを引き止めた。

昨夜、アーチャーが大怪我をして帰つて来て以降、三人とも寝ずにいたので正直に言

うと学校に行く気力は無かった。おそらく凜が引き止めずとも自然と休むことになっただろう。

「恐らく今日が最後ね。アーチャーはあんなになっちゃって大変だけど、本人がなんとかするって言ってるから今は信用するしかないわ」

「今日が最後って、なんか確信でもあるのか？」

「ええ。今はそんなに顕著でもないから分からないけど、アーチャーが言うには、円蔵山一帯に強力な陣地が形成されてるわ。私もちよつと確かめてみたけど間違いないわね。あの中にどれだけの魔力を蓄えてるのは分からないけど、明らかに今までとは違うわ」

「私も使い魔を飛ばしてみたんですけど、結界に弾かれて中は見れませんでした。兄さんが言うには、最後の準備に入ってるんじゃないかって」

「そうでしょうね。そして、私たちは恐らくあの転移魔術で結界内に強制的に転移させられるわね。あつちが自分の優位を捨てる必要はないんですもの。指定転移なんてもやってのけるんだからそれ位はできると思っていた方がいいわね」

二人の会話についていけない土郎は席を立つと朝食の準備を始めた。本当は聞いていなければいけないのだろうが、朝食も重要だ。腹が減っては戦はできないのだから。

土郎がテキパキと朝食の準備をしている間に二人の間で結論がたようで、凜は一旦

自宅に帰るといつて出て行ってしまった。

「二応遠坂の分は残しておくか……」

凜の分を器によそい冷蔵庫に入れる。桜はこのまま士郎の家に残るそうだ。

「先輩、何か手伝うことはありませんか？」

「いや、もう出来るから座って待っていてくれ」

その光景はいつもの日常と全く変わりがなかった。………琴音がないことを除いて。



深夜0時。

約束の時を迎えた綺礼は円蔵山の麓、柳洞寺の門前にいた。

「ようやく私の願いが成就する時が来たようだな」

「残念ね。それを見られないなんて」

少女の声が聞こえて振り向いた途端、綺礼は痛みを襲われた。視点も低くなっている。目を凝らすと、自身の下半身がないことに気づいた。

「貴様——ッ」

「一片も残さずに消えな。魂喰い」
イートスキル

それがキャスターの宝具であると感じいた時にはもう遅かった。視界は黒で染まり、世界も黒に染まっていく。心臓からアレが抜けていくのが知覚できる。

そして、言峰綺礼はこの世から姿を消した。

それを成したキャスターはそれが何でもないことのようにその場を一瞥することすらなく転移魔術で帰っている。

キャスターは嘗て本殿があった場所に立ち、皆の準備が終わっていることを確認すると、声を挙げた。

「Sed orci velum aperia bellum!」
さあ、戦いの幕を開けよう

予め敷設してあった魔術陣が起動し、転移魔術が発動する。

そして、現れたのは、士郎、凜、桜、ライダー、アーチャー。

迎え撃つは、キャスター、ソラ、琴音、セイバー。

遂に第五次聖杯戦争の最後の幕が切って落とされた。

Phase. 17

理解できなかった。

気付けば倒れていた。

何が原因でどうしてこんな結果になったのか誰にも理解できているはずもない。

ただひたすら黒。

囁きのように聞こえてくる声は怨嗟に満ちている。これを呪いと呼んでもいいのだろうか。

違う。これはそんな生易しいものじゃない。

そう。まさに世界にあるすべての悪と名のつくものの集合体のような――



ふと頭の中に送り込まれてきたイメージを払うように凜は頭を振った。

まぎれもなく今のは現実だ。それが彼女には理解できてしまう。周囲を見れば、自分以外誰もそんなそぶりは見せていない。あのイメージを見せられていないのだろう。

「凜、私の宝具を使う。詠唱の時間を稼いでくれ」

「……ええ、分かっている。桜！ 頼んだわよ」

「はい。ライダー、キャスターとセイバーを。私と姉さんはあの見慣れない少女を、先輩は琴音さんをお願いします」

凜は直ぐに頭を切り替え、両手に宝石を握った。この程度では気休めにしかならないだろうことは分かっている。もしあの少女が想像している通りだとすれば、現代の魔術師では相手にすらならない。

そして、士郎も投影で作りに出した剣を手に琴音に向かった。

一方のキャスターたちはそれをただ見ていた。

自分たちが優位であるゆえの余裕を見せているのか、何か思惑があつてのことかは分からない。

「リク、あと何秒？」

「122秒。アーチャーの固有結界が展開されたら、一気に終わらせるよ」

『ねえ、ちよつと士郎のところ行ってくるね。言いたいこともあるし』

「いつてらっしゃい。ボクたちのことは心配しなくていいから思いの丈をぶつけてくる

「いいよ」

士郎の方に向かう琴音をキャスターは笑顔で見送った。それが何よりの後押しとなり、琴音はこの10年間、どうしても言いたかったことを士郎に告げることになる。

琴音が行つてからすぐに攻撃は始まった。ライダーの鎖に、凜の寶石魔術、桜の虚数を使つた魔術。しかしそのどれもが完璧に防がれる。そこには詠唱も動作も無かつた。

「無^ノ工^ア程^クで魔術を使えるつていうの!？」

「ううん。きちんと工程はふんでるよ。………私の身体に刻むつていう方式でね」

そう言つてソラは袖を捲り上げる。

そこには数々の魔術陣が彼女の肌に直に刻み込まれていた。

そのあまりの光景に凜は吐き気を催した。

目で見える範囲だけでも裕に1000は超えているだろう。彼女の言葉から察するに、それは身体中余すところなく刻み込まれているのだと考えられる。想像したくもなかつた。

そんな心情を読み取つたのか、ソラは言葉が続ける。

「私の身体の表面に刻まれた魔術陣の数は2500。当然眼球にもあるし、手足の爪の内側にもある。身体の内側にもいくつか刻まれてるよ。そして、その組み合わせによつて発動する魔術の数は100万を超えてる。でも、それだけじゃないの」

そう言つたソラの眼に魔術陣が浮かび上がった。

「この魔術陣は本来不可視のエーテルを見えるようにするもの。だから、こんなこともできる」

ソラは空中を軽くたたく。

それと同時に凜の後ろで人が倒れる音がする。

振り向いて見ると、桜が倒れ伏していた。身体中から汗を吹き出し、息も荒くなっている。

「一体何をしたの!」

「エーテルを辿ってダメージを与えたのよ。ほかの属性と違って虚数はその場にエーテルを残すの。今は魔術が使われて時間が経っていないから本人とまだ繋がってたのよ。だから、そこをちよつと刺激してあげただけ」

驚きで声が出なかった。その発言が本当なら桜は魔術を使えない。そして、発言が嘘ならなお悪い。いつその矛先が凜に向かうとも知れないからだ。

「ほらほら、時間を稼ぐんでしょ? だったら頑張りなよ」

そう挑発的に言うソラは、どこまでも余裕そうに立っていた。



キャスターたちが戦い始めた傍らで士郎と琴音は対峙していた。琴音は礼装を起動させ、士郎も剣を握っている。

「琴音、絶対にキャスターは間違ってる。今からでも遅くはないからキャスターを止めてくれないか？」

開口一番、士郎は琴音を説得しようとする。

『なんで絶対って言いきれるの？』

「世界を滅ぼそうとしたんだ。間違ってるに決まってる」

『それだけ？ 士郎はいつから人伝の話だけで当人を理解できるようになったの？』

「それだけじゃない！ 魂喰いを容認するような奴を信じられるわけないだろ！」

『容認したから、何？ 実際にキャスターがしてるところでも見たの？』

「見てはいないさ！ でもその思想があるだけで危険だろ！」

二人の会話はヒートアップしていき声も大きくなっていく。

『一体何様のつもり？ まさか正義の味方とか言うんじゃないよね』

「な、何が言いたいんだよ！」

士郎は言葉に詰まった。まさにそう言い返そうとしていたからだ。

『切嗣さんの真似がしたいのか何なのか知らないけど、士郎がやってるのは正義の味方どころか、そのごっこ遊び以下じゃない！ ただの自己満足、自殺志願者じゃない！』

折角士郎を巻き込まないように頼んでセイバーから引き離してもらったのに！」

それは琴音の本心だった。士郎では聖杯戦争は絶対に生き残れない。その確信があつたから琴音はキャスターに頼んでセイバーを遠ざけてもらった。しかし、当の士郎はそれが余計なことだと言わんばかりだ。

「聖杯戦争のこと聞いて黙っていられるわけないだろ！ 10年前みたいなことが起こつたらどうするんだよ！」

『10年前？ そのことを士郎が言うの？ 何も覚えてないくせに。その時の様子も！ 迫ってくる炎の恐怖も！ 家族の顔も！』

凶星だった。確かに士郎は家族のことは覚えていないし、実際の火災現場を覚えていない。士郎の記憶で最も古いのは切嗣が自分を抱き上げたところなのだ。

それでもその時の悪夢は見る。恐らく身体に染みついた恐怖が見せているのだろう。だから、無意識のうちに夢が事実であつたと思ひ込んでいた。そして、自分のことをあまり話さない琴音もそうであると思つていた。

だが、それは違う。目をつむればあの地獄が今も鮮明に思い出せる。原型を留めていない家々、あちこちから聞こえる呻き声や泣き声。隣家の夫婦は既に事切れていた。自身の両親もまた同じだった。

入院してからも、琴音の苦悩は続いた。目をつむれば、あの日の悪夢が見え、眠るこ

とすら出来ない。声も出なくなっている。近くに住んでいた祖父母も亡くなっており頼れる親族もない。切嗣に引き取られ、藤村大河という底抜けに明るい女性に出会わなければ、恐らく今も入院しているか、自殺していただろう。

だから彼女は誰よりも親しい人を守るという気持ちが強いの。士郎もまたその例外ではない。親しい一人のためなら迷わず無関係の他人を見捨てるだろう。しかし、士郎は自身の犠牲を厭わない。それが琴音にストレスを与える。今まではギリギリのところまで我慢していたがもう限界だった。

周囲の景色が変わり始めているのを気にもせず、琴音は叫ぶように心のうちを言い放つ。

『士郎自身は一体何がしたいの!? 誰かを助けたいならそんな他人を傷つける剣^モばっかり作つてないで治療魔術でも練習したらいいのに! 適正何て関係ない! 人を救う手段は魔術だけじゃない。医学を勉強したっていい。ねえ、答えてよ、士郎。何がしたいの? 切嗣さんの思想じゃなくて、自分で考えて、したいことは何?』

いつの間にか琴音は魔術の声ではなく自分の声で叫んでいた。そして、士郎は答えを返すことが出来ずにいた。



世界が変わった。夜の世界は書き換えられ、どこまでも続く荒野になった。墓標のよ
うに地面に刺さる剣はそのすべてが複製品。

自身の理想ではなく他人の理想で生き、その行動すべてが誰かの模倣に過ぎなかつた。手に持つ武器も、自身の内面も、すべてが模倣であった男の世界はやはり偽物でし
かなかつた。

「ソラ、準備完了だ。始めるよ」

キャスターの言葉に、ソラがアーチャーに向かって駆け出す。アーチャーも剣を使い
接近させまいとするが、ソラは気にも留めない。

ソラの身体に刻まれた魔術陣が全てを弾く。そして、あつという間にアーチャーの眼
前に到着した。魔術によって強化されたソラの一撃でアーチャーは起き上がることす
らままならない。

「その力、私の好きにさせてもらおうよ」

ソラは一際大きな魔術陣を展開すると、アーチャーの頭を掴んだ。

変化はまずマスターである凜にあらわれた。焼けつくような痛みを感じ、その部位を
見てみると、令呪が薄れていた。残り一画であった令呪は外からの干渉によって着実に
奪われている。そうはさせまいと抵抗しても、全く意味がない。ほどなくして凜はマス

ターとしての権利を失った。

もちろんそれを行ったのはソラだ。彼女は自身の左手に現れた令呪を確認すると、強い意志を込めて令呪を使う。

「令呪を以って命じるわ。アーチャー、魔力の続く限り固有結界を展開し続けなさい」

令呪の効果はたちまち現れる。一瞬とはいえマスターを失ったことによる魔力不足で綻びの生じていた固有結界は元の姿を取り戻した。

「リク、こっちも完了だよ！」

「ん、じゃあ、始めようか。聖杯降誕の儀式を！」

Phase. 18

儀式を始める。そう言ったキヤスターの背後に祭壇が現れる。壇上には今回の小聖杯であるイリヤスフィールが寝かされ、護衛のようにセイバーとバゼットが両端に控えている。

「ああ、そうだ。セイバーとアーチャーは生かしておかなきゃいけないから魔力が足りないのか。……うん、取り敢えずライダーには死んでもらおうか」

そう言つてキヤスターは手を振りかざす。その動きに合わせるように無数のゴーレムが生み出されライダーに向かう。

人間を模つたものから竜までその種類は様々だ。一つ一つではライダーには遥かに及ばない。それでもいくらか倒しても無限と云つていいほどに生み出されるゴーレムは着実にライダーにダメージを与えていく。

「パターンG、百腕？カクテツヤセルPの巨人」

地面に手を着けたキヤスターが呟くと、次々に腕が地面から突き出して逃げ場を奪つていく。ライダーは自身から生み出された天馬に乗つて空に逃げるが、そこにはゴーレ

ムの竜がいる。それも一頭ではなく何十頭も。

マスターである桜や凜も何とかしようとしているが、ソラが片手間で妨害しているためライダーの援護は出来ていない。

「ライダー！ 宝具を使って！」

「分かりました。……………騎^{ベルレ・フォーレン}栄の手綱！」

ライダーの宝具は、竜の軍団を吹き飛ばした。しかし、その残骸が集まり再び竜が作り出される。数は減っているが、それでも多い。火を噴いたりすることはないが、翼が鋭利でお互いがぶつかるのを気にせず突っ込んでくるため躲すのも精いっぱいだ。

「そ　ろ　そ　ろ　終　わ　り　に　し　よ　う　か。

Serpentium ^蛇 _は ^地 _に incidunt ^墮 _ち in terram」

ライダー用に組まれた魔術がライダーを地に落とす。立ち上がる隙もなくライダーは自在に動く地面に捕縛された。力を込めて抜け出そうとするが、びくともしない。

「さようなら、ゴルゴンの三女」

抵抗の甲斐もなくあっさりとライダーは首を落とされた。桜の手からマスターの証である令呪が消え、ライダーの存在は小聖杯に吸収される。

勝ち目がないにも関わらずマスターに攻撃を仕掛けようとする凜を軽くあしらい、キヤスターは形を現しつつある聖杯に近づいていく。

「さて、あと一つ分はボクの中にある魂で代用しようかな。ま、一般人でも10万人分くらいあればいいよね」

キャスターの身体から何かが抜け出て小聖杯に取り込まれていく。

ついに準備の整った聖杯はその姿を表した。姿形こそ金色の杯だが、その存在感は圧倒的だ。この場にいる誰をも凌ぐ魔力、そして、それとともに感じられる邪悪の気配。

「何よこれ、こんなものが聖杯だっていうの!？」

「そうだよ。これが聖杯の正体。第四次聖杯戦争では街を焼き尽くした呪いの結晶。人の願いを破滅的な方法でしか叶えられない欠陥品。第三次聖杯戦争でアインツベルンの反則手によって汚染されてしまった聖杯。それが必死になって争ってきた魔術師が最後に見る絶望よ」

凜の叫びにソラが答える。そしてその答えは最悪だった。

「最後に残ったのが魔術に長けた者じゃない限り聖杯は正常な機能を取り戻すことではない。それを理解して、自分の願いでは全人類を滅ぼしてしまうと分かってしまったから衛宮切嗣は勝者でありながら聖杯の破壊を選んだの。でも、私たちは違う」

「どうするっていうのよ」

「聖杯の中にあるこの世^{アレン}全^{リマ}ての悪^ユを引き抜いて消滅させる。その為にはきちんとした手順で聖杯を作り出す必要がある。加えて、世界に私たちの能力が縛られないように隔離

する必要があった。ま、それは固有結界っていう形で何とかしたけど。もしアーチャーがカイに負けてたらソラの陣地で似たようなことをする予定だった」

「だからあそこまで嚴重に結界を敷いていたのね。でも、引き抜くなんてこと出来るの？」

「出来るよ、凜ちゃん。リク君の真名知ってるでしょ？」

凜の問いに答えたのは琴音だ。魔術の声ではなく、しっかりと自分の声で喋っている。

「琴音よね？ そんな声だったのね。士郎は？」

琴音は無言で自身の後ろを指さす。そこには士郎が倒れ伏していた。

「生きてるわよね？」

「当たり前でしょ。言葉で言っても分からなかったからちよつと……ね」

傷跡は見つけられないが、恐らく琴音が治したのだろう。意識は失っているようだが。

「それにしても随分すつきりした顔してるのね……いや、今はそうじゃないわ。……確かに私はキャスターの真名を知ってるけど、それがどうして大丈夫ってことに繋がるの？」

「あ、そこまで詳しくは知らないのか。リク君はね、第三魔法の使い手なの。だから、聖

杯の中に根付いた魂を引つ張り出すくらいなら出来るよ」

「そう。でも私にもリクにもこの世^{アレンリマ}全ての悪^ユを浄化するほどの力が出せない。というよりも、私たちの力はどちらかといえればあつちに近いから、対極の力が必要だった。それは、アーチャーでもライダーでもアサシンでもバーサーカーでもダメだった。ランサーは出来る可能性はあつたけど、マスターがダメだった。それで残つたのが、セイバー。人々の願いの結晶である神造兵装を使うセイバーの協力が必要不可欠だった」

こうして話しているうちにも徐々に黒い太陽という形で聖杯の暗黒面が現れていく。この世の全てを呪うかのようなそんな印象を与える不気味なものだった。微かに囁き声も聞こえるような気がする。

「凜ちゃん、それに桜ちゃんも。あの声を聞かないで。あれを聞いたら常人では耐えられないから」

琴音の注意に声から意識を逸らそうとするが、言われたことで余計に気になってしまいい先程よりも鮮明に聞こえるようになってしまふ。その声は殺意に満ちている。その様子を見たソラは水を掛けることで強制的に意識を逸らした。

「ほら、しっかりしなさい。まだまだやることはあるんだから。その時になったら手伝ってもらおうからね」

「手伝うってなにをよ。引つ張り出したらセイバーの宝具で片づけるんじゃないの?」

「そう簡単にいくならこんな大仕掛けにはしないよ。さ、もうそろそろだよ」

黒い太陽はその大きさを増していた。先程までは目測で握りこぶし大だったのが、今では何倍にも大きくなっている。それに伴って、何かの形をとろうとしているようにも見える。

「アーチャー、あなたにも手伝ってもらおうから回復させておくね」

ソラは魔術陣を展開し、アーチャーの左腕を修復する。一分も経つことなく左腕は元通りにくつついていた。

「何か問題はある?」

「特にないな。それで、君は一体何を危惧しているのだね?」

「あの呪いの塊がどう動くか分からない。中の意思は消滅を望んでるらしいけど、それは恐らく一つの側面に過ぎない。だとしたら、最悪今までの聖杯戦争でのサーヴァントが出てきて襲い掛かってくるかもしれない」

「ちよつと、そんなことになつたらどうするのよ!?! 私や桜なんか一分も持たないわよ!」

凜の脳裏にはあのバーサーカーが複数いる場面が想像されていた。桜も似たような想像をしているのか顔を青くさせている。

「あ、私士郎起こしてくるね」

琴音は気にすることなく土郎を起こしに行く。琴音は事前にそのことを言われていたので驚いてはいない。現実には目の前にしたときどうなるかは分からないが。

「ソラ！ 構えて！」

キャスターの緊迫した声が聞こえ、ソラが咄嗟に防御魔術を使うと竜巻にも匹敵しようかという突風が襲ってきた。同時に土煙も舞っているため視界もない。

そして、視界が晴れた時、そこには最悪の事態が待っていた。

Phase. 19

土煙が晴れた。

そして見えてきたのは、生き物のように動く漆黒の大地だった。

目を凝らせば、その大地は無数の怪物で埋め尽くされていることがわかる。それが何であるとは言いきれない。見た目だけで言えば4足歩行の獣だ。

「最悪ではないけど、それなりに悪い状況だね。ソラ、まずは減らすよ」

「そうだね。これだけいたら本体に届かなさそうだし。セイバー、アーチャー。魔力の心配はしなくていいわ。アレを減らしてくれる？」

ソラは魔力の心配は要らないと言った。それに、アレは呪いそのものようだ。手加減をするつもりは両者には一切なかった。

「分かりました。用意が出来たら呼んでください」

「固有結界の維持の方は大丈夫なのか？」

「魔力は心配しないで言って言ったでしょ。それにさっきの令呪の効果忘れたの？」

「そうだったな。ならば遠慮なくいかせてもらおう」

そう言つてアーチャーは手に弓を投影する。

「カラドボルグII
偽・螺旋剣」

アーチャーの一撃が敵の一団を消滅させる。それを皮切りにセイバーも集団に突っ込んでいく。

それを見届けたキャスターは琴音たちに振り返る。

「琴音ちゃん、出来る限りでいい。アレを減らしてくれる？」

「分かった。リク君も頑張つて」

「ん、声が出るようになったんだ。……じゃあ、心配要らないね」

「任せて！」

琴音が自分の声で話しているのを聞いて少し驚いたキャスター。そして、士郎、凜、桜の目を見て任せられると確信した。

その内面を覗いたかのように琴音は任せてと自身に満ちた声で言った。

「士郎は私と、凜ちゃんは桜ちゃんとのペアに分かれるよ」

「ああ。琴音、さつきは悪かったな」

「今は謝るより先にやる必要があるでしょ。謝るのはそのあと。じゃ、行くよ！」

起
satus—usque、動 月 靈 髓 液
ヴォールメン・ハイドララム

トレス、オン
「投影開始！」

琴音は自身の礼装である月ヴォールメン・ハイドラグラム 靈 髓 液を起動し、右手には切嗣の愛銃であったトンプソン・コンテNDERを構える。銃弾は既にキャスターの魔術が籠められたものが装填されている。

士郎が作り出したのは今までのような稚拙な剣ではなかった。そこから中に見本となるべき剣があり、投影という自身の力の源を知った士郎の作り出す剣はアーチャーのものに迫るほどだった。

「全く、二人ともやる気出しちゃって。これじゃ私たちもそうするしかないじゃない。宝石だって無限にあるわけじゃないのよ？」

「姉さん、今はそんなこと言ってる場合じゃないですよ」

「分かっているわよ。でもこの後の出費を考えると怖いわ。それより桜、もう大丈夫なの？」

凜が心配しているのはソラにやられた一撃のことだ。直後には起き上がることにすらままならなかったのだから心配でないはずがない。

「大丈夫ですよ。今はもうお爺様の力も全部頂いたので、姉さんよりも強いですよ？」

「言うわね。じゃあ、見せてもらおうかしら？」

「いいですよ」

桜は礼装を起動する。その礼装は兄である慎二が桜の特性を如何なく發揮するため

に考え出したこの世に二つとない特注品だ。虚数というレアな属性と、間桐の吸収を併せたその魔術はキャスターの宝具に似ていた。

桜の影が蠢き形を取り始める。それは楯のようであり剣のようであった。琴音は水銀で似たことをしているが、桜が使うのは影である。

その光景に驚きながらも、凜は両手に宝石を握りしめる。どの宝石も大きく、色も鮮やかな物ばかりだ。そこに込められたものもそれ相応のものであろう。

「さ、行くわよー！」

そして、少し離れた場所にいたキャスターとソラも覚悟を決めていた。

「さて、ボクたちも行こうか」

「うん。まずは力を元通りにしないとね。あの力、今なら制御できるから」

二人は両手を繋ぐ。決して離さないように。離れ離れにならないように。

「*Quinonon peribit anima mea*」

「*Duc nos in s·cula effercio*」

「*Signatum ad priorem potentiam*」

「*Duo vincula religare, ut est rei praeterita*」

二人で一つの詠唱を紡いでいく。それは過去、彼らがお互いの力を封じるために行つた魔術を解呪するためのものだ。

精神が摩耗したままその身に余る魔術を植え付けられたソラ。機能として与えられた魔力収集が悲劇を齎したリク。その力を封じ、普通のヒトとして暮らすために掛けた制限魔術は二人がいてこそ掛けることが出来、解呪することが出来る。

『remission^初is originalis^放』

最後は二人の声が重なった。

二人の真の力が解放されていく。その余波だけで周囲に群がる敵は消し飛んでいく。そして、遂に二人は自身の力を取り戻した。

聖杯の器として造られ、欠陥品だと疎まれ、最後にはアインツベルンを滅ぼした第三魔法の担い手、リク。

実験体として両親に売られ、残虐で過酷な環境に置かれ、魔術兵器と成り果てたソラ。「ああ、この幾人もの感情が流れ込んでくる感覚、久しぶりだ。そっちはどう？ ソラ」

『もんだい』はないよ。この『はなしかた』もじきに『もどる』から」

「その喋り方も久しぶりだね。バゼットさん、一人で行ける？」

「問題ありません」

「そう。じゃあ、琴音ちゃんたちの援護に行つてあげて」

所在無げに佇んでいたバゼットに声を掛けるリク。

その返事はいつも通りの事務的なものであったが、その実力は分かっている。更に今

はリクの魔術によつて本来の実力以上が發揮できるのだ。問題などあるはずがない。敵は数こそ多いが一体一体の力はそれほど強くない。

琴音たちの援護を任せ、リクとソラも戦いを始めた。



セイバーが剣を振るうたびに敵の一団が吹き飛ぶ。

魔力の節約を考える必要のなくなったセイバーは正に一騎当千であつた。敵が単体ではそれほど強くないこともあり、数を減らすのは簡単に思えた。しかし、如何せん数が多すぎた。無限にいると思えるほど一向に減る様子は見えない。

それでもセイバーは剣を振るい続ける。かつてブリテンの地に攻め込んできた蛮族はこれよりも一人一人が格段に強かつた。そして、数こそここまでではないが、自軍の数十倍ということも常のことであつた。

当時はセイバーの傍には円卓の騎士が居た。その誰もが強く、当時のブリテンは最強

と言えた。しかし、今は傍に彼らは居ない。

こうして一人で戦うことは無かった。そして戦っているうちに自身の抱える願いにも疑問が沸いてくる。

王の選定のやり直し、ブリテンを滅びの運命から救う。それはセイバーが聖杯戦争を戦う無二の理由だ。だが、それは本当に願ってもいいものなのか。

もし新たな王がブリテンのことよりも自身の願望の実現のみを思う暴君であったなら。今戦っている敵のように蹴散らされるのはブリテンの民ではないのか。その時自分はどうするのか。

そもそも滅びの運命を救ったとしてその後はどうなるのか。現代に召喚されたことで知ることが出来たものもある。ブリテンという国は滅びたものの、未だ伝承やお伽噺で自身が未来で復活する王として信じられているということもその一つだ。

結局どこでどう間違ったのか。剣を抜いたところからなのか。女であることを隠していたからなのか。自身の子を認めなかったからなのか。それとも——間違っただけなのか。

剣を振るいながらなおも考える。

思い出すのはキャスターの過去。夢という形で見たキャスターの過去は壮絶であった。それこそ、全てをやり直したくなるほどに。だが、キャスターはそれを望んではい

ない。

なぜなのか。それを考えて、ようやくセイバーは思い至った。

キャスターはソラと出会うことが出来たことを無かったことにしたくないのだ。彼らの関係は恋人のようであり、家族よりも絆が深い。それを無かったことにしてまでやり直したいことなどないのだ。

では自身はどうか。

確かに蛮族との戦いは苦難を極めた。退けるために村を見捨てたこともある。だが、確かに民の間には笑顔があった。戦いの間の僅かな平和であっても、ブリテンの民は笑顔だった。騎士たちもそうだった。

それらをすべて無に帰してまで叶えたい望みではなかった。ブリテンが滅んだのは必然であった。しかしそれは過去のことだ。苦難も歓楽もあり、そしてその全てが今の自分を形作っている。それをセイバーは忘れていた。

『王は人の心が分からない』……確かに私はそうだったようだ。もう私は悩まない。私は先へ進む！』

迷いを捨てたセイバーの周囲に変化が起こった。

魔法陣が広がる。そしてそこからはかつての仲間が姿を表した。

「ガウエイン、トリスタン、ペティヴィエール、ガラハッド……それにランスロット」

「王よ、貴方の求めに応じ馳せ参じました。指示を」

ガウエインがセイバーに指示を求めた。

「あの獣を一扫する。出来るな？」

「仰せのままに」

「アーサー……」

「ランスロット……」

「私は貴方に裁いて欲しかった。だが、それは間違いだったようです」

そういつてランスロットはキャスターのほうを見る。

「彼に教えられたのです。自身の罪を他人に裁いてもらうのは『逃げ』だと。私は未だ貴方を赦すことは出来ない。ですが、私は自分の罪にも向き合わなければなりません。ですから、今回のこれは、私の罪滅ぼしです」

ランスロットは言うだけ言って敵に向かっていった。

その姿は反乱を起こした「裏切りの騎士」ではなく、円卓一の技量と言われた「湖の騎士」のものだった。

「やはり私は間違っていた。彼らとの絆を無にすることがあつてはならない」
決意を新たにしたセイバーは剣を握り直し、戦友の下へ駆けていった。



アーチャーはセイバーの一連の行動を周囲の敵を排除しながら見ていた。

かつてエミヤシロウであった彼が共に戦ったサーヴァントであるセイバー。今も僅かにその時の記憶が残っている。

「君もついに答えを得たというわけか。他ならぬ自分自身の手で」

では、自分はどうか。アーチャーとしての自分は自身である衛宮士郎を殺し、自分の存在を消すという望みでこの聖杯戦争に参加した。それは今も揺るぎのない望みであるが、同時に殺す必要がないとも思っていた。

それは環境の違いからだ。琴音という家族が居て、衛宮士郎の欠点を指摘し矯正しようとする彼女の存在があれば、自分のような正義の味方にはならないと何故か確信できた。

「ふ。私にも彼女がいたが、それを無視した結果がこれか」

自虐的に呟くアーチャーは手を止めない。自身の手にする愛剣、干将莫邪は息子が父親の復讐を遂げるための剣であり、妻の身を捧げて造られた

劍でもある。

それを自分への復讐のために使ってきたアーチャーは、いつしか最愛の女性の姿すら薄れつつあった。

それを思い出させたのは皮肉にもカイという自身の同類だった。傷は確かにアーチャーを蝕んでいたが、それは同時に最愛の女性の姿を思い出させるものでもあった。

「何が傷だ。これは今の私にとつては祝福としかなり得ない。間違つたな、正義の味方」
劍を破棄し、新たに弓を構える。

それは何の変哲もない弓だった。まるで学生が部活で使うようなものだった。
しかし、それは最も手に馴染み、使いやすいものであった。

「君の弓を使わせてもらおう。大丈夫だ。セイバーではないが、もう私も迷うことは無い」



「士郎、右！」

「分かつてる！」

琴音の援護で士郎は優勢に戦っている。士郎は手にする武器が投影品であることを利用して使い捨てながら敵の数を減らしていく。一方の琴音はそうして攻め込む士郎が四面楚歌の状態にならないように気を配りながら礼装で迎撃し、時折魔術弾を使つて効率よく敵を減らしていく。

二人が一緒に戦つたことはない。ライダーの時も琴音は士郎を庇つただけであり、闘ではなかった。

それでもお互いが動きを理解し、無駄のない動きが出来ているのはお互いがお互いの性格をよく知っているからだ。

士郎は今それほどでもないが、自身の身の危険を省みず敵に向かつていく。琴音は慎重に攻め手を変えながら、自身を決して危険の中には置かない。

「もう一回！ 投影開始！」
トレース・オン

罅の入った剣を投げつけ、士郎は新たに剣を投影する。その僅かな隙を埋めるように琴音は魔術を使う。

「士郎、避けて！」

琴音の言に従つて士郎はその場から離れる。すると、つい先程までいた場所に何体もの敵が押し寄せていた。

「連係なんて出来ないと思つてたけど違ふのね。
Ventus, conciderunt」

風の魔術が敵を一掃する。だが、その残骸を乗り越えて次々に敵がやってくる。

既に士郎と琴音の魔力はかなり消費されており、このままではもたないことは分かっていた。

「士郎！ 凜ちゃんと桜ちゃんに合流するよ」

「分かった！」

そうして琴音と士郎は凜と桜が戦っている場所に向けて走り出した。

そして、凜と桜にも魔力の限界というものが見え始めていた。

戦い始めてからまだそれほど時間は経っていないが、何しろ数が多い。基本的に対多数を想定した魔術に乏しい桜では近くに寄ってくる敵しか相手に出来ず、遠距離広範囲の魔術が使える凜にも宝石の数という問題がある。

元々姉妹であるためコンビネーションでは問題はないが、この敵と戦うには彼女たちの魔術は不利にしかならなかった。

「桜！ あとどれくらいなら大丈夫!？」

「私はまだまだいけます！ 姉さんは宝石のストックは大丈夫ですか？」

「結構厳しいわね。一応使えそうな物は全部持つてきてはいるけど、あと10回くらいで無くなりそうよ」

「じゃあ、先輩たちと合流しましょう。たぶんあつちも同じことを考えていると思います」

「そうね。バゼットさん、それでいいですか？」

「了解しました。援護はしますから一直線に向かってください」

バゼットの意思を確かめてから二人は走り出した。バゼットの援護があれば難なく切り抜けるだろう。

「宝具が相手でないと思えないというのはいくつに不便ですね」

バゼットは自身の切り札の使い勝手の悪さに少々愚痴をこぼす。そうは言っても使えないものは使えない。キャスターから指導を受けたルーン魔術を活用してバゼットは二人の進行を妨げる敵を殴り飛ばしながら進んだ。



「パターンA、月の女神」？p r e m i s t

リクが女神の名を告げる。宙から光の矢が降り注ぎ周囲の敵を一掃した。

リクが持つ力の中で最も強く扱いの難しい自分自身の起源と同一の名をもつ魔術『実現』。

誰かの願いを叶え実現するという聖杯の器であるリクの起源は、あらゆるものに応用できる魔術となって使役される。『実現』で出来ないことはほとんどない。先程のように女神の一撃を再現することも出来る。出来ないものといえれば直接世界に作用するようなものや、魔法に該当するものだ。

この『実現』という魔術は力が封印された状態でも使用できるが、その応用範囲は狭く、ライダーの時に使われた百腕？k a t a r y x e l pの巨人も本来であれば巨人そのものが作られる。

「ん。どうやらセイバーが何か決意したみたいだね。ボクの中を使つて願いを叶えたみたいだ」

「それは良かったじゃない。さ、私たちも決着をつけないとね」

リクは身体から何かが抜け出たのを感じ、笑みをこぼした。それと共にセイバーの感情が流れ込んでいる。それは決意であった。

ソラもそのことが分かったようで同じように笑みを浮かべている。

「じゃあ、一気に行こうか。パターンZ、神々の王」

リクが実現魔術の中では最上位に位置するパターンZを使う。天空から雷が降り注ぎ、戦場全体を揺るがす。しかしそれでも数は減らない。総数としては減ってはいるのだろうが、次々に生み出されるため変化が見られないように思えてくる。

「もつと広範囲じゃなきゃダメみたいね」

そう言つてソラは両手を広げる。

全身に刻まれた魔術陣が起動し、それらが一つの魔術陣を作り上げていく。魔術陣を構成する線や文字も魔術陣の羅列から作られ、現代ではおろか神代でも見かけないであろう緻密で巨大な魔術陣が形成された。

更に両目にある魔術陣で構成を変更し、味方に被害が出ないように調整する。

「さあ、終わらせるよ！ Genesis fulgebunt!」

創世の名を冠した魔術は確かにあらゆる兵器を超越するものだった。魔術兵器として完成されたソラが使える最終技は生前一度も使われることは無かったが、想定される威力は敵国を滅ぼしてなお余りあると評価されていたのだ。

それを自らの意志で、眼の魔術陣での制御も行った状態で発動すればどうなるか。

その結果は一目瞭然だった。

あれだけの数が居た敵は一掃されていた。しかし、本体ともいえる黒い太陽は健在だ。

加えて先の一撃によりソラは魔力をほとんど使い果たしている。

更に悪いことに、再び敵が生み出されつつある。だが、この状況こそリクが待ち望んでいたものだった。

「セイバー、今だ！」

リクは遠くに見つけたセイバーに叫んだ。それに応えるようにセイバーの持つ聖剣は輝き始める。

「ガウエイン、道を開いてくれ」

「分かりました。王よ」

ガウエインが聖剣を構える。既に敵は生み出され、セイバーの方へ向けて侵攻を始めていた。

「散れ、エクスカリバー・ガラティーン 転輪する勝利の剣！」

擬似太陽が組み込まれた聖剣の一撃は敵を薙ぎ払い、黒い太陽への道を切り開いた。

そこをセイバーは疾走する。近寄ってくる敵は共に駆けるランスロットとガラハッド、ペデイヴィエールが処理し、セイバーの眼前の敵は遠くからトリスタンが射抜く。

そして、援護はそれだけではない。

「フルンディング
赤原猟犬」

Ventus flare Noli! Hirundo et humus

!

アーチャーが投影を使い撃ち漏らしを片づける。リクが魔術で援護する。

その場にいる誰もがセイバーの援護をしている。その意思を無駄にしないためにもセイバーは駆け抜けた。

そして、ついに間合いに捉えた黒い太陽は姿を変えようとしていた。

「そんなことはさせない! consequence、災厄覆す正なる法!」

リクが自身の魔術を使い宝具の効果を反転させることで黒い太陽を捕縛した。その捕縛から逃れるために形を変えようとする黒い太陽。

「さあ、セイバー。残る令呪全部で君に力を!」

令呪出のブーストを受け聖剣は一際輝きを放つ。

「約束された!」

セイバーはこの場の全員の意味を込め、人々の願いの結晶たる剣を振り上げた。

「勝利の剣!!」

一閃。

全魔力を込めた一撃は黒い太陽に直撃した。

呪いの塊であるそれを浄化していくように、聖剣の光は辺りを照らした。

「ありがとうな」

誰かの声が聞こえたような気がした。



光が晴れると、全員が元の場所に戻って居た。無限に広がっていた荒野は既になく、周囲の景色は柳洞寺のそれだ。

そして、かつて本殿があつたその場所には光り輝く杯が姿を現わしていた。

「あれが、聖杯……」

凜が呟いた。

「そう。あれが本物の聖杯。願いを叶える願望器であり、奇跡の象徴。さあ、誰が使う？」

ソラが問いかけた。

それに最初に答えたのはセイバーだった。

「私には必要ありません。この度の戦いで私は改めて気づいたのです。共に戦った仲間のことを無にしてはならないと」

そう言つてセイバーは姿が薄れつつある円卓の騎士を見る。

「私は良き王であろうとした。だが、そこには私個人の意思は介入しなかった。だからこそ私は人の心が分からぬと言われたのだろう。皆にも随分と迷惑を掛けただろう。済まなかつた」

そう言つてセイバーは頭を下げた。

それに対し、騎士はただ黙したまま一礼し、姿を消していった。

次に答えたのはアーチャーだった。

「私にも必要はない。既に私の願いは意味のないものと化した。まあ、凜がどうしてもというのなら奪つて見せるがな」

「いいわよ。そんなものに頼らないでも自身の力で願いは叶えるわ。だから、私もいない」

凜も聖杯はいらないと断つた。

横を見れば桜も同様に必要ないと首を振っている。

「じゃあ、バゼットさんは？」

「いえ、必要ありません。そもそも私は聖杯戦争では既に脱落していますから」

「そう」

少しの静寂が場を包んだ。

それを破つたのは士郎だった。

「俺もいらぬ。俺は望みがあつて参加したわけじゃないし」

「私もいらぬよ。声も出るようになったし、リク君とももう一度会えた。だから、リク君が使つて」

「じゃあ、ボクが使わせてもらうよ」

そう言ったリクはソラと共に聖杯に近づいていく。

「ボクの願いは決まつている。ボクとソラは世界を見てみたい。この世界だけじゃない。無数にある世界を！ 空の果てを！ 陸の果てを！」

果たして願いは聞き入れられた。

リクとソラは受肉を果たし、その身に新たな法則を身につけた。

既存の第二魔法、並行世界の観測に近い効果を持った新たな魔法は、確かにリクとソラの望みを余すことなく叶えてくれるだろう。その発動にはかなりの魔力を消費するようだが、問題は無い。

そして、願いを叶えた聖杯は消えた。

それと同時に、現世に召喚されていたサーヴァントも座へと還っていく。

「アーチャー、ありがとう」

「なに、礼を言う必要などない。むしろ助けられたのは私の方だ。……ああ、そうだ。ただ私の真名を言っていなかったな。私はエミヤシロウ。正義の味方のなれの果てさ」

言うだけ言つてアーチャーは消えて行つてしまった。残された凜は少しの間頭を抱え、そして叫んだ。

「先に言いなさいよ!! てか逃げるな!!」

「姉さん、もうアーチャーさんはいませんよ……」

「分かつてるわよ……土郎、アイツみたいになつちやダメだからね」

「あ、ああ」

なぜか鬼気迫る顔で言う凜の言葉に土郎は頷くことしか出来なかった。

そんな土郎にセイバーが声を掛ける。

「シロウ、最後まであなたの側で剣を振ることは出来ませんでしたか……」

「気にすんなよ。セイバーが鍛えてくれてたおかげで俺はここまで生き残れたんだ。だから、謝るな」

「シロウがそう言うのなら。では、お別れです。いつまでも達者でいてください」

「大丈夫だ。琴音もいるんだしな」

そう言つて土郎は笑つた。つられるようにセイバーも笑みを浮かべ、そして、姿を消

した。

そんな士郎たちから少し離れたところで、琴音はリクとソラと話していた。

「リク君……」

「大丈夫。ボクたちはこれから色々な世界を見て回るけど、いつでもここに帰ってこれるんだから」

「そうそう。だからこれが今生の別れってわけじゃない」

「うん。そうだよね……。ねえ、きつとまた、会えるよね」

『当然！』

リクとソラは声を合わせて言った。その顔は当然笑顔であり、自然と琴音の顔にも笑みが見え始める。そして、リクは一冊の本を琴音に差し出した。

「この本は？」

「これからボクたちが見て回る世界のことを記録されていく本だよ。いつ帰ってこれるかは分からないけど、その本を見ればボクたちが何をしているのか分かるでしょ？」

「……ありがとう」

「いいんだよ、お礼なんか」

リクは少し照れたように頬を掻いた。

「じゃあ、また会おう」

「うん。またね……リック君、ソラさん」

涙を流すのを必死に堪えて琴音は言葉を振り絞った。

「さあ、行こうか。ソラ！」

「うん。まだ見ぬ世界へ！」

琴音が瞬きをしたその瞬間、二人の姿は消えていた。

その場を琴音はじっと見ている。その瞬間を忘れないように。心にやきつけるように。

やがて、朝日が昇ってきた。

この世界の誰もが経験したことのないような激動の一夜は明け、新たなる一日が始まる。

凜に呼ばれた琴音は駆けていく。

いつかの再開の約束を胸に秘めて。

E p i l o g u s

リク君と共に戦った第五次聖杯戦争から70年が経ちました。

正常な機能を取り戻した聖杯だったけど、再び聖杯が悪い目的で使われないように、私たちが分解しました。

その時に一悶着あったみたいですけど、凜ちゃんが何とかしたみたいですよ。方法は聞きませんでした。何かあくどい笑みを浮かべていたので。

そうそう。その凜ちゃんは時計塔で主席になりました。ルヴィアさんと最後まで主席の座を争っていたそうです。二人の喧嘩(?)はそれからもずっと続きました。たまに私が仲裁に入ることもありましたが。

桜ちゃんは立派に間桐家の当主としてその務めを果たしていました。

結婚はしなかったみたいなので間桐家は桜ちゃんの代で終わりになっちゃいましたよ。でも桜ちゃんはそれでいいんだって言ってました。

バゼットさんはリク君から教えてもらったルーンのおかげで更なる活躍をしたそうです。あの聖杯戦争以降一回も会ってませんが、凜ちゃんの話に繰り返し出てきます

た。

士郎は……やっぱりというか、そう簡単に正義の味方になることを諦められなかったのか、卒業したらすぐに外国に行っちゃいました。それでも前のように何も考えずに突進するような考えはなくなつたので私の心配も少し減っています。

そして、私は慎二君と結婚しました。

子どもこそいませんけど、充実した毎日でした。私が家族を失つたということもあつて、孤児院をしています。どの子たちも優しい子に育つてくれて、今でも時々訪ねてくるんですよ。

そういうえば、ギルつていう子どもが来て、リク君から渡された本を読んで、それ目的で通つてくれるようになってから経営が良くなつた気がします。あの子は一体誰なんでしょう？　ずっと見た目が変わらないんです。

あ、魔術に関しては、実はあの聖杯戦争以降あまり使っていません。リク君がくれたあの本は何度も読み返してますけど、私が魔術を使う機会は50歳を過ぎてからはありませんでした。

そして、今。

もう凜ちゃんも桜ちゃんも士郎も慎二君ももうこの世にはいません。

私もそう永くはないでしょう。

悔いはありません。

でも、もう一度リク君に会いたいなあ。



琴音が開設した孤児院は元々不動産関係を手掛けていた間桐の家の人脈で冬木市郊外の小高い丘の上にある。

敷地内には緑が溢れ、四季折々の風景が楽しめる。

桜が満開になるうかという春。

自身がそう永くは無いことを悟った琴音は最期の時を孤児院で過ごす決めていた。

毎日朝早くに起きて日の出を眺め、起きてきた子どもたちに挨拶をする。食事もみんなと共に摂り、時には先生役として教鞭をとることもある。

最近はそのようなことは出来なくなってきたが、たまにあの本に書かれている物語を読み聞かせたりもしている。

特に人気なのは『魔法少女と魔法の物語』だ。大切な願いをかなえてもらう代わりに

街を魔女から守るその物語は、子どもたちが劇にするほどの人気だ。

その中の登場人物と知り合いだと言ったらどれだけ羨ましがらるだろうか。

きっと大騒ぎするだろう。会わせてほしいと言ってくるだろう。

その様子が容易に想像できて思わず笑ってしまう。

「琴音さん、楽しそうですね」

声を掛けてきたのは遠坂静。遠坂凜の次女であり、今はこの孤児院を経営している。交流の続いている遠坂家からは他にも何人かがこの孤児院で働いている。静は遠坂家でありながら魔術に関しては全く関与していない。魔術の存在は知っているものの、教わってはいないのだ。

「ふふふ。子どもたちに『魔法少女と魔女の物語』の登場人物と知り合いだと言ったらどうなるのか想像したら楽しくなっちゃって」

「ああ、あのリクって人のことですか。写真でなら見たことありますよ。お母様が持っていましたから」

「あら、一体いつの間に撮ったのかしら」

「それにしても『魔法少女と魔女の物語』かあ。私はその大人向けの方を知ってるからちよつと微妙な気持ちですね。私としては『魔法使いの子供先生』の方が好きですけど」

「あら、静ちゃんはそっちの方が好きだったのね。ふふ。人それぞれ好みがあつていい

じゃない」

二人の会話はとても穏やかで、琴音にとつてとても心地よいものだった。

静は仕事があるので事務所に帰って行つたが、琴音は杖を突いて手入れの行き届いた庭に出た。

少し歩いた先には桜の木があり、そこからは冬木を一望できる。

桜の木の側にあるベンチに座り、琴音は昔を思い出していた。

——小学生の時、初めて魔法を知った。

——それから、切嗣さんに引き取られて大河さんと出会った。

——第五次聖杯戦争ではリクと共に最後まで戦つて。

そうして昔を思い出している内に眠ってしまったのだろう。気づけば12時を少し過ぎていた。

昼食を摂った後、年少組が大部屋で昼寝をしているのを縁側からそつと見守る琴音。

「ねーねー、おばあちゃん。お客さんが来てるよ」

孤児院の中でもお姉さんのな立場にある楓が琴音に來客を知らせる。

誰かと約束したかしら、と思いながら琴音は杖をついて応接室に向かった。隣には楓も一緒に居る。

「お待たせしました。私が桜卯琴音で——」

最後まで言い切ることが出来なかった。

何故なら、そこにいたのは——

「やあ、琴音ちゃん。久しぶりだね」

あとがきと設定

〔あとがき〕

実はこの小説が初めての完結小説です。最初に書いていたのはネギまででしたが、完結には至りませんでした。何度か改訂をして掲載しようかとも思っていました。その出来があまりにもひどかったため、とりやめ。

キャスターの自称が「ボク」だったり、「私」「ボク」「オレ」がキャスターの中にいるというのも、そのネギまで使っていた主人公の設定から引つ張ってきてました。

この小説を書くにあたって、一番苦労したのはマスターを誰にするかという所でした。最終的には原作では既に死亡していると思われるコトネを使うことで決着しましたが、そのまま龍之介がマスターだった場合とか、凜がマスターだったり、色々考えていました。

また、たびたび長期にわたって更新が途絶えるということをしてしまい、本当に申し訳ないです。個人的な執筆の仕方として、まずは会話文だけで話を作り、そこに地の分を入れていくという手法で書いているんですけど、なるべく会話だけにならないようにしていると、止まってしまうんです。現に、何か所明らかに会話文が多い場所もあり

ます。

さて、これからですが、一応この『Fate／world end』は完結となりま
す。エピログでリクたちが行った世界でのエピソードが書かれてますが、気が向いた
ら短編的に追加するかもしれません。

とりあえずはもう一方のISも進めなければすしね。
では、また機会があれば。

【ステータス】

真名はリク・チェラーシス、またはツエーン。

初めのマスターは雨生龍之介であるが、召喚後すぐに魂ごと取り込み、のち桜卯琴音
が何も知らされないままマスターとなる。第五次では初めから桜卯琴音。

サーヴァントとしての属性は混沌・悪。

ステータスは一般的なキャスターの例に漏れず、以下の通り。カッコ内はs／n編。

筋力：E（D）

魔力：A++(A++)

耐久：D(D)

俊敏：E(D)

幸運：C(B)

宝具：E↗EX(E↗EX)

クラススキル

陣地作成：D(A+)

道具作成：B(A)

固有スキル

魔術：A++(A++)

魔術を習得していることを表す。

A++ランクでは、現代の魔術に加え神代の魔術すら使用できる。現代の魔術師では相手にならない。

陣術式：A+(A+)

魔術陣による魔術の発動が可能であることを表す。

A+ランクでは、シングルアクション工程で魔術陣の敷設が完了する。多重敷設も可能。また、敷設された魔術陣は不可視にすることが可能。その場合、その魔術陣によつて発動される魔

術のランクは1ランクダウンし、多重敷設は不可。不可視化できるのは魔術陣の線のみであり、その効果まで不可視にすることは出来ない。

魔力生成：A（A）

魔力を生成する能力。

Aランクでは、自然界に存在する全てのものから魔力を生成することが出来る。但し、生者から魔力を生成することは出来ず、一度生命活動を停止させなければならぬ。生成の対象となったものは何も残さずに消滅する。

生成された魔力は一定期間使用されなかつた場合霧散する。また、自らの許容量を超える魔力を生成することは出来ない。ただし、キャスターはその性質上、ほぼ無限に魔力を許容できる。

自然同化：B（―）

自然と同化する能力。

自身の領域内に於いてのみ効果を発揮する。一度発動されれば、視認以外での探知が不可能となる。但し、自身が領域から出た場合及び領域を破壊された場合、このスキルは効果を喪失する。

領域判定は、工房もしくは自身の敷設した魔術陣圏内。

宝具は3つ所持しており、そのすべてが高ランクである。

魂喰いイトスキル：E↖A+（E↖A+）

その存在を自らに取り込む能力を持つ。魔力供給のための『魂喰い』とは異なり、対象となった者の能力を獲得することが出来る。本来であれば、獲得できる能力に制限はないが、生前に起こった出来事により、一存在に付き一つ、ランクB以下という制限が付いた。聖杯戦争においては、スキルに限らずステータスも対象になるが、宝具の取り込みは不可能。また、英霊が生まれつき持っている『神性』等のスキルは獲得できず、生前に磨かれた『心眼（真）』等のみ獲得できる。

二人だけの絆：EX（EX）

内なる少女ソラと意識を同調させる。また、その際のステータスは両者のものが合わさったものになり、ランクが高いものが優先される。魂を扱う第三魔法の一端であるため、魔力消費は凄まじく、発動にはサーヴァント一体分の魔力が必要。また、一度発動した場合、以後12時間の間は発動できない。

死を齎す災厄の剣：A++

セイバーの持つ約束された勝利の剣と同じ神造兵器の一つ。人類のあらゆる負の願いを結晶化したものであり、世界に争いが多ければ多いほど威力が上がる。

また、反転した使い方として、災厄覆す正なる法として使用もされた。その場合のランクはB。

【解説】

・キャスター（リク）

真名は十番目の杯。

最終決戦時にはソラが独立した存在となったため、宝具の一つである二人だけの絆は使えなくなっている。また、死を齎す災厄の剣も発動条件が変わっており、それぞれのモチーフを反転させるという方式をとらなければならなくなった。

これは、Zeroの時は徒に災厄を撒き散らす存在であったためモチーフを必要としていなかったのが、理性的に変わった全盛期の姿で召喚されたためである。

また、モチーフが反転し発動した宝具を再び強引に反転させることで、一時的に災厄覆す正なる法として使用された。

起源である『実現』は聖杯としての機能を表している。器であると同時に聖杯そのものでもあったキャスター特有のもので、本人が実現できると思うことなら本文中にもある世界改編や魔法以外なら実現できる。

また、この起源が暴走状態にあった当時は道行く人の願望を片っ端から実現させてい

たらしい。

出自は stay night の時代から 200 年後。アインツベルンが未だに第三魔法を求めていることから、聖杯の器、そして聖杯そのものとして第五次聖杯戦争で生じた聖杯のかけらを埋め込まれて誕生した。母体にはイリヤスフィールの細胞が使われているため、イリヤスフィールの子であるとも言える（ただし、本人はそのことは知らない）。

誕生後に行われた聖杯降誕実験により偶発的に第三魔法を手に入れる。また、この時に起こった内乱でアインツベルン家は致命的なダメージを負った。その責によつて地下に封印処理されることとなる。

20 年後にアインツベルンの分家の家長が失った妻を取り戻そうと魔術を使い、復活。街を丸ごと一つ呑み込み行方をくらませた。

潜伏先で後に父親となる人物と知り合い、ソラを救出。それ以後世界中を旅し始めた。

旅の途中、父親とソラを殺された彼は世界を敵に回し、最終的には守護者に討伐された。

聖杯で願いを叶えたりクとソラはその後異世界を回り、その合間にすっかり年老いた琴音と無事に再開した。

実は作者が扱いに困っていた。特にマスター。

当初の案では、幼くも狂気に彩られたマスターと、未知の技術に出会い狂喜乱舞している龍之介が冬木を地獄絵図に変えるというものだった。ちなみにその場合では原作キャスターのように討伐対象となり、セイバーのエクスカリバーで消滅してもらう筈。しかし、どう考えても第五次聖杯戦争に繋がらないため没。

魔術陣を使うという設定は、未来だつたらこれぐらい出来るよね、というところから。魔術の発展によつて、属性に関係なく魔術陣の性能のみで魔術を発動できるようになつたという設定。

第三魔法についてはほとんど分からないので、魂が形を覚えているから、その魂が宿ると、その形をとる。臓硯がしていたことの完全上位互換が第三魔法だと解釈しました。

・ソラ

サーヴァント適性としてはキャスターとバーサーカー。魔術の腕だけで言えば作中随一。

幼いころから不思議な力を使い、親からも気味悪がられていた。そんな中、両親に売られ、魔術研究所に引き取られる。そこでも過酷な生活により言葉が不自由になった。

そこでは魔術兵器を作り出すために人体に魔術陣を刻む実験が行われており、ソラもその被験者となる。

しかし、その情報を聞きつけたリクによつて助け出され、以降行動を共にする。

ちなみに本名は桜卯静琴^{しずき}。リクも知らないが、琴音の親族の家系。面立ちが似ていたのはそのためである。

聖杯戦争後はリクと共に異世界を回り、自由気ままに過ごしている。

実は作中一のチートキャラ。バグキャラと言つてもいい。繰り出す魔術は約100万。おまけに体術もそこそこできる。きつとソラが主人公だったら一日で聖杯戦争が終わる。そもそもリクとソラはスキルとして魔力生成を持っているため、マスターからの供給が貧弱でも、時間さえかければ自前の魔力だけで街を壊滅させることもできる。

・カイ

エミヤの名を持つ青年。幼いころに養父を紛争で亡くし、それ以降自身の中での正義の味方像が揺らぐ。自分探しの旅で出会ったリクとソラによつてある程度の区切りがついた彼は各地の紛争に傭兵として参加、自身の眼で『正義』を見極めようとした。

戦場で二人に会った際に再び正義とは何かを聞こうとしたところで背後から味方に

撃たれ死亡。

しかし、リクによってその魂が回収され、リクを通して正義とは何かを探求することとなった。

アーチャーとの戦いで正義の意味を理解したカイはようやくその魂を開放した。

切嗣↓士郎っていうのがあるのなら士郎↓誰かっていうのがあつてもいいんじゃないの？という考えから誕生。一応フランス人という設定。かませ。

・桜卯琴音

キヤスターのマスターであり、衛宮切嗣の養子。誕生日的には士郎の姉。

品行方正、文武両道、眉目流麗と傍から見ればパーフェクト人間だが、その内面はサドであり、また、極度に心配性でもある。家族の為ならば他人を見捨てることも厭わない。

密かに彼女に恋心を寄せる者もいるが、本人が慎二一筋であるため望みは無い。

聖杯戦争後は魔術の使用頻度が極端に下がる。大学卒業を機に孤児院を立ち上げ、以降は経営に勤しんだ。26歳で慎二と結婚したが、第四次聖杯戦争の際の心的障害により子どもは出来なかった。

88歳まで生き、87歳の時にはリクとも再会している。

原作では死亡していると思われる。ていうかたぶん龍之介アートエンド。拙作ではキャスターが龍之介を食べちゃったので生存。そのためほぼオリキャラ。名字もオリジナル。

全く魔術と関係ない家系でありながら、潜在能力は士郎を遥かに超えている。

・間桐慎二、間桐桜

慎二は魔術師としての才能は皆無だったが、分析と研究は常人を遥かに超えていた。完全ではないものの、魔術を使いたいという欲求がないため、原作ほど性格が歪んでいない。綺麗な慎二。女の子と食事にも行くが、決して一対一では行かない。主に士郎を誘う。理由は琴音が怒ると怖いから。

琴音との結婚後は魔術の世界から完全に身を退き、自らが設立した会社の経営拡大に勤しんだ。総資産額は間桐家のそれをも遥かに凌いだらしい。

享年71歳。

桜は間桐家最後の当主となった。本人には結婚する意志がなく、また間桐の魔術の継承はおぞましいものであったためそれを望まなかった。たまに帰ってくる士郎を暖かく迎え、事実婚状態であったとも言われている。

琴音の孤児院を頻繁に訪れ、子どもたちの相手をしていた。元々そつちの方に興味があつたようだ。

使っている魔術は黒桜が使っているのと同じようなもの。別に黒くもなつてないし、髪色も白くない。

享年52歳。

・遠坂凜、遠坂静

凜は遠坂の当主として魔術に打ち込み、遂には時計塔の主席の座を得る。またその功績によって宝石翁の弟子となり、3度平行世界の観測に付き合つた。母親もキャスターの残した資料により完治した。時計塔の中で人生のパートナーを見つけ、1男2女をもうける。彼女の次の当主には長男が選ばれた。

ちなみに高校三年生のときにうっかりで、猫をかぶっていたのが発覚。高嶺の花は自ら地上に落ちた。しかし、それ以降は今まで以上に男女ともに友人が増えた。一成とは結局死ぬまで和解しなかつたらしい。

享年79歳。死ぬ間際まで魔術の鍛錬を欠かすことは無かつた。

静は凜の次女であり、魔術とは無縁の生活を送っている。琴音の開設した孤児院を任

されており、琴音と一番多く接している。自身の子も同じ孤児院で生活している。とても穏やかな性格で、あまり怒らない。

・衛宮士郎

士郎は高校卒業後すぐに外国へ飛び立ちNGO活動に参加して数多くの人命を救った。それでも琴音の心配は絶えることは無かったが、帰ってきたときには必ず琴音の家に顔を出した。現地に何人も愛人がいるという虚偽の噂が流れ、桜に半殺しの目に遭うこともあった。

享年40歳。通り魔から幼い子どもを庇つての死だった。

・A U O

第四次聖杯戦争では原作と変わらず。

第五次聖杯戦争では、ほとんど登場せず、地の文で言峰に気持ち悪いと言ったくらい。一応聖杯が出来るころにセイバーのもとへ行く予定だったが、慢心ゆえに固有結界に入ることが出来ず、外で待ちぼうけ。それも僅かな時間しか我慢できず、さっさと

教会に帰ってしまった。

言峰が死んだことに對しては、特に何も思っていない。

聖杯戦争の後には永遠のシヨタ「ギル」として活動。偶然立ち寄った琴音の孤児院で見た書物に興味を持ち、毎週通うようになった。孤児院の経営が上向いたのも、ギルの黄金律の影響だったりする。

・その他の人々

龍之介は一話でご退場と相成ってしまった。キャスターと聖杯戦争を戦うルートでは、生き生きとした姿が見られたはず。

時臣などのZeroの原作メンバーは、死に方などが違うだけで特に違いは無い。強いて言うなら、セイバーがランスロットと戦わなかったことくらい。

イヴァンはアサシンのマスターがいらないことから急造されたキャラ。詠唱から分かる通りロシア人。魔術を広く浅く学ぶ異端者でもあった。実はバゼットと面識があったり、時臣と会ったこともある意外と顔の広い人物。本当はもつと活躍させたかった。

臓硯は最終戦の前に桜に蟲の主導権を完全に奪われ、身体が崩壊し、死亡。一応第五次聖杯戦争では勝ち目があると踏んで桜と慎二に協力していた。

【リクとソラの物語】

・『魔法少女まどか☆マギカ
魔法少女と魔女の物語』

願いを叶えてくれる代わりに魔法少女となって魔女と戦うお話。

全年齢版では日曜朝にやるような魔法少女もの。しかし、15歳を越えると読むことのできる大人版では、魔法少女の真実が描かれている。

・『魔法先生ネギま！
魔法使いの子供先生』

僅か10歳で日本の学校の先生をやることになった少年の成長の物語。男の子に人氣。

・『ゼロの使い魔
伝説の系統使い』

伝説の系統を使う少女と、その使い魔の物語。この話を読んだあとに光る鏡を探す少年が多発する。

・『恋姫無双
少女三国志』

古代中国で実際にあった三国の時代の物語。但し、なぜか皆女性体化。当然、男の子に人氣。

外伝

prototype

人が歴史を学ぶ上でどうしても避け得ぬ考えがある。

それが『if』である。

『もし』、本能寺の変で信長が死んでいなければ。或いは今日の日本はまた違った形であつたかもしれない。

『もし』、第二次世界大戦が起らなかったら。

そして、これもまた本来は存在しないはずの歴史。

いくつもの『if』が積み重なり合った故の世界。

観測するにはあまりにおぞましく。しかし、ある世界へと繋がる物語。

世間を騒がす殺人鬼、雨竜龍之介が血染めの魔法陣から召喚したのは、彼が想像していた悪魔とは姿が違いすぎていた。

雪原を思わせるほどに透き通るような、腰まで届く白銀の髪に、鮮血を思わせる紅の瞳。背は丁度彼の下で蠢いている少年と同程度。頭に角は生えてはおらず、背中に蝙蝠のような翼もない。それでも、その存在は善くない感覚を見る人に与える。

しかし、龍之介は違った。

外見だけで言えば神の造形といっても差支えない程の美を誇り、その溢れ出る雰囲気は紛れもなく彼が欲した悪魔そのもの。そんな存在を目の前にして彼は言葉を失っていた。恐怖ではない。それは、歓喜であり、畏敬でもあった。

「ほ、本当に悪魔……？」

無意識に発せられた龍之介の言葉に悪魔は甘美な音楽のような声で答える。

「ボクは悪魔じゃないよ。悪魔何てボクの足元にも及ばないんだから」

「じゃあ、何て呼べばいいんだ？」

「そうだね。魔術師^{キヤスター}とでも呼んでくれればいいよ」

そう言った悪魔改めキヤスターは部屋を見渡し、テーブルの上に並んでいる三つの生首を見つけた。

「マスター、これは君がやったの？」

生首を指差しキヤスターは龍之介に問い掛けた。

「そうそう。息子だけはーなんて言いながら必死になっちゃって……」

龍之介は嬉々とした声で身振り手振りを使いながらその時の状況を語り始めた。

「ふーん。こーんな子供想いの親を持って幸せだったね、名も知らない少年君」

キヤスターは生首を目に見えない力で御手玉をしながら少年に話しかける。

縛られているということもあり、一步も動けない少年ではあるが、その目には僅かながらにも肉親を思っただけか怒りの感情が見て取れる。その顔を見たキヤスターは綺麗な笑みを浮かべた。

「あはは。怒ってるの？ ねえ、親をこんな風にされてどんな気持ち？」

キヤスターは御手玉を止め、生首を宙に浮かせたまま静止させる。

「すっげえ！ なあ、キヤスター、俺もそれしてみたい！」

「うーん、こればかりは才能の問題もあるんだよねえ。まあ、後で教えてあげるよ」
興奮を抑えきれない龍之介が声を掛けてくる。それも仕方のないことだろう。目の

前で未知の現象が起これば誰しも興奮はする。少年もこんな状況でなければ目を輝かせているだろう。

キャスターは指を所謂鉄砲の形にしてその指先を少年の父親だったモノに向ける。

「ばーん」

銃声を模したあまりにも軽い一言は、それに反して恐ろしい事態を引き起こしていた。

その言葉の直後、父親の頭は破裂し、辺りに残骸を撒き散らした。龍之介によつて真紅に染められ、所々黒くなり始めている壁には、何故か白いままの頭蓋骨の破片が刺さり、少年の目の前には、齒と思わしきものが転がっている。

「——ッ!!」

少年が声にならない悲鳴を上げる。それは同時にあまりの惨状に麻痺していた少年の心が再び元に戻ったことの証明でもあった。

「あはははは。その悲鳴、最高だよ。ぞくぞくしちゃう。これだよこれ。ボクはこれが聴きたかつたんだよ」

キャスターは満面の笑みを浮かべている。その頬は興奮の為か紅潮し、眼は狂気の光を湛えている。龍之介もその光景を焼き付けるかのようにその目を見開いている。

「さあ、次は君のママだよ。それ、ばーん」

母親の頭も同様に破裂する。しかし、今度は悲鳴は上げなかった。目は虚ろで、何も映していないようだった。

「なーんだ、もう壊れちゃったのかな。つまんなーい」

何の反応も示さなくなった少年を見たキャスターは落胆した目で残っていた姉の頭もどこか事務的に処理した。

興奮が落ち着いてきたのか龍之介がキャスターに話しかける。

「なあ、キャスター。次は何を見せてくれるんだ？」

それはまるで餌を前におあずけをされているペットの様だった。それを見て、キャスターも笑みを浮かべた。それは、自身と同じ精神を持つ人を見つけたが故のものだった。

「次は、こうだよ」

キャスターは一度手を叩き少年を吊り上げた。その少年の姿は十字架に括り付けられているように両腕を広げ、全身に力はなくだらりとしている。

「さつきも後で教えてくれるって言ってたけどさ、それって一体何なの？」

「これは魔術だよ。別呼び方はそうじゃなくてもいいけどね。ほら、魔法とか、呪術とかファンタジー的なアレだよ」

「すげー面白そう！」

「愉しいよ。これが使えれば色々と出来るし。さ、時間もないことだし、仕上げようか」
キヤスターは先程と同じように指先を少年に向ける。これから一体何が起こるのか、
龍之介には想像すらできなかつた。

「ばきゅーん」

言葉と同時に、指先からファンシーな光が放たれ、少年に当たる。そして、当たると
同時に何かが弾ける音がした。

「すげえ……COOLなんてもんじゃない……」

「ふふふ。そうさ。これがボクが創り上げた最高傑作。名付けて！ 人間プラネタリウ
ムサー！」

龍之介が恍惚とし、キヤスターが自慢するそれは、一見、よく実験室にある人体標本
に見える。しかし、よく見れば血管が収縮し血液が循環しているのが観察でき、筋肉も
僅かながら動いている。眼球も動き、肺も収縮している。つまり、この人体標本は生き
ているのだ。

弾け飛んだのは少年の皮だ。その破片ともいうべきものは見当たらない。おそらく
そこら中にある血の池に沈んでいるのだろう。

そんな中キヤスターは引き出しを漁り何かを探していた。

「あれ？ 何を探してんの？」

それに気づいたキャスターが問いかける。その答えはキャスターが手に持っていたもので明らかになった。

それはカメラだった。キャスターはカメラを使い部屋の惨状を余すところなく映していく。そして、最後に少年だったものの写真を撮り、そのカメラを懐に仕舞った。

「さ、行こうか」

「あれ？ このままでいいの？ まだ生きてるじゃん」

「いいのいいの。もう何も出来ないんだし、それに、見つけた人が発狂しそうで。もうそれを想像しただけで笑いが止まらないよ」

「そういうことかー」

そうして二人はこの家を去って行った。

その二人の姿は、まるでテーマパークから帰ってきたかのようなだった。



「——というのが、聖杯戦争ってやつ。何か質問でもある？」

街中の地下を走る下水道の一角に陣を構えたキャスターは龍之介に聖杯戦争のことを教えていた。偶発的な召喚とはいえ、召喚してしまった以上聖杯戦争の参加者である。そして、例え聖杯を獲る気持ちがなくても参加者である以上、敵から狙われるのも必定。

知っているのと知らないのでは気の持ち様は当然違う。だからキャスターは自身を知り得る情報を龍之介に話した。その上で質問はあるかと尋ねたのだ。

「んー、じゃあ一つだけ。聖杯ってどんなものなんだ？ 願いを叶えてくれるんだよね？ えーと、確か今回で四回目って言ってたよな。そしたら聖杯がどんな形してるのかとか分かってるのかな？」

「形は黄金の杯。ただ、願いの叶え方がボクたち好みかな。どんな高潔な願いでも、捻じ曲げて悪意ある方向性でしか叶えられないんだよ」

「じゃあさ、世界平和を願ったら世界中から争いをする生き物がみんな死んじゃうとか？」

「そんな感じ。実際には人間だけだろうけどね」

「へー。……うん、決めたよ、キャスター」

「何を？」

「俺は聖杯が欲しい。で、手に入れたら何か途轍もないことを願ってみたい。まあ、内容

は決まってるじゃないけどさ、なんか楽しそうじゃん」

龍之介は笑顔だった。聖杯戦争で戦うともなれば、自身すら危うくなることもあるだろう。しかし、殺人という狂気に彩られながら、それでも引き際を見極めることのできる彼は、ある種の天才だった。誰もその才を認めずとも、自分が一番よく分かっている。そして、彼は自身の才能を疑っていない。

そして、心ずらまるで呼吸するように読むことのできるキャスターにもその思念は伝わってきていた。

その才能は、キャスターから見ても十分他の魔術師相手に通用するほどだった。魔術の才は本職の魔術師には劣るかもしれない。しかし、それは龍之介が自身の力のみで魔術を学んだ場合の話だ。魔術師の英霊足るキャスターにかかれば、家系でいう3代程度ならあつという間に抜かせるだろう。

そうなれば、キャスター自身が聖杯に近づく可能性も格段に上がる。とはいえ、まずは基礎からだ。

「おっけー。マスター、まずは属性を見極めないとね。さあ、目を閉じて」

龍之介は素直に指示に従った。キャスターはそれを確認すると一回手を叩き、彼の背中を手を当てた。

「今からマスターの魔術回路を目覚めさせる。その時にどんな感じか教えてね」

キャスターは掌から魔力を放出し、龍之介の中に眠っていた魔術回路を少しづつ励起させていく。

「うお！　なんだこれ！　何だか分かんないけどすげえ！」

「いや、それじゃ分かんないから。で、具体的にはどんな感じ？」

「何か浮いてる感じがする。水かな」

「水……ね。ま、いいんじゃないかな」

キャスターが手を放すと、龍之介の身体を巡っていた不思議な感覚は消えた。

「で、どうだったんだ？」

「マスターの属性は水だね。起源までは調べられないけど。で、水つてことは回復系な

んだけど、どう思う？」

「最高にCOOLだよ！　だって失敗しちゃっても治せるし。……ああ、今までそれで

何回失敗したことか……」

「喜んでくれてうれしいよ。さ、早速今日から始めようか。まずは被検体を攫ってこな

いよ」

「じゃあ、俺が行ってくる。キャスターも何かやることあるんでしょ？」

「うん。じゃあ任せたまよ」

『——次のニュースです。冬木市で発生している連続殺人事件ですが、つい先程、危篤状態の続いていた少年が亡くなりました。これで犠牲者の数は12人となつてしまいました。現地では5000人体制で捜索が続けられています。容疑者の足取りは依然として不明です。また、同市では三日前から失踪事件も発生しており警察ではその二つの事件の関連を調べています。それでは、現地より』

そこまで見たところでウェイバー・ベルベツトはテレビを消した。

恐らく警察では犯人を見つけることは出来ないだろう。何故ならその犯人は魔術師であるからだ。それも、聖杯戦争に参加できるほどの、である。いくら日本の警察が優秀であろうとも一般人にどうこうできるものではない。それに、魔術秘匿の面からいっても、表の警察に犯人を捕らえさせるわけにはいかないというのもあるのだ。

「それで、坊主は此度の作戦に参加するの？」

ウェイバーに話しかけるのはライダー。それは先程行われた教会での一件についての問いだった。その一件を思い出しウェイバーは暫しの間考えに耽った。

「皆の者此度はよくぞ集まつてくれた。本来であれば聖杯戦争期間中に教会側からこうした呼び出しは行わぬものであるが、緊急事態が発生した故、声を掛けさせて頂いた」
この教会の神父である璃正が口を開く。その正面には人はいない。そこにいるのは鼠であったり鳥であったり、つまり魔術師の使い魔である。

「皆も知っているだろうが、現在この街で発生している連続殺人及び失踪事件は魔術師の仕業であると判明した。また、その下手人の傍らにはサーヴァントがいることも確認されている。確認されているうちの最後の殺人の現場では、生きたまま皮を剥がされた犠牲者が出ている。それも、発見時にはまだ息があつた。そして、その場には魔術の痕跡が残っていた」

そこで一度璃正は言葉を切った。その光景を思い出したのか、顔は犠牲者への悼みと下手人への怒りで複雑に歪んでいる。

「そこで、教会側では魔術の漏洩防止という観念から、警察に対してこの件に関する禁じ

た。しかし、それも限界に近付いている。また、このままでは聖杯戦争自体が中止となることも有り得る。その為、皆には共同でこの下手人及びサーヴァントを討伐してもらいたい」

小さく咳払いをし、璃正は続ける。

「しかし、共同ということは手の内を見せるということにも繋がるため、こちらから報酬を出し不公平の無いようにする。私が預かる予備令呪。その一面を参加者に与えよう。だが、今すぐにといい訳にもいくまい。故に、明日の午後11時。今日と同様にこの教会に集まることで参加の意を示していただきたい」

璃正はそれだけ言うを使い魔に背を向けた。そして使い魔が去るのを確認もせず祭壇に向かって祈りを捧げはじめた。

「なあ、ライダー。僕が参加しないと云ったらどうする?」

「余は勝手に参加させてもらう」

「だよな。まあ、僕も参加しないっていうのはあり得ない選択肢だと思う。マスターだからとかそんなのじゃなくて、人として許しちやいけないことなんだ」

「当然であろう。して、何か策でもあるのか?」

「ない。サーヴァントの方はキャスターだろうし、今の僕の方じゃ到底及ばないんだから」

ウェイバーは悔しさの欠片も見せずに口にした。自分は優れていると疑わないウェイバーではあったが、流石に英霊にもなった魔術師相手にそんな虚勢を張れるわけもない。

「だから、今できるのは真名を探ることぐらいなんだけど、手がかりが何もなければ出来ない」

「つまり?」

「明日にならなきや何も出来ないってことだ」

ウェイバーは溜息を吐く。何かをしたくとも何もできないのはもどかしいことこの上ない。そんな様子を見たライダーは一言。

「休むのも戦の内。恐らく明日以降は忙しくなるだろうよ。ならば余や坊主は休養を取るべきだ」

◆

そして午後11時。既に脱落しているアサシン陣営とバーサーカー陣営以外が揃っていた。

敵サーヴァントの居場所は、その魔力の残留から時臣が探り大凡の居場所を掴んでいた。それによれば、居場所は住宅街に近い場所にある下水道の中であるらしい。しかし、居場所が分かっていたからといって突撃するような愚人はいない。現在出揃っているサーヴァントで唯一確認されていないのがキャスターであることからして、十中八九その場所は工房化しており嚴重に守られているだろう。

従って、サーヴァントとマスターがそこから出てくるのを待たなければならない。そして、その監視役には敏捷に優れたランサーが行うことになっていた。加えて、ランサーの持つ槍には魔術を無効化する力があるため、最適であった。

そして、監視すること二日。ついにサーヴァントとマスターが姿を現わした。

夜の闇でも目立つ白銀の髪の毛の人物こそキャスター。その隣にいる青年がマスターだろう。その姿を確認したランサーは自らのマスターであるケイネスにそのことを伝達

し、キャスターの前に躍り出る。だが、いきなり戦うことはしない。キャスターの放つ魔術をあしらいなから、少しづつ住宅街から離していく。

そして、遂に既にサーヴァント同士の一戦で破壊されていた倉庫街へ誘導することに成功した。

キャスターは突然のランサーの襲撃にも焦りはなかった。相手が徐々に住宅街から離れて行っているのにも気が付いている。

「さーて、この先には何が待ってるんだらうね」

「あれが英霊ってやつかー。すげーな」

「あ、そうそう。マスターがやられちゃったらボクもここに居られなくなっちゃうから気を付けてね」

「分かっているって。それよりもさ、さつきから何してんの？」

キャスターは先程からランサーに魔術を放つと同時に何かをしていたのだ。それを

疑問に思った龍之介が問いかけた。

「魂喰いだよ。今頃この辺りの憐れな一般市民の皆さんは死んじやってるんだよ」

「そんなのもあったんだ。ま、いつか」

そうして自身の力を補給しながらランサーを追いかけ、遂には倉庫街に到着した。

「君はランサーだよ。その槍、ボクの魔術を消してたから宝具かな？」

「外道に話すことなど何も無い。覚悟！」

ランサーは赤と黄の槍を使いキャスターに襲い掛かる。しかし、それが一向に当たることはない。

「そんなものなの？ それじゃつまらないよ」

キャスターが煽るがランサーは気にも留めない。元より時間稼ぎのための戦いであるからだ。そして、待ちに待った援軍がやってきた。

「ふうん。これを狙ってたんだ。えーと、セイバー、ライダーかな。アーチャーとバーサーカーとアサシンがいないけどどっかで狙ってるのかな」

キャスターが軽口をたたくが、誰もそれには乗ってこない。キャスターは一つ溜息を吐くと、目を瞑った。

その姿に警戒を露わにする三騎。

そして、キャスターが再び目を開いたとき、全てが終わっていた。



何が起きたのかは分からなかった。ただ、理解できたのは自分が負けたことだけだった。

ランサーの身体は半分以上が喪失しており、霊核の損傷はもはや修復不能なほどだった。そして、そのマスターであるケイネスとソラウは血の海に沈んでいた。倉庫街から少し離れた場所に身を隠していた二人はランサーとのパスを通じて、攻撃を受けていたのだ。

そして、その攻撃は彼らの魔術回路共々血管を内側から破裂させていた。最早助かることは無い。しかし、そんな状態でも二人には意識があった。本来なら死んでいるはずの二人に青年が近づいていく。

「ふーん。これが人間を内側から破裂させた結果かー。あんまりCOOLじゃないなー」

その青年は右手に持ったメスに魔力を纏わせた。

「ま、いっか。魔術師も解体してみたかったし。それに最近の子供ばっかりだったからな」

青年はそのメスをソラウに近付けていく。これから何が起こるのか想像できてしまったケイネスはそれを止めようとするも体は動かず声も出ない。そもそも何故まだ目が見えているかすら分からない。

「さーて、まずは心臓でも見てみるかな」

そう言つて青年は、大量の血に塗れ、辛うじて原型を留めていた彼女の豊満だった胸を躊躇いもなく切り裂いた。

「へえ、魔術師つていつても心臓の形は変わらないのかー。……んー、それにしてもつまらないなー。やっぱり新鮮な反応のあるのじゃないとイメージも湧かないなー」

青年は手に持つていた心臓を適当にソラウに戻した。

「どうせだから芸術的な死体にでもすればいいか」

そう言うのと、青年はソラウの身体を解体し始めた。両腕を落とす、足も付け根から切り落とす。

そして、彼女の腹を裂き次々と臓器を取り出していく。先程戻した心臓や、肺、胃に腸を取り出し、空っぽになった体に青年は切り取った手足を詰めた。

それをただただ見ていることしか出来なかったケイネスの心中は怒りに満ちていた。

しかし何もできない。そして、遂に青年がケイネスのほうにやってきた。

「んー、なんか反応ないのにも飽きちゃったし、首落として終わりでもいいや」

そうしてあつさりと首を落とされ、ケイネスは死を迎えた。

ランサーが崩れ落ちると同時に、その攻撃を辛うじて躲したセイバーが斬りかかってくるが、キャスターには届かない。ライダーも追い打ちを掛けようとするが、敏捷のステータスでセイバーに劣るため、簡単に避けられてしまった。

「二人掛かりでもその程度？　ほら、折角人気のないところに来たんだから宝具でも使つたら？」

そう挑発するキャスターの手には、漆黒の杖が握られていた。細長い8の字を描いているその杖は宝具だろう。そして、それが先程の惨状を引き起こしたとセイバーは予測を立てる。

一旦キャスターから離れたことではやくやく周囲を見ることが出来るようになったライダーは、その光景に驚いた。

先程まで規則正しく並んでいたコンテナはキャスターを中心として円状に削られていた。自身の立っていた位置が少し離れていたからよかつたものの、あの円の中であればライダーの誇る戦^{チャリオット}車でも逃げきれなかつただろう。

その幸運に感謝しながらキャスターの方を見ると、手に持った杖をクルクル回して遊んでいた。特に魔術を使う訳でもなく、本当にただ杖を回しているだけだ。

「あ、考え事は終わった？　じゃあ、今度はこつちからいくね」

そう言ったキャスターは杖の先端を思い切り地面に叩き付けた。その一点を中心として、いくつもの魔法陣が地を走る。

身構えるセイバーとライダー。そして、その魔法陣からは予想もしていなかつたものが現れた。

一人は、既に確認されているキャスターのマスター。

しかし、それ以外は何の変哲もないように見える幼子だった。その数12。現在冬木で行方不明になっている人数より一人多いが、その誰もが虚ろな目をしている。

「さあ、君たち。悪い騎士様を一緒に倒そう！」

キャスターが指揮官のように手を振ると、その子供たちが一斉にセイバーとライダー目掛けて飛び掛かっていく。

セイバーとライダーも流石に操られているだけの子供たちを斬ることが出来ないの

かただだけ避けることだけに専念している。

「くっ、卑怯な！ このような手を使って！」

「卑怯？ 一体何のことやら。その子たちは自分たちから手伝つてくれるって言つたんだからね」

キャスターはそう言つてにやける。その顔が憎たらしいが、キャスターに近寄ろうとすると、子供たちがその進路を阻む。結果として、セイバーとライダーは攻めあぐねていた。

そして、一人の少女がセイバーに向かつて魔術を使った。当然セイバーの対魔力の前では何の意味も齎さないが、その戦いを離れたところから観察していた時臣は狼狽えていた。

——そう。その少女こそ時臣の娘である凜であつたからだ。



時臣は決断を迫られていた。

そもそも彼とそのサーヴァントであるアーチャーが戦いに参加していないのは、キャスターの真名を探り当てアーチャーが確実に葬るための理由だった。それが作戦でもあった。

しかし、味方とはいえあの魔術師殺しが参加している以上、キャスター討伐のためにあの子供たちが始末される可能性は高い。そしてその中には次期党首であり、娘である凜の姿。

作戦を遵守し、キャスターの討伐のためにはこのまま探るのが最善である。とはいえ、現時点で戦場に出て自身のサーヴァントが負ける姿など想像すらできない。

そして、時臣は決断を下した。

「王よ、出撃で御座います」

「まあよい。この様な雑事、雑種共で問題は無かろうと思っていたが、そうでもなかったらしい。アレは我が斃^{オレ}そう」

アーチャーは自身の宝物庫から後世ヴィマーナと呼ばれた舟を取り出し、それに乗って戦場へと向かった。

そして、件の魔術師殺しは助手の舞弥と共に子供たちに銃口を向けていた。とはい

え、今すぐ撃つつもりもない。確かに攻めあぐねてはいるものの、何故かキャスターが攻撃してこないため不利な状況ではないのだ。

魔術師殺しとして現役であつた頃ならば、恐らく既に引鉄を引いていただろう。しかし、そのスコープで子供たちを捉えるたびに自分の娘の顔が頭を過る。技術こそ衰えてはいないものの、精神的な面では確実に衰えていた。

気を紛らわせるようにスコープを別の場所に向けて。そこにいるのは妻のアイリス・フィールだ。偽装とはいえセイバーのマスターとして振る舞っているアイリス・フィールを城に置いてくることは出来なかつたため、嚴重に結界を敷き、全て遠き理想郷すら用いた陣地を造っていた。

再び戦場に視線を戻す。先程から状況は変わっていないが、幸いというべきかアーチャーが動き出した。

そうであれば、と魔術師殺しはスコープをキャスターのマスターに向けた。

子供たちを使い遊んでいたキャスターだったが、新たなサーヴァントが向かってきているのを感じると、表情を入れ替えた。

「あれ、どうしたんだ、キャスター？　なんか怖い顔してるけど」

「ちよつと強敵が来そうだよ。警戒はしておいて」

龍之介に注意をし、キヤスターは魔術回路を励起させる。それに呼応するように、子供たちの動きが超人染みてくる。だが、それこそがキヤスターが子供たちを操っている証拠に他ならない。

しかし、突然電池の切れたように子供たちが動かなくなる。

その僅か数秒後、眩いほどの黄金が姿を現わした。

「アーチャーかな？」

「ふん。雑種如きが我に話し掛けるか。余程死にたいと見える」

「耳障りな声だね。ボクの美声とは大違いだ」

「遺言はそれだけか？ では、疾く去ね」

アーチャーの背後から何本もの剣や槍が射出されキヤスターを襲うが、その悉くをキヤスターは魔術で撃ち落としていく。

「この程度、何とも無いね。口だけのオレサマ野郎なんて、全く最悪だね」

「ハッ。この程度だと？ ああ確かにこの程度では問題ないのであるうな。では、次だ」
アーチャーの背後が揺らめく。そこから顔をのぞかせた刀剣類は優に300を超えていた。

「あははは。流石にきつい……かな？」

キャスターは魔術を使い、自身を戦場から一気に移動させる。しかし、自動追尾の機能でもあるのか、射出された刀剣の内何割かはキャスターを追ってくる。

「呑み込め！ 円環ウツ示す大蛇ホ！」

キャスターは杖を自身の前に突き出し、真名を叫ぶ。それは、ランサーが喰らった一撃だった。その黒い蛇に呑み込まれた刀剣は分解されていく。そして、新たな杖となつてキャスターの前に再構成された。

二本の杖を持ち、キャスターはアーチャーから遠ざかっていく。

そして、キャスターの向かった先は今回の聖杯戦争の器であるアイリスフィールの隠れている場所だった。

杖を振るだけで何層もの結界を破り、最後の砦である全て遠き理想郷アの守りもセイバー不在の今は弱体化しているため簡単に破壊し、最奥に居たアイリスフィールに襲い掛かる。それに対し反撃しようとするアイリスフィールだが、針金で作った鷹はキャスターの一睨みで消し飛ばされ、遂には眼の前にも迫られた。

「貴方がキャスターね。私をどうするつもり？」

精一杯、気丈な声で問うアイリスフィール。

そして、それにキャスターは蠱惑的な笑みを浮かべて答えた。

「聖杯、貰っていくね」

アイリスフィールが攫われた。

それを確認した魔術師殺しは即座に令呪を使いセイバーを奪還に向かわせる。そして、教会にキャスターの居場所を連絡し、キャスターのマスターを舞弥と二人で狙撃した。

しかし、その狙撃は阻まれた。キャスターのマスターの周囲には不可視の防御結界が張られており、ただの銃弾では意味がなかった。少なくともあのキャスターの魔術を突破するにはサーヴァント並の一撃が必要だろう。

早々に狙撃を諦め、魔術師殺しはアイリスフィールの方に注力する。こうなってしまう以上、セイバーと協力してでも何とか奪還しなければならぬ。ライダーやアーチャーも既に現場に向かっている。3対1ともなればキャスターもただでは済まないだろうが、それにアイリスフィールが巻き込まれてしまつては聖杯戦争自体が成り立たなくなってしまう。

そこまで考え、魔術師殺しはセイバーにアイリスフィールの秘密を打ち明けた。

小聖杯であるアイリスフィールを手中に収めたキャスターは直接転移されないように即興の陣地を作り、即座に作業に取り掛かった。

ハッキリと意識のあるアイリスフィールの身体に右手を埋めていく。それは実体を伴うものではなく霊的なものであったが、自身の身体に異物が入ってくる感覚はアイリスフィールにとって耐え難い苦痛であった。

「……………うっ……………あ、……………なに……………を……………」

「何って、小聖杯に魔力を注いでいるんだよ。このボクの魔力をね」

ウインクしながらも作業を止めないキャスター。その内、アイリスフィールは徐々に自身という存在がナニカに染められていく感覚を覚えていた。

「……………や、……………やめ、……………これ以上は……………」

「あはは。いい貌してるよ。気持ちいいの?」

「違うわ!」

「あらら……………まだそんなに気力あったんだ。じゃあ、他のサーヴァントも来ちゃうし、少し強めにいくよ?」

「ひいつ……………むり……………こんなに……………はいらない……………」

召喚された時のように、キャスターの頬は紅潮している。息遣いも少々荒い。

「さ、とどめだよっ！」

左手に持った杖で魔法陣を作り、そこに集まってきた魔力を一気に小聖杯に注いでいく。

「……………つ……………いや……………!!」

最期に大きな悲鳴を上げ、アイリスフィールは崩れ落ちた。

そして、キャスターがその手を身体から引きずり出すと、そこには黄金の杯が握られていた。



キャスターの陣地の効果により見当違いの場所に飛ばされたセイバーがようやく辿り着いたところには、全てが手遅れだった。

キャスターの足元には崩れ落ちたアイリスフィール。そして、キャスターの手には

杯。

「あははははハハははは！」

後から到着したライダーたちも、ただその動向を見ていることしか出来ない。狂ったように笑うキャスターの手にあるのが聖杯であると、理解しているからだ。

そして、その聖杯から黒い泥が溢れ始め、キャスターを覆い尽くし、更に広がっていく。

それだけではない。その泥は意思を持っているかのように住宅街に向かって侵攻を始めた。

「ライダー、何とかして止めないと！」

「分かっておるわ！ 余の宝具を使う！ 坊主、下がっておれ！」

言われたとおりウエイバーは戦車から降り、アーチャーのマスターである時臣の近くに向かう。それを見届けたライダーは剣を抜き、自身の宝具の名を叫んだ。

「いぎ、我が同胞よ！ アイオニオン・ヘタイロイ 王の軍勢」

黒い泥の溢れている現実が、浸食されていく。魔術の極致ともいえる固有結界は、正体のわからぬ黒い泥を冬木の地から完全に消し去った。

しかし、その代わりに固有結界の中は黒い泥で覆われていく。一緒に固有結界に取り込まれたセイバーはライダーと共にその泥をどうにかしようとしているが、消し去るよ

りも新たに出現する方が多いため、徐々に追い詰められていく。

「ライダー、少し、下がってくれ。私の宝具で一掃する」

「相分かった。しかし、何とか出来るのか？」

「ああ。行くぞ！」

セイバーは不可視の剣を上段に構える。

そして、その真名と共に振り下ろした。

「約束された勝利の剣！」

光の奔流は泥を跡形もなく消し去った。それでも、その泥を生み出したと思われる聖杯やキャスターに傷はない。

「……なんだよもう。折角いい気分だったのに」

不満げな顔でセイバーを睨むキャスター。それは大好物を目の前で取り上げられたような顔だった。

「ああもう。ボクの行動に水を差さないでよ。もうムカついた。死んじやえ！」

そう言って指を鳴らすキャスター。その行為はセイバーたちには何の効果も及ぼさなかった。しかし、外に居た面々は違った。

まずは先程までキャスターが操っていた子供たち。その全員が内側から破裂した。倉庫街には12の血の花が咲いた。

そして、その花を基点とした魔法陣が生まれ、魔法陣が拡がっていく。それは倉庫街だけに留まらず、住宅街にも広がっていく。そして、その魔法陣に触れた者を無差別に血の花に変えていく。隣に居た恋人が破裂した人もいれば、そうでない人もいる。全く規則性が見られないそれはただの暴虐であった。

そしてその血の花の中には当然、サーヴァントのマスターたちも含まれる。とはいえ、効果自体は一流と呼べる魔術師なら抵抗レジストできるものではあるが、舞弥やウェイバーはそれすら満足に行えず、死んではいけないが致命傷を負った。

完全無差別であるが故か、時臣や切嗣にその死の呪いが降りかかることは無かった。それでも、ライダーのマスターであるウェイバーが倒れたことにより固有結界も徐々に解除されていく。

「ク……クソツ………なんだよ！ 動けよ！」

ウェイバーが必死に自身の身体に喝を入れるが、それに反して身体は全く動かない。まるで地面に固定されてしまったかのようなようだ。

そうしている間にも固有結界は解け、再び黒い泥が世界にあふれだした。

しかし、先ほどとは違い広がっていく様子は見られない。まるで、王の命令を待つ兵士のように微動だにしていけない。

「王よ、私の不知を承知の上でお尋ねしたい。あれは一体何なのでしょうか」

「あれは、『悪』だ。それも雑種どもが思い付くようなものではない。あれは世界そのものと同じであろうよ」

「では、倒すことは不可能なのは？」

「常時であればこの我オレに対する幾度もの問いは極刑ものではあるが、そうも言っていない。あれを倒すのは不可能ではない。我オレの宝具は世界を切り裂く故、問題は無かる」

時臣とアーチャーが会話している間にも、泥の総量は増えていく。そして、遂に固有結界が限界を迎え、中に居たセイバーとライダーが戻ってきた。

「坊主！ 気をしっかり持つのだ！」

ライダーはウェイバーに駆け寄り声を掛ける。一方のセイバーは油断なくキヤスターを見据えていた。

「さ、準備は整ったね。マスター、始めようか」

「お。遂にやっちゃいますか？」

魔法陣によって転移してきた龍之介と言葉を交わしたキヤスターは上空へと飛び上がる。そして、二本になった杖を構え、淫靡な声で終わりを告げる。

「Age ergo accede prior, et initium diei
！」

そして、黒い泥が弾け飛んだ。



火災。と言えるようなものではなかった。

黒い泥は雨となつて降り注ぎ、それに触れたものを燃やし尽くしていく。動物も、建物も。ただ一つの例外は、人。

血の花を咲かせた死体は燃えることは無かった。何故なら、それらに与えられた役割は違うからだ。

生者はその火の熱さに苦しむことはあっても死ぬことは無かった。何故なら、彼らに与えられた役割は違うからだ。

そうして冬木という都市が燃え尽きた後、生者の犠牲を以ってキャスターの魔術は起動した。

時臣は身体から力が抜けていくのを感じていた。立つて居られないというほどではないが、自分の中の大切な何かが無くなっていく感覚。

そして、その正体に気付く。

魔力だ。

どれほど魔術回路を開いても、魔術が使えろという感覚がない。

そして、それを証明するかのようにサーヴァントが自身の容を保てなくなつたかのように消えていく。ライダーもセイバーも、単独行動のスキルを持つアーチャーまでもそれに抗えていない。

「まさか、世界から大源^{マナ}を！」

時臣が気づいたが既に遅かった。異変は冬木だけでなく世界中で始まっていたのだから。

それでも時臣は諦めなかった。たとえ自分が死しても、あのキャスターだけは止めなければならぬ、と聖杯戦争の提唱者である御三家の一人である故の責任感なのか、それともただの意地だったのか。どちらかは今となつては分からないが、それでも時臣は諦めることはしなかった。

「令呪2画を以つて王に願ひ奉る。最大威力の宝具で以つてキャスターを殺せ！」

最期には優雅のかけらもなかった。それでも、その気力は誰よりも強かった。

そして、時臣が令呪で命ずるとはほぼ時を同じくして、切嗣も令呪を使つていた。

「令呪2画を以つて我が下僕に命ずる。冬木市ごと、キャスターを消し飛ばせ！」

切嗣は最期まで冷静だった。自身の身体が半分ほど泥に吞まれかけていても。

そして、彼が最後に思い出したのは、妻と娘の顔だった。

そうした二人の犠牲で以つて奇跡は成った。

「ふん。まあ、アレをそのまましておくのも虫唾が走る。よかろう。我が宝具で以つ

て滅しよう。セイバー、合わせろよ？」

「いいでしょう。タイミングは貴方に任せます」

そして、二人は自身の象徴を掲げる。

「天地乖離す」

「約束された」

その目標は地上に降り立ったキャスター。そして砕めく泥。その全てを滅するために残された力を全て一撃に乗せる。

「開闢の星——！」

「勝利の剣——！」

二つの閃光は狙いを外すことなくキャスターを襲う。直撃を待たずしてマスターであつた龍之介は蒸発していつてしまった。そして、残されたキャスターに抗う姿勢は無かつた。

「まあ、こうなつた所で、ボクの勝——」

最後まで笑顔で、キャスターは散つていつた。後悔やそれに類する感情は一切見受けられなかつた。

そして、そのキャスターの散り様を見ることなく、魔力を使い切つたセイバーとアーチャーも姿を消した。



後に大崩壊と呼ばれた世界規模での災害の発端が、この冬木という地で行われた聖杯戦争によるものであったという記録は一切残されていない。それでも、世界に極僅かに残る旧世代の魔術師たちは聖杯戦争が原因であったと確信している。

そして彼らは記録について、この災害によつて引き起こされた魔術師たちの混乱の中で資料が失われたということが要因であると推定しているものの、それが真実かどうかなど分からない。

しかし、一つだけ確かなことがある。

それは、この大崩壊以後、魔術が一切使えなくなったということだ。それによつて、魔術師はその道を諦めざるをえず、その中の一部の人間だけが近代科学との融合を目指した。

彼らは魔術師と呼ばれ、魔術理論を基にした霊子変換、演算処理を身に着け、電腦世

界に自身の意識を移し行動することが出来るようになった。そして、彼らはこぞつて『月』を目指した。

——それが何を意味するのかも知らずに。

『Heavens Feel』

嘗て存在した魔法に肖つて魔術師達からそう称される場所にある人物の姿があった。

雪原を思わせるほどに透き通るような、腰まで届く白銀の髪に、鮮血を思わせる紅の瞳。

背丈は10歳程で、声は天上の音楽の様。存在自体が妖しいその人物は、大きな岩に腰かけ、歌う様に口遊ぶ。

「早くー誰かー来ないかなー。まだまだ、ボクの願いは終わってないんだから」

その周囲には無数の人形^{ヒトガタ}。

「誰か来たみたいだね。今度こそボクに耐えられるといいんだけど」
そして人類は、再び災厄の扉を――